

33年

献辞と序文

この日本語版は、韓国語版もあります。

<http://p.booklog.jp/book/9695>

(Korean ver.)

【献辞】

シストとカタリナ夫妻、そして韓国の全ての殉教者が天から支援しているリトル・ペブルさんに捧げます。

【序文】

2006年6月2日AM1:36

シスト(Xyst)、韓国殉教者からのローキューション

マリー・マドレーヌ：

6月1日の午後、チェ・ヒョンシュクさんのところに行って相談をしました。そうしたら「ライフヒストリーが欲しい」と言っていたので、シストとカタリナ夫妻殉教者に「どうかライフヒストリーを教えてください」とお願いしました。1度、聞いたとき、何も印はありませんでした。ミシェル・マリー・フランソワがローキューションに備えて祈り、待っていて、私も祈っていたら、「ミシェル・マリー・フランソワに教えます」と一言、男性の声を聴きました。昨日聴いたシストさんでした。「印はありますか？」と尋ねたら「識別のための印」があったので、司祭にこのことを話しました。そして、再度確認をしたところ、「識別のための印」をいただきました。

こうして、このライフヒストリーを受ける仕事は、僕、つまり、シストとカタリナの直系の子孫に、シスト自身から委ねられたんだ。本当に天は僕に約束を守ってくれたよ。

2007年4月6日

マリー・マドレーヌに与えられた聖母マリア様からのメッセージ

秋田県湯沢市「清水小屋」共同体にて

聖母マリア様：

ミシェル・マリー・フランソワには仕事が山ほどあります。シストとカタリナ夫妻の殉教のことを韓国に伝えること。そして、「全ての恵みの仲介者、贖（あがな）いの共贖者」の商標をもらうための仕事も、コルベ・マリーと一緒にします。

天は映画という手段をぼくに望み、そしてシナリオを与えてくれたんだ。僕はこうして映画の脚本を書き上げることができた。

2006年6月8日AM0:07～0:57

聖母マリア様と韓国の殉教者カタリナからの公的メッセージ
(秋田県湯沢にて)

【 聖母マリア様からリトル・ペブルさんへのメッセージ 】

聖母マリア様：

愛するリトル・ペブル、あなたを愛し、祝福します。聖母があなたにお話しします。勇気を持って、あなたの事を伝えた3人がいます。あなたは大きな喜びに満たされ、大きな慰めを受けます。

(韓国から)あなたのために、身を捧げる人がこれから起され、あなたに仕えていきます。子供たちのために、とりなしてください。愛しています。いつも聖母があなたのそばにいます。司祭の祝福をお願いします。

この映画が上映されたあかつきには、韓国と全人類を救うために、リトル・ペブルさんのためにつかえ働く大勢の韓国人が起こされるそうだ。

さあ、天が、韓国と全人類の救いの為に、僕に与えた脚本を読んでくれ！

忠州湖の光る水面。長く伸びる岬が見える。

月岳山が見える。

麓に村がある。

今は1592年の6月。

村中の人々が、広場に集まっている。

月岳山の鉦山役人と通訳者、そして日本の武士の一団が来ている。

何のために来たのか。皆、心配と恐怖で凍りついたようになっている。

精錬の仕事の親方の名が呼ばれる。

日本に連行されるのだ。

ナレーション

「豊臣秀吉は、領土欲のけだものではなかった。

金、銀への執着の化け物でもあった。この大悪魔は、先進精錬技術の技術者を求めた。」

親方の家族たちがすがり付いて泣き叫び始めた。

すぐ横に、若い夫婦が立っている。子どもはいないようだ。

十代半ばの妻の目から、たちまち同情の涙が次々にこぼれおちる。

二十歳を少しこえたくらいの若い夫は、目をつぶって何かを真剣に考え始めた。

ぱっと目をあげ、顔に決意をみなぎらせる。

夫

「僕が親方の身代わりになって日本に行く」

大きな声ははっきりとひびく。

妻はびっくりして夫の顔を見つめる。目も口も大きく開けて。

夫

「僕たちにはまだ子どもがいないよ。おまえ。」

この一言で妻は夫の考えを理解した。

妻

「うん」

通訳がこれを武士達に伝えた。

鉾山役人が、彼は親方に劣らない優秀な技術者だと保証する。

武士達が相談する。結論は早く出た。技術が確かなら、

若い方がいいのだ。今後、長く働けるし、

日本語を直ぐに覚えられるだろうから。

武士の頭

「おまえ達だ。すぐに支度しろ。」

通訳が若い夫婦にこれを伝えた。

夫

「おまえ、ついてきてくれるかい」

妻

「うん。わたし、あなたを信じている。」

単純に自分を信じてくれる妻に、心から夫は言う。

夫

「ありがとう」

武士達が待っている所以夫が大急ぎで仕事場に行き、

たった一つ取ってきたのは鉄の鍋。

灰吹き法の「るつぼ」だ。

武士達は、若夫婦が途中で逃げ出さないように、腰に綱を結わえ付けた。

二人の顔は、真っ赤になる。何というはずかしめ。

犬のように歩かされて、生まれ育った村を村人全員の

目の前で連れ出されるとは。

夫は歯をくいしばり、妻の目からは、又、涙が落ちる。

33-2 月岳山から釜山まで

月岳山から釜山まで、こうして歩かされる、何日も。
疲労のきわみ。重い体。重い心。重い鉄の鍋。
夫婦は、飢えでよろよろする子たち、もう衰弱して動けない子たちを見て泣く。
侵略者の武士たちから、食べものをわたされる、はずかしさ。
生き残って、飢えている人たちの目が集まっている中で……。

テーマ曲が終わる。

釜山だ。戦利品としての捕りよの第一陣として船にのせられる。
捕りよ達で満杯の船。祖国の見納めだ。この夫婦にとっても。皆にとっても。
船が動きだすと泣き叫ぶ声。
「お父さん。お母さん。」という絶叫もあちこちからあがる。
夫婦も泣き叫んでいる。妻は、嗚咽しながら泣き、突っ伏して顔もあげられない。
陸も島も見えなくなり、まだ突っ伏している妻をだきかかえて、たたせる夫。

夫
「おまえ、ぼくたちは、村に残ることもできた。これは自分たちで選んだんだよ。
僕は親方に代わってあげたかったんだ。代わってあげたいという心の声に従うか、
村に残るかを選ぶことができた。そして僕は心の声に従う方を選んだんだよ。
自由に選んだんだよ。おまえ悔やんでいるのかい。」

妻は、首を横にふる。

妻
「あなた。あなたを信じている。あなたにどこまでもついていきたいの。
私、自分の村、自分の国を離れるのがこんなにつらいなんて知らなかった。」

祖国を離れてはじめて祖国愛を自分の中に発見したのが、
この愛は、一日一日と二人の中で強まることになる。

夫
「どこに行っちゃって、どんなことがあったって、この国を決して忘れない。
僕はこの国を愛している。」

また、泣きだした妻を、夫は胸にだきよせ、自分の胸で思う存分泣かせる。

それから何日もたっている。

「陸だぞ」という大きな声がして、
船の日本人たちが皆一斉に甲板に出て行く。
彼らの喜ぶ顔。夫婦は、すぐに理解する。
日本にもうじき着くと。
妻の顔が青くなる。死刑囚が、処刑台を見たように。

妻

「私、この海に飛び込んで死にたい。」

明日に何の希望も持てないので絶望に
囚われているのだ。苦しみの発作だ。

夫

「おまえ。それじゃあ敗北だよ。
僕たちは、国は負けたけど、
僕たちは魂の戦いでは負けて
いないんだよ。
これからどんな戦いになるのか、
全くわからないけど、
僕たちは魂の戦いでは勝つんだよ。」

希望の光は何も無いことに変わりはないが、
妻は夫の頼もしさを感じる。
捕虜たちは船を下りたところだ。
夫婦は異常に目立つ。
夫が背負っている鉄の大鍋がその原因の一つ。
それから妻が、他の誰よりも泣いているのが、
もう一つの原因だ。
戦利品としての捕虜の第一陣。
港中、そして町中の日本人が集まって
人垣をつくる。大騒ぎをしながら、
指差して、喋っている。
好奇の目、遠慮の無い目。

妻は、見世物になる苦しみを
生まれてはじめて経験する。
哀れで、惨めな動物になったようだ。
惨めだとおもうと、
涙が止まらなくなってしまい、
エンエンと声まで上げて泣いてしまう。
とうとうしゃくりあげ始めた。
その時、一人のパードレと二人の同宿が、
この一番目立つ夫婦に近づいてきた。

パードレ

「おお、かわいそうな子よ」
夫婦は今、三人に気づき、ハット顔を向ける。
パードレは、妻の方へ
さらに近づき、ギュツとハグする。
そして涙にぬれたほっぺにキスをして
慰めるためにやさしく頭をなでる。
いつくしみにあふれるパードレの顔を
妻はびっくりして涙をゴシゴシふいて見る。
西洋人をはじめてみた驚きと、
やさしく慰めてもらった驚きだ。
武士たちが、武士の頭までもが飛んできて、
パードレの前にひざまづき、
頭をたれ、祝福の十字と按手をうける。
武士達は、大変な尊敬と感謝を
パードレに示す。
それをまじかに見る夫婦は、また、びっくりしている。
絶望のくらやみにいた妻には、
希望の光が差し込んだようだ。泣き止んだ。

妻

「この人、お坊さんかしら。」

夫

「この人はとっても偉い人にちがいないね。」

妻

「なんでこんな私達に優しくしてくれるの。」

夫

「話が聞きたいね。僕は、この人の話がとても聞きたくなったよ」

パードレと武士たちの会話が続く。
二人の同宿が夫婦の方を見る。
一人の同宿は夫に微笑みながら目をのぞく。
武士達が、この同宿にも大いに尊敬を
あらわしていたのを夫は見ていた。
彼は自分の胸をさして「ルイス」と言い、
もう一人の同宿の肩に
手を置いて「パウロ」と言う。

ルイス

「パウロ 通訳を頼む」

パウロ

「彼はルイスで、僕はパウロだ」
夫婦は高麗の言葉がパウロの口から出てびっくりする。
パウロが微笑んで言う。

パウロ

「ぼくは、日本生まれの高麗人だよ、通訳するからね」

夫が、この人も偉い人だとみたルイスは、
権威のある人のような顔と物腰だ。
しかし、そのルイスがさらにニコッと笑い、こう言う。

ルイス

「その鉄の大鍋を僕に渡せよ。もってやろう。
重いだろう、疲れているだろう。腹ペコだろう。」
こういいながら、もう鉄鍋を奪い取って背負ってしまった。
夫が、あまりのルイスの気さくさと親切にびっくりしていると、

ルイス

「この鉄鍋は、何の道具なんだい。料理のためかい。」

夫

「これは、金や銀を鉱石から吹き分けるための、るつぼだよ。」

ルイスの示す親しさにのせられ、夫も親しい口調で答える。

ルイス

「えー！なんと、そんな技術を君は持っているのか。」

夫

「僕は鉱山で働く精錬技術者なんだ。
ぼくが、すごい技術者っていうことじゃ決して無いよ。」
夫は謙遜に答える。しかし、祖国に対する誇りが
疲れきった顔に輝きを与える。

夫

「でも、高麗の精錬技術は、世界一なんです。
ぼくは、それを日本人に教えるために連れてこられたんだ。」

高麗の精錬技術が、世界一というのは本当だ。中国式より大規模、
高能率の高麗式への切り替えにより、これからしばらく石見銀山は
世界一の産銀量をほこることになる。それをぬいて次に世界一の
産銀量をほこることになるのが院内銀山であり、

彼の言葉は事実として証明される。

ルイス

「奥さんだね。その袋も僕によこしなさい。もってあげよう。」

妻

「これは軽いからいいの。」

ルイス

「何が入っているの。」

妻

「にんにく。お父さんが、これで長生きしてくれって、
泣きながら手渡してくれたの・・・」

この話題は、まずかった。妻は、泣き声になった。可愛がってくれた
大好きな父親を思い出し、十分に別れを惜しむいとまもない、
別れに、苦しみ嘆いた父の姿を思い出したのだ。
一度泣きやんでいた妻がもう一度泣きだし、

妻

「お父さん、えーん、ひっく、ひっく、お父さん、えーん、ひっく、ひっく」
と、しゃくりあげて、とまらない。パードレが妻の方を見、武士たちとの話を
打ち切って、また、歩みより、妻をハグし、頬にキスし、頭をなでる。
でも今度はおさまらず、大きな声をあげて、

妻

「お父さん、えーん、ひっく、ひっく。」
と繰り返しながら泣く、パードレにルイスが話しかける。

ルイス

「パードレ、この二人は鉱山の技術者で、この鉄の大鍋は、
金や銀を精錬する道具だそうです。世界一の高麗の技術を指導するために
連れてこられたそうですよ。」

パードレは、うなずき、目をみひらいて、驚いたという表情をつくる。
パードレは、とても目立つ、この若い夫婦が気に入ってしまった。

そして、早く親しくなろうと茶目っ気をだす。

パードレ

「鉱山の指導者になるのですね。二人に、あだ名をつけましょう。
鉱山は、カタコンブのような長い沢山の地下道があるでしょう。
そこで指導者になるから、この人のあだ名は、シスト。
それから、『お父さん、お父さん』と涙をずっと流しつづけているので、
あなたのあだ名は、カタリナ。お父さんが子どもに名前を付けるように、
あなたたちに名前をプレゼントしましたよ。」

ルイスとパウロ

「そりゃーいい、ぴったりだから絶対憶えられる。」
二人の同宿はパードレのユーモアに大喜びして賛成する。

ルイス

「もう、その名前でさっそく呼んじゃえ。な、シスト。ね、カタリナ。」

夫婦には、今は訳がわからない。あだ名でこれから呼ばれるとだけしか
わかっていない。しかし、この二人のあだ名は、まさに予言的に
これからの二人の活躍を暗示するものになる。「パードレは天からの
インスピレーションでこの名を思いつき、二人につけた」としか言えないほどだ。

33-5 シストとカタリナの由来

パードレは、「シスト」をシスト2世からとった。
彼は、アテネ出身のギリシャ人
だが、イタリアのローマで司祭になり、ローマ皇帝のキリスト教徒への
迫害のさなか地下教会の為に働き、ローマ司教、
つまり、ローマ教皇になり、
カタコンブと呼ばれる大地下墓地から信者を指導した。
そして、このカタコンブの中でミサを行っている最中、
密告により皇帝の軍隊に
踏み込まれ、そこで首をはねられるというドラマチックな殉教をとげた。

そして、また、パードレは「カタリナ」をシエナの聖カタリナからとった。
彼女は、永遠の御父との対話と「涙の霊性」という泣きながらの
祈りと嘆願の毎日を送ったことで、非常にユニークな聖女だ。
彼女は、慈善家として大活躍し、多くの人に偉大な影響力をもった。
彼女に賛同し、彼女の活動を助けた人々は「カタリナの軍隊」と呼ばれた。

パードレと二人の同宿は外国から来て鉱山で指導者になるということと、
「お父さん、エーン、エーン、ヒック、ヒック、お父さん、エーン、ヒック、ヒック」と
泣いていることだけで、シストとカタリナとあだ名をつけ、「ピッタリだ」と言っ
ているのだが、三人は、シストがこれから、日本中の鉱山を結ぶ地下教会を
つくりあげ、指導すること、その助け手として、カタリナが慈善の行いをもって
奇跡的ともいえる成果をあげることを今のところ知るよしもない。

武士達が出発を命令する。
ルイスは、鉄の大鍋を背負い、シストとカタリナと
いっしょに歩き始める。パードレとパウロは、歩き始めた、
他の高麗の捕虜たちにも、慈しみ深く、慰めを与えるために、
一人、また、一人と次々に声をかけ、話をし、話を聞いていく。

1592年7月、有馬である。武士達は有馬のキリシタン大名、
ドン・プロタジオ有馬晴信（はるのぶ）の家臣だったのだ。
捕虜達の第一陣は、
日本におけるイエズス会の本拠地の有馬に連れてこられ、
キリシタンの農民たちの家に分散して住まわされた。
シストとカタリナがルイスに連れられて一軒の農家に着いたところだ。

海が近い。有明海だ。そして間近に迫る

雲仙の高く大きな山体。こんな南の地、しかも海のすぐ側でありながら、山頂は冬になると雪をかぶる。

ここでも、また、夫はシスト、妻はカタリナとルイスから家人に紹介される。

家の人たちが、二人の足を指さしている。

二人のはだしの足は、足首から下が赤く大きく腫れあがっているのだ。

頬はこけ、シストのひげは伸び、カタリナの髪は、ほつれている。

7月といえば、もう暑い九州の道を、はだしで何日も歩きづめに

歩いたのだ。

二人は家の人表情と声の調子から、大変に同情してくれているとわかる。

ルイス

「マリアさまとヨゼフさまを預かったと思って、この二人の世話をしてくださいね。

この二人にしてあげることが、イエズスさまにしてあげることになるのですから。

神があなたたちに豊かに報いてくださいます。」

家の主人

「ルイスさま、安心してください。イエズスさまに仕えるように、

この二人に仕えますから」

ルイス

「シスト、カタリナ、またくるからね。」

ルイスが去ろうとする。二人はそれを見てあわてて言う。

シスト

「ありがとう ルイス」

カタリナ

「ありがとう ルイス」

ルイスが去った後の何という心細さ。二人はまだ日本語がわからない。

カタリナ

「あなた、着いたのかしら、もう旅は終わったの。」

シスト

「そうみたいだね。」

カタリナ

「わたし、立ってられない。」

カタリナは、着いたと思ったら、疲れがふきだしはじめたのだ。足が棒のようにこわばっていたから、立っていられたのだが、今、しゃがもうとするとストーンとおしりまでもついてしまい、それでも止められず横ざまに土の上に倒れてしまう。疲れで全身が痛む。もう立ち上がれない。

家の奥さん

「まあ、大変。なんてかわいそうなの。」

家の人たちのキリスト教的兄弟愛が爆発する、一斉に皆がカタリナに駆け寄り、抱き上げシストと共に家に連れて行く二人は親切の大洪水に沈められる。

有馬のどの家にも、あとからあとから連行されてきた高麗人がいる。

有馬だけではない。

キリシタン大名の治めるところでは、大村も天草も長崎も五島も同じように捕虜達が民家に分宿させられている。

イエズス会は、1566年から高麗への宣教を望んできていた。

ヨーロッパ人は、遠い先を見て、用意周到に準備をする頭の持ち主である。

日本の宣教のために1580年に有馬にセミナリヨをつくり、

10才前後のキリシタンの子弟を入学させ、

将来の同宿、修道士、司祭の養成をはじめると、

日本生まれの高麗人のキリシタンの子弟も入学させ、

高麗への宣教の準備をはじめたのだ。

有馬には、パウロの他に何人かの高麗人同宿がいるが、

今、彼らは、何千人もの高麗人の捕虜にカトリックの教理を教えるために、

あちこちによって大わらわで働いている。

その何千人もの高麗人捕虜の中でもシストとカタリナはパードレたち、修道士たち、同宿たちの間で有名人になってしまっている。

一体なにがあったのだろう。

実は、こんなことがあったのだ。

イエズス会は上記の理由で、高麗人たちに熱烈に信仰の教育をほどこし始めた。

シストとカタリナは、農家の一家と一緒に農作業をして過ごしているが、

日曜日は高麗人たちのほとんどは、セミナリヨへ行く。

そこで、パウロの通訳つきでパードレから、または、パウロから教理をならっている。

ある日のこと……。パウロが通訳している。

パードレ

「神は唯一です。唯一の神には三つのペルソナがあります。

父と子と聖霊です。これを三位一体といいます。

三位一体は人間の頭では絶対に理解できません。

ただ、これをこのまま信じるのですよ。」

その時、パードレの目に、お気に入りのシストの顔が飛び込んだ。

パードレ

「私の子よ、シスト。父と子と聖霊は別々の方なのですよ。

なのに神は一体だなんて、信じなさいと言われても信じられますか。」

真剣にシストは考える。パードレは、しばらくシストの返事をまつ。
ニコニコしながら。

シスト

「パードレ、わからないけど、信じたいから信じます。」

パードレ

「そう、そう。よし、よし」

パードレは、この返事に満足してうなづく。

シスト

「パードレ、これは僕が金と銀と銅を一つの石から
とるのとなにしているなあと考えたんです。

一つの石で、何のへんてつもない石に見えます。

でも、その一つの石の中にちゃんと金と銀と銅がある。

吹き分けたらちゃんと別々に取れるのですから。」

まず、パウロが驚きの叫びをあげる。パードレがパウロに

パードレ

「なに。なに。何をシストは言ったんだい。」

パウロ

「パードレ、聞いてください」

そして、シストの言葉を通訳する。

パードレとパウロは顔を見合わせ、しばらく黙ってしまう。

二人とも、三位一体について、

こんなたとえを未だかつて聞いたことが無いのだ。

もしかすると教会史上初の「三位一体の鉱石によるたとえ」かもしれない。

やっとパードレが口を開く。

パードレ

「シスト、あなたは天才です。」

パードレは、となりにいるカタリナにも何か質問してみようと思った。

パードレ

「カタリナ、私の子よ。人間の五感では決してとらえられないけれど、
ご聖体はパンではなくて、もうイエズス様になっています。

人間の靈魂が永遠に生きるために、かたみとして与えて下さったのです。

これも、また、分からなくても信じて認めなければなりません。

それが出来ますか。」

カタリナも真剣な表情でしばらく黙る。

それから悲しそうな声で話し出す。

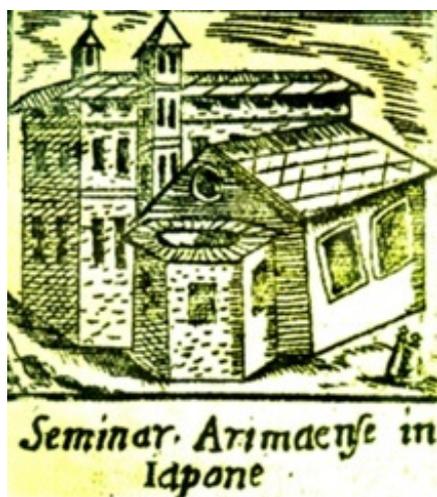
カタリナ

「パードレ、私のお父さんが、私が連れて行かれる時に、

これで長生きしてくれって、ニンニクを私に手渡したの。
たったこれがお父さんの形見なの。神様は何でもできるでしょう。
永遠に長生きさせるために、ご自分を食べさせるしかなかったら・・・。
私も、もし私が何でもできる神様だったら自分を食べ物にして、
子どもにあげちゃう。何でもできる神様で、
お父さんのようなイエズスが、
そうして下さったって、私、信じたい。」
カタリナは、お父さんとの別れのことを思い出して、
目に涙があふれる。パードレは、感動し、パウロと、
また、顔を見合わせる。お父さんのニンニクと、
イエズスのご聖体を並べて考える子どもらしさの中にも、
もし私だったらと自己を食べ物にしてあげちゃうという
愛深い自己犠牲の宣言があったからだ。

パードレ

「私の子どもたち、あなたたち夫婦は、なんという夫婦だ」
パードレもパウロもこの二人の話を皆に伝えずにはいられなかった。
もちろん聞いた人々も感動し、食事の時の話題にしたり、
次の人に伝えたりと。こうしてシストとカタリナに会ったことが無い人々も、
シストとカタリナの名と、
この二人の返事のことについて知るようになったというわけだ。



(有馬のセミナリヨ想像図)

この教理の説明の時間が終わると、
シストはカタリナの手を引いてパードレに一言いいに行く。

シスト

「パウロ、通訳して欲しいんだけど。」

パウロ

「ああ、いいよ。」

シスト

「パードレ、僕が天才だっていうことは、決してありません。それに、僕たち夫婦が特別な夫婦だっていうことも絶対にありません。」

シストの顔は真剣で、真実に自分たちを低くみているのが分かる。その真剣さは、変わらないが、目が今、遠くの一点を見る。そして、

シスト

「でも、高麗の人々が、工夫することにおいて、天才のようにひらめくのは世界一です。」
パードレは通訳のパウロの言葉を黙って聞き、さらにしばらく黙ってシストの言葉を吟味する。さきほどパードレは、小さい子のように単純で素朴なこの二人がそれにもかかわらず、絶対理解不可能な奥義と呼ばれることがらについて、それでも何とか自分なりにとらえてみよう、しばらく、真剣に沈黙し、自分なりに工夫して、ひらめきによってとらえたのを見た。もう3ヶ月も高麗人捕虜達に教えているパードレは、他の高麗人達も、同じように、シストの言う「工夫することにおいて、天才的なひらめき」を示すのにうれしい驚きを味わってきた。

パードレ

「私の子ども達、シストとカタリナ、私もそう思います。でもいつまでも謙遜でちっちゃいままでいなさいね。今のうちにね。」

シストとカタリナは、本当にパードレをしたっている。親に対する子どものように、心をひらいて思っていることを素直に話す。パードレは、それだからますます「父の心」を刺激されるのだ。

「工夫することにおいての天才的ひらめき」が、技術的分野で発揮されてきたからこそ、シストとカタリナは高麗から連行されてきたのだ。これからシストが日本に伝える大規模高能率の精錬技術は、鉄鍋が大きいことによる技術革新ではない。なんとシストが伝え、石見銀山、院内銀山を世界一の産銀量にするのは、今で言う反射炉なのだ。

とにかく、数千人もの洗礼を準備中の高麗人捕虜達は、真理をとらえ、みとめ、信じるために彼らの民族的「工夫することにおいての天才的ひらめき」を最大限に用いてまわりのスペイン人、ポルトガル人、日本人のキリシタン達を驚かせつつある。

ここでカタリナが何か聞いたそうにする。パードレが目で促す。

カタリナ

「あの、パードレ、ちっちゃいことっていいことなの。私、ちっちゃいままでいなさいなんては

じめて言われたわ。」

この質問にパードレの顔はますます「お父さん」のようにやさしくなる。

パードレ

「おう。愛する私の子どもたちよ。天国はちっやい子になってはじめて入れるところなのですよ。」

パウロの通訳つきなので、パードレは区切り区切り話す。カタリナがこの言葉をきいて目をまるくして思わず。

カタリナ

「まあ、本当に」

と聞き返すのがおかしい。パードレは、ニコニコ微笑む。

パードレ

「本当ですよ。イエズス様が『幼子のようにならなくては天国に入れない』と教えてくださったのです。きなさい。」

パードレが、二人を脇の祭壇、マリア様の祭壇に連れて行く幼いイエズス様を抱いたマリア様のおかれた祭壇である。

中央の立った人のももの高さには、アルファベットのAとMの組み合わせ文字がある。

パードレ

「誰でもみんなマリア様の子どもです。これからあなた達は自分をまだおっぱいを飲んでいる小さな子どもと考えて、マリア様を自分の本当のお母さんとして、何でもお話するのですよ。そうしたら、マリア様によって幼子にさせていただきます。」

パードレは、シストとカタリナが夢中になってマリア様の像を見ているのを、横から見つめる。

カタリナの視線はどうやら胸に抱かれている。幼いイエズス様に言っているようだ。

パードレ

「カタリナ。ちっやい子のように、遠慮なく何でもマリア様に話してごらん。さあ、何を願いしてもいいんだよ。さあ。」

カタリナ

「何でもいいの。パードレ。」

パードレ

「いいよ。カタリナ。」

カタリナ

「マリア様、赤ちゃんをちょうだい。」

シストの顔が真っ赤になった。パードレが、二人に祝福を与える。

1592年 クリスマス 12月25日である。

未明の深夜0時から始まったクリスマスミサは、この年、有馬につれてこられた高麗人捕虜達のほとんどが来た。有馬中の人々が来ているといえる。聖堂の中に入れる人数は限られている。シストとカタリナは他の高麗人捕虜と外でミサを聞く。彼らの熱心さは、まだ洗礼を受けていないにもかかわらず、燃えるようだ。ミサのはじめに、赤ちゃんのイエズスのご像をささげもったパードレが、外に出てきて、一番遠くのはしから行列をはじめてくれた。だから、シストもカタリナもかわいらしいご像を見ることができた。

カタリナ

「かわいいわ。かわいいわ。ね。あなた。ね。」

シスト

「うん。かわいいね。」

お昼になっている。シストとカタリナは、家の人々のご馳走を準備した。家の主人の先唱で食前の祈りが唱えられる。日本にきて6ヶ月近くになる。シストとカタリナには家の人々の話がもうほとんど聞き取れる。話もかなりできる。高麗の人々が、日本語を非常に早く習得するので、司祭たち、修道者たち、同宿たちは、皆、驚いている。今も日本語だ。

家の奥さん

「カタリナ、はじめてのクリスマスの真夜中のミサはどうだった。」

カタリナ

「赤ちゃんのイエズスさまのご像が目の前を通ったの。かわいかったわ。ぷくぷく、やわらかそうな、かわいい、右前足が、目にやきついているわ。」

うっとりとしてカタリナは話すが家の人たちはぷっと吹き出して腹を抱えて笑い出す。しばらく笑いが止まらない。カタリナが言いたかったのは、赤ちゃんのイエズスの交差した、前に出された方の右足なのだ。外で大きな声がする。ルイスだ。

ルイス

「クリスマスおめでとう。」

皆、大喜びでルイスを出迎え、上にあがらせ、食卓につかせる。シストとカタリナが、この家に来てから、ルイスは旅から旅の間には、必ずこの家に訪ねてきてくれる。

ルイス

「楽しそうだね。」

子どもたち

「だって、カタリナが『イエズスの右前足』っていうんだもの」

カタリナ

「キャー。そんなことばらさないで」

この家の子どもたちとの会話がシストとカタリナの日本語会話の上達をなおさらはやめているのだ。子どもたちはシストとカタリナになついでしょっちゅう話かける。子どもたちが一番の先

生だ。ルイスは子どもたちから聞く右前足の話に大笑いした。

5年前に秀吉が禁教令を出している。司教、修道士たちは、目立たぬようにしており、にもかかわらず各地の教会、修道院が次々に破壊されてきている状況で、今や、日本人同宿たちが全国の信者の世話に以前にまして大活躍している。それで、ルイスも有馬にはほとんどいない。ルイスは、有馬の出身でキリシタン武士の子弟だ。優秀な子だったので選ばれて、セミナリヨの第一期生として入学した。ポルトガル語、ラテン語、論理学、哲学、神学をたたきこまれたエリートで、あらゆる司祭に仕え、通訳として同行し、名だたるキリシタン武将たちとも、皆と親しく交わっている、すごい同宿なのだ、遠い道のりも、短日時で行き来してしまう。道なき道も迷うことなく、どんどん進む。変装の達人で、名前もいっぱいもっている。まるで忍者のようなところがある。イエズス会の根拠地、この有馬と地方の信者を結ぶ人間だ。そのルイスが、シストとカタリナに、初めてあった時から何かしら特別にひかれている。シストとは同い年だとわかった。二人とも1570年生まれ。カタリナは1575年生まれだ。あの時、パードレもパウロも感じた、何かこの若い二人の夫婦は内面に素晴らしいものを持っていると、それが何なのか見つけていきたい。

二人に対する興味がルイスを二人に接近させ、愛着させる。

ルイスは笑っている二人を見つめ昨日得た情報を伝える。

ルイス

「シスト。カタリナ。君たちの行き先が決まったよ。石見銀山っていうところだ。とっても高い値段で売り渡されたそうだよ。」

シスト

「僕たちが、とっても高い値段で売られたっていうことを、僕たちは喜んでいいのかな。何か胸にズキンとくるんだけど。」

ルイスが答えに困っているうちに子どもたちが騒ぎ出す。

子どもたち

「シストとカタリナはどっかへ行っちゃうの。」 「嫌だどこにも行かないで。」 「ねえ、行きたくないって言えば行かなくていいんでしょう。」 「ねえ、おねがい。行きたくないって言ってよ。」

カタリナ

「私達は、行きたくないって言えないのよ。」

子どもたち

「嫌だ。嫌だ。どうして行きたくないって言えないのよ。」

子どもたちが泣き出した。二人にすがり付いて、二人をゆすって、泣いてせがむ。

子どもたち

「行かないって言ってよ。行きたくないって言ってよ。」

シストとカタリナは自分たちが戦利品だということは良くわかっている。でも、子どもたちには説明できない。人が人を物のように売り買いすることを。

カタリナは、子どもたちと一緒に、子どものように泣き出してしまった。近づく別れを悲しむより以上に、物のように売られるということが現実になってショックを受け、みじめな気持ちになってしまったのだ。

家の奥さんも泣いている。涙のクリスマスになってしまった。家の主人と家の奥さんは子どもたちをシストとカタリナから引き離し、別の部屋に連れて行く。子どもたちは向こうで、カタリナはここでまだ泣いている。

シスト

「ルイス。どうやってこのことを受けとめたらいいのかい。何か。とってもつらいんだ。自由を失った身分なんだって思い知らされて。」

ルイス

「シスト。カタリナ。その方法はね。自分の苦しみを全てイエズスの苦しみに重ねあわせ、イエズスに似たものとなれたことを喜ぶ。こういうやり方なんだ。」

ルイスは、実際の例を示すために、考えるための時間をとる、そして話をしだす。

ルイス

「イエズスはね、銀貨30枚で売り渡されたんだよ。奴隷一人の値段は、銀貨30枚って決められていたんだ。12使徒の一人ユダ・イスカリオテが、裏切って敵の司祭長たちにこの値段で売って引き渡したんだ。そして、イエズスは捕らえられて死刑を宣告されて十字架にはりつけになったんだよ。だから、自分たちが奴隷のように売られた苦しみとはずかしさを、イエズスがしのんだ苦しさとはずかしさに重ねあわせるんだ。そして、イエズスと似たものになれたことを喜ぶんだ。同じ苦しみ、同じはずかしめ、つまり、同じ運命、同じ十字架に預かれたことをね。」

シストとカタリナは、だまって集中して聞いている。二人ともそれぞれに何かをつかみかけているようだ。それを、見てルイスは、また、話し出す。

ルイス

「それからね。君たちは自由を失ってなんかいないよ。苦しみとはずかしめが強いられたもので、絶対に受け取らなくてはならないものであってもそれでも君たちの魂は自由なんだよ。イエズスがね。人が私の命をうばうのではなくって、私が自由に自分の命を与えるのだからおっしゃったんだ。苦しめとはずかしめをいやいや受けるか。苦しみとはずかしめを愛して、望んで、よろこんで受けるかの自由が魂にはいつもうばわれずに残されているんだよ。いいかい。十字架の縦の棒は苦しみ。横の棒ははずかしめ。」

ルイスは、パードレが祝福するときのようにゆっくり手をたてについて、よこにうごかして、十字を描く。それから、両腕を広げ、それをハグするまねをしつつ、

ルイス

「この十字架、大好き。こうするんだよ。」という。

今、シストは、自分からすすんで親方の身代わりになったことを思い出している。「そうだ、僕は自由に選んだんだ。苦しみ、はずかしめ、この十字架大好き。魂の闘いの勝利って、これだ。これなんだ。」

心と魂に大きな光を受け、シストの瞳がキラキラと輝く。

カタリナも黙ってはいるが、今、同じように、大きな照らしを受けつつある。同じ苦しみ、同じ十字架、同じ運命を夫と分かちあってきた幸せ。たしかに、自分はそれを望んできた。自分にとってこれ以上の幸せは、きっとこの世に無い。花嫁になった日、そういえばこんなことを感じたっけ、

今、これをイエズスに。あの花嫁の愛で、イエズスを愛すれば、どんなことも幸せにかえられる。カタリナの顔に微笑がもどる。

「涙のクリスマス」。日本での最初のクリスマスを二人はいつまでもこう記憶するだろう。しかし、実はこの日二人に神からの啓示の光という偉大なおくりものが与えられ、二人の生涯の闘いの方向性が定まったのだ。二人は、それぞれが受けたものを、まだ言葉にあらわせない。あまりに深い内的なさとりの場合、誰でもそれについてしばらく黙ってしまうものだ。シストが実際的な話に持って行く。

シスト

「ぼくたちの行き先は、ここから遠いのかい。」

ルイス

「かなり遠いよ」

カタリナ

「いつ、いくの。洗礼は。」

ルイス

「春になったら。ご復活祭に洗礼を授かるんだよ。パードレたちは、高麗人たちが洗礼を受けてから、それぞれの行き先に出発できるようにと頼んだからね。」

家の主人と奥さんが泣きやんだ子どもたちを連れて食卓に戻ってくる。こうして食事が再開する

。

1593年 春が来た。カタリナのお腹がふくらんできている。赤ちゃんをみごもったのだ。胸も、体全体も、顔も、女らしく、母らしく変化している。それだけではない。母性愛もまた育ってきている。

小さなもの、か弱いものへ愛がわきでる。持ち前の同情心はこの母性愛によって自然とさらに強まっている。セミナリヨでは四旬節に入り、洗礼の準備が本格化した。今日から高麗人たちは、日曜だけでなく、毎朝、ミサに行き説教を聞き、教理の説明を受ける。今日は、四旬節、第一週の月曜日だ。シストとカタリナが、日曜日以外にも朝ミサに行く初めての日だ。有馬の漁民、農民は朝はやくから働く。いつもいっしょに働く家の人たちにすまないと思いながらもわくわくどきどきしながらセミナリオにやってきた。

ミサの福音はマテオによる聖福音、25章の31節から46節である。ラテン語で読まれたあと、パウロの通訳つきでパードレから内容が説明された。「あなたたちが、わたしの兄弟であるこれらの最も小さな者の一人にしたことは私イエズスにしたのである。」「我が父に祝せられたものよ、来て世のはじめよりあなたたちのために備えられた国を得よ。あなたたちは、私が飢えた時に食べさせ、渴いたときに飲ませ、旅人であったときに宿らせ、裸であったときに着せ、病んでいたときに見舞い、牢獄にいたときに来たからである。」

帰り道は、カタリナはものすごく幸せそうである。シストの手をにぎり一緒に歩く。いつもとまったく違う。ギュ、ギュ、ギュというにぎり方にシストが聞く。

シスト

「おまえ、何かあったかい。うれしそうだね。すごく。」

カタリナ

「うん、あなた。私、今、胸が燃えているみたいに熱いの。」

シスト

「なんで。」

カタリナ

「わたしね。イエズスのことを知れば知るほど、こんなかわいそうな神様、世界のどこを探したって他にいないって思うの。それで私、イエズスにかわいそうなイエズスに何かしてあげたくってしかたがなかったんだけど、何をしたらいいかわからなかったの。ねえ、さっき聞いたでしょ。最も小さな者の一人にしてあげたことはイエズスにしてあげたことだって。私、やっとイエズスにしてあげるにはどうしたらいいかわかったわ。これから大好きなイエズスにいっぱいしてあげられると思うと私うれしくて飛んで行っちゃいそう。」

シストのまわりを両手をつないでぐるぐるまわりだすカタリナ。そして、カタリナの望みはすぐ実現しはじめる。春になり、海がおだやかになり、高麗からの捕虜の海上輸送が再現され、有馬にも去年の自分たちのように苦しみとはずかしめに打ち砕かれ、希望をなくし、つかれきって、ぼろぼろの姿の高麗人捕虜たちが、また新たに到着しだしたのだ。

シストとカタリナは、この四旬節の間、パードレからイエズスのご受難、ご死去、つまり、もっ

ともはずかしい、そしてもっとも苦しい極刑であるはりつけの死について沢山のことを聞かされた。また、ルイスも旅から帰るとたずねてくれるが、涙のクリスマス以来、ルイスは話題として日本のキリシタンに加えられている迫害のことを出すようになった。彼らからカトリックの歴史、神の国のために命をささげた殉教者たちについても教えてもらっている。

シストとカタリナが月岳山から釜山まで歩かされたのは、釜山浦（フサンカイ）と東?と尚州と忠州で防衛戦が戦われて間もない時だった。二人は、祖国を守るために死ぬまで戦い勇敢に命をささげた兵士たちのなきがらが、何千と積まれているのを見た。立派な服装の武将のなきがらは首が無く、他の首のあるなきがらは全てみな、耳と鼻がそぎ取られていたのだ。死んでのちにも加えられたはずかしめ。歩きながら二人はどれほど泣いたことか。日本の武士達は自分たちの手柄の証拠とするため、それらを日本に送ったのだ。

それでもシストは祖国のために命を捧げつくした勇敢な彼らを、その時、うらやましいと思った。今、シストの胸には一つの熱望がやどりはじめている。神の国のために命を捧げること。愛する祖国、高麗のために命を捧げることである。同胞の高麗人たちのために、働きたいとシストは熱烈に願っている。そこに新たな高麗人捕虜達の到着である。シストは教え、カタリナは慰める。二人の自発的な奉仕がはじまった。

待ちに待った復活祭である。シストとカタリナは、他の多くの高麗人たちと洗礼を受ける。家の主人が、シストの代父、奥さんがカタリナの代母だ。

パードレ

「シスト。エゴ・テ・バプティーズ・イン・ノミネ・パートリス・エッツ・フィリイ・エッツ・スピリトゥス・サンクティ。」

高麗人の男性達は何十人も洗礼を受け終わる。次に女性達の番だ。

パードレ

「カタリナ。エゴ・テ・バプティーズ・イン・ノミネ・パートリス・エッツ・フィリイ・エッツ・スピリトゥス、サンクティ。」

女性達も何十人もいる。カタリナは感動のあまり泣いている。シストという名とカタリナという名は、もう二人の正式の名前だ。

洗礼を受ける前から聖人の名前と呼ばれていた不思議な二人であるが、二人は今日からお互いのことを、おまえ、あなたと呼ぶかわりに、シストとカタリナと呼ぶことに決めている。洗礼の恵みをいつまでも忘れないために、そうしようと二人で考えて決めたのだ。ミサが終わって二人が出会う。

シスト

「カタリナ。おめでとう。」

カタリナ

「シスト。あなたも、おめでとう。」

このとき二人は、本当に生まれ変わったような気持ちがした。

シスト

「しあわせだね、カタリナ。」

カタリナ

「シスト、私、幸せで泣いちゃう。神様ありがとう。」

家の主人、奥さん、子どもたちが、口々におめでとうを言い、よろこびあう。それから、高麗人同志のおめでとうだ。シストとカタリナは沢山の洗礼を受けた高麗人、全員に次々と声をかけよろこびあう。

ルイスが一段落ついたのでみはからってよってくる。

ルイス

「シスト。カタリナ。おめでとう。」

シスト

「ありがとう。ルイス。」

カタリナ

「ありがとう。ルイス。」

ルイスは、大きなカタリナのお腹に目をやる。

ルイス

「このお腹の赤ちゃんのおかげで予定が変更になったんだよ。君たちは、もう一年、ここにいるんだ。石見銀山に行くのは来年の春だって決まったよ。よかったね。みんな。」

とって、子ども達の頭をポンポンとたたいていく。

子ども達

「わーやったー。シストとカタリナとまだ一緒に遊べるー。」

キャーキャーとって子ども達が、シストとカタリナにしがみつく。喜びが重なった。そして、有馬でのさらなる一年は、ルイスとシスト、カタリナ夫妻の友情を非常に固くすることになるのだ。

1593年8月、赤ちゃんが生まれた。男の子だ。シストにそっくりだ。シストとカタリナは、名前と代父を考えている。カトリックは生まれるとすぐに洗礼を受ける。その時、親にかわって、赤ちゃんを抱いてくれるのが、代父、または、代母である。そして、たいてい名前を代父、または、代母の名前にする。

シスト

「ねえ、カタリナ、ルイスに代父になってもらおうよ。この子の名前もルイスがいいな。」

カタリナ

「私達の一番の友達だもんね。それが、いいわ。」

シスト

「ルイスが今度旅から帰ってきたら、たのもうね。」

カタリナ

「うん。」

代父または、代母はその子の親代わりだから、その子ともその子の家族とも、切っても切れない関係になる。ルイスは、旅から帰ってきて、さっそくやってきた。

カタリナ

「ルイス。赤ちゃんを抱っこして。かわいいわよ。首がすわってないから。頭をこうやってささえてね。」

ルイスが、とまどいながら、へたくそに抱く。

ルイス

「僕は、恐いもの知らずだと言われているけど、こんな生まれたての赤ちゃんは、こわれそうで、恐いよ。どうしよう。」

本当に小さな、手や足やその指だ。10才の時から家をはなれ、セミナリヨで男ばかりの団体生活をしてきているルイスは、普通の家庭で体験することをほとんど体験していない、男だけの社会の中で信仰と頭脳と体をきたえにきたえて、今は、迫害のさなか、信仰の戦いのさびしさの中、身をきげんにさらしつつ、007か忍者かのように活躍している。そして将来、結婚する気はさらさらない。同宿は司祭や修道士とは違うから結婚できないことはないのではあるが。

シスト

「ルイス。この子の代父になってくれないか。」

カタリナ

「ルイス。お願い。そして、この子に私達ルイスって名前付けたいの。」

ルイス

「えー。本当に。うん。喜んでなるよ。」

8月15日の聖母被昇天の大祝日。有馬の高麗人たち、皆に祝福されて、シストとカタリナの赤ちゃんは代父のルイスに抱かれて洗礼を授けられた。

パードレ

「ルイス。エゴ・テ・バプティーズ・イン・ノミネ・パートリス・エッツ・フィリィ・エッツ・スピリトゥス・サンクティ。」

今年、送られてきている、去年よりさらに多くの高麗人捕虜たちに、シストは教え、カタリナはなぐさめてきたが、この、ただ泣いたり、おっぱいを吸ったり、微笑んだり、眠ったりしかできない小さな赤ちゃんが、彼ら全員に与えた希望は大変大きい。たった一人の存在なのに、高麗人、皆の喜びと未来への希望の源に赤ちゃんルイスはなっているのだ。喜びに湧く高麗人たちを見て、パードレがルイスに言う。

パードレ

「まるで伝道士一家だね。シストとカタリナが一年間残ってくれて、本当に助かってるよね。私達は。」

ルイス

「パードレ。僕は、この二人に特別な友情を持っています。二人を尊敬しているんです。二人が祖国と同胞に対して持っている愛と誇りは素晴らしいですね。」

パードレ

「そして、二人は、謙遜で、単純で、素朴で、真っ直ぐだね。」

パードレと、ルイスは、高麗人たちの祝いと喜びの輪の中に入っていく。パードレが、ルイスとカタリナにハグとキスを与えるのが見える。

そして、シストとカタリナは、パードレとルイスに連れられて、今日、盛大に花で飾られた、あの、AとMの組み合わせ文字のマリア様の祭壇に向かう。カタリナは、聖水を降り注がれ、ローソクを持たされ歩き出す。

カタリナ

「ああ、マリアさまありがとうございます。」

パードレがルイスを侍者に、産後の母と子の祝福の式を行ってくれるのだ。ローソクをしょく台に立て、赤ちゃんを抱いたまま祭壇の前にひざまづくカタリナ。シストもその横にひざまづく。高麗人たちが皆、うしろについてきている。

式が終わった。パードレが、皆に話す。そして、通訳するのはシストである。あの時と、同じ言葉。

パードレ

「誰でもみんな、マリア様の子どもです。これから、あなたたちは、自分をまだおっぱいを飲んでいる小さな子どもと考える。マリア様を自分の本当のお母さんとして、何でもお話するのですよ。そうしたら、マリア様によって、幼子にさせていただきます。」

33-13 1593年のクリスマス 深夜ミサ

1593年のクリスマスの深夜ミサ。赤ちゃんルイスを抱いたカタリナを思いやって、ルイスがシストとカタリナを、セミナリヨの聖堂の玄関、つまり、屋根の下に連れてきてくれた。

今晚もまた、大勢の高麗人たちが洗礼を授けられる。長い長いミサ。セミナリヨの10代の子たちの歌声が響く。開け放たれている聖堂の扉からローソクがゆれる祭壇が見える。外は、冬の夜。そして、光る星。玄関のひさしの下で若い夫婦が小さい乳飲み子を抱いているのだ。何というクリスマス。馬小屋に呼ばれた貧しい羊飼いたちは、今晚は、高麗人捕虜たちだ。カタリナがささやく。

カタリナ

「シスト。私、去年のクリスマスとぜんぜん感じが違うの。マリア様が、どんな気持ちだったかとってもよく分かるわ。」

シスト

「そうか。ぼくも、ヨゼフ様がどんな気持ちだったかとってもよく分かる。」

二人は赤ちゃんルイスを見つめる。

カタリナ

「パードレが、いつまでも謙遜でちっちゃいままでいなさいねって言ったのおぼえている。シスト。」

シスト

「謙遜で、ちっちゃいままでいることを、教えてくれるために、イエズスは赤ちゃんになってくれたんだね。」

カタリナ

「こんなに、わたしに、頼りきってこの子が生きているみたいに、私も神様に頼りきっていつも生きていきたい。」

シスト

「そして、何があっても頼りきって、安らかにまかせきっていたいね。ぼくも。」

涙のクリスマスだった最初のクリスマス、二人は苦しめとはずかしめを、花婿と同じ運命に預かることを喜ぶ花嫁の愛で受け入れ、愛し望み、喜ぶことが魂の戦いの勝利であることを神の照らしによってつかんだ。

二回目のクリスマスは、苦しめとはずかしめによって謙遜でちっちゃいものとして生きぬく基礎を与えられた。連行以来の日々を、神は「幼子路線」として完成させる恵みの日として下さった。シストとカタリナは、この日、強烈な確信をだき、ちっちゃい子らしく、かわいらしく、生き、話し、行動することを今後、生涯はずかしがることなく続ける。

実はこれから、有馬を去れば、シストは先生、カタリナは先生の奥さんと呼ばれる日々が待って

いるのだ。二人は、それを知らない。しかし、神はその環境の中でも二人が、ごう慢にならず、逆にますます自らすすんで謙遜になるように、すばらしい配慮をもって二人を導いてくださっているのだ。

1594年 春が来た。そして、石見銀山から役人が一人やって来た。シストとカタリナを迎えに来たのだ。家の主人が、セミナリヨのパードレの元へ知らせに行き、家の奥さんは旅のしたくをカタリナと一緒にはじめた。大きい子が赤ちゃんルイスのおもりをし、小さい子は泣いている。別れるのが嫌で泣いている。

出発は、明朝だ。月岳山から連行された時と違い、今回は準備のゆとりがある。お別れの夕食を作るために、奥さんが台所に行き、カタリナは畑に行く。「お父さんのにんにく」をほりあげて持っていくのだ。土のついた手で涙を拭いたのだろう、しばらくして戻ってきたカタリナの顔は泥で真っ黒だ。シストが悲しい表情でその顔を見て、やさしく微笑む。

シスト

「カタリナ。顔が泥まみれだよ。いっぱい泣いたのかい。」

関門海峡の手前の宿屋である。明日は、船に乗る。夜である。赤ちゃんルイスが泣きはじめた。カタリナがおっぱいをやるために起き、子守り歌を歌いだす。もちろん、母からならった子守り歌である。カタリナの声は、日本人の声とは違い、少しハスキーな、少し低めの声だ。シストも目をさまし、カタリナの子守り歌に聞き入っている。満腹した赤ちゃんルイスが、また、寝る。

シスト

「カタリナ。祖国が、なつかしいね。」

カタリナ

「うん。」

シスト

「帰りたいね。」

カタリナ

「うん。私、ずっと左手に、私達が渡ってきた海があったでしょ。その向こうに高麗があると思うと、歩きながら、ずっと考えたことがあるの。」

シスト

「なにを。」

カタリナ

「モーゼの時のように、この海がわかれて、歩いて祖国に帰れたらなあって。」

シスト

「僕も、海の向こうの祖国のことばかり考えて歩いてきたよ。この何日かずっとね。明日、船に乗ったら、その船が風に吹かれて高麗まで流されてくれないかななんて考えた。でも高麗には、また侵略軍がいて、たくさんの捕虜を捕まえて連行しているんだもの、まだ、祖国には帰れない。」

シストとカタリナは、侵略軍にふみにじられている祖国、苦しみにあえぐ祖国のことを考えている。そして、二人は泣く。しばらくしてカタリナが口を開く。

カタリナ

「シスト、この子は祖国に帰れるかしら。私達が帰れないとしても、この子には祖国を見て欲しいわ。」

シスト

「わからない。でもカタリナ。希望しようよ。夢をもとうよ。この子か、この子の子か、とにかく僕たちの血をつぐものが、いつか祖国を見ることを。ね。」

カタリナ

「うん。きっとかなうわよね。」

カタリナ

「うん。いっぱい泣いちゃったの。ここのみんなと別れるのがつらいし……。お父さんお母さ

んのこと思い出しちゃったし・・・。」

シスト

「役人が、石見銀山には今、高麗人はいないっていったね。僕たちは、これで祖国からも同胞からも今度こそ切り離されてしまうね。」

若く、感情豊かな情熱家のシストは、子どものように素直に悲しみを表す。祖国や同胞により強く愛着するのはいつも男の方だ。女に比べて環境の変化への適応能力も低い。同胞が誰もいないところへ行くという事実打ちのめされているシストはうなだれて涙をこぼす。二人は、心ゆくまで悲しみ、泣く。

一夜明けて、シストとカタリナはセミナリヨに朝ミサに行った。去年と同じように洗礼の準備にはいった高麗人たちが、皆、四旬節に入って朝ミサに来ている。大好きなシストとカタリナと赤ちゃんルイスが、今日立ち去るということを聞いて他の高麗人たちも皆やはり来てくれている。パードレの教理の説明は、急遽、赤ちゃんイエズスを連れたヨゼフ様とマリア様がエジプトに逃げる話しにきりかわった。

マリア様とヨゼフ様がしのんだ苦しみに、自分たちの苦しみを重ねあわせなさい。マリア様、ヨゼフ様に似たものになれたことを喜びなさい。感謝しなさいとパードレは話した。シストがささやく。

シスト

「そうだよ。痛みとはずかしめ。この十字架、大好き。だもんね。」

カタリナ

「うん。この十字架大好きね。」

ミサ後、同胞との悲しい別れをすまし、パードレとお別れする。パードレは、強く、二人を強くハグし、そしてキスしてくれた。そして、赤ちゃんルイスのおでこに親指で十字をしるし、抱き上げてキスだ。

パードレ

「シスト、カタリナ、今、ルイスは旅に出ているけれど、ここに帰ってきたら、必ず石見銀山に行かせるからね。あなたたち、一家の信仰のお世話を今後もずっとルイスがたずねていって続けるから安心しなさい。」

シスト

「ああ、良かった。ルイスと時々会えるなら安心だ。」

パードレ

「なにしろ、ルイスは、この赤ちゃんの代父だもの。義務がありますからね。さあ、もう一度祝福します。ひざまずきなさい。」

パードレの祝福をうけ、一家は家に帰る。食事をしていたら、昨日の役人が来た。馬を引いている。馬にあの大きな鉄鍋、お父さんのにんにくの袋、三人の身の回りのわずかな品がのせられる。

シストとカタリナの代父、代母。つまり、信仰においてのお父さんお母さんであり、しかも、実生活でも親のようにかわいがってくれた家の主人と奥さんとのお別れ、小さい弟や妹のような子

どもたちともお別れだ。お互いにもう二度と会えないとわかっている。お互いに情がうつっているから、この別れは本当の家族との別れと変わらないつらさだ。ルイスとカタリナは、役人に連れられて、こうして、また長い旅に出る。

石見銀山に着いた。役人が、一家を連れて行ったのは唐人屋敷である。シストとカタリナは、家が立派なので、驚いている。わずかな自分たちの荷物とその家に運びこみ、役人から家の中の説明を受ける。

役人

「シスト先生、奥さん。ここで少し待ってて下さい。林のおかみさんを連れてきますから。」

シスト

「あー、ハイ。」

シストもカタリナも何も分からずとまどっている。二人ともお腹がすいている。カタリナは、赤ちゃんルイスをあやして話しかけながら外に出る。林のおかみがやってきて大声をだす。

林のおかみ

「あんた。高麗から連れてこられたんだって。」

カタリナ

「あっ はい。」

林のおかみ

「遠くね。海の向こうから良くここまで耐えてこれたね。本当にね。そんなさー。赤ん坊抱えてさ、大変だろう。私に任せとき。困ったことがあったら何でもいうんだよ。」

こう言いながら林のおかみは、大きな手でカタリナの背中をバンとたたいた。

カタリナ

「キャー」

カタリナは赤ちゃんを抱いたまま前へつんのめった。

林のおかみ

「あー、そうそう。ここはゴロツキ、札付き、何でもいるから周りの連中から何かされたら、すぐに、わたしんここに言いにくるんだよ。」

シストも外にでてきて、林のおかみの話を聞いている。

林のおかみ

「高麗から来た先生だね。奥さんと一緒にうちに来な。しばらく、勝手がわかるまで、うちで食事を一緒に食べるんだよ。さあ、いいから、いっしょにおいで。」

二人は訳が分からないまま、あいさつも自己紹介もせずに赤ちゃんルイスを連れて、林のおかみのうしろをついて歩いていく。林のおかみがすごい大声をあげる。

林のおかみ

「あんたー。」

林の親分と子分たちは昼休みを終えたところだ。親分は子分たちにどなっている。

林の親分

「おーい。お前ら。何をぐずぐずしているんだ。油売ってねーで、早く持ち場に戻れ、こら。」

ふざけながら仕事場にもどろうとする子分たちがいる。まだ、口にキセルをくわえている子分が一人いる。林のおかみがそれを見つけて、なんと走っていく。とびかからんばかりだ。

林のおかみ

「何やってんだい。キセルなんかふかしてさ。早く消しなよ。」

どん。とその子分の頭を林のおかみがぶんぐったので。キセルが口から離れて地面に落ちた。向こうでは子分同士が、けんかしている。

林の親分

「お前ら。また、やっているな。何してやがんだ。こら。」

子分達は、皆、若い。活気にあふれている。そして、林の親分とおかみは迫力にあふれている。今、林の親分とおかみは一緒になって、シストとカタリナの方へくる。

林の親分

「ほおー。赤ん坊連れかー。」

いきなり林の親分は赤ちゃんルイスの顔をのぞきこむ。赤ちゃんルイスが、ニコニコする。

林の親分

「おっ。俺に笑ったぞ。かわいいなあ。おい、お前。この赤ん坊、すごくかわいくないか。」

林のおかみものぞきこむ。また、赤ちゃんルイスがニコニコする。

林のおかみ

「ああ、たまんない。こんな、かわいい赤ちゃん見たことないよ。先生の奥さん。ちょっと抱かせてよ。」

人見知りか、はじまる前の赤ちゃんだ。天使のような笑顔。夢見るような表情を誰にでも見せてくれる。林のおかみは、赤ちゃんルイスを抱っこする。

シスト

「この子が、特別すごくかわいっていうことは決してありません。」

シストが大まじめに、こういいはじめたので林の親分とおかみは、キョトンとする。

シスト

「でも高麗の赤ちゃんは、世界一かわいいです。」

一瞬、沈黙の時があったが、林の親分が大声で笑いだす。

林の親分

「ワッハッハッハッ。こりゃーいい。こりゃー気にいった。先生、俺は実は、中国人だ。林 太郎衛門って言うんだが、『はやし』っていうのはな、『りん』だよ、『りん』。」

こうしてたちまちひよんなことからシストは林の親分に気に入られてしまった。国が負けても、捕虜になっても、祖国に対する誇りを堂々と口にする。しかし、自分のことは誇らないこの若者は、なんと魂の持ち主だと林の親分は驚いたのだ。多くの若者の面倒を見てきたが、こんな若者は、はじめてだと思ったのだ。

林の親分

「先生、先生の奥さん。鉱山では、役人なんか何の力も持っていねーんだよ。鎚親っていうのが、力をもって、みんなに言うことを聞かせているんだ。その鎚親達の中でも一番実力がある

のが、この俺だ。だから、役人から先生たちのこと頼まれてるのさ。」
林夫妻とシスト一家は、林の親分の家に向かって歩いていく。

日本の鉱山には、鎚親制度というものがあつた。やくざの親分、子分の関係の原型のようなものだ。親分は、鎚親で子分は堀子と呼ばれた。鎚親の命令は絶対である。そのかわり、鎚親は、本当の親代わりとして堀子の面倒を何から何までみた。鉱山は、治外法権である。ならずもの、おたずねもの、くいつめたもの、かけおちしたものが逃げ込んで、誰かの鎚親のもとに、わらじを脱げば、その鎚親の堀子になって生きていける。しかし、鉱夫である堀子のほとんどは、30才にもならず、じん肺などで死んでしまう。堀子は、一般に結婚しないで生涯を終える。ただし、妻子連れで逃げ込んだ者や、駆け落ちして逃げ込んだ者は、妻子がいる。

シストとカタリナは、林の親分の家で食事をしている。

林の親分

「明日、堀子の一人の葬式があるが、来ね一か。シスト先生。」

シスト

「行きます。」

林のおかみ

「駆け落ちしてきた人だったから、妻と子どもを残していっちゃったんだよ。」

カタリナ

「まあ、かわいそう。」

林の親分とおかみはため息をつく。

林のおかみ

「こんなに、みんな早く死んで、夢も希望も無いよ。」

林の親分

「妻子を残して死ぬんじゃ、うかばれね一よなあ。」

シストとカタリナは、気の毒そうに黙って聞いている。

翌日のお葬式である。妻子がとりすがって泣いているが、その妻子よりもさらに大泣きしているのが、カタリナだ。死んだ堀子は本当に若い。

カタリナ

「あーん。あーん。なんでこんなに若いのに死んじゃうの。あーん。あーん。奥さんと子どもはどうなっちゃうの。」。

カタリナの胸は同情で張り裂けんばかりだ、泣けて泣けてしょうがない。とにかく豊かな同情心がカタリナの特徴だ。死んだ若い堀子の顔を見て、シストとカタリナはここに居る人たちの中で二人だけが負っている強烈な体験がフラッシュバックする。祖国を守るために命を散らした若者達の何千という顔。耳と鼻をそがれた顔だ。あどけないほど若い顔が多かった。あの若者たちの父や母の悲しみはどんなに深いだろうか。また、自分たちと同じくらいの若者達も。残された妻たちはどんなになげているだろうか。子どもたちは、どんなにさびしいことだろうか。

目の前で、あなた。お父ちゃん。と遺体にすがって泣く妻子の姿にシストとカタリナは同情で、気が狂わんばかりになってしまっている。人間が持つ愛には、いろいろな種類の愛がある。その中で一番神の持つ愛に近いのは同情の愛である。しかし、ただ同情を感じるだけにとどまるなら、それが何になるだろう。シストとカタリナは、実際的な人間、行動的な人間、思ったら言い、考えたら行動する人間だ。その自然的土台の上に、イエズスの教えが今や加わっているのだ。「これらの最も小さな者の一人にしたことは、私、イエズスにしたのである。」という教えだ。

シスト

「カタリナ。ヨゼフ様に先立たれて悲しむマリア様とイエズスに対してしてあげていると思って何かしてあげようね。役人から渡された当面の生活費があるから、それを使おうよ。」

カタリナがシストの手を握り締める。

カタリナ

「うん。シストありがとう。私にまかせといて。」

翌日、野菜売りがやってくると、カタリナは野菜をどっさり買った。半分はあの母と子のためだ。それをかかえてさっそく母と子をなぐさめに出発する。まず、向かうのは林の親分の家だ。赤ちゃんルイスをおんぶって、両腕いっぱい野菜をかかえてうれしそうに歩いていく。

カタリナ

「こんにちは。」

林の親分

「おお、あがれー。おまえー。先生の奥さんだぞー。」

林の親分がいた。おかみも奥から出てくる。

林のおかみ

「まあ。先生の奥さん。たくさん野菜買ったね。どうするの。」

カタリナ

「昨日のお母さんと子どもの家にもっていくの。親分が面倒見てあげるって聞いたけど、私にも

何かやらせて。」

林の親分

「そりゃーうれしいが……。先生とこの方が今のところ、ここの誰よりも貧乏だぜ。何も持ってねーじゃねーか。今からそろえなきゃなんねーものばかりだろうによ。いいのかよ。」

カタリナ

「シストと私はどうしてもこうしたいのよ。お願い。」

林の親分

「ちょっと、そこに、野菜を置いて、まあ、上がれ、上がれよ。話しを聞きてえからよ。」

カタリナは、言われるままに上に上がり、親分と向き合う。

林のおかみ

「お茶いれるからね。赤ちゃんを座布団の上におろしなよ。」

おかみは、お茶の仕度にかかる。

林の親分

「来たばかりで、昨日はじめて会ったばかりの親子だろ。おまけに、自分たちは家財をこれっぽっちも持って無いし。乳飲み子抱えてこれからものすごく物入りだ。何でそこまでやるんだい。ふつう、そこまでやんねーよ。」

林の親分は、とってもまじめになって、問いたです。

カタリナは、小さな女の子のように無邪気に普通のことのようように答える。

カタリナ

「私の神様がね、あなたが人にしてもらいたいと思うことを人にしてあげなさいって教えてくれているの。」

林の親分

「ほー。人にしてあげなさいって教えているわけか。自分が人にしてほしくないことを人にするな。とは、ちょっと違うねー。」

カタリナ

「そしてね。あなたが人にしてあげたことは、神様にしてあげたことだ、って教えてくれるの。」

林の親分

「ほー。人間が神様に何かしてあげられるってのかい。」

カタリナ

「そうなの。それで、シストと私はね。あのかわいそうな人に何かしてあげたいの。」

林の親分

「なるほどねー。でも先生の奥さん。もしかして忘れてやしねーかい。あの親子は、日本人だ。あんたらとあんたたちの国をひで一めにあわしている国の人間だよ。いいのかい。」

林の親分は、カタリナを試し、カタリナの神様を試すための質問をぶっつけてきた。しかし、カタリナは気づいていない。まったく変わらず、同じように無邪気に答える。

カタリナ

「私の神様はね。あなたの敵を愛しなさい。迫害する人々のために、祈り、祝福しなさいって教えてくれたのよ。」

もう林の親分は、カタリナに向かって何も言わない。突然、林の親分は、林のおかみに向かってしゃべりだす。

林の親分

「おまえ、先生と先生の奥さんの神様は、本当の神様なんだ。おれは、たった今、くら替えするぜ。お前も、くら替えしろい。」

これには、カタリナもぶったまげた。林のおかみが目をまんまるくして、おったっている。

林の親分

「俺は、ちょっと堀子みんなのところにへ行ってくるからな。あいつらにもくら替えさせる。くら替えだー。くら替えだー。」

林の親分は、おかみにこういい残して外に出て行く。カタリナは、あっけに取られている。林のおかみは、カタリナの前に、お茶を置いてぼっそつと言う。

林のおかみ

「鎚親はさー。かわいがってる若いのが、30にもならず次から次へおっちゃんじまって、葬式ばかりだしてるだろう。本当に救ってくれる神様が欲しいんだよ。」

カタリナ

「あの一。それで、私……。この野菜、あの母と子に持って行っていいのかなあ。」

林のおかみ

「もちろんだよ。ありがとうね。先生の奥さん。」

林の親分は本当に林一家の全員にくら替えを命令した。命令したが、どんな神様が良くわからない。皆に、どんな神様ですかと聞かれて困ってしまった。精練の部門で、高麗式の炉づくりをはじめているシストのもとに林の親分がさっそくやってきた。シストを見つけて声をかける。

林の親分

「シスト先生よ。工作中すまね一。ちょっと相談してえんだが。」

シスト

「ああ、林の親分。何ですか。」

林の親分

「おれたち、林一家は全員そろって仏様からシスト先生と先生の奥さんの神様にくら替えすることに決めたんだ。それで、シスト先生の神様についてシスト先生から教わりて一んだが、どうだい、教えてくれね一か。」

シスト

「え一。何でまた。」

シストは驚いてしまった。何が起こったのか見当もつかない。しかし、林の親分がカタリナとのやり取りをはなしてくれて納得した。

シスト

「わかりました。林の親分。僕が知っていることは、全力を尽くして全部教えます。じきにルイスという友達がたずねてくれるはずです。彼は、何でも知ってるから彼が来たときに、何でも教えてくれますよ。洗礼もさずけてくれます。今度彼が来たとき、皆が洗礼をさずけてもらえるように、今日から毎晩教えましょう。いいですか。」

林の親分は、まだ洗礼とか何もわからず、ちんぷんかんぷんの話しだが、とにかく、彼は本当の神様について、真剣に聞きたいのだ。

林の親分

「洗礼ってえのは、何かかわんね一がよ一。当面、みんな毎晩、酒飲みに行かね一で、女買いに行かね一で、ばくち打ちに行かね一で、シスト先生の塾に出ろって言えばいいんだな。」

こうして、ルイスが来たら洗礼を林一家全員で受けようとやる気まんまんの皆で、シスト先生を向かえ、その日から「林一家のシスト塾」が、はじまった。

唐人屋敷に、ルイスが来た。商人の格好で現れた。カタリナは、大喜びである。もう夢中でしゃべっている。ルイスと最後に別れた時から今までのことを話しに話して、今晚もおこなわれる「林一家のシスト塾」のことまで、一気に、長時間、ルイスには話すいとまも与えず。一方的に、しゃべりまくった。

ルイスは聞いている。頭を二分割して聞いている、半分はカタリナの話しを追っている。そして、半分は……。この唐人屋敷にあがってくるまでにルイスは見た。まっ昼間からにぎわっているふもとの町を。つまり、遊女と寝る店、ばくちをうつ場所、飲み屋、見せ物小屋、芝居小屋、それらが軒を連ねて並び、どこも大にぎわいだった。遊んでいる若者達は、ならずものしか見えなかった。林一家だって皆、休みの日にはこうして女を買い、酒を飲み、ばくちを打つ連中にまちがいない。おお、この勝利は大きい。難攻不落の城を一人のちっちゃな子どものような女がいともたやすく落としてしまったようなものだ。おお、神よ、あなたは一体ここにどんな計画をもってらっしゃるのですか。と、半分は背筋がぞくぞくするほどの戦慄をおぼえながら神と対話している。

カタリナ

「ルイス。私うれしいの。神様ありがとう。私は、なんにもやっていないのに。神様大好き。」

その晩、とうとうシストとルイスと林の親分、この3人の男がそろった。これから、31年後に、一緒に首をはねられて殉教する3人の男たちだ。「林一家のシスト塾」の先生になったルイスが思ったとおり、林一家はそろいもそろってならずものの集まりだった。教えの説明が終わり、林の親分の家から掘子たちが帰ったあとだと。林のおかみは酒を出している。カタリナも手伝っている。赤ちゃんルイスは、カタリナの背で可愛くねむっている。

林の親分

「ルイスさんは商人なのかい。」

ルイス

「いえ。ぼくは同宿。パードレたちや修道士たちの手伝いだよ。」

林の親分

「へー。じゃ、商人の家の出かい。」

ルイス

「ちがうよ。武士の家の出だよ。」

林の親分

「ほー。うまく化けるもんだねー。そうやって化けなきゃ外を歩けねーのかい。」

ルイス

「そうなんだ。」

林の親分

「ふーん。おたずねものってことかい。武士の出だったらもとの名前があるんだろう。何て名だい。もちろん世間ではだしちゃいけねー名前だろうがよ。」

ルイス

「大町六左衛門だよ。」

横でシストとカタリナがびっくりして聞いている。二人が顔を見合わせた。二人の唇が同時に動いている。発声しないで「おおましろくざえもん」と。はじめてルイスが、ルイス以外の名をもっているのを知ったのだ。

林の親分

「なるほどね。大町六左衛門か。ルイスさんよ。今度ここに来る時きゃ商人なんかに化けるこたあねーぜ。おれが、おれのほりこだっという手形書いてやっからよ。これがあれば、琉球（りゅうきゅう）だろうが、松前だろうが、行きたいところへ、どこだっといけらあ。関所なんかつ一つ一に通過だぜ。もちろん、大町六左衛門じゃいけねー。だが、まかしときな。俺の子分たちも世間にでて自分の名を明かせば、みーんな捕まっちゃうやつらばかりだからよー。俺が、いろんな名前を作ってやって手形を書いてやるんだ。俺は、偽名を考える天才だぜ。わっはっは。うまい話しだろー。よーし、大町六左衛門じゃねーぞー。馬井六左衛門だ。どーだ、うまいだろう。わっはっは。」

林の親分は大陸的な人間だ。島国的な日本人とは全く違う。ごうかいで、おおらかだ。そして、外交的手腕にたけている。いろんな人との交渉ごとに、大変な才能を見せ、なんでもうまくやってしまう人物だ。かけ引き、取り引きなら、俺にまかせろという親分なのだ。

林の親分

「そうだ。シスト先生にも先生らしい名前くっつけて手形書いてやらあ。めでたい名がいいだろう。めでたっていう字の嘉左衛門先生。悪くねーだろう、な。」

えつにっている林の親分。林のおかみとカタリナは大喜び。新しい名前よりもカタリナは「六左衛門」がすごく気に入ってしまった。

カタリナ

「ねえ、いち、に、さん、し、ご、ろくのろくざえもんなの。」

ルイス

「そうだよ。いち、に、さん、し、ご、ろくざえもん。」

カタリナ

「わあ。おもしろい。ねえ。わたし、これからルイスのこと、ろくざえもんって呼んでいい。」

ルイス

「ああ、いいとも。そんなに、ろくざえもんが気に入ったのかい。」

カタリナ

「うん。何か、口の中でさいころが転がっているかんじ。」

みんな

「えー。」

みんな絶句。そして爆笑。

六左衛門

「さいころの六左衛門か。いいよ。ここでは、ぼくはろくざえもんだ。林一家の掘子の六左衛門。ひとよんで、さいころのろくざえもん。」

唐人屋敷に戻ってきた。ちょうちんを消し、カタリナは赤ちゃんルイスを寝かしつけに行く。シストと六左衛門はもう酔いはさめている。シストが真剣な表情になっている。

シスト

「六左衛門。座ってくれ。」

六左衛門はシストに向き合っであぐらをかく。

シスト

「六左衛門。どう思ったかい。」

六左衛門

「うん。ならずものぞろいの林一家が集団で改心するなんて、信じられない。奇跡だと思う。神の大勝利だ。君たちはすごいよ。」

シスト

「六左衛門。そのことじゃないんだ。それに、ぼくたちは、決してすごくなんかないよ。ぼくたちは何もやってないもの。みんな神様がなさったみわざだ。」

六左衛門

「そのことじゃないっていうのなら……。あの元気な若いごろつきどもが、遊女と寝るのをやめられるかなあって内心、心配なんだ。」

シスト

「六左衛門、そんなことでもないんだ。それに、遊女と寝るのをやめられるか心配なら、独り者のほりこに、林の親分みたいに結婚して妻をみんなもて。そして、妻とだけ寝ろって言えばいいじゃないか。」

六左衛門は、それを聞いてぶっと吹き出した。自分が、生涯独身をつらぬこうとっていて、女性にいっさい性欲をだかないようにと戦っているのに、ほりこたちが、そんな大変な内的な戦いができるかと思ったのだが、シストの答えはなんと自然な発想だろう。

六左衛門

「わー、シスト。君は、本当にまっすぐに単純にものを考えるねえ。そうだよ。本当だ。聖パウロもそうすすめている。えーと、そうじゃないっていうなら、林の親分が書いてくれる手形のことかい。だったら、こんなに助かることはないよ。本当に、ぼくにとってうまい話しだよ。これは。」

シスト

「六左衛門、そのことでもないんだ。六左衛門は、ぼくの名がシストだから、シストⅡ世のことを教えてくれたし、今、キリシタンに加えられている迫害のこともいろいろ話してくれてるよね。ぼくはね、カタコンブを日本の鉱山はつくれるんじゃないかって思っているんだよ。」

シストの顔はますます真剣になる。六左衛門はたちまちその言葉に反応し、身を乗り出す。そして大きな声をだす。

六左衛門

「何だって。そんな可能性がここにはあるのかい。」

シスト

「そうだよ、林一家のほりこ達は、みんなここに逃げ込んできたんだよ。そして、ここにいれば安全だ。役人はここには追ってこれない。ということは、クリシタンたちも、もし追われたなら、ここに逃げこめるってことじゃないかい。そうだろう。それから、今晚のできごとだ。六左衛門が名前を変えてつちおやに手形をかいてもらえば、国中どこにでもいけるっていうのなら、パードレだって修道士だって、他の同宿だって、同じことじゃないかい。それからね、日本では国中の鉱山が一つにつながっているんだよ。この間、一人のつちおやが死んだんだ。その人の、ほりこ達が、国中の鉱山に知らせに行って、北の果てからも南の果てからも、そのつちおやにかつて面倒を見てもらった人たちが、みんな集まってすごい大きなお葬式をあげたんだよ。それから、つい最近大きな事故が起きた鉱山から、残された家族への義援金をつるためのほりこがそこのつちおやたちから送られてきたよ。もちろんこのみんなが募金に協力したよ。それに、どこどこで新しい鉱山が開かれたとか、どこそこの鉱山で新しい鉱脈が見つかったとか、どこそこの鉱山は今さかりだとか、もうおとろえたとか、詳しい情報がみんな伝えられてくるんだよ。それから鉱山から鉱山へと移るのも自由で、おとろえた鉱山からさかりの鉱山へと、さかんに移動していくんだよ。六左衛門。このしくみがクリシタンに利用できればどうなると思う。」

シストは、熱っぽく語る。神の国のための熱心が燃え上がっている。六左衛門は、大きくうなずきながら聞いている。

シスト

「六左衛門。このしくみをクリシタンが利用するには、各鉱山にクリシタンのつちおやがいればいいんだよ。一人でも。できれば日本中の全ての鉱山に一人ずつでもクリシタンのつちおやがいれば、日本中を自由に動ける地下教会が完成する。」

シストの巨大な構想を聞かされて六左衛門の頭はパンク寸前だ。鉱山の制度について全く知らないのだから、ついていけなくて当然だ。

シスト

「じゃー。どうやって日本中の鉱山にクリシタンのつちおやがいるようにできるかだ。そこで、ぼくの計画だよ。いわみ銀山は日本一の鉱山でやってることも最先端だ。そこの最も中心的なつちおやの林の親分が、ほりこともどもクリシタンになるんだ。ほりこ達も技術と知識にかけては、超一流だ。だから、林の親分にほりこたちをつちおやに育てあげてもらうんだ。できるやつから、次々につちおやを襲名させて、他の鉱山に送りこんでもらう。クリシタンのつちおやはそこで、また、ほりこたちをクリシタンに改心させて、ほりこたちに技術と知識をたたきこんで、つちおやに育て上げる。こうすれば、ねずみ算式にクリシタンのつちおやが増えていく。どうだい、六左衛門。」

六左衛門

「うん。すごい。林の親分からいろんなことを聞いてもっと詳しく、鉾山の制度を学ぶことにしよう。」

六左衛門は、これだけというのがやっとだった。

翌日、六左衛門が、先生として教える2日目のシスト塾が終わり、昨日のように酒がでると、六左衛門は林の親分に鉱山の制度やつち親制度や他の鉱山とのつながりなどなど、たくさんの質問をしまくった。シストの言ったとおりだった。ということは、すなわち林一家に洗礼をさずけ協力してもらえば、時間さえかけなければ、日本中の鉱山をネットワークする地下教会が本当にできるということだ。

六左衛門

「シスト、林の親分に昨日の話しをしてくれないか。」

シスト

「よし。わかった。林の親分、ぼくの計画を聞いて欲しいんだけど。」

林の親分

「何だい。何だい。遠慮なく話せよ。」

シストは昨日のように、そして今晚は林の親分からさらに詳しくいろいろ確認できたので、もっと確信にみちて、しかも熱くなって自分の計画を全部話した。その話の熱烈さに林のおかみもカタリナも引き込まれ、酒をつぐのも、さかなをだすのも忘れてすわりこんで、いっしょに聞きどおしたほどだった。話しを聞き終わった林の親分が目にも手をもっていく、なんと意外なことに林の親分が泣いた。なぜ、泣くのか、皆がわからず、しばらく全員沈黙してしまう。やっと林の親分が、口を開く。開口一番。

林の親分

「ありがてえ。ありがたくって涙がでたのよ。おれの口にしねえ悲しみはよ、かわいいほり子達が、この世にも、あの世にも希望をもてねえまんまに死んでゆくってことよ。あいつら坑道に入りつづけりゃ、あんな若くてぴんぴんしているやつらでも、あと数年の命だぜ。数十年じゃねえ。数年だぜ。つち親になりゃー坑道に入らねーから、もっと長生きできる。結婚すれば自分の子どもを育てるってえこともできらあ。あいつら世間には戻れねえ。ほり子を続けりゃー数年でおだぶつだ。金もうけても残してやる子もいねえ。この世に何の希望も持てねーから、ばちあたりな生活をつづけて遊女と酒とばくちでみんなすっちまうし、極楽往生の望みもねー。シスト先生の言うとおりにりゃー、神様にご奉仕できるってことだろう。そうすりゃ、神様が天国に入れて下さるよな。この世にもあの世にもあいつらに希望が生まれるって思うよ。うれしくって泣けてきたよ。」

林の親分の気持ちを良く知っている林のおかみもこの話に泣き出した。カタリナももらい泣きしている。シストと六左衛門は、林の親分がこれほど子分のことを思いやっているその愛に感動し目頭が熱くなっている。なんといい親分だろう。

さて翌日。六左衛門の教理説明の第3日目。いよいよ林一家の全員にシストの計画が伝えられた。若いならずものたちの顔が希望に輝きだした。あとをとって林の親分が大演説をした。

林の親分

「親分のためなら、命すら惜しんじゃいけねー。このイエズスっていう親分には、なおさらだ。」

どこの世界に、子分のために子分の罪を背負って、はりつけになって下さる親分がいるってんだい。こんないい親分には、どこまでもおつかえして当然だ。しかも、この親分は、ご自分につかえた子分を天国に入れて下さるっていうんだぜ。親分からして、命を俺達のために捨て下さったんだ。こんな親分には俺達もよろこんで命を捨てようーじゃねーか。てめえら わかったか。」

林一家が全員立ち上がる。すごいときの声を上げる。

「えい、えい、おー。えい、えい、おー。」

六左衛門もシストも、ぶったまげてそれを見ている。彼らは、どうみても、大喜びだし、ほんとにやる気だ。自分のむなしい人生が突然、価値ある人生にできる道が開かれたのだ。若いバイタリティーで、その道を突進しようとするばかりの子たちのときの声に、とうとう偉大なことが始まった。と、シストも六左衛門も感じた。六左衛門がシストの耳と口をよせて話す。

六左衛門

「シスト、実はローマ時代の迫害の時も、洗礼準備中の人と洗礼を受けて間もない人が一番良く働いたんだよ。君とカタリナは、洗礼を受けて間もない人だし、林一家は洗礼準備中の人だ。歴史は繰り返すね。」

たしかに歴史は繰り返す。イエズスが福音を宣教した30数年後キリスト教徒はローマ皇帝ネロによる大迫害にあった。わずかの男女からはじまった教会は、たった30数年でローマ皇帝を、おそれさせるほどの数の信徒数に増えたのだ。これと同じことが日本中の鉱山でならずものたちの世界で、これから起きるのだ。たった30年後、新しく第3代の将軍として徳川家光が就任し、日本中の鉱山への大迫害をはじめて実施した時、各藩はつち親とやま師のうち、はなはだ大勢の者がキリシタンであることに驚がくした。つち親や、やま師には、何年もの修行をつまなければならぬ。特につち親は、鉱山でのあらゆる部門のあらゆる仕事のことが、わかっていなければならぬのだ。それだけでは無い。子分であるつち子の面倒を見、まとめあげる力量と人格をも必要とする。つまり即席では絶対になれない。そういう彼らの大多数がキリシタンであることが調べによりわかった時、迫害者たちは何がどうしてこうなったのかさっぱり理解できず、うろたえるばかりであった。プロ中のプロの彼ら、つち親ややま師が、いなくなるとは鉱山がなりたない。院内銀山でもその時、国家老が江戸家老へ「院内銀山のキリシタンを残らずほぼくしたら、山がすたれる」と報告している。しかし、キリスト教会の歴史はじまって以来の前代未聞の側面も、またある。

日本の鉱山は、治外法権である。誰が国を支配し、どんな政治をし、どんな法律をつくろうが関係ない。自分たちの掟で自分たちで治めている。鉱山奉行とか上の役人たちが、支配する藩が変わったためにいれかわろうが、ただそれだけのことである。下に影響はない。つまり、日本の中に他の国があるようなものだ。ただし、その国はならずもの国といえる。そのならずものたちの間に、わずか30年の間に、爆発的にイエズスの教えが広まり、彼らが命を捨てるほどこの教えに忠実な本当の信仰者になったということは、前代未聞の出来事だ。また、そのならずものキリシタンたちが後年、品行方正なキリシタンたちが迫害を、のがれて逃げこむための受け皿をつくりあげたこと、これもまた、前代未聞のできごとだ。シストとカタリナがもたらした火が、なぜ、ならずものたちに、たやすく点火しいきおいよく燃えさかり、そして急速に燃え広がったかは、林の親分とつち子達の思いがそれを良く説明する。彼らの思いは、すなわちすべてのつち親とすべてのつち子たち、共通の思いだからだ。つまり、イエズスは、彼らにとって、みりよくをたたえた神、そして親分であり、イエズスの教えは彼らのこの世とらい世の唯一の希望になったからなのだ。神が、ならずものたちをこれほど大きぼに、そして重要な使命に用いる、こういうことが歴史上他にあつたらうか。

いよいよ今日は、林一家全員に六左衛門が洗礼を授ける日だ。司祭でない六左衛門が行う洗礼は、水をひたいに3度かけながらラテン語で「誰それ、我、父と子と聖霊とのみ名によってなんじを洗う。」というだけだが、男性にはシストが代父、女性にはカタリナが代母にならなければならない。そして、全員一人ひとりに、洗礼名が必要だ。六左衛門は、男女の人数分の紙に一枚ずつ、違う名前を書いてトランプの、ばばぬきのように皆にひかせることにした。すると、林の親分には、「ヨアキム」が、そして林のおかみには「マリア」が当たった。皆に洗礼名が決まって、いよいよ洗礼式だ。林の親分が、これでやってくれ、ともってきたのは、子分が親分のも

とにわらじをぬいだ時、親分とかわす『かためのさかずき』のためのさかずきだ。これで、子分たちはみな、林の親分と親分、子分のちぎりを結んだのだ。そして、大きなひょうたん。水がいっぱい、いれられている。このひょうたんから水をさかずきに注ぎ、それでもって洗礼をさずけてくれというのだ。何とかわった洗礼式。でも笑ってはいけない。林の親分は生涯で最も厳しゆくな時と心得、今まで見たこともない真剣でいかめしい顔をしている。たぶん武士が切腹する時、こんな顔になるのだろうと、それを見つめながら六左衛門は思っている。だから六左衛門も同じような顔でそのさかずきとひょうたんを受け取る。林の親分が、林一家の全員に向かって大声をあげる。

林の親分

「てめえら、いいか。今から受ける洗礼を、イエズス親分との『かためのさかずき』をかわすと思って死ぬ気で受けろい。わかったか。」

皆

「お——。」

こうして、彼らは、ありったけの決意と真剣さで洗礼をうけた。この林の親分のすばらしい思いつき、つまり、親分、子分の『かためのさかずき』の、さかずきと水を入れたひょうたんを用いての洗礼式は、今後、鉱山でつち親とつち子たちの一家あげでの改心と洗礼の場合、六左衛門が常に用いる方式となった。

林の親分が熟練の優秀なほり子を、特訓して一人ずつ、一年に一人ずつでもつち親にし、襲名（しゅうめい）させ……こうして年数をかければという計算は、いわみ銀山の中と、外で大いに狂った。しかも、うれしい誤算という形でだ。

いわみ銀山の中心的つち親の、林太郎右衛門（はやしたろううえもん）と、その一家が全員そろってキリシタンになったという話しは、たちまち知れわたり、はかりしれない影響をみなに、特に、つち親たちに及ぼした。

どこへ行っても、よるとさわるとこの話しだ。林一家の皆も、自分の新たなよろこび、希望、生きがいについて黙ってなんていられない。真理や、救いをさがしていたものは皆、彼らの話しによるこんで、そしてまじめに耳をかたむけた。いわみ銀山全体に、キリシタンへの改心の波がおしよせた。世間では禁教令がしかれているが、ここではそんなのまったくおかまいなしだ。

しかも世間では仏教の、または、神道の親類縁者、特に、父母兄弟が反対したりもする。しかし、ここのならずものたちは、そういうしがらみを、ここにくる以前からまったく断ち切っている。

誰にも遠りよがなかった、ならずものたちだ。悪をなしているときも同様に、善をなすときも遠りよはない。また、彼らに干渉する関係者などここにはいない。つち親でさえ、彼らがキリシタンになろうがっこうにかまいやしないし、逆に自分がキリシタンになるとときには、ほり子、全員にキリシタンになるよう命じてしまう。

こうして一家あげての改心が、他のつち親のもとで連鎖反応のように次から次へと起こったのだ。シストは、今や大将のような存在だ。他の一家にも林一家同様に教え、キリシタン地下教会を国中の鉱山に広げる戦略をさずけ、実行させる指揮官だ。

六左衛門も、ひんぱんに、いわみ銀山を訪れ、教え、洗礼をさずけた。こうして、林一家だけで、スタートというシナリオは、多くのつち親と、その一家と合同でスタートということに、スケールアップしてしまったのだ。すなわち、キリシタンのつち親が、計画の何十倍ものスピードで誕生していきだしたのだ。もちろん、やま師も多くのキリシタンになっていった。

いわみ銀山の外でのうれしい誤算というのは、シストのつくった高らい式の炉の大成功によってじまった。精錬部門の人々は「すごい。」と言葉を失った。そして、すごい、すごい、といううわさは、鉱山中にたちまち広まった。

毛利氏の役人が、そのすごさに狂喜した。そして、シストを他の鉱山にも高らい式の炉をつくらせ指導させるために次から次へと毛利氏支配の鉱山に派けんすることにきめた。

もちろん大がかりな炉の建設には、長期の滞在が必要だ。そして、手伝いのための精錬部門の弟子たちを伴わなければならない。

シストは、派けんされるたびに、弟子たちの中に同宿や伝道士を混ぜて伴った。まるで、キリシタンの教理の集中講義に行くようなものだ。

日中は、炉をつくり、指導し夜は例のシスト塾だ。シストの大車輪の活躍が続けられ、高らい式の炉もキリシタンの教えも毛利氏支配の他鉱山にどんどん広まっていった。そして、そこでも大将として、指揮官として、日本国中の鉱山をネットワークする地下教会を完成させるための戦略を新しくキリシタンになったつち親や、やま師、ほり子たちにさづけていった。

シストの、最初の計画は、小規模で長い時間をようしての地下教会づくりであったが、まるで高らい式炉のように大規模高能率で地下教会づくりがすすんでいったのだ。しかも何の妨害も受けず、やりたいほうだいできた。

シストは若い。1594年24才で日本の鉱山での地下教会づくりをはじめた彼は25才、26才、と昼は精錬の、夜はキリシタンの教えの指導を続ける。

体力の限界をこえて働きつづける彼は意志の強固な力によって自分の体をささえているのだ。その彼の意志力をささえているのは、六左衛門がくるたびにをもたらしてくれる祖国、高らいの情報だ。

六左衛門は、キリシタン武士たちからも、連行されてくる高らい人ほりよたちからも両方から情報を得てきて、シストの家でシストとカタリナに話してくれるのだ。シストとカタリナの頭と心にはいつも祖国が生きている。じゅうりんされている祖国とともに二人はいつも苦しんでいるのだ。六左衛門がもたらしてくれるのは、高らいの庶民や農民が、義兵となって秀吉の侵略軍に対して、抵抗しているありさまだ。

シスト

「ああ、ぼくの祖国。ああ、ぼくの高らい。戦い続けているんだ。戦い続けてくれ。勝ってくれ。」

シストもカタリナも胸がしめつけられるように苦しくなる。毎回毎回、聞くたびにそうなる。そして、「ぼくも戦いつづけよう」と祖国の敵、神の国の敵、秀吉に対して祖国と共に、祖国の義兵とともに戦っている意識を強めて、体にむちうって明日からもますます働こうと決意を固める。

。

1597年になった。六左衛門がやってきた。いつもと様子がちがう。何かあったらしい。精錬部門で、指導中のシストのところまでやってきて、シストを呼ぶ。

六左衛門

「シスト。一大事だ。京で、パードレや修道士や信者が24人つかまって長崎ではりつけにされるために今、瀬戸内海にそって歩かされている。君の国の人3人いるんだ。君たちのあとから、高らいから連行されてきたんだよ。今から尾道に向かえば、間に合って彼らに会える。カタリナは、林の親分のところへ行かせたから、そこへすぐに行こう。24人の中には、中国人が、お父さんの男の子が一人いるんだ。」

シストは、これを聞いた瞬間、頭に血がのぼるような感じがした。同ほうが、しかも同じように連行されて、つれてこられたキリシタンが殉教しようとしているのだ。すぐ弟子たちにあとをまかせて、六左衛門といっしょに林の親分の家へ向かった。

林の親分は、林のおかみが呼びに行っている。親分の家につくと、3才のルイスをだいてカタリナが待っていた。カタリナは、シストを見ると泣き出してしまった。六左衛門が、ちっちゃいルイスをすぐにだきとり、シストが何も言わずにカタリナをハグする。二人とも何を言っていないのかわからない。

シスト

「大丈夫かい。」

カタリナ

「シスト。シスト。シスト……。ひどい……。ひどい……。」

シスト

「ひどい。本当にひどい。」

二人には同じ連行の体験がある。家族も、友も、祖国も、奪われた悲しみがよみがえる。もしかして今、殺されようとしている3人は、祖国で家族や友を殺されたかもしれない。彼らも、死の恐怖を味わったかもしれない。少なくとも荒はいした祖国と、多くの同ほうの死をまのあたりにしている。そして、なわめのはずかしめと連行の旅の苦しみをなめている。そして、最後には異国の地でひきまわし、はりつけ、ごうもんを受けるのだ。この3人が、他の殉教者たちとは、まったくちがう5年間をすごしてきたことが、シストとカタリナにはわかるのだ。だから会いたい。会ってたった一言でもはげましの言葉をかけたい。祖国、高らいの言葉で。林の親分とおかみがはいつてきた。親分は、ルイスぼうやをだいている六左衛門に、がなる。

林の親分

「中国人が、いるのか。男の子なのか。」

びっくりしたルイスぼうやが、泣きだしたので、今度は、林のおかみが六左衛門からだきとる。

六左衛門

「うん。男の子が3人いて、一人が、お父さんが中国人でお母さんが日本人。もう一人が高らい人。あと一人が日本人だ。」

カタリナが、ひめいをあげた。

カタリナ

「えー。高らいの3人のうち一人は、男の子なの。」

六左衛門

「そうだよ。3人のうち、一番ちっちゃい子が、高らい人だそうだ。」

林の親分

「おまえ、すぐ仕たくにとっかかれ。冬の山ごえだ。おれは、馬を手配してくらあ。」

大わらわの旅仕たくがはじまった。時間のゆとりは無い。

シストとカタリナとルイスぼうや。六左衛門と林の親分とおかみは間にあった。1月19日、彼らは、尾道で殉教者たちに会えたのだ。真冬なのに一重の着物。そして、はだしである。はだしの足は、はれあがり出血している。着物は大量の血によごれている。左耳がそがれて、そこからの出血だ。六左衛門は、イエズス会の三人の仲間かけよっていく。パウロ三木、ヨハネ五島、ディエゴ喜斎だ。子どもが3人で、歩いている。一番ちっちゃい子にシストとカタリナが、高らいの言葉で呼びかける。ルドビコ茨木だ。ルドビコが、うれしそうに呼ぶ。

ルドビコ

「お父さん、おじさん、高らいの人たちだよ。」

林の親分は、中国人の男の子、アントニオが、呼びかけた中国語に答えたので、その子と話しはじめている。この区間は、さいわいなことに役人の頭が、話しをするのを見のがしてくれている。ルドビコに呼ばれて、彼の父のパウロ茨木とおじのレオ烏丸が高らいの言葉で答える。たちどまることはできない。

シストとカタリナの心は、たちまち、うめきはじめた。カタリナは、こみあげてくるおえつに口に片手をあてる。なぐさめと、はげましの言葉なんて何も頭にうかんでこない。泣きながらシストが声をしぼりだす。

シスト

「ぼくたちも高らいから連行されてきたんだよ。ぼくたちもキリシタンなんだよ。」

カタリナは、なきくずれそうになってきた。

カタリナ

「ぼうや。神様。助けて・・・・・・・・。」

ルドビコが、むじゃきに明るく答える。

ルドビコ

「おじさん。おばさん。泣かないで。ぼくは、もうすぐ神様に会えるんだから。しあわせなんだよ。ぼくたち十字架につけられて、両がわから槍でつきさされて殺されるんだって。ぼくは、神様をほめたたえながら死ぬってきめているの。」

パウロ茨木

「それと、神に感謝しながら、だね。」

父親らしくパウロ茨木が口をはさむ。

ルドビコ

「うん。神様にありがとうをくりかえしながらね。」

パウロ茨木

「そうだよ。神に賛美と感謝をささげつつ槍を受けるんだよ。」

パウロ茨木は、よろこびを満面にたたえて息子と話している。かわいい声で息子が答える。ニコニコしながらうれしそうに。

ルドビコ

「大丈夫だよ、お父さん。だって、ぼく、頭の中で何度もなんども練習してるんだもん。」

パウロ茨木

「愛する兄弟。高らいから連行されてきたなら、ひどいめにあったでしょう。つらいめにあったでしょう。でも、憎しみではなく愛ですよ。うらみではなく、ゆるしですよ。怒りではなく、柔和ですよ。さばきやのろいではなく、祝福と祈りですよ。」

シストとカタリナは、うなづきながら聞いている。言葉を耳と心にきざみつけようと必死になって、そして姿と顔を目に焼きつけようと見つめている。あふれる涙にじゃまされながらも、人間は不条理で残酷な強烈な体験によって、まっぴたつに分かれる。無理やり選ばされるといってもよい。憎むか、愛するか。うらむか、ゆるすか。怒るか、柔和にふるまうか。さばき、のろいか祝福し祈るか。中間のない両極へと分かれていくのだ。シストとカタリナ、林の親分とおかみ、そして六左衛門にとって、まさに今、神からの問いかけがなされている。そして、殉教者たちの姿は、その言葉よりもはるかに強く、愛とゆるしと柔和と祝福と祈りを選ぶことを呼びかけてくるのだ。

パウロ茨木（いばらぎ）の弟のレオン烏丸（からすまる）は、日本人のらい病者の世話に身をささげてきた説教師だ。今、彼は、高らいの言葉での最後の説教を、シストとカタリナにしてあげようと口を開く。

レオン烏丸

「愛する兄弟。同じ祖国を愛し、同じ神を愛する兄弟よ、神との一致を目指しなさい。それは、あわれな人間ほど、なおさらあわれむということです。私は、イスパニアのパードレや修道士と、この国のらい病者の世話をして、よくわかりました。日本人ほど、魂がくらやみにとざされているあわれな国民はいないと。日本人は、みんながやるからやる。みんなが、やらないからやらない。このような生き方に、がんじがらめにしばられています。目の前に、どれほどかわいそうならい病患者が苦しんでいても、みんながほっとくからほっとく、みんなが逃げるから逃げる。そうして良心も痛まない、かわいそうな国民です。

正しいことを正しいからという理由で行う。正しくないことを正しくないからという理由で行わない。もしこの国民にこれができるなら、私達の祖国を侵略することもなく、自分の同国民を、らい病者だからといって、のたれ死にするままにほっておくこともないでしょうに。神は、私たちをあわれんで下さいました。こうして、キリシタンになれたのですから。最もあわれなめにあった私たちを、神があわれんで下さったのですから、その神とともに、魂において最もあわれなこの国の人々をあわれみましょう。愛する兄弟、これが、私たち三人のあなたたちへの遺言です。さよなら、天国であいましょう。」

とうとうカタリナが泣き崩れてしまった。しゃがみこんだお母さんが、全身をふるわせておえつして泣くので、ルイスぼうやも、ワンワンと泣き出す。シストは、片手でルイスぼうやをだきあげ、片手でカタリナの背中をさする。六左衛門と林の親分とおかみが、シストたちを見つけてやってきて、皆そろった時、全員が泣きはらした目をしていた。六左衛門は、殉教者たちの最

期をみとどけるために、長崎に向かい、あとの皆は、いわみ銀山への帰途についた。

いわみ銀山に帰ってからも、皆の思いは、強れつに殉教者たちにひきよせられたままだ。銀山中に、シストとカタリナと林の親分とおかみが殉教者たちに来てきた、話しをしてきた、と知れわたり皆がその話しを聞いたがる。本物のなかの本物、神に次いで最も崇高な存在に、出会った衝げきからさめやらないまま、シストたちは皆にこわれるままに話し、思い出しては泣く。彼らの話しは、改心したばかりのつち親、ほり子、やま師たちの信仰を固め、熱心の炎をますます燃えたたせて、はかりしれない影響を及ぼす。3人の男の子たちの話を聞いて泣かぬものはおらず、特にすばらしい模範となっている。そんな小さな子どもたちは、いったいどうやって最期をとげたのだろう。知りたいものだ。皆が、同じのぞみを抱いている。そして、六左衛門が、とうとうそれを知らせにやってきてくれた。12才のルドビコ茨木と13才のアントニオは、一緒に神をほめたたえる歌をうたいつつ、やりのほさきを胸に受けた。

パウロ三木は、「自分は最も弱いものだから、まっさきにこのように死なしてくださる、その神に感謝する。」と最期に、感謝の説教を十字架上で行なつたと、六左衛門が目撃談を語ってくれた。彼らは、本当に感謝しながら賛美しながら大喜びで死んだのだ。

これを六左衛門から聞いた時、シストもカタリナも林の親分もおかみも、まったく不思議な体験をした。何と、心に賛美と感謝が突然、もうれつに湧きあがってきたのだ。

弱いもの、ちっちゃいものに、これほど明らかにあらわれた神の栄光。彼らに注がれた神の力。彼らに与えられた、神のあわれみ。神よ、あなたは善い方です。神様ありがとう、という賛美と感謝だ。

カタリナ

「私、あの3人の子を絶対忘れないわ。あの子たちにならいたい。ちっちゃいままでいて、どんな時にもよ、殺される時にもよ、神様ありがとう。あなたは、ほんとうに良い方です、て言いつづけるの。」

シスト

「ぼくもだ。あの一番ちっちゃなルドビコが、自分のための一番ちっちゃな十字架にかけよってその木をだきしめたのに、ぼくはならいたいよ。この十字架、大好きって、苦しみとはずかしめ、そして、死までもだきしめたいよ。」

12才の高らいの男の子ルドビコ茨木（いばらぎ）の印象が最も強れつに、2人の心に残ったかのようにみえる。しかし、パウロ茨木（いばらぎ）の言葉とレオン烏丸（からすまる）の説教は、2人を今からおそうとほうもない打撃にそなえ、神が語らせたとしか思えない。2人は、彼らの言葉の重さを理解し、その言葉でもってかろうじて自分を支えることになるのだ。

1597年の4月、前回の訪問で、殉教者たちの最期を伝えてくれた六左衛門が、今回もってきた知らせは、シストとカタリナの胸にやいばを突きたて、えぐるようなものだ。六左衛門自身が、よく分かっている。友情は、彼らの心と六左衛門の心を深く結びあわせており、彼らにとって何が一番苦しいことか、六左衛門には手にとるようにわかるのだ。しかし友情で結ばれているがゆえに、かくすことはできない。六左衛門は、今晚大事なことを話すと言い。すぐには、言わない。林の親分とおかみに唐人屋敷に来てもらうという。日がくれて、林の親分とおかみがやってきた。六左衛門が、とうとう伝える時がきた。

六左衛門

「シスト。カタリナ。君たちの祖国にとって最悪の事態だ。秀吉が、さらに14万人以上の大軍を、高らいにせめこませることにきめた。義兵を皆殺しにして、高らいを制服するつもりだ。」

シスト

「そんな……。」

カタリナ

「うそ……。」

カタリナがシストの手を求める。カタリナの手が、どんどん冷たくなるのをシストは感じる。ショックが大きすぎたのだ。シストは、こみあげてくる怒りの感情に圧倒され、カタリナの手をにぎったその手がふるえる。シストが怒りに満ちた声をあげる。

シスト

「やつらに、高らい人を殺りくする権利なんてない。高らいを、征服する権利なんてない。高らいの人が、自分の国を守って戦うのは、高らいの人の正しい権利だ。」

最期には、大声になった。カタリナも、涙声で怒りの抗議をする。

カタリナ

「どうして日本人は、誰も秀吉に反対しないの。どうして、こんな悪いことにみんな賛成するの。どうしてなの。」

林の親分

「ちくしょう。なんてやつだ、秀吉め。死んじまえ。」

林のおかみ

「シスト先生と奥さんがおこるのも、もっともだよ。何で人の国をぶんどらなきゃならないのさ。」

林の親分とおかみも、いきりたっている。シストとカタリナにとって、自分たちの義ふんに心から同調して同じ義ふんにかられてくれる、林の親分とおかみがこの場において本当によかった。シストは怒りを表現し、同調してもらわなければ、今はどうしようもない

シスト

「やつを殺してやりたい。」

林の親分

「おれもだ。」

シスト

「ぼくは、やつが憎い。」

シストの声は、怒りからうめきに変わってゆく。

シスト

「祖国と同ほうが、こんなめにあうより、ぼくが一万回殺されるほうがいい。」

人は、自分をひどいめにあわせた人を許すのと、自分が最も大切に思い愛している人をひどいめにあわせた人を許すのと、どちらがたやすいだろう。実は、前者の方がよりたやすいのだ。そして後者は、最高に、むつかしいことなのだ。シストとカタリナが、怒りと憎しみの感情をいだいたのは当然のことだ。

今、この時点でのシストとカタリナに、神に賛美と感謝をささげながら殺されるよう神が求めれば、二人はそれができるにちがいない。しかし、彼らに弱りはてた祖国をさらに痛めつけ、生き残っている同ほうを、さらに殺りくすることを秀吉が命じたことについて今、神に賛美と感謝をささげることはできない。今、秀吉を愛し、許し、祝福することはできない。今の二人には不

可能だ。連行されてからの一日一日は祖国愛が増す、一日一日だった。特に義兵の抵抗は、伝え聞く二人をいっそう激しく祖国愛に燃えたたせ、今では祖国と同ほうのためには、一万回死ぬことだって望むほどになっている。その祖国が滅ぼされ、民が特に、義兵が殺りくされる。命令は出て、準備が日本中で始まった。義兵の抵抗によってこの侵略がざせつし、兵が引きあげ、祖国が解放されるという望みは、シストとカタリナはじめ、日本にいる高らい人全員の望みだったのに、その希望の灯は、吹き消されてしまった。今から、この状況で神は、シストとカタリナにルドビコ茨木（きばらぎ）とパウロ茨木（いばらぎ）とレオン烏丸（からすまる）の姿と言葉を通して、神に感謝と賛美をささげ、秀吉と日本人をあわれみ、彼らを愛し、許し、彼らに対し柔和であり、彼らのために祈り、祝福するよう求める。この点で、シストとカタリナが神から受けるしれんは、3人の高らい人殉教者よりもはるかに大きいといえる。しかも、神は、このためしを1年9ヶ月にもわたって、シストとカタリナにかしつづけるのだ。

1599年1月末に、高らいは完全に解放される。その日まで、日々、絶えず神はシストとカタリナにこの課題をつきつけ、要求し、ためしにためしつづける。2人にとって生涯の中で最大のためしにあう1年9ヶ月だ。なぜ、このようなことを神は2人になさるのか。それは、2人を最高にすぐれた道具にするためだ。不純な動機はいっさいなく、ただ純粹に愛の動機だけで行動する道具、神の助けがなければ、良いことは何ひとつできないと痛感している、けんそんな道具、どんなに長くまたされても希望と信頼で忍耐しぬく道具にするためだ。シストがうめく。

シスト

「高らいを救いたい。六左衛門。高らいをすくうためにぼくは、いったいどうすればいいんだ。ぼくには、何もできない。」

あれくるった怒りに、悲しみがどんどん混じっていく。シストは、男泣きをはじめた。林の親分は、シストの肩をだきに行き、反対がわから林のおかみがカタリナの横に座る。カタリナは、両手を林のおかみに回しだきついて泣く。六左衛門は、シストが静まるのをだまってまちつづけ、男らしく悲しみつつ論理的に話す準備をしている。六左衛門がゆっくり、そしてきざみこむように話しはじめる。

六左衛門

「シスト、カタリナ。君たちは、一万回死んで、高らいをすくうことができるよ。」

シストとカタリナは、六左衛門を見る。

六左衛門

「自分に死ぬということを一万回も、それ以上も行なえば、君たちの愛する祖国を、君たちは神に救ってもらえる。必ず、きっとだ。」

シスト

「自分に死ぬって。」

六左衛門

「自分を殺して、自分の望みじゃないことを行なうこと。自分の好みや、望みや計画ではなく、それと対立する神の好みや望みや計画を受け入れて実行すること。これが自分に死ぬことだよ。」

シスト

「具体的には、何をするんだい。」

六左衛門

「このあいだ君たちが、パウロ茨木とレオン烏丸からさずけられた、ゆい言を実行することだよ。」

シスト

「あわれみの全くないやつらを、あわれまなきゃならないのかい。晋州城でやつらは、赤ちゃんにいたるまで何万もの人をみな殺しにしたじゃないか。」0

シストは、抗議する。

カタリナ

「なぜ秀吉までも愛し、ゆるし、祝福し、祈ってあげなければならないの、どうやってそんなことが実行できるの。」

カタリナも抗議する。

六左衛門

「君たちが、できないって思うのは当然だ。同じ立場だったらぼくにだってできないもの。だから、あの3人の聖人たちに助けてもらうんだ。彼らはやってのけたじゃないか。そして、君たちにそれをやるようにすすめた当の本人なんだから、必ず助けてくれるよ。彼らは、神とともにあわれな侵略者の秀吉と日本人をあわれんで、祖国のためにくどくをつんでそれをささげた。2月5日までに彼らがやってくれたことを今日から今度は君たちがひきつぐんだ。いいかい。神は全てを支配しているんだよ。この侵略をやめさせることも、神様にはできるんだよ。ただ、そのためには神と一致して愛とゆるしとあわれみを実行する、いけにえになる人間が必要なんだ。ほらイエズスが自分を殺す人々を愛し、ゆるし、あわれんで「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは、何をしているのかわからないのですから」って祈っただろう。くどくをつんで、それをささげることによって神が何でもなさってください。これを信じるんだよ。」

カタリナ

「高らいをすくうことが私たちにできるの。」

六左衛門

「神は、全てを支配してらっしゃる。だから高らいを救う唯一の方法がこれなんだよ。神にやっってもらうんだ。」

シスト

「この方法しかほんとうにないのかい。」

六左衛門

「秀吉と日本人は、確かに悪魔に導かれている。その悪魔に打ちかつには、愛とけんそんしかないんだよ。なぜなら、悪魔には愛とけんそんがこれっぽっちもないから、愛とけんそんを実行する人間と戦うと、混乱し負けてしまうんだよ。この方法をえらべば、それが、実行できない弱く悪い自分自身に直面する。その時こそへりくだって自分の弱さ悪さをみとめ、神に、天使たちに、聖人たちに、特にあの3人に助けてってたのむんだ。それで、けんそんになれるんだ。悪魔が

秀吉と侵略軍を守っていると考えてごらん。そしたら、悪魔より強いほうに頼むしかないってわかるだろう。その神に願いをかなえてもらうには、君たちがまず神の願いをかなえてあげるんだ。」

シストとカタリナに、今は、もうすでに強力な助けが聖なるあの3人の殉教者から与えられはじめている。シストとカタリナに、彼らの姿と言葉がありありと脳裏によみがえる。六左衛門の言葉だけでは、2人にはこの試れんはのりこえられないにちがいない。しかし、生きた模範をふたりはもっている。天国からの助けを送ってくれる生きた模範だ。彼らにはできた。しかも子どもにすら。林の親分とおかみもいっしょになって考えている。13才のアントニオの模範が彼らにはある。もちろん天国からのこの子の助けもだ。

六左衛門

「実はね、こんどの26人の殉教が日本ではじめての殉教ではないんだよ。イエズス会のパードレが過去何人も仏教の僧りよから毒殺されているんだ。ぼくたちイエズス会の関係者は、それでも日本人を愛し、ゆるし、あわれみ救いを願っている。ぼくにとっては敬愛する恩師たち、ポルトガルやイスパニアの会員にとっては愛する仲間が何人も暗殺され続けているのにだよ。彼らのとうとい犠牲とぼくたちのゆるしと愛とあわれみを合わせて神様にささげ、日本をすくっていただくためにね。」

林の親分

「でも秀吉を愛するってどうすりゃいいのかい。おれはあんなやつ大きらいだぜ。」

林のおかみ

「わたしもさ。好きになんてなれっこない。あんなやつ。」

六左衛門

「愛は、好ききらいにとらわれず、相手の善を願ってあげることなんだ。だから、秀吉が救われますようにって、神様に願うことで大きらいなままでも愛したことになるんだよ。」

シストがつぶやく。

シスト

「自分に死んで、いけにえの愛にいきる……。」

シストがまたつぶやく。

シスト

「父よ、秀吉と日本人をお許してください。秀吉と日本人は、何をしているのかわからないのですから……。」

皆がシストのひとりごとに耳をすましている。

シスト

「これを言うのは死ぬほどつらい……。」

カタリナが何度もうなずいて胸に苦しそうに手をあてる。

シスト

「でも高らいを救うにはこれしかない。だったらぼくはやる。ぼくたちはやる。」

シストはカタリナを見、カタリナは答える。

カタリナ

「うん。」

林のおかみ

「わたしたちもいっしょにやるからさ。」

林の親分

「そうだ、そうだ。シスト先生と奥さんの祖国のためにおれたちもいっしょにやってやるぜ。

なあ、六左衛門。」

六左衛門

「もちろんだ。」

シスト

「今、この言葉を言ってみてぜんぜん許せていない。愛せない。あわれめない自分がはっきりわかる。ぼくは、最低最悪だ。三人の殉教者とくらべたら、なおさら自分のみにくさが思いしらされるよ。」

カタリナ

「六左衛門。でも、秀吉と日本人を救ってあげてって言えば、それでも高らいを救えるのよね。心が反対のことをさげんでいても。そうでしょ。」

六左衛門

「そのとおりだよ。いや、むしろ感情が反発し、言うのがつらければつらいほど、自分に死ぬ、いけにえの愛に生きるってことが、よりできているってことなんだ。」

カタリナ

「よかった……。私は、今は、心から言えないもの。」

本当に、シストとカタリナにとってこれを言うのは心における「死」だ。前もって確実に死を予告された人がたどるプロセスというものがある。受けいれられなくて最初は怒り、あれくるう。

「なぜ自分だけがこんなめにあうのか。神は、運命は、残酷だ。」と。そして悲しみにふさぎこんでいく。そして少しずつ死が受け入れられるようになる。そして、心に少しずつ平和が戻ってくる。そして、死を良いものとしてとらえようとする。それができる程度に応じてよろこびさえ生じてくる。シストとカタリナは肉体上の死を告知されたものがたどるプロセスにちょうどそっくりの道を行きはじめた。今は、怒りと悲しみが強くて「受けいれる」ということはまったくできない。理解し、いっしょに苦しんでくれる友、六左衛門、林の親分とおかみの存在が地上でのたのもしい助けだ。そして、本当に天国からの助けが支えとなるのだ。なぜなら神に賛美と感謝をこのことについてもささげるよう、そこまで神は2人に求めており、それができるためには地

上の友だけでは、まったく足りないからだ。シストとカタリナは、ルドビコ茨木、パウロ茨木、レオン烏丸と固く結ばれた。そして、神は高らいの救いの計画を本当に彼らによって継続して下さるのだ。

1597年9月だ。高らいの南は征服され、高らい水軍が壊滅し、2人の祖国が残虐にふみにじられている知らせが届く。2人の心における「死」は、深い。神から見捨てられたようにすら感じるくらいだ。しかし2人は愛する祖国を救うために、その「死」を何万回もささげようと、「秀吉と日本人を愛し、ゆるしあわれむ。彼らを救ってあげてください。」と忍耐づよく続けている。4才になったルイスぼうやのかわいさは、2人の心の苦しみを大いにいやしてくれる。映画「汚れなきいたずら」のマルセリーノぼうやが5才だったと言えばルイスぼうやのかわいさかりの姿が思いうかぶだろう。神は、けなげに心における「死」をささげ続けるシストとカタリナに特別なはげましを与えてくださった。2番目の子が宿ったのだ。ルイスぼうやも弟か妹ができると聞いて大よろこびだ。「お母さんが食べたからおなかに入ったの。」とか言って質問しまくり、実にかわいらしい。いたずらもし、シストのやることを何でもまねるルイスぼうやの幼いむじゃきさは、かわいいだけでなく、憎むことも、うらむことも、復しゅうすることも、さばくことも、のろうこともない天使のように生きるということを姿をとおしてシストとカタリナに教えてくれる天の教科書、教材だ。こうして、ふたりは幼子路線へとみちびかれ、靈魂の毒である憎しみ、うらみ、復しゅう心、さばき、のろいからより完全に清められていく。

1598年2月。2番目の子が生まれた。男の子だ。この子の代父は、林の親分で、この子はヨアキムという彼の名をもらった。六左衛門が例の「かための盃のためのとひょうたん」で洗礼を授けてくれた。ヨアキム赤ちゃんは、誰がみてもお母さん似だねと言われる。気質もどうやらカタリナゆずりのようだ。カタリナの気質の最大のものは並はずれて豊かな同情心だ。シストの気質は強い正義感が最大の持ちようだ。正しいと信じたら、どこまでもどこまでも信じたことをやりぬくことと、自分の言葉に対して誠実でありつづけるという行動にそれがよくあらわれる。シストは、「祖国の救いのためには一万回でも死にたい」と宣言した。そして六左衛門から教えられた方法が正しく唯一の方法だと理解し、確信した。いよいよ侵略は7年目にはいり、戦闘のすさまじさと祖国の荒廃のひさんさがますます耳に届くが、彼は妻をはげましはげまし、何万回ではなく何十万回とあわれみのシュート練習を繰り返す。韓国のサッカー選手のようにますます強く、多彩に、遠くに、正確にけることができるようにあきらめることなくチャレンジをくり返す。

「秀吉と日本人をあわれみます。彼らの永遠の救いを望みます。」と、これが心の底からの祈りと祝福になることをめざして。しかし、賛美と感謝をこのことにおいて、この状況でささげることが本心からできるようになるという目標は、気の遠くなるほどの先にあるように2人は感じている。2人の内的な戦いの困難さを助けるために神はマリア様を通してカタリナの豊かな同情心に働きかけてくださった。

ある日、カタリナは、ルイスぼうやとヨアキム赤ちゃんと3人でいた時、突然、マリア様からのインスピレーションを受けたのだ。それは、マリアママは、秀吉の母でもあり、侵略軍の一人ひとりの母でもあり、全日本人一人ひとりの母でもある。マリアママは、彼らを実の母親の何億倍も愛していて、永遠の救いを得させるためならどんなことでも、それこそ何万回でも死んであげたいと思っていらっしゃる。私は、秀吉の母である又、日本人の一人ひとりの母であるマリアママの気もちが、この2人の子をもってわかる。マリアママの身になれば、真実に秀吉と日本人をあわれんで、その一人ひとりの永遠の救いを願いもとめることができる。今、そうやってみたら、本当に私は彼らをあわれむことができた。祖国の人々と何の差別もなく。全人類の母、あわれみの母であるご自分への一致という手段を与えた瞬間、カタリナは心において完全に死ぬことができるようになった。つまり、真実に、心の底から敵を愛し、あわれみ、ゆるし、祈り、祝福できるようになった。この瞬間的な心の刺激的变化にカタリナはおどろきのあまりとびあがって叫んでしまった。

カタリナ

「やったー。できたー。マリアママありがとう。あなたは本当に善い方です。賛美と感謝です。」

」

そしてカタリナは再びおどろいてとびあがった。

カタリナ

「賛美と感謝だって。私、賛美と感謝してる。カタリナは自分の中に働いた神の恵みと自分の中

にうちたてられた愛の徳が突然のもので一方的なマリアママの働きかけだったので純すいに内的な世界だけを見て賛美と感謝をささげたのだ。外的な状況はいっさいかわりなくだ。仕事を終えたシストが帰ってくるとカタリナは食事のしたくもほったらかして、まちきれないかのようにシストにとびついてマリアママから受けたインスピレーションと心の変化という恵みを一生けんめいになってシストに語る。二人は立ったままだ。聞いているシストの目から涙があふれ、ほほをつたってころがりおちる。カタリナも涙をながす。

シストは静かに泣き上を見上げる。

シスト

「マリアママがぼくを今救ってくださった。ああ……。苦しかった。」

カタリナ

「シスト、シストもできる。」

シスト

「うん、ぼくも今、できたんだ。」

カタリナ

「そして、心が変わえられた。」

シスト

「うん。ぼくは今、はじめて、本当にマリアママに出会ったよ。頭の判断をすべてやめて、ただ心だけであわれむってことが今ぼくの中で起こったんだ。こんなの生まれてはじめて体験した。マリアママが、ぼくを新しく生まれ変わらせてくれたみたいだ。こんなみじめで弱く、悪い、最低最悪のぼくのところまで、マリアママがきてくれたんだね……。」

シストは、静かにかたり、静かに泣き続ける。

シスト

「マリアママ、あなたのあわれみを感謝します。賛美します。」

神の2人に対する要求はきわめて高く、きびしかった。神は2人の中に、きわめて大きい祖国愛と神の国への愛をあらかじめ育てあげ、それから神の国を根絶しようとしたネロ皇帝とその手下どもと、一つの大きな民族を滅ぼしつくそうとしたヒトラーとその手下どもを合わせたような存在である秀吉とその手下ども、その国民を心から愛し、ゆるし、祝福し、祈れという、課題をかしたのだ。シストとカタリナは、どんな高らい人よりも徹底的に自分の罪ぶかさを見つめさせられ、思いしらされた。弱さ、悪さ、ゆえに、一步も自分では前進することができない、それほど最低最悪な魂のもちぬしなんだと痛感させられた。祈りがなにもききとどけてもらえぬように感じ、神から見捨てられたと本当に思わされた。こうして今日、マリアママが一方的に2人の心に奇跡を行なって2人を助けて変えて下さった。

どのように変えて下さったかという、一言で言えば、マリアママ的な魂に変えて下さったのだ。シストとカタリナはどんな高らい人よりもマリアママ的になった。日本という国の中に、ほとんどの人に知られずかくれた存在である。治外法権の鉾山の世界というならずもの国がある。この国のどうしようもないほど罪によごれくさったならずものたちのカトリック教会の大將と女大將、2人の指揮官を今、神はマリアママによってマリアママ的に変容させた。それは、このな

らずものの国のカトリック教会が完全にマリアママ的なカトリック教会として育てられ、15年後には迫害によってキリシタンをやめますと宣言したぼう大な人々を、箱舟のようにふところに入れて、守り、天国へと運ぶという役わりを受けるようにさせるためだ。母は、どんな子も見捨てない。例外なくどんな子もなのだ。それをシストとカタリナにひきいられた地下教会は実行することになるのだ。今、シストとカタリナには、それは未来のこととしておしえられてはいない。今はただシストとカタリナのマリアママへの愛がどんな高らい人よりも強くなり、マリアママの母的心をどんな高らい人よりも完全に理解したとだけ言える。

1598年9月16日 シストとカタリナのマリアママによって清められ完全にされた愛とゆるしとあわれみと祝福の祈りを神は、よろこんで受け取ってくださったのだ。とうとう神は指を動かして下さった。秀吉が、死んだ。シストとカタリナはもちろんこのことを知らない、そして、祈り続ける。11月になり、侵略軍の総退去がはじまった。高らいは、救われたのだ。

しかし、日本ではこれらすべてが秘密にされていた。

六左衛門は、長崎でイエズス会の情報網により、侵略軍に総退去を命じる使者が秘密のうちに出発したことを10月はじめにいち早く知った。

1598年11月、六左衛門が石見にやってきた。もちろんシストとカタリナにこのすばらしい知らせを伝えるために。カタリナは、ルイスぼうやとヨアキム赤ちゃんをつれて散歩にいているようで家にいなかったのでシストの仕事場に向かおうと歩いていたら、偶然、林の親分とおかみにでくわした。

林の親分

「おー六左衛門、久しぶりだな。」

林のおかみ

「何ニコニコしてんのさ。何かいい知らせかい。」

六左衛門

「やー 久しぶり。」

六左衛門は、林の親分とおかみに秀吉の病死と、その結果、侵略軍に総退去命令が出され、総退去がはじまっていることを詳しく話した。

林の親分

「本当か――。う――ん。」

林のおかみ

「まあ。あの二人、とびあがってよろこぶよ。」

林の親分

「六左衛門、あの二人には、まだ知らせてねえんだな。よーし。六左衛門、10日間だけ、これをあの二人にはだまってくれねーか。」

六左衛門と林のおかみは「え――。」とびっくりして声をあげる。

林の親分

「あの二人、本当に、心から秀吉と侵略軍と日本人の魂の救いを祈ってるんだぜ。おれの祖国が同じじめにあってたら、おれは絶対まねできねえ。いくらほめてやってもほめたりねえ立派な行いだ。そして、とうとう神様を動かしちゃった。おれが神様だったとしても、こんなけなげな二人の願いを聞かないわけにはいかねえな。あいつら自分の祖国を救ったんだ。悪に対して悪を返さず。善をもって悪にうち勝てってーイエズス親分のおっしゃることをそのまま地でいってよー。いくら祝ってやっても祝いたりねーよ、これは。な。そーだろ。」

六左衛門と林のおかみは大きくなずいている。

林の親分

「おれにまかせろ。最高の祝いの席をもうけてやる。」

六左衛門は、シストとカタリナに会えば必ず高らいの戦況を質問されるから、それをさけるために、10日間はよそを伝道してくることにして石見銀山から出て行った。

林の親分は、子分たちを伝令にたてて、キリシタンつち親たち全員が集まるよう集合をかけた。子分たちは地下教会の広まった鉱山全部にすっとなでいった。林のおかみは、大森町で一番格の高い店の一番格の高い部屋に大宴会の予約をいれた。

日がたつにつれ、カタリナは、林一家のなつかしい顔をよくみかけるようになった。晩ごはんを食べながらシストに言う。

カタリナ

「ねえシスト。このごろなつかしい人の顔をよくみかけるのよ。キリシタンつち親になってよその鉱山に行った人たちなの。ふしぎだわ。」

シスト

「へえー。何なんだろうね。ぼくの方は、今日、林の親分がやってきて、あさっては仕事は休みだって。ぼくたち家族に大森の町で昼ごはんをごちそうしてやるって。」

ルイス坊や

「わーい。大森の町で、ごちそうなんだ。やったー。やったー。」

シスト

「誰か、つち親の襲名式をするのかって聞いたけど、そうじゃないって。いいから、いいから腹ペコにしとけ、ごちそうがいっぱいぞ、だつてさ。」

最後は、ルイス坊やのおなかをポンポンたたく。

ルイス坊や

「ぼく今から何も食べないでおなかをすかしくね。」

話題は、どんなごちそうが出てくるかという方へいった。

当日がきた。林の親分とおかみが、シスト一家をむかえにやってきた。それと、どこからあらわれたのか六左衛門がいるのでシスト一家はびっくり。

カタリナ

「六左衛門。いつ来たの。えー。どうして。」

六左衛門

「お店につくまでないしょだよ。」

六左衛門は、いたずらっぽく答えて、とびついて来た。ルイス坊やを高くだきあげる。お昼ごろ、大森の町の一番大きな料亭に着き、中にとおされる。部屋につくと人がいっぱいいるのに、まずおどろかされた。100人は、こえている。あちこちでシスト塾をやったシストには、見おぼえがある顔が多いが、あったことのない人もまじっている。林の親分とおかみがシスト一家を上座の方へ、上座の方へと手を引いてつれていくので、シストとカタリナはうろたえはじめた

林のおかみ

「びくつくことないよ、さあ、こっちだよ。」

とうとう一番の上座、主ひんの席に座らせられてしまった。シストとカタリナには、何がなんだかさっぱり訳がわからない。集まったもの全員が、シスト一家をのぞいて何の祝いか知っている。そして、これがびっくりパーティーだということも。それで、シストとカタリナのうろたえぶりを今、皆がニコニコしながら見守っている。林の親分が全員に立てと手で合図する、シスト一家はすわらせられたままだ。乾杯ではない。いったい何がはじまるのか。ルイス坊やは、皆にならって立ってしまった。

林の親分

「六左衛門 はじめろ。」

六左衛門

「みんなー。よく聞けー。」

全員

「おー——。」

六左衛門が大声で叫ぶ、皆が大声で答える。

六左衛門

「おれたちの大將と女大將は、イエズス親分の命令どおり、悪に対して悪を返さず、善をもって悪に打ちかったぞー。」

六左衛門が、にぎった右手のこぶしをつきあげる。立ちあがっている男たち全員が「うお——。」と長くさけんでこぶしをつきあげて答える。

ルイス坊やもまねして同じことをやっている。

次は、林の親分が、どら声をはりあげる。

林の親分

「おれたちの大將と女大將は、イエズス親分の命令どおり、敵をにくまず、敵を愛して、自分たちの祖国を救ったぞー。」

林の親分も右手のこぶしをつきあげる。全員が「うおー。」と答えてこぶしをつきあげ喜びを全身で表現する。皆の声の調子の祝いとよろこびのムードにのせられてルイス坊やも大よろこびして「お——。」と叫んで手をぐるぐるとふりまわしている。

シスト

「自分たちの祖国を救ったって。」

シストは、立ち上がって六左衛門と林の親分にむかいあい二人の肩に手をおいた。

シスト

「今、祖国が救われたって言ったのかいもしかして。」

二人は強くうなずき、六左衛門がくわしく説明する。

六左衛門

「秀吉は、六月の終わりに赤痢にかかった。8月5日に病状は悪化して絶望的になった。9月16日の朝、未明に秀吉は死んだ。その後、極秘のうちに高らいに総退去を侵略軍に命じる使者が送られた。今、高らいでは、実際に侵略軍が占領地を放棄して総退去をしている。神は、秀吉に突然の病死をもたらし、それによって高らいを救ってくださったんだ。」

三人は今、輪になって肩をくんでいる。むこうでは、林のおかみがカタリナにくわしく教えてくれているようだ。カタリナが「キャーツ」と叫んでいる。

カタリナが立ち上がって、シストがめがけて手をひろげて近よる。シストとカタリナが今、だきあう。

二人とも泣いている。

林の親分

「大将と女大将の大勝利だから兵たち全員で祝わなきゃな。」

カタリナにだきつかれ、だきしめられたままシストが両手を天の方へ高々とあげる。

シスト

「ああ、神さまありがとうございます。マリアママありがとうございます。みんなありがとうございます。」

シストは集まってくれた男たちの方へ目をやる。

シスト

「高らいが、救われたなんて、夢じゃないだろうか。ぼくは、喜びで自分が死んでしまわないのが不思議なくらいにうれしい。これは、ひとえにマリアママのおかげなんだ。ある日、マリアママはカタリナに、そしてカタリナを通してぼくに、マリアママは全ての人、一人ひとりの本当の母で、どんな悪人でもけっして一人も見捨てないってさとらしてくれたんだ。そして、二人に敵をゆるし、愛し、祝福し、彼らの魂の救いを心から願い求める心をくださったんだ。ぼくたち、二人とも自分一人ではそれができなかった。ただただマリアママの助けでできたことだから、みんなの前で告白する。ぼくたち、二人とも何のてがらもたててないし、勝利も得ていない。マリアママが、たたえられ愛されますように。」

カタリナがシストに話す。

カタリナ

「シスト、私もうれしくて、夢を見ているここちがするわ。私たちを天国からルドビコ茨木とパウロ茨木とレオン烏丸が、たくさん助けてくれたわよね。三人にも本当に感謝よね。三人は、天国で大よろこびよね。」

宴は、はじめた。林のおかみは、ルイス坊やのために魚の骨をはずして、身を口に運んでやったり、母親のように世話をしてくれている。シストのもとには、100人以上の男たちが一人ひとり、全員、次々にやってきて、高らいが侵略から救われたことを祝ってくれた。彼らは全員キリシタンつち親で、シストが会ったことのないキリシタンつち親は、シストが教えたつち親とほり子のうち、その時、つち親として洗礼を受けたものを一代目とすると、ほり子として洗礼を受けて、あとでつち親を襲名したのが二代目だ。この二代目のキリシタンつち親が、他の鉱山に出て行って育てあげた三代目のキリシタンつち親なのだ。ねずみ算式にふやすというシストの戦略はうまくいっており、もう三代目のキリシタンつち親が生まれているということが宴の間にシストに分かってきた。しかも、現時点で100人以上にキリシタンつち親は、なっており、皆、地下教会の広がりをめざしてくれており、キリシタンつち親がいない鉱山へとどんどん出ていって来ており、今や約100ヶ所にキリシタンつち親がいるという鉱山の地下教会の成長ぶりが

分かってきた。

六左衛門と林の親分のシストに対する熱い熱い友情が実現させたこの祝宴は、はからずももうひとつの大勝利、地下教会の予想外の急発展の姿をあらわに見せてくれるものになった。シストは、彼ら一人ひとりに心からお礼を言う。「こんなぼくたちのためにわざわざ集まってくれてありがとう。ぼくたちの祖国の勝利のためにこんな祝宴をはってくれてありがとう。みんなのおかげでぼくたちの喜びは百倍になったよ。」と。

そして彼ら一人ひとりの口からうれしくも意外な言葉が返ってきた。

「シスト先生と奥さんに少しでも恩返しができる絶好のきかいがきておおよろこびでかけつけてきました。」

「自分にとって最大の敵である秀吉のためにすら祈り、愛するなんてすごい模範を与えてくれるシスト先生と奥さんが大将と女大将だということで本当に誇らしく思っています。」

「今、まだ、こうやって元気に生きていることも、しかも神におつかえする生きがいをもってしあわせに生きていることも、みんなシスト先生と先生の奥さんのおかげだから、こちらこそ感謝します。」

「自分の人生に希望があるのも、天国に希望がもてるのも、ほり子たちの人生に希望をもたらせるのも、ほり子たちに天国の希望を与えてやれるのもみんなシスト先生と先生の奥さんのおかげです。ほり子たち全員の感謝も伝えます。」

「シスト先生と先生の奥さんが秀吉のために救霊を祈り求めて彼を愛したのを見て、悪党でならずものでいまだに、罪にまみれている自分のようなものも、絶対、救ってもらえるんだ。神様は、あわれみなんだゆるしなんだと本当に確信できました。この模範で救いの希望がますます強められました。ありがとう。」

「シスト先生 直伝の高らいのすごい技術をたずさえて新しいところへ出て行けるのでいい立場を得られるんです。本当に、感謝してます。」

「結婚して子どもをもってます。すごくしあわせです。シスト先生がキリシタンつち親になって妻をめぐって、妻とだけ寝るように言って下さったおかげです。」

宴は、終わりに近づいている。大きすぎではしゃいで、ごちそうをお腹いっぱい食べてルイス坊やが林のおかみの胸にだかれてねてしまっている。いとおしくてたまらない、ていうふうに林のおかみがなでたりほおずりしたりするのを見て、ヨアキム赤ちゃんにおっぱいを飲ませているカタリナが思いきって前からの疑問を口にしてみる。

カタリナ

「ねえ、おかみさん。親分との間に子どもはできないの。」

林のおかみ

「私さー。実は、遊女だったんだ。何度もむちゃくちゃな方法でおなかにかきた子を流産させたの。つまり殺しちゃったの。それで、子宮がだめになってもう妊娠できなくなっちゃったの。私は、売春婦で人殺しなんだ。でもマリアママはどんな子も決して見捨てない。私も救ってもらえる。しあわせ。」

林のおかみが、やすらかな顔でほほえむ。突然カタリナはすさまじい感動にとらわれた。全身にとりはだがついて。背筋がぞくぞくし、体にぶるぶるみぶるいがおこった。その反応を見て林のおかみが言う。

林のおかみ

「どうしたのよ。正直に言って。私、軽蔑にはなれているから。」

カタリナ

「ちがうのよ。マリアママは、どんな子も決して見捨てない。私も救ってもらえる、しあわせっておかみさんが言った時、感動しちゃったの。自分の罪深さをこんなに素直にみとめながら、こんなにマリアママのあわれみと神さまのゆるしを深く確信している人に私、生まれてはじめて会ったわ。私、尊敬を感じる。私、おかみさんのこと、今の話で、今までも大好きだったけど、うんと、うんと、ますます好きになったわ。今日、男の人たちの友情の美しさをうらやましいと思ってたの。私、おかみさんと最期までいっしょにいて、いっしょに殉教したい。ねえ、林の親分はそれを知っててめとってくれたの。」

林のおかみ

「そうよ。もちろん。」

カタリナ

「ああ、私、林の親分もますます尊敬しちゃうな。」

林のおかみ

「私は子分たちを息子たちと思ってかわいがっているんだ。でも、この子は特別。」

林のおかみは、まだ胸で寝ているルイス坊やをぎゅっとだきしめる。

林のおかみ

「この子は親分肌よ。うちの人も私も親分肌だから、なんかね、二人の間に生まれた子みたいに感じちゃってかわいくってたまないんだ。」

シストとカタリナにとって、こんなふうに自分たちが地下教会のクリシタンつち親みんなから祝ってもらったことなんてもうないだろうなと思っていた。シスト一家は、毛利氏にお金で買われた奴隷いで、毛利氏のものだ。他のつち親やほり子や山師は全国どこにでも移動できる。しかし、この二人は毛利氏が派けんするところにしかゆけない。この祝宴から約2年たった。

1600年の暮れ、唐人屋敷に毛利氏の鉱山役人がやってきた。

鉱山役人

「シスト先生、奥さん。毛利氏はこのたび石見銀山を放棄することになりました。ここは天領となって幕府が直接支配することになります。それで、先生ご一家はもう自由です。」
事情がまったくのみこめないまま鉱山役人を見送った二人は、まだ喜びがわいてこない。自由になったといわれても実感がないのだ。二人は、林の親分のところへ行くことにする。林の親分とおかみは関ヶ原の戦いで毛利氏が石田三成がわに最初ついていて、合戦の場で寝返ったことなど知っていた。これが、シスト一家を自由にする原因になったなんて意外ななりゆきにびっくりしてしまった。

林の親分

「自由になったって一こった一、シスト先生。高らいにももしかしたら帰れるっていうことだけ。」

林の親分の顔に一瞬、不安そうな表情がうかぶ。林のおかみの顔にもルイス坊やとヨアキム赤ちゃんを見て不安そうな表情がうかぶ。シストもカタリナもそれに気づいている。高らいに帰れると聞いたとたんにシストとカタリナの心は大きく波だちはじめた。帰れるかもしれないんだ。帰りたいた。林の親分は考えている。世界最高の精錬技術をもち、信仰においてもすばらしい模範を示し、ならず者のおれたち皆が心服する指揮官。そして、この大成功をおさめた戦略を生み出し皆にさずけた大將が、今、戦列をはなれてしまったらどうしよう。

彼にかわる人などいないのにと。林のおかみは、もしかしてルイス坊やとも、うちの人が代父になったヨアキム坊やともお別れなのかしらとはらはらしだした。シストも自分の指揮官としての責任のことを考えている。神の国のための戦いは、まだ準備段階で本番になってはいない。兵を残して大將が家に帰ってしまうようなことをしては皆のやる気がなえてしまう。ぼくは責任上、高らいには帰れないと。カタリナは、殉教する時はいっしょにと願っている林のおかみとの女の友情を解消してはいけないと感じている。二人とも祖国への思いとの間で板ばさみになってしまっている。沈黙が続く。シストとカタリナが顔と顔をあわせてみつめあう。

シスト

「ぼくは、自分の使命を放棄できない。いっしょに戦ってくれている人の信頼をうらぎることはできない。苦しみとはずかしめの十字架の道の方をぼくは選ぶ。高らいに帰りたいた。高らいに帰れるなら、苦しめられ、はずかしめられ、殉教するってこともなくなるだろう。ぼくは、今、自由に選びとる。十字架の道の方を。イエズスにならって歩くことを。カタリナ。わかってくれるかい。ついてきてくれるかい。」

カタリナ

「うん。シスト、私はいつでもあなたと一緒によ。あなたと同じ運命、同じ苦しみ、同じ十字架にあずかりたいの。そして、林の親分とおかみさんとも。」

林の親分とおかみの顔がパッと明るくなる。

林の親分

「おれは今の沈黙の長さで、シスト先生と奥さんが、どれほど大きいものを犠牲にしたかよくわかったんだぜ。シスト先生、おれにもう一度、祝宴をはらしてもらいて一、これほどのことを地下教会のためにささげてくれたことに見合うだけのことをさせてくれ。」

シスト一家が、奴れいの身分から自由の身分になった祝いをキリシタンつち親を全鉱山から呼んで行なうという林の親分の申し出は誰がなんといおうとやるというようなもので、シストとカタリナが何を言ってことわろうと無駄だった。

1601年の1月、再び大森の町で、こんどはあのお店を一軒まるごとかりきって祝宴がはられた。六左衛門ももちろんかけつけてきたし、キリシタンつち親の数は三百人をこしている。前回の祝宴は、キリシタンつち親同志がはじめて顔をそろえ、自分たちの地下教会の発展ぶりを確認し、互いにはげましあう場ともなったので、皆のやる気をひじょうに高めるという結果になった。今回も実に良いタイミングで皆が集まったのだ。というのは、関ヶ原の戦いで敗れた大名たちのうち、敗死したり処刑されたりしたキリシタン大名のおさめていた領民のキリシタンたちが、たくさん殺され、または、領地を追われろとうに迷った。

美濃の三千人のキリシタン、久留米の七千人のキリシタン広島や山口のキリシタンたち等々だ。彼らの中から近い鉱山に逃げこむものが出はじめた。

とうとう地下教会が、本来の機能を果たしはじめたのだ。その彼らを受け入れたキリシタンつち親たちを交えての地下教会の大会となったからだ。皆、いよいよこれからだと感じているとき、自分たちの大将と女大将が自由になったというのに祖国に帰ることよりも、自分たちのために日本に残って自分たちと戦いつづけることを選んでくれた。

そう聞いた彼らは全員勇み立った。特に前回の祝宴に参加した人々は、シストとカタリナの熱烈な祖国愛を直接、見、聞き、知っている。その祖国よりも神の国のための戦いの方を二人が選んだ。つまり、自分の祖国よりも神の国を優先したということに、彼らは非常に感動し、ますます二人を誇りに思い、模範にしようと思うのだ。兵が大将を信頼し、誇りに思っていればいるほど戦いの時、その軍隊は強い。シストとカタリナは祖国へ帰れるチャンスを犠牲にしたが、その代わり、この祝宴でキリシタンつち親という兵たちの連帯をつよめ、士気をこぶし、さらなる地下教会の発展にまいしんさせるといふ、むくいを得ることができたのだ。神はシストとカタリナの良い心にたいへんな豊かさをもってむくいて下さったのだ。

六左衛門は、奴れいのみじめな二人、港で船からおりてめだつたあの姿を思い出して、思い出をシストとカタリナとその晩、夜明けまで語りあった。ひと目みたときから友情を感じた不思議。やはりシストとカタリナは何か特別なものを持っている。ならずものたちが、この二人に心服している。もちろんぼく自身もだ。これまでの二人とのできごと全てを思い出してさぐっても、まだつかみきれない何か、それをこれからもずっと二人といっしょに生きてさぐってゆきたい。この二人に出会えたことは、ぼくの人生で最高の宝だ。自由になれて本当におめでとう。七年以上も奴れいだった友が解放されたことを六左衛門は心からうれしく思っている。

1602年、秋、六左衛門は、出羽（でわ）の国の久保田、今の秋田市まで伝道旅行するようになった。以前からの友、キリシタン武将のペトロ人見九右衛門が、関ヶ原の戦いの結果、浪人の身になっていたのを久保田藩の藩主、佐竹義宣に召し抱えられ、そこの武士や平民の多くに伝道し自ら洗礼をさづけはじめたからだ。そのうえ、佐竹義宣は、1602年、夏、常陸の国（ひたちのくに）水戸（みと）からやってきた時、キリシタンの側室、岩瀬の御台（いわせのみだい）とキリシタの多数の家来をつれてきており、急激にキリシタンが、出羽の国に増えているからだ。

大きな街道（羽州街道）を北に進み出羽の国に入り峠から里におりる寺沢村がある。

その村の大百姓、寺沢藤兵衛の家に泊めてもらった、六左衛門は彼と彼の親せきの寺沢太郎右衛門（てらざわたろううえもん）に、キリシタンの教えを語り、二人とも心を開いて聞き、信じてくれた。

藤兵衛は先ごろ妻を亡くしたばかりで、たった三つの女の子一人が母無し子として残されていた。六左衛門は、ここを通る行き帰りには藤兵衛の家に泊めてもらい、さらに詳しくキリシタンの教えを説明し、とうとう藤兵衛一家と太郎右衛門一家に洗礼を授けた。そして、藤兵衛の娘にはマグダレナという名をつけた。父の藤兵衛にはヨアキム。太郎右衛門にはマチャスという名をつけた。シストとカタリナに六左衛門はこの話ししを聞かせてくれる。特にマグダレナについていっぱい話してくれる。三つ子の魂、百までもというが、聞くところによるとマグダレナは男まさりらしい。女の子のような遊び方はちっともしないで男の子みたいにとっくみあったり、棒をふりまわしたり、石をなげたり、虫や動物を追いかけたりするらしい。六左衛門に荒っぽく高い高いをされたり、両手をもってぐるぐる大きく回されたり、かたぐるまで走ったりすると恐がるどころか、もっともっとと大喜びでせがんで六左衛門を疲れはてさせてしまうらしい。シストとカタリナの頭の中には男の子のようなきかんぼうのあばれものらしい顔をして、日にやけて真っ黒になった骨太のたくましい女の子のマグダレナのイメージが出来上がっていった。別に、六左衛門がそんな描写をしたわけではないが、その風変わりな行動をおもしろおかしく話すのを聞いているうちに、かつてにそんなイメージがわいたのだ。六左衛門が泊まりにくるとマグダレナは、大喜びですごいいきおいでとびついてくるので受けとめるのが大変だ。どしんと遠慮なくぶつかってとびこんでくる。そして、六左衛門のあとを追いまわす。こんな男っぽい性格の子だし六左衛門もままごとや人形遊びはやったことがないからにがてだし、武家の育ちだから、すもうやちゃんばらごっこで遊んでやる。そうするとマグダレナは本気になる。

マグダレナ

「ろくじゃえもん。おらさ、かがってこいっ！」

（ろくじゃえもん私にかかってこい）

おまけにマグダレナは負けん気が強くて勝てないとベソをかき泣きながら勝つまでつづけようとしてやめようとしな。六左衛門もそうかんたんにわざとらしく負けてやったりはしないが、や

めたくなるとうまく負けてやる。そうするとマグダレナは大喜びだ。

マグダレナ

「ろくじゃえもん。なんとだ、まいったが。こうさんだが。」

(ろくじゃえもん どうだまいったか)

今、六左衛門は、久保田城の大奥に来ている。ペトロ人見の旧友として彼とともに岩瀬の御台に会いに来たのだ。ペトロ人見は佐竹の殿の家来たちに西洋式の馬術を教えていて、たいへん重んじられている。

岩瀬の御台は、二人に自分の身の上ばなしをはじめた。

岩瀬の御台

「私ね、今、18才なんです。芦名家（あしなけ）の当主だった父が私生まれてまもなく家臣に切り殺されてしまったの。父を生んだ人が、女なんだけども、二階堂家（にかいどうけ）の当主で、私の将来の夫を次の二階堂家の当主にしようと、私を実の母からひきはなして二階堂家の養女にしたの。でも私が5才の時に二階堂家は伊達政宗（だてまさむね）に攻められてほろぼされてしまったの。私とその当主だった祖母は落城したので自殺しようとしたのよ。でも家臣たちがそれをとめて、伊達家に私たちをわたしたの。祖母は、もともと伊達家の生まれだから、私たち殺されなかったわ。それで伊達がおさめる杉目城（すぎのめじょう）に住まわされたんだけど、祖母は伊達家の世話しになりたくないって私をつれてそこを出て行ったの。杉目城にはそう長くいなかったわ。祖母は、岩城城（いわきじょう）の城主である人が親戚なのでそこに身を寄せたの。でもすぐにその人が小田原攻めに参戦してそこで病死してしまったので、私たち岩城城を立ちさったの。そのあと、祖母はまた親戚をたよって太田城（おおたじょう）の城主、私の今の夫の佐竹義宣（さたけよしのぶ）のもとに私と行ったの。7才だったわ。私、父や母や兄弟や姉妹がいなくて、家族のあたたかさや、だんらんの楽しさっていうものもまったく味わったことがなくて、身のまわりではいつも戦（いくさ）と死と別れ……。親せき同士が殺しあったり……。私、愛情に飢えていて心のまん中にぽっかり大きな穴があいているようにいつも感じていて、満たされていないの。

夫は関ヶ原の戦いで徳川家康側に参戦しなかったので出羽の国にお国替えされてしまってから、私がキリシタンであることを家康にとがめられはしないかとひどくおそれて、水戸城（みとじょう）で結婚したときのようにではなくなってしまうの。永続する愛をあこがれていていつも求めてきたんだけど……。」

岩瀬の御台はだまってしまふ。しばらくしてもう一言。

岩瀬の御台

「私、もしかして離婚させられてしまうかもしれない。たとえ離婚されても私は、イエズスをえらびます。このお方だけは、私を永遠に愛してくださるのですもの。」

六左衛門とペトロ人見はこの若く美しい姫をなぐさめるために、あとは純粋に信仰の話しをしあった。イエズスに愛されているということ苦しみに満ちた人生を生きぬく力にしている人にとって同じ愛と信仰に結ばれた人々とその信仰を語り合う時間は、どれほどなぐさめぶかいことか。そしてそういう機会は貴重でそう多くはないのだ。

1603年、春、六左衛門が、石見銀山をおとずれると、カタリナのおなかが大きくなっていることに気づいた。

カタリナ

「六左衛門、私ね、もちろん神様におまかせしていて男の子でも女の子でも感謝するけど、女の子が欲しいな。」

六左衛門

「そうだね。女の子だったらいいね。」

六左衛門は、そう答えながら若く美しく悲しげだった岩瀬の御台が目に浮かんでしまった。それで、まだ話ししていなかったあの身の上ばなしをカタリナとシスト、そして9才だから、もう何でも大人の話ししに興味があるルイスにしてやった。カタリナは、かわいそうにと言って涙をこぼしながら聞く。ヨアキムぼうやもそこにいる。5才だ。お母さんが泣くのでもらい泣きしている。わからないのに。この子は優しい子だ。本当に。

シスト

「女には自由が少ないねえ。六左衛門、そのかわいそうな人に、ぼくに教えてくれたようにさ、魂の自由だけはいつでもある。苦しみや悲しみを、この十字架大好きっておよろこびでだきしめるか、大きらいって言って不平不満だらけになるか自分でえらべる自由がある。どんな苦しみも、この十字架、大好きってよろこんで受け入れられたら、魂の戦いに勝ったっていうことでその勝利にかんしてもよろこべるんだよって教えてやってほしいな。」

六左衛門は、思い出してなつかしそうな表情になる。

カタリナ

「そうだわ。あの涙のクリスマス。私も花嫁の愛を教えてもらった。イエズスと同じ苦しみ同じはずかしめ、同じ十字架。イエズスを花むこととして愛するなら、花嫁のしあわせは花むこと同じ運命にあずかることだって。その人にこれを教えてあげてよ。六左衛門。」

六左衛門

「うん、そうするよ。」

六左衛門はこう言って、あとの言葉はのみこんだ。それを忠実に実行しているシストとカタリナのことも話しそうと言おうとしたが、やめろ、やめて、と反対するに決まっているから、だまっ

ていて許可なんかとらずに話ししてしまえと考えたのだ。そしてその通り実行した。

岩瀬の御台

「私、シストとカタリナを模範にするわ。」

シストとカタリナは、彼女の心の友となったのだ。

1603年の10月、シストは、精練の仕事で息子のルイスを指導している。自分の知識、技術、びみょうなコツ、かん、伝えるべきことは非常に多い。子どものころからお父さんについて手とり足とり教えてもらえる、ルイスは幸せものだ。超一流の職人になるだろう。林のおかみが来た。

林のおかみ

「シスト先生。奥さんが産気づいたよ。」

外から大声で呼びかける。

ルイス

「お父さん。どうするの。」

シスト

「男は待つしかないんだよ。でも今日は仕事をみんなにまかせて帰ろう。」

3回目のお産だから生まれてくるのは早い。シストとルイスが家についたら間もなくおなかからでてきた。見たら女の子だ。

シスト

「やったー。女の子だー。やったぞー。」

これにはみんな笑ってしまった。カタリナのプレッシャーになるといけないと、今までシストは女の子がいいななどと言も言っていなかったのだ。シストの優しい愛情だ。しかし、今、女の子が産まれたとわかった瞬間、思わず叫びまくってしまったのだ。カタリナも望んでいた女の子でうれしいし、シストのこのよろこびを見て、しあわせを味わっている。林のおかみも大よろこびだ。

ルイスとヨアキムぼうやは、お母さんの出産と新生児の女の子を見てすごく不思議がっている。

林のおかみ

「シスト先生。女の子の名前、考えてんのかい。奥さんは。」

カタリナ

「私は、シストのつけたい名前。」

シスト

「ぼくは、考えていたよ。女の子だったら林のおかみさんに代母になってもらってマリアって名をもらおうって。」

林のおかみ

「だめだよ。こんな私みたいな女になったら、どうするのさ。」

シスト

「おかみさんみたいな女になったら、ぼくたちよろこぶよ。な、カタリナ。」

カタリナ

「うん。シスト。ねえ、おかみさん。代母おねがいね。」

林のおかみは、がらにもなくうれし泣きしてしまう。

林のおかみ

「うれしいよ。そんなに言ってくれて。でも本当に私のような女になっても知らないからね、う、う、う……。」

カタリナの産んだ女の子が、六左衛門から洗礼を受け、代母のマリア林の名をもらい、あまやかすことなく愛情をいっぱい注いでくれる両親と強いおにいさんと優しいおにいさんにかこまれ、しあわせいっぱい人生を歩みはじめた。その同じ時期、出羽の国、久保田城の大奥では、そういう家族愛を体験できず、愛情飢餓の傷を情緒に負った岩瀬の御台のその傷がますます深くなる状況が続いていた。夫から遠ざけられたまま、さびしく彼女は日を送っている。

夫はキリシタンの信仰を彼女が捨てる気が絶対ないと確かめたあと、一度も彼女を呼んでくれない。別れることを、夫は決めたなど彼女は感じている。1604年が来た。前年、夫は横手城に城代としても二階堂家の家老だった人を入れ、横手の城下にも二階堂家の家臣団を住ませた。彼らは、皆、彼女と同郷のものだ。夫が、彼女のことで彼らとやりとりしていることが、彼女の耳に入ってきた。いよいよ来るべき時が来たのだと彼女は覚悟を決めた。ある日の朝、夫が、今日、昼に侍女をともなってくるようにと使いをよこした。夜にではなく、昼に来いということで彼女はわかった。侍女を二人ともなって会見の間でまわっていると、夫が小姓を二人ともなって入ってきた。着座するなり、

佐竹義宣

「おまえを愛している。しかし久保田藩が、より大切だ。わかってくれるか。」

岩瀬の御台

「はい。わかっております。私もあなたを愛しております。でも、イエズスがより大切です。」覚悟していたからこそ、そして神の恵みでここまではしっかりと云えたが、今までの数々の別れとこの新たな別れが心の中で重なった、そのしゅんかん、情緒の傷がパカッと開いてしまった。彼女は、たたみに顔をふせて声をあげて泣き出した。あまりにも激しくおえつして泣くので侍女たちもたまらずに両横で同じように泣いてしまった。

佐竹の殿もあわれに思い、もう何も言わない。立ち上がり小姓をつれてでていった。翌日、もう夫ではない佐竹の殿から離えん状とこれからの指示を書いた書状が届けられた。それには、大奥を出て、横手に行けと書いてあった。20才の彼女は、その日侍女たちに長い髪をそりおとしてもらった。もう二度と誰とも結婚しないというしるしである。

1604年は、シストにとっておおいそがしの年だった。天領となり、奉行として大久保長安が治めるようになってから新しい採鉱法がころみられ年々、飛躍的にとれる鉱石の量が増え、精錬の部門は仕事量が激増してきている。それに加えて、この年、大久保長安が佐渡へ渡り、同様に天領である佐渡金、銀山に石見から多くの山師、つち親、ほり子、精錬技術者を呼び寄せたのだ。1601年に開山したばかりの佐渡の金銀山の地下教会を拡大する最高のチャンスだった。熟練の技術者たちがいっきに減るのは大変だけれど、これから日本最大の金山になるだろうことがあきらかなこの佐渡へ、シストも多くの手下たちを送りだした。

これとは、また、別に関ヶ原の戦いで天下をとった徳川家康にお国替えされて新しい領地の領主となった大名たちは、それぞれ新しい鉱山を開発しようとしてつとめたので、特に関東から北の諸藩で、次々に新しい鉱山が開かれつづける時代となった。それで、地下教会としてはどんどん新

しいクリシタンつち親をつくって送りこまなくてはならない。忙しいが、大発展の時である。カタリナも忙しい、上の二人が元気な男の子で大変。そして、マリア赤ちゃんは生まれてまもないわけで日々が夢のように過ぎてゆく。でもあとになってふりかえると、かわいい子どもにかこまれて、このころが一番よかったねっというにちがいない。

六左衛門も地下教会のために教え、洗礼をさずける働きでも、大忙しだが、出羽の国へ行くことも続けている。1606年、寺沢村に入ると、いつものように外で遊んでいたマグダレナが六左衛門を見つけた。まだ遠いのにずーっと走ってくる。六左衛門は、マグダレナの足が速いので感心している。もう7才だ。飛びかかるように抱きついてきた。ドシン。キューツ。

マグダレナ

「ロクザエモン、おめー、どごがらやってきたんだあ？いつもどごがらくるのよ？」

(六左衛門。いったいどこからやってきたの？)

マグダレナは、ハーハー言って息をしている。

六左衛門

「有馬からだけど、あっちこっちよりながらくるんだよ。」

マグダレナ

「んだながー。おら、アリマなんて、どごだが知らねな。こんどよ、おらどご、そごさつれでいってけねが。」

(そうなの。有馬ってどこか、私、分からない。今度、私を連れてって。)

六左衛門は、困って、うーんとうなってしまう。

マグダレナ

「これから、おめよ、どごさいぐのよ。おらどごも連れでいってけれ。」

(これからいったいどこに行くの。私も一緒に連れて行って。)

六左衛門

「教えない。連れて行かない。」

マグダレナ

「なして、なしてよ。ロクザエモンのケッチ。いじわるだな、おめだば。いつもそうだおな。」

(どうして、どうしてなの、六左衛門のけち、いじわる。あなたは、いつもそうするんだもん。)

マグダレナは、六左衛門をぶったたく。かなり痛い。六左衛門がくるたびに、マグダレナは、いっしょに連れていけとせがむのだ。毎回、断られても、いっこうにくじけない。今日も同じだ。マグダレナは、六左衛門と手をつないだり、腕をからませてよりそって歩いたり、おんぶをせがんでおんぶってもらったり、抱っこまでせがんでちょっとだよっと抱っこしてもらったり、うれしくって甘えまくる。

それを、田にでている寺沢村の百姓たちがほほえみながら見ている。村人みんなが知っているのだ。キリシタンの先生、六左衛門は、大百姓の藤兵衛のおじょうさんマグダレナのあこがれの君(きみ)なのだ。子ども同士でもマグダレナはけんかでは負けない、からかわれたって平気だ。

友だち

「おめよ。マ・グ・ダ・レ・ナッ。ロクザエモンのごど、すぎなんだべー。いやーい。」

(マグダレナは、ロクザエモンが好きなんだろう。)

マグダレナ

「んだよ。おら、ロクザエモンのごど、でーすぎだもん。んだがらなんなのよ。」

(うん。そうだよ。私、六左衛門が、大好きだもん。それがどうしたの。)

家の中でもマグダレナは六左衛門にすごく甘える。六左衛門のひざの上に、ちょこんと座るし、六左衛門の前に出された酒のさかなも、

マグダレナ

「ロクザエモン、おら、これ味っこみであげるがらね、あーん。」

(これ味みしてあげるね。あーん。)

と、横どりだ。

お母さんがいない子のマグダレナが、まるで実の母親に子どもがやるようにいっさい遠慮することなく堂々と甘えてくることに関しては、六左衛門はいつも受け止めてやっている。それにしても、すなおに自分の気持ちを表現するなあ、このあたりの方は、まるでポルトガルやスペインの人たちだ。日本人ばなれしていると、六左衛門は思う。さて大人の会話しが、始まった。

藤兵衛

「あのんしよー。ロクザエモンさん、この村さよ、たまげだごどおぎだんだ。なんだがどいえばよ、金のこうみゃぐがみつかっただんし。」

(この村にたいへんなことがおこったんですよ。金の鉱脈が見つかったんです。)

太郎右衛門ももちろんきている。

太郎右衛門

「そいでよ。すぐとなりのよ院内っていうどごさはよ、なんと銀のコウミャグがみつがったんだど。」

(すぐとなりの院内には銀の鉱脈が見つかったそうです)

六左衛門

「ほーっ。そりゃー驚きだ。この村となりの村にねー。」

寺沢と院内は、羽州街道の東側が寺沢で西側が院内だ。地下教会に関わってきそうだな、と六左衛門はこのことを記憶にしっかりきざんでおく。シストや林の親分に伝えるべきこととして。

六左衛門が藤兵衛の家から出発して次に向かったのは横手だ。あの岩瀬の御台が名前を昌寿院と変えてわずかな侍女たちと住んでいる。

出羽の国に伝道旅行するときは、いつも立ち寄ってあげる。そのたびに昌寿院はカタリナのことを聞くので、六左衛門はカタリナがまさに祖国の高らいが日本人から侵略され、自分自身が日本人から連行され奴隷の身になっていた、その時期に、日本人の未亡人やみなし子に愛徳の行いやって、ならずものの林一家のつち親からほり子全員をキリシタンにしてしまった話しとか、カタリナが愛を与えてきたことを話ししてやった。昌寿院は、カタリナがかわいそうな人々にしてあげることは、イエズスにしてあげることになるとならって大よろこびした話ししを聞いたとき、受けるよりも与えることによるこびがあるというイエズスの言葉が思いだされた。

それは、横手に来た年、つまり二年前のことでこの世で永続する愛をもらうことをあきらめた時だった。もらうことをもう考えずに、与えることを考えよう。そう考えてから実際に不幸な人を助けてきた。さびしげだった彼女が明るくなってきたのはそのときからだ。

昌寿院は、マリア観音をもっている。木製で仏像のように見える。六左衛門と昌寿院はそのマリア観音の前で語り合うのだ。（彼女の宝物のこのマリア観音は、今は横手市の春光寺（しゅんこうじ）にある。春光寺のとなりの天仙寺（てんせんじ）に彼女はほうむられている。）

昌寿院

「カタリナの女の子は元気。」

六左衛門

「うん。マリアはもう歩きまわっているし、おしゃべりだよ。二人のおにいちゃんがいるからたくましい甘えん坊に育ってるね。」

昌寿院

「いいな。うらやましいな。私、甘えたことないの。甘え方も分からないわ。いつも人の目を意識しちゃうし、周りの評価を気にしちゃう。」

六左衛門

「そういえば、カタリナとシストは周りの評価をまったく気にしないなあ。シストは、ぼくと同じ36才だからカタリナは31才か。でも二人とも寺沢村の7才の女の子みたいだ。」

昌寿院

「その子。どんな子なの。」

六左衛門は、マグダレナのことを話ししてやる。酒のさかなの横どりには昌寿院もびっくり。

昌寿院

「まあー。ねえ、六左衛門さま、マグダレナはそんなに行儀が悪くって大丈夫。」

六左衛門

「たしかに行儀悪いなあ。でもお父さんから、村の誰からも愛されている。お父さんも、ぼくも手をやいているけどね。」

昌寿院は、考え込む。

昌寿院

「実は、私、神様やマリア様の前でも行儀良くしなきゃ、いい子でいなきゃって思っている。いい子でないと愛してもらえないんじゃないか、捨てられるんじゃないかって心配している。」
こう六左衛門に打ち明ける。六左衛門もそれを聞いて考え込む。

昌寿院

「カタリナさんもシストさんもそのマグダレナっていう子もきっと私と違うわね。」
六左衛門はうなづく。

六左衛門

「カタリナとシストはね、マリアママのような地下教会っていうんだよ。それをつくるんだって。二人とこのことについて話ししたりするんだ。この意味はね、お母さんは自分の子だったら、どんな子も見捨てたりしない、そうだよ。マリアママは、全ての人のお母さんだから、どんな悪人でも決して見捨てない。最初、二人はこういう理解から出発したんだ。でも今はもっと進んでいてね。悪い子ほど愛される、できの悪い子ほどかわいがられる。手のかかる子ほど、いとおしまれる、それがお母さんと子どもの関係だから、悪い靈魂を見捨てないなんていう言い方じゃ不十分。神様もマリアママも悪い靈魂であればあるほど愛してくれるって二人とも確信しているんだ。」

六左衛門は、二人が神のあわれみと愛の大きさに関して、これほど大胆な信頼をもつきっかけになったのは・・・と林のおかみがカタリナに以前、自分が売春婦で、しかも、おなかの中の子を何人も殺した人殺しだけど、マリアママは、どんな子も決して見捨てない。私も救ってもらえる。しあわせと言った時の話しをした。

昌寿院

「六左衛門さま、私、自分の信仰の上での課題が分かってきました。やっぱり、神様やマリア様に甘えなくてはいけないんだわ。こんな私なんだけどって、ありのままに打ち明け話しをいっぱいするの。ごめんなさい。あまえられないの。こわがっているの。まずこう打ち明けなくっちゃ。そして、カタリナさんやシストさんを見習って大胆に信頼してちっちゃなことまで心の中をみんな打ち明けて、それから、でも悪い子ほど愛してくれるもんね。許してくれるもんね。救ってくれるもんね。こう言わなくっちゃ。」

六左衛門は、これを聞いてびっくりする。カタリナとシストは出会った最初からちっちゃい子のようだった。ならずものたちと共に地下教会を生み、広げている今、二人はますますちっちゃい子のやり方で神をとらえるようになってきている。この二人のちっちゃい子のやり方を、二人に一度も会っていない昌寿院が、言葉で的確に表現したからだ。

六左衛門

「そうだね。甘えられない。甘え方もわからないって言ったけど、そういう打ち明け話しを毎日毎日くりかえしてゆけば、必ず甘えられるようになれるからね。」

昌寿院

「そう言ってもらえると希望がわくわ。」

1608年、出羽の国へ行ってきた六左衛門が石見にやってきた。彼はいつもシスト家、つまり唐人屋敷に泊まるのだ。最初来たときとても広く感じたこの家が、今はそうでもない。15才のルイスは背がお父さんのシストに並んだ。10才のヨアキムはもう職人としての訓練がはじまっていてお父さんとお兄さんと一緒に仕事場にいつている。4才のマリアは、昼間はお母さんを独占。夜、シストたちが帰ってくると今度はお父さんを独占しようとべったりだ。今もシストの横にきている。子どもたちが成長し、家財道具も増えた。そして、今晚は林の親分とおかみがきている。食卓もせまく感じる。

六左衛門

「出羽の国へいくたびに会っている昔からの友人のペトロ人見が院内銀山の初代山奉行（やまぶぎょう）になったんだよ。」

六左衛門は、普通に話ししている。話しの主題はペトロ人見の活躍で、久保田城下ですでに武士たちなど大勢が、キリシタンになったとか、ペトロ人見というキリシタン武士の伝道の熱心さだ。

しかし、林の親分が口をはさむ。

林の親分

「院内銀山にはもうすぐ石見からもキリシタンつち親の三太夫（さんだゆう）親分とその家族が出発して地下教会を広げるんだぜ。あいつはたのもしいやつき。ところで、六左衛門は、今回は院内銀山と寺沢金山に立ち寄ったのかい。」

六左衛門

「ああ、ペトロ人見が案内してくれた。院内銀山の銀鉱石の産出量がものすごいので、諸国から人が急速に集まってもう街ができてきているよ。すぐそばの寺沢金山は、まだそれほど人が集まっていないけどね。」

このときだ。シストの心に突然、思いがけない考えがおこった。寺沢金山に行こうという考えだ。自分がいるところが、地下教会の中心地だ。寺沢金山に行くということは地下教会の中心地を石見銀山から寺沢金山に移すということだ。なぜ、そんな必要があるのか。シストにはさっぱりわけがわからない。しかし、そうすべきだというあっとうされるほど強いうながしを心に感じるのだ。

その夜ふけ。かたづけものが全部すんで、カタリナがふとんに入ったとき、

シスト

「カタリナ。今、ぼくの心にとってもふしぎなことが起こっているんだ。ちょっと聞いてくれるかい。」とシストが小さな声で話し出した。

カタリナ

「うん。なあに。シスト。」

シストは今晚の食卓で自分に起こったことをカタリナにうちあけた。カタリナは、返事にこまっ

てしまった。カタリナにもさっぱりわけがわからない。

カタリナ

「明日、六左衛門に話ししてみたらどう。」

いつものように単純にシストの考えに信頼し夫に神さまが働きかけているのかもカタリナは考え、こう答えたあとは、眠ってしまった。シストは、なかなか、ねつけなかった。心の中の強いうながしは、続いたままだ。理由をさがそうとするのだが、みつからない。それどころか考えが、勝手に動いて、すべきことがより具体的になっていく。時期は、今だ。すぐに仕度にかかるべきだ。いっしょに林一家もいくべきだ。家は、寺沢金山に建てるべきだ。技術の伝授の仕事は寺沢金山と院内銀山をかけもちすべきだ。というふうに。結局、眠るのをシストはあきらめ、あかつきのころ六左衛門を起こして夕べからのことを六左衛門に打ちあげた。話しを聞いているうちに、六左衛門は、これは神様からのインスピレーションを受けたのかもしれないと思ったが、慎重にならなくてはと考え、一言こう言った。

六左衛門

「それが地下教会のためになるのか、ぼくには分からない。うーん。ただ、ペトロ人見は大喜びすることまちがいなしだな。」

その晩、シストは六左衛門と二人で林の親分の家におしかけた。

林の親分とおかみもシストの話ししにはびっくりしてしまった。林の親分のコメントは、六左衛門のコメントにそっくりだった。

林の親分

「おれにはなんで寺沢金山に行くべきなのかさっぱりわからね、だがよー、三太夫親分は大喜びだろうぜ。」

六左衛門も、林の親分もシストが地下教会を生み出してから14年間示してきたリーダーシップに信頼しきってやってきた。すごい成果をあげ、今も大発展が続いている。二人ともシストの決断にまかせようと思い、反対だ、とか、賛成だとかいわない。

林の親分

「シスト先生が行くって決断するなら、おれは一家をひきつれていくぜ。さあ一決めてくれ。さまたげになるものなんかなにもねー。」

これを聞いてシストは二日間まってみた。自分の心へのこのうながしが消えるか、強まるか。結果は、強まった。そして、やはり理由はわからないままだ。そして、なすべきことが具体的になるばかりだった。ジョヴァンニ三太夫親分一家と一緒に出発すべきだ。ひきつぎのために、今すぐ、仕度にとりかかるべきだ・・・と。とうとうシストは決断した。地下教会のために神様がぼくに寺沢金山に行けとうながしていると信じて。一緒に行く人も、残って見送る人も、皆そう信じてくれた。皆が熱心に協力してくれて、仕度はたちまちにととのった。そして、彼らは旅立った。

日本海を船が行く。秋田の港までは船旅だ。季節は夏。南風をいっぱい帆に受けている。長い船旅。林の親分一家と三太夫親分一家の20才前後の若いほり子たちは、体がなまってしょうがないとぶつぶつ言っている。今、甲板ではシストとカタリナが話しをしている。子どもたちは少しはなれたところにいる。マリアの手を引いているのはヨアキムだ。ルイスは、ほり子の若者と話しがはずんでいる。多勢が海風とながめを楽しんでいる。

シスト

「もうすぐ秋田だね。カタリナ。みんな若いから、たいくつして早く仕事がしたいっていつているけど、ぼくは仕事をしないでこんなにカタリナと一日中、一緒にいられる日々がもっとつづいてほしい。カタリナ、愛しているよ。」

カタリナ

「うれしい。私も愛しているわ。シスト。」

カタリナがシストに甘えてだきついていく。シストは、肩にもたれかかったカタリナの頭をなでながら感慨深げに言う。

シスト

「やっぱり、ぼくたち、日本人の夫婦とはちがうんだね。」

くっついていた二人は、はなれて顔を見合っただけでほほえむ。

シスト

「もうひとつ。この船旅の間、すばらしかったのはね、忙しさや、疲れにさまたげられないで子どもたちと心をふかくふれあわせることができたことなんだ。」

カタリナ

「ルイスとは、男同士の話しだったんでしょう。」

シスト

「うん。船旅がはじまったらすぐ、ルイスがこんなことを話しはじめたんだ。お父さんは、自分というものをしっかりもっていてそれをかくしたりなんかしない。お母さんも自分というものをしっかりもっていて、それをかくしたりなんかしない。お父さんとお母さんは、本当の相手をお互いに全部知っていてお互いに愛しあっている。だから、本物の愛だ。僕もヨアキムもマリアも自分というものがそれぞれにしっかりあって、それをかくしたりしない。でも、日本人はそうじゃない。自分というものをもっていないみたいに思えるんだ。ぼく、実は、近くの村から鉱石の選別なんかの仕事をしにきてる、たくさんの女の子のたちの中で、気になる女の子が何人かいたんだ、で、よく見てただけど、やっぱり女の子たちも、本当の自分をお互いにかけてくれない。自分というものをしっかりもっていない。ぼくが、こういう相手と結婚したら、二人の間の愛は本物の愛なんだろうか。ねーお父さん、お母さんはどんな娘さんだったの。お父さんとお母さんの祖国、ふるさと、そこはどんなところで、どんな人がいるの。くわしく話ししてよって。それでぼくは、カタリナの最初の思い出から全部思い出して見たんだよ。ルイスとヨアキムに

思い出すことはみんな話ししてやった。」

シストの目は、心が祖国に飛んでいっているという目になった。

シスト

「ルイスとヨアキムが、ぼくの思い出を聞くことによって、祖国を共有してくれるのがうれしくてね。船旅の間中、ルイスとヨアキムにせがまれて、思い出しては話し、思い出しては話し、をやってたんだ。それでね……。」

ルイスは、ほほえみながらカタリナの頭を両手ではさんでしっかり自分の方に向けさせる。

シスト

「ぼくの、心の中は、カタリナへの愛と祖国への愛でいっぱいなんだって、つくづくわかったよ。」

カタリナはうれしくて泣き出して涙が目からあふれる。シストは、やさしくキスしハグする。

船は、秋田の港についた。久保田城下には三百人の武士や町人のクリシタンがいて組織化されている。ほとんどが、ペトロ人見によって洗礼を授けられた人たちだ。船からぞろぞろとおりてくる皆の中で、シストとカタリナ、林の親分夫婦、三太夫は年がほり子たちよりぐっと上なのですぐわかったらしい。さっそくクリシタンの港の役人があいさつし、名前を確かめる。

役人

「六左衛門さんから、皆さんが港についたら飛きゃくを寺沢まで走らせてくれるようたのまれているんです。それから、道案内役で、二人のクリシタンが湯沢までいっしょに行ってくれます。」

これでもう安心だ。やっと歩けるぞと元気いっぱい男も女も歩きだす。

4日後、シストたちの一団は湯沢についた城下町だ。道案内のクリシタンについていく。大きな宿屋に入っていく。奥から六左衛門が玄関まで出迎えに来た。色がすごく白い、ほっそりとした、ほんとうにかわいい、そして美しい女の子が手をつないでいる。その後ろから身分の高そうな武士がほんとうにうれしそうな顔をしてついてくる。そのまた後ろには、ゆうふくそうな百姓が二人。

カタリナ

「キャー。六左衛門。」

マリア

「ろくじゃえもん。」

マリアが六左衛門の方へ両手をのばして近よると、六左衛門はあいたほうの手で軽々とマリアをだきあげる。マリアは首にだきつく。とにかく全員が、仲良しの六左衛門に出会って大喜びだ。

六左衛門

「みんな、おなかぺこぺこだらう。晩御飯はごちそうだよ。部屋に荷物をおいたら大部屋に集合だよ。」

宿屋の人に導かれて今晚寝る部屋に皆、一度、散っていく。マリアが、六左衛門にだかれているのでシスト一家はまだ残っている。六左衛門と手をつないでいる子は人形のようにきれいな子だ

。

カタリナ

「六左衛門。この子はだあれ。」

六左衛門

「マグダレナ。」

カタリナ

「えー。うそでしょう。信じられない。」

マグダレナ

「なして、うそだなんていうなよ。信じられねって……。おら、ま・ぐ・だ・れ・な だをん。」（何でうそっていうの。何で信じられないの。私、マグダレナだもん。）

カタリナとシストはびっくりぎょうてん。頭の中で長年イメージしていたマグダレナとあまりにもちがすぎるのだ。9才の少女、マグダレナ。体つきは、まだ子どもだが、顔は女らしい美しさにあふれている。

マグダレナ

「ロクジャエモン！！。おらのごとで、おめ、おがしげったごど、この人らさはなしっこしたべ、んだ、んだべーっ。ロクジャエモンのばーがー。」

（ロクザエモン。私のことで、変なことこの人たちに話ししたんでしょ。そうに決まっている。六左衛門のバカ。）

といいながらマグダレナが六左衛門の背中を力まかせに平手でひっぱたく。

バシーン。すごい音がした。

シスト

「やっぱり、マグダレナだ。」

カタリナ

「うん。」

身分の高そうな武士にふりむいて、それから、他の二人にも目をやって六左衛門が言う。

六左衛門

「シストとカタリナとルイスとヨアキムとマリアです。」

今度は、武士の顔が信じられないというふうになる。それから深々と礼をして、

ペトロ人見

「シスト先生、先生の奥さん、ようこそ来てくださいました。院内銀山奉行のペトロ人見です。」

とあいさつするので、びっくりしたシストとカタリナはどうしたらいいのかわからずうろたえて六左衛門を見る。

六左衛門

「キリシタン同士、兄弟・姉妹だろう。今日は身分の差はなしで、・・・だよ。」

それで意を決して、シストも名前で相手と呼ぶことにする。

シスト

「ペトロ人見さま、よろしくお願いします。」

ペトロ人見

「よろしく願いするのはこちらのほうです。とにかくまず、部屋に行って荷物をおいて大部屋に。」

シスト一家が宿屋の人に部屋に連れていかれるのを見送りながらペトロ人見が六左衛門に言う。

ペトロ人見

「見かけがあまりにも単純で無邪気そうなので予想とちがってびっくりした。子どもみたいな夫婦っていう印象だ。」

六左衛門

「そうか。そんな印象を受けたのか。あの夫婦も子どもたちも、ぼくたち日本人のもっていない、ものすごい純粋さをもっているんだ。つきあえばつきあうほどわかってくるよ。僕たちとは全然違うって。」

シスト家、林の親分一家、三太夫親分一家が大部屋に勢ぞろいした。どよめいているのは次から次へと教えられ先ほどの武士が院内銀山奉行だと全員が知ったからだ。先に来て皆をまっていたペトロ人見に皆が注目する。ころあいよしと見てペトロ人見が立ち上がり、皆をすわらせる。そして歓迎の言葉を口にする。

ペトロ人見

「シスト先生。先生の奥さん、林の親分、三太夫親分、そして皆さん、院内銀山と寺沢金山に地下教会の本拠地を移しに、ようこそ来てくださいました。私はキリシタンのペトロ人見です。」

石見からの一団のうち大人たちは、皆、息をのんだ。

ペトロ人見

「私は、初代院内山奉行に任命されたばかりですが、これは大抜てきでも栄転でも大出世でもなく、させんなんですよ。ついこの間まで私は久保田藩の武士たちに西洋式の馬術を教えていたのです。もちろんついでにキリシタンの教えもね。」

若いならずものたちの心は、この言葉で一気にほぐれた。ペトロ人見の人柄にぐんぐん皆がひきつけられる。皆が笑顔になったのを確認して続ける。

ペトロ人見

「家臣たちが私からどんどん洗礼を受けるので、殿様は困ってしまっていたところへ、院内銀山が開かれ、ちょうど私をかくしてしまうのに、いい穴があると思われたのです。」

もう遠慮がいらないことがわかって皆は大笑いする。それがおさまるのをまって続ける。

ペトロ人見

「これにこりて私がおとなしくなるのを殿様はお望みのようですが、新しく開かれた銀山でひらきなおって大暴れしようというのが私の決意です。つまり、今までの何倍もの人にキリシタンの教えを教え洗礼をさずけようと決心しているのです。」

聞いている皆の口から、オーという声があがる。このすごい話しに感嘆しているのだ。

ペトロ人見

「この身にふりかかる結果としては奉行職のはくだつと久保田藩からの追放が数年先には確実にあるでしょう。その時が来るまで、できるだけ多くの人に洗礼をさずけたいのです。それにくわえて地下教会を全国の鉱山に広げる皆さんの仕事を全力を尽くして支えたい。」

林の親分が思わず口をはさんでしまう。

林の親分

「てーいうことは、もとは人殺しやどろぼうだったかもしれねーならずものの、やましやつち親やほり子たちに銀山奉行さま、じきじきに教えて、じきじきに洗礼をさずけていただけるってーことですかい。」

林の親分は、いつものようにすばやく先におこることを具体的に読んでイメージしている。そして信じられないといわんばかりの顔つきだ。

ペトロ人見

「そのとおり。この身の続くかぎり、そうするつもりです。」

林の親分

「信じられねー。いや、そりゃすげー。そりゃ、ありがてー。夢のような話しだぜ。」

ペトロ人見

「それだけではありません。近くの村々から百姓たちが、たくさん働きに来ています。女の子や男の子もたくさん。その百姓たちにも教えて洗礼をさずけたい。もちろん私の家来の役人たちにも。それから、久保田藩は流れ者になって他国から来た農民たちを新田開発のために、どんどん受け入れて住まわせています。実は、彼らの中にキリシタンが多いのです。私は、久保田城下で武士や町人や農民、あらゆる身分のもの数百人に洗礼をさずけ、彼らを組織化しました。今度

も院内銀山、寺沢金山を中心にあらゆる身分をふくんでクリシタンを広い範囲で組織化したい。皆さんの助けがあれば百人力です。神様のために、マリア様のために、心をひとつにして助けあいましょう。」

男たちが、オーと大声でこたえる。

三太夫親分

「エイ、エイ、オー。」

男たち

「エイ、エイ、オー。エイ、エイ、オー。エイ、エイ、オー。」

シストは、カタリナの手をギュッと強くにぎる。このさわがしさのなかなのでカタリナはシストの耳に口を近づけて聞く。

カタリナ

「どうしたのシスト」

シストもカタリナの耳に口を近づけて、

シスト

「あとで打ち明けるよ。ぼくの心のひみつを。」

シストがニコツとする。カタリナは、うなづく。

このあと二人の百姓が自己紹介をした。寺沢藤兵衛と寺沢太郎右衛門だ。

大部屋での晩御飯が終わった。シスト、六左衛門、林の親分、三太夫親分、ペトロ人見、寺沢藤兵衛、寺沢太郎右衛門の七人の男は、別の部屋に別の席がもうけられてそちらに移動だ。マグダレナがだだをこねる。

マグダレナ

「おら、ログジャエモンど、いっしょにいでがら、いっしょにいぐ。」

(私、六左衛門と一緒にいたいから、一緒に行く。)

六左衛門

「だめだよ。夜おそくまで、むつかしい話しなんだから。カタリナ。マグダレナをつれていって、同じ部屋で寝かしてくれ。」

カタリナが、マグダレナの手をひくとマグダレナはついてきたが、部屋について顔をのぞきこんでよくみると涙目だ。

カタリナ

「どうしても六左衛門と一緒にいたかったの。」

マグダレナ

「おめー、カタリナっていうなだべ。ログジャエモンど仲がいいんだべ、おらログジャエモンのごと、だいすぎなのによ、ログジャエモンはおらのごと、じゃまにすんなへー。」

(あなたは、カタリナっていうのね。六左衛門と仲よしなんでしょう。私は、六左衛門が大好きなのに、六左衛門は私のことじゃまにするの。)

マグダレナは唇をかむ。涙が、こぼれる。

カタリナ

「まあ————。」

カタリナは同情心があふれてしまってマグダレナをやさしくハグする。横に立ったルイスが聞く。

ルイス

「どのくらい好きなの。」

マグダレナ

「おら、ロクジャエモンと結婚してなだもん。そんならすぎなの。」

(私、六左衛門と結婚したいの。そのくらいすぎなの。)

ルイス

「お母さん。このあたりの人って何か日本人じゃないみたいだね。」

宿屋のはなれの別室では明日以後の戦略会議がはじまっている。もちろんシストが中心だ。

シスト

「ここへは、ぼくに神からのうながしがあって来ました。もっている技術は、ぼくの精錬、親分たち一家の採鉱、採掘などすべて日本で最高のものですが、ながれもののように来ているわけです。これをペトロ人見さまから呼びよせられたというかたちにして下さい。そうしたら最初から全員が指導者です。指導的立場にたてれば、近くの他鉱山にも指導者として派遣されるようになります。」

ペトロ人見

「わかりました。シスト先生。私が石見銀山から最高の技術者たちをよびよせたと明朝、役人たちに命じてふれまわらせます。明日は、寺沢まで行き、私が先導して明後日、寺沢金山に行き、その皆に私が紹介します。二晩、藤兵衛さんと太郎右衛門さんのところに宿をとります。その翌日は、院内銀山に同じく私が先導して入り、できるだけ多くの人に、一日かけて私が紹介します。」

六左衛門

「有馬から秋田まで、そうたびたびはこられないので洗礼は、ペトロ人見にまかせるよ。できれば寺沢金山や院内銀山のつち親が、ほり子たちといっしょにそろって洗礼を受ける時は、つち親と、ほり子の「かための盃」のための盃に水をいれたひょうたんから水を注いでそれで洗礼をさずけてほしいんだ。」

ペトロ人見

「へー。何だいそれは。」

ペトロ人見が目を丸くする。そこで六左衛門と二人の親分が、まずどういういきさつでこのやり方になったかを説明し、次に30才まで生きられたら長生きというほり子たちの人生と生き方、考え方などを語った。

ペトロ人見

「わかりました。私も盃とひょうたんで洗礼をさずけます。鉱山の働き手たちについて私はもっと知りたい。皆さんから話しをしっかりと聞いて、よく理解したうえで彼らに伝道します。」

シストが夜中、戦略会議を終えて部屋にもどってきた。カタリナは気がついて起きた。子どもたち、それにマグダレナはぐっすり寝ている。ふとんに入ったシストにカタリナが聞く。

カタリナ

「シスト。あなたの秘密って何。」

シスト

「カタリナ。あの時、皆は希望とよろこびにあふれていたけど。ぼくだけは違ってたんだ。ぼくは、ただ、ただ、ほっとした。心のそこでは今回のことほどこわかったことは今までになかった。」

たよ。ぼくの勝手な思い込みだったのではないかっていう思いが心をさらなかったんだ。それと、こんなに大きくなった地下教会のかじとりをぼく一人の決断でする、その責任の重さにつぶされそうだったんだ。でも大将としてそんなそぶりも見せちゃいけないってわかっているから、確信に満ちているようなふりをしてきたんだ。あの時、ぼくは心の中で、神様ありがとう。マリアママありがとう。ああ、こわかった。ああ、つぶれそうなほど重かった。今、はじめて確信がもてました。ほっとしました。って話ししてたんだ。」

カタリナ

「そうだったの。何も気がつかなかったわ。あなたは立派な大将だわ。私も皆も安心してついてこれたんだもの。シスト、ありがとう。一人で皆の分を全部せおってくれて。」

シストは、まだ神がなぜここに彼らをこさせたのか、その理由のほんの一部分を知ったにすぎないのだ。それでもシストは今、感謝にみちて安心してねむりにつく。

戦略会議で打ち合わされたとおりにペトロ人見は全て実行した。新しい山奉行が石見銀山から最高の技術者集団を呼び寄せ、明日、明後日と彼らを紹介するという役人からのおふれで、寺沢金山でも院内銀山でも、驚きにみちて皆が話しし合う。当日は、まさに、はなばなしいデビューと言ったところだ。

高らいの世界最高の精錬技術の先生の……。日本で最も進んだことをやっている石見銀山からの……。最新の測量技術をもちいた坑道の掘り方の……。何一つうそではない。そして気さくな山奉行が大げさに石見の面々に尊敬を示しつつなのだ。迎える人々も大喜びだ。皆も来てまもないし、寺沢金山と院内銀山の将来性に金もうけの夢をかけてきている。ここは将来性ありと保証されたようなものだからだ。こうして歓迎されてシスト家と林の親分一家は寺沢金山に。三太夫親分一家は院内銀山に住みつき、地下教会づくりは銀山奉行の応援をうけて、この地でさらにのびていくのだ。

1608年10月、シストは精練の仕事をしばらく休んでいる。ルイスとヨアキムもだ。高らい式のオンドルをそなえた家を大工たちに建ててもらうために、一日中、彼らを指導しているのだ。林の親分の家とあわせて二軒だ。ルイスとヨアキムはオンドルを知らない。そのつくりかたからシストは息子たちに教える。カタリナは、日本の北国での初めての冬を前に高らいで用いた皮の手ぶくろと長くつをつくりたいと考えている。カタリナは藤兵衛に聞きに行った。マリアは、シストたちに預けた。

カタリナ

「藤兵衛さん。毛皮となめし皮を手に入れたいんだけど、どうしたらいいかしらない。」

藤兵衛

「うってるどころあるがらんしょ。カタリナさん。びゃっごあるぐげど、おらどいっしょにくるが。」

（売ってるところがありますよ。カタリナさん。ちょっと歩きますが、いっしょに行きますか。）

カタリナ

「はい。よかった。そんなお店があるなんて思わなかった。」

藤兵衛

「らい病にかがってしまった人らだがよ、わの村さででしえ、きゃどぞいにあずまってすんでるどごがあってしえ、そこで毛皮っこどがなめした皮っこうってらなしえ。」

（らい病にかがってしまった人たちが、自分の村をでて、街道ぞいに集まって住んでるところがありましてね。彼らが毛皮となめし皮売ってるんです。）

カタリナ

「かわいそうな人たち。その人たちと知り合って友達になりたいわ。」

藤兵衛

「びゃっこまってでけねが。」（ちょっとまっててくださいね。）

藤兵衛は、カタリナの今の返事を聞いて、ちょうど良いチャンスだ。マグダレナをつれていこうと考えたのだ。大百姓の屋敷は広い。マグダレナをよびにどこかに行った藤兵衛が、マグダレナといっしょにやってくる。

マグダレナ

「マリアのかあさん。まりあげんきだが。」（マリアのお母さん、こんにちは、マリアは元気。）

カタリナ

「マグダレナ。こんにちはマリアは元気よ。」

出発した三人は話ししながら、大きな街道に出て北へしばらく歩くと、街道沿いに、その店があった。店の裏手が、らい病の人たちの住んでいる小屋だ。

店には、月の輪熊、鹿、もしか、猿などの毛皮、牛や馬のなめし皮がある。店番の男が奥か

らやってきた。カタリナは、友達になろうと思っているので、名乗って話し出す。

カタリナ

「あの、私、高らいから来て、今、寺沢に住んでるカタリナっていいます。皮の手袋や長くつが作りたくって材料を買いに来たんですけど・・・。」

店番の男の顔が、カタリナという名を聞いてニコツとした。らい病のために顔が傷だらけだ。

店番の男

「カタリナさん。あんた、もしがして・・・よ。キリシタンなだが。」

(カタリナさんは、もしかしたら、キリシタンなんですか。)

カタリナ

「え。はい。」

店番の男

「おらもは、キリシタンなんだ。ミカエルっていうんだけどもよ。ここでは、洗礼うげだのおらだけなんだけどよ。キリシタンの教えの話しっこだば、みんな、きいでるよ。」(私もキリシタンです。ミカエルっていいます。ここでは、まだ洗礼をうけたのは私だけですが、みんなキリシタンの教えの話しは聞いてますよ。)

マグダレナは、ミカエルの顔や手の傷にぎょっとして体をかたくしている。はじめて、らい病の人を見るのだ。

ミカエル

「ロクザエモンっていうへ、どうしゅぐが、年になんきゃがごさきてくれるんだ。」

(六左衛門っていう同宿が年に数回来てくれるんです。)

マグダレナ

「ろくじゃえもんのともだちなのが。ミカエルさんって。」

(六左衛門の友達なの。ミカエルさん)

マグダレナの顔が急に生き生きとした。マグダレナにとって六左衛門の友だちは、みんな良い人にきまっているのだ。カタリナも藤兵衛もびっくりした。六左衛門がここにも来ているなんて。

マグダレナ

「おら、ま・ぐ・だ・れ・な、おらも、ろくじゃえもんの友達だ。よろしぐね一つ。」(私、マグダレナ。私も、ろくじゃえもんの友だちよ。よろしくね。)

カタリナ

「私たちも、六左衛門とは、家族のようにつきあっているのよ。こちらは藤兵衛さん。皆、キリシタンです。」

ミカエル

「ほほ、こりゃーたまげだなー。うれしな。なんとよろしぐな。カタリナさんよ。おらはよ、「マタギ」って言ってよ、狩するんだ。マタギも皮の手ぶくろどが長ぐづどがつかうんだ。」(これはうれしいな。よろしく。ところでカタリナさん私は「マタギ」って言って、狩をする人間でして、「マタギ」も皮の手袋と長くつをつかうんですよ。)

カタリナには、「マタギ」というものがわからなかったので、ミカエルはたくさん説明してく

れた。このあたりの山々には数えきれないほどたくさんの月の輪熊、鹿、かもしか、猿、いのししなどがある。川にも魚がいっぱいいる。それらをとって暮らしているのが「マタギ」だ。毛皮を売るだけでない。熊の胆（くまのい）のような動物由来の薬もつくる。話しが動物の内臓などを薬にしたり食べる話しになると、カタリナの目が輝きだす。かもしかの胃と腸のうまさは、絶品だとか、「マタギ」は生でかもしかの肝臓を食うとかの話しの途中、たまらず、とうとう口をはさんだ。

カタリナ

「ミカエルさん。私、肝臓とか小腸とかの内臓、特に肝臓がほしいんだけど、手に入るかしら。」

ミカエル

「んだったら。おらが、ほがのやづらによ、獲物しどめだら、はらわだ、きもっこもって、カタリナさんのえさよ、売りにいげっていっておぐべった。」（だったら、私が「マタギ」の連中に、獲物がとれたら内臓、特に肝臓をもってカタリナさんのところへ売りに行けって言いますよ。）

カタリナ

「わー。ありがとう。絶対おねがいね。寺沢金山のシストとカタリナの家よ。それからミカエルさん、今、私たちを皆に会わせてくれない。六左衛門の友達のキリシタンだって紹介して。何か助けてあげられることがあれば助けてあげたい。」

こうして行動派のカタリナはこの日のうちにもうライ病人たち皆と友達になってしまった。それから、「またぎ」たちとの交際もはじまることになった。

その日の晩、住んでいる急ごしらえの小さな家でシスト一家は食卓をかこんでいる。今日、買った毛皮となめし皮をカタリナが見せおわったところだ。

カタリナ

「病気が重くなった人を、まだ病気が軽い人が世話しをしてあげて助けあっているの。街道をゆく人のほどこしをたして何とか食べていっているの。私が買い物したんで助かったっていつてくれたわ。でもあんまりにも貧しいの。お願い。私たちは金持ちよ。あの人たちに分けてあげさせて。」

シストは石見銀山に来て間もないころ、カタリナの愛の行為で全てがはじまったのを思い出しながら聞いている。またそれがくりかえすのだろうか。シストはカタリナの同情の愛からの行動が神によって祝福されるのを体験してきている。だからカタリナを信頼している。

シスト

「さっそく。お金をもっていっておいで。」

カタリナ

「わー。うれしい。ありがとうシスト。それから私、このことをペトロ人見さまに話ししてみる。きっとペトロ人見さまは、あの人たちに教えてくれるわ。そして、きっとあの人たちは全員洗礼をうけたくなるわ。」

何と単純なカタリナ。シストもそれが良いと思う。というより、カタリナの考えはすばらしいと感嘆する。

カタリナ

「それからシスト、「マタギ」のミカエルさんがね……。」とカタリナはけものの肝臓とか小腸とかの内臓が手に入る予定だと話す。

シスト

「すごいね。うれしいね。どうやって料理するつもりだい。」

カタリナ

「ここの味噌って甘くてすごーくおいしいでしょう。私、ここの味噌で鍋物にしたい。「お父さんのにんにく」をすりおろしていっぱい混ぜたらきっとおいしいわ。」

カタリナは、「お父さんのにんにく」をここ寺沢にももってきている。また、カタリナが気に入っているこの地域の味噌は、他の地域の味噌とはくらべものにならないほど米こうじを多く配合している味噌だ。それで甘みが強くレバーやホルモンに合うのだ。

カタリナはまず、林のおかみとマグダレナをつれて、定期的にライ病人の小屋にかよいはじめた。食べ物や、まきがいつも十分あるように気をくばり、経済面でささえた。三人はペトロ人見に会いに行き、この話しをした。ペトロ人見は、ぜひ行く、といい、彼もライ病人の小屋への訪問をはじめた。ペトロ人見は院内山奉行であるまえに、キリシタンの伝道師なのだ。そしてライ病人全員の洗礼へ向けての準備がはじまった。

シストが指導してオンドルをつくった二軒の家がたった。カタリナは、皮の手袋と長靴を家族の為に作った。「マタギ」のミカエルのおかげで、彼の村の連中が、レバーとホルモンを売りに来てくれた。シストとカタリナはこれで鍋料理をつくり、林一家を皆よんで、二軒の家の完成を祝うことにした。かまどに大鍋がおかれ、レバーとホルモンと野菜が味噌とにんにくで煮込まれている。かまどの煙はオンドル部屋の床下に流れ、床をあたため、反対がわの煙突から出ていつている。シストはまず皆をオンドル部屋にあげさせた。床が温かくって皆はびっくり仰天。口々にシストをほめる。

ほり子たち

「シスト先生はすごいですね。」

シストは高らいの技術がほめられたのだと受け止める。

シスト

「ぼくはちっともすごくないよ。でも高らいの暖ぼう技術は世界一です。」

カタリナが、おわんについて、皆に鍋料理をくばる。

レバーとホルモンは小さく切って煮込んである。

カタリナ

「みんな、食べてみて。私の創作料理よ。何が入っているかあててみて。食べ終わってからね。」

ほり子たち

「いただきまーす。」

みんなうまいうまいとほめる。おかわりする人続出。鍋はたちまちからになる。そして皆のうち誰もレバーとホルモンについてはあてられない。たにし鍋に似ているからたにしの仲間だろうとかいつている。

カタリナ

「にがいのが、かもしかの肝臓で歯ごたえがあるのが、かもしかの小腸よ。」

ほり子たち

「げー。四足の内臓。」

カタリナ

「肝臓とにんにくで精がつくのよ。長生きできるわ。」

ほり子たち

「また、ごちそうしてください。食べにきます。」

林の親分はこのやりとりに大笑いしている。林のおかみはカタリナを手伝ったから最初っから教わっていたけど、こわごわ食べていた。

林の親分

「おれが名前をつけてやる。カタリナ鍋だ。てめえらこれからカタリナ鍋って呼ぶんだぞ。わっはっは。」

これからたびたびカタリナ鍋は、ほり子たちにふるまわれることになる。暗い坑道内で目が良く

見えるようになる。体力が長持ちするようになる。体があったまって寒さに強くなる。レバーとにんにくの効果でほり子たちの健康がぐっとよくなっていった。

1612年 春 この年、院内銀山の年間銀産量は20トン。人口は2万人に達するのだが、発展著しいこの銀山にもう一人山奉行が任命された。かつてペトロ人見から洗礼を受けた、久保田はんでも名高い家臣ペトロ梅津政景（うめづまさかげ）だ。山奉行二人体制、そして二人ともキリシタン。この地でペトロ人見は久保田城下で伝道した6年間の数倍もの人々に自分の手で洗礼をさずけた。カタリナからたのまれたライ病人小屋の人々全員にはもちろん、六百人にだ。二人のキリシタン山奉行にとっても、シストやカタリナたちにとっても、うれしかったことは、同時期にフランシスコ会の同宿たちが数人、次々と太平洋がわから日本海がわへ山をこえて出羽の国にはいり、院内までも巡回してキリシタンたちをはげましてくれたことだ。彼らは江戸から仙台へきた同宿たちだ。彼らは江戸でライ病人を世話しし教えている。

フランシスコ会は最も貧しい人たちに最も伝道の力を注ぐ会だ。それで、カタリナ、林のおかみ、マグダレナ、そして八重という寺沢村の百姓の娘さんで寺沢金山の精錬部門の鉱石の選別の仕事をしに来ている14才の女の子、この4人がやってる、ライ病人のキリシタンたちへの慈善の活動を聞いて4人といっしょにライ病人の小屋へ行ってくれた。それでカタリナたちとは特に仲良しになった。彼らはマグダレナの家、つまり寺沢藤兵衛の家に宿泊したのだ。そしてもちろん山奉行たちにも会ってはげましあっている。八重は長男のルイスが、ぼくが気に入った人だといってシスト家につれてきた人だ。

1612年の秋、19才になったルイスと15才になった八重は明日、結婚する。夜遅くまでシストとカタリナとルイスは食卓で語りあった。突然ルイスは少しあらたまって話しだした。

ルイス

「お父さん。実はぼくはお父さんがいつもうらやましかったんだ。」

シスト

「ほー。なんで。」

ルイス

「お父さんとお母さんは精神的に一致している。信仰も一つ。愛も一つになっている。同じ祖国を愛し、同じ神を愛して。お父さんは祖国に帰れないけど、お父さんはお母さんが祖国なんだ。なぐさめや、やすらぎや、あたたかさや、よろこびの全てをお母さんからもらってる。」

シスト

「本当にそうだね。」

ルイス

「ぼくは、これからお父さんのように幸せな男になるよ。」

カタリナ

「私にとっては逆にシストが祖国だわ。」

ルイス

「うん。八重にとって、ぼくはそんな夫になって彼女をきつとしあわせにするからね。」

翌日、ペトロ人見が来てくれ、二人の結婚式に続いて八重の洗礼式を行なってくれた。アガタという洗礼名をペトロ人見がつけてくれた。シスト家にキリシタンのお嫁さんが来たのだ。皆の喜びはたいへん大きい。仲良しになった「マタギ」の村の人々が、前日にとったえもののレバーとホルモンをお祝いだといって届けてくれたので、カタリナ鍋が用意され多くのお客さんにふるまわれた。カタリナ鍋の評判もこうして広まっていく。

春に来たフランシスコ会の同宿たちは、カタリナが高らい人だと知ったので、その時、シストやカタリナに自分たちの最大の支援者であった高らい人の若い女性について話しさせてくれた。太田ジュリアという名だ。江戸城に5年前の1607年の夏までいて今は駿河に行ってしまったが、江戸にいる間は、フランシスコ会のパードレや修道士の活動を、多額のきふで助けただけでなく、貧しいキリシタンのために服や食物をほどこした。江戸城でのできごとを知らせて今はこうしろ、あるいはこうするな、今こそこの殿、あの殿を訪問しろと助言して助けてくれたといった。また、今、江戸で最も活やくしているキリシタンは、ハチカン・ホアキンという高らい人で、ルイス・ソテロ神父を家に迎え、家を教会としていて、老人だが4年前に高らい人の妻と二人で洗礼を受け、2年前からフランシスコ会の信心団体の会長として働いていると聞いていた。シストとカタリナは江戸でキリシタンたちの中心となってきたのが高らい人だと聞いてびっくりした。祖国を愛し、同胞を愛している二人にとってこれは本当にうれしい話しだったのだ。

1612年11月、六左衛門が寺沢にやってきた。シスト家族全員と林の親分とおかみは、藤兵衛の屋敷にマグダレナに呼ばれて集まっている。太郎右衛門も来ている。マグダレナは、13才。できるだけ六左衛門のそばにいて、できるだけ六左衛門をみつめていたいという気持ちをかくさない。素直にそのとおりに行動しているので、皆にも彼女のよろこびが伝わる。マグダレナがいちずに思いつづけている人は年に数回しか会えない人なのだ。マグダレナが穴のあくほど見つめている六左衛門の顔は、今回は何か悲しげで、今までとは違う。

六左衛門

「徳川家康が、迫害をはじめたんだ。住んでいる駿府（すんぶ）でキリシタンの家臣14人の財産を没収し追放した。4月17日のことだった。御殿女中（ごてんじょちゅう）の中では、最も熱心で身分の高い高麗人が、その13日後に島流しの宣告を受けて、伊豆の大島に流された。」

カタリナ

「え。もしかして、その人、大田ジュリアっていわない。」

六左衛門

「そうだよ。よく知っているね。その翌日、城下の全ての教会を打ち壊させた。それから6月に有馬で家康の命令を受けて、新しい領主が家臣たちと宣教師たちに迫害をはじめたんだ。セミナリオとコレジオは、長崎に避難し、神父や修道士たちもほとんどが長崎に移動したよ。」

家康の迫害と聞いてシストの顔はくもる。

シスト

「領民たちに対しても迫害がはじまるんだろうね。」

六左衛門

「領民たちは皆そう考えているよ。」

カタリナ

「なつかしい有馬。代父、代母の家族。そう、六左衛門にとってはふるさとよね。」

カタリナは、心配で青ざめる。

六左衛門

「それから、江戸で迫害がおこりそうだ。今のところ4月末にフランシスコ会の修道院や日本語学校、教会、同宿養成所、病院が打ちこわされ、追放され、住み家を失ったパードレや修道士たちに、たった一人勇敢に宿を提供した高らい人がいてね、彼だけが自宅監禁されている。」

カタリナ

「え。その人、ハチカン・ホアキンっていう人でしょう。」

六左衛門

「うん。そうだよ、良く知ってるね。そのあと、江戸中の町人が調べられ、3700人のキリシタン名簿が作られたんだ。」

シストとカタリナは、春に聞き知ったばかりの二人の同胞が、一人は島流しにあい、一人は自宅監禁となっているのを思うと胸が苦しくなった。

林の親分

「3700人の江戸のクリシタンの中で、たった一人しか宣教師の宿主にならなかったなんてな。殉教できる人間は少ねーだろうな。」

翌日、六左衛門は、ペトロ人見、ペトロ梅津、三太夫親分たちに会うため出発した。シストは六左衛門に、もし江戸で迫害がはじまったら、絶対にいそいで知らせてくれと、くれぐれもたのんでおいた。

1613年8月、六左衛門が、江戸の迫害がはじまったことを知らせに、寺沢まで大急ぎで、より道なしでやってきた。3700人の江戸キリシタン名簿をもとに、7月27日、キリシタン狩りがはじまったのだ。前回と同じメンバーが、藤兵衛の家に集まった。

六左衛門

「徳川秀忠（ひでただ）の命令で1500人が名簿をもとにして捕らえられたんだ。わずか数人をのぞいてみなキリシタンの信仰を捨てる、つまり、ころぶことを誓約して家に帰された。」

実はこの半月後の8月12日に、今度は浅草のライ病院がふみこまれ、ルイス・ソテロ神父と、そこで働いていたキリシタンが全員つかまって牢に入れられる。その時、六左衛門たちは、江戸に向かっているのだ。

ふいにカタリナが言い出す。不思議そうに。

カタリナ

「もし、純粹にイエズスが大好きだったとして、その人がキリシタンの信仰を捨てますと役人に誓約した瞬間から、イエズスが大好きになれるのかしら。」

男性たちは、この質問に内心おどろく。女性たちは、瞳を輝かせて発言したそうにする。

カタリナ

「私、イエズスが大好き、それだけしかないの。他に何も考えていないの。私、弱いから脅迫とか、ごうもんを負けて、ころびます、って誓約するかもしれない。でも、一生それを後悔すると思う。そして、イエズスが大好きなのは、変わらないと思うの。」

林のおかみが、林の親分を見ながらきりだす。

林のおかみ

「神様なのに、こんな私を愛してくれる。だから、私もイエズスを愛したいんだ。私もただそれだけ、他に何も考えてない。私がころぶって誓約して、今の私よりもっとなおさら悪くなったら、こんな、こんな、こんな、私を愛してくれる神様、イエズスにもっと愛が燃えあがっちゃうかも。」

林の親分は、いつも見せない林のおかみの一面を見せられ、びっくりしている。

八重

「おら、だいきでたまらねひとさだば、なんでも、わのものあげでっておもうんし、んだのに、その人どごきずつけでしまったどぎ、その人、かわらねで、おらどごすぎだっておもってくれでいるなだば、もっとけでぐなるをん。」

（大好きでたまらない人には、何でもあげたいと思うわ。それなのに、その人を傷つけることをした時、その人が、変わらずに私を好いてくれるなら、もっとあげたくなる。）

まだ新婚の八重は、ほおを赤く染める。

八重

「おら、なんもかんがえでねっし、なんもしらねっし、たんだ、おら、あーイエズスって、ごころさえがいで話っこせばよ、だいきでたまらねぐなってくるのよ。すてきなイエズスのごど、

やだぐなんかなれねべった。」

(私、何も考えない、何も知らない、ただすてきなイエズスを心に描いてお話しすると、大好きでたまらなくなってくる。すてきなイエズスを大きらいになんかなれない。)

マグダレナは、いつものように六左衛門のとなりにはすわっているが、燃えるような顔をしている。

マグダレナ

「ほんとにだいすぎなひとどこ、急によ、でっきれいになれねもん。おら、イエズスにひきづけられてすぎになったわ。おらも、なあんもかんがえねな。いったんすぎになったがら、はなれられねな。」

(本当に大好きな人を急に大嫌いになんてなれない。私、イエズスにひきつけられて好きになったわ。私も何も考えてない。いったん好きになったから、はなれられない。)

ここまでは、いちずな女性としてのマグダレナだ。

マグダレナ

「おらがいろいろかんがえて、なんかの理由どが目的どがあってイエズスがすぎになったんだら、もういっけいろいろかんがえて、その理由どが目的どが打ち消せば、だいきれいになれるのがも知れねけど、自然とひきつけられすぎになったのだから、もっとひきつけるものがあらわれないかぎり、はなれられね。んだども、その場合でもきれいになってはなれるわけでもなくて、すぎでありつづげるはずだ。」

(私が、いろいろ考えて何かの理由や目的があってイエズスが好きになったのなら、もう一度いろいろ考えて、その理由や目的を打ち消せば大嫌いになれるかも知れないけど、自然にひきつけられて好きになったのだから、もっとひきつけるものがあらわれないかぎりにはなれない。でもその場合もきれいになってはなれるんじゃない。好きでありつづげるはずだわ。)

14才の女の子のマグダレナが、男のように論をすすめるので、皆が感心している。頭のつかい方まで男まさりのところがあるのに、藤兵衛や太郎右衛門、六左衛門といった、彼女を子どもの時からみている男たちが注目する。

マグダレナ

「おらが、ころぶって誓約してしまったどしたら、つぐなうために、きっとひっしになって今よりもこごろのながで熱心になるっし、かなしませだイエズスをよろごばせるためによ、なにせばいいが必死にさがしてみついたら、それに、一生うちこむど思うよ。」

(私がころぶって誓約してしまったどしたら、つぐなうためにきっと必死になって、今よりも心の中で熱心になるわ。悲しませたイエズスをよろこばせるために何をすればいいか必死にさがしてみついたら、それに一生うちこむど思う。)

マグダレナが話している間中、他の女性たちは大きくうなずいていた。同感、賛成というわけだ。9才のマリアが話しだす。

マリア

「私、遠い国にすてきな王子さまがいて、いつか私に会いに来て、結婚してくれるってきいたら、今からその王子さまを大好きになれるわ。心の中で、その王子さまといっぱいお話しもできる

。でも他の人が私のことを笑わないよう、誰にも教えないで心の中でずっと続ける。」

おとぎ話の世界にまだ住んでいるマリアの発言に皆ニコニコし、その場の雰囲気はやわらいだ。マリアは、まだ初恋を経験していない。

シスト

「女の人たちが発言してくれて、ぼくはとても助かったよ。ありがとう。神が地下教会に何をさせたいのか見えてきた。きっと今までにないことだと思うけど、神はこのマリアママ的な地下教会には、迫害されて信仰を捨てる誓約した人を迎えに行ってもいいんだ。」

林の親分

「迎えにゆくのかい。」

シスト

「うん。迎えにゆけば、彼らが本当に、純粹にイエズスが大好きなら、きっと鉱山に来る。女の人たちはそう思うだろう。」

女性たち

「うん」

シスト

「鉱山は治外法権だから、自由に信仰できることを彼らに教えるんだ。家康が、鉱山労働者は鉱石を手形がわりにもっていれば関所を通れると決めてくれたから、手形がわりの鉱石を用意して迎えに行かせるんだ。

ぼくは、地下教会の全てのつち親に指令をだす。彼らが迫害がおこったところの、クリシタンを迎えに行くようにとね。彼ら自身行くか、ほり子をつかわすようにとね。寺沢金山と院内銀山からは明日にでもほり子たちを江戸へ送ろう。大急ぎでいった方がいい。たくさんのほり子たちに、この指令をもって日本中の地下教会をまわってもらわないとね。」

林の親分

「江戸にはおれが自ら迎えに行くぜ。これは地下教会にとって『かけ』だ。『大ばくち』だ。こんな大事なことを、ほり子にまかせてられるかい。」

六左衛門

「ぼくが道案内するよ。」

シスト

「ぼくも江戸に迎えにいこう。じゃあ明日は地下教会にほり子たちを手分けしてつかわそう。ぼくたち三人は、その仕事をやりおえて、あさって江戸にすっとなでいこう。」

三太夫親分もいっしょに行くことになり一行は四人になった。かんぱつを入れず、シストたちが動き出したのは大正解だった。シストたち四人が江戸につくと、おととい（8月16日）、きのう（8月17日）処刑場で計22名が首を切られて殉教したところだった。江戸中、その話でもちきりなので、情報は何でもすぐ耳にはいった。四人は、処刑場に直行した。

ハチカン・ホアキンと主だったキリシタン八人の首がさらされていた。22人の体は、細かく切り刻まれ、山とつまれ、キリシタンたちがもちさることができないよう、見張りの番人がついていた。

処刑場に人々がやってきている。尊敬ぶかく祈るので、キリシタンの信仰をもっているのは一目りょうぜんだ。彼らの多くは、聖なる殉教者のゆかりの品を手にいれたくって、遠くからでもやってきているのだ。シストたちは、そういう人たちに片っぱしから声をかけて、鉱山のほり子になれば、自由に信仰できるから来ないかとさそい、泊めてくれないか聞いてみる。

こうして殉教者の遺体が片付けられるまで、一週間シストたちは処刑場にかよいつづけた。シストたちの活動の結果、話はたちまち伝わり、なんと、ほとんどの江戸のキリシタン、もちろん、ころぶことを誓約した人々を含めて、鉱山に行くことに心を決めた。

処刑場には、他の鉱山から指令を実行するために、つち親やほり子が次々と来はじめたので、六左衛門がコーディネーター役としてずっと残ることになった。

最後の日、処刑場でシストは10才くらいの女の子が一人で泣いているのを見かけ、声をかけた。

シスト

「どうしたの。」

女の子

「お父さんが殉教して、私、みなしごになったの。」

シスト

「名前は、何ていうの。」

女の子

「クララ。」

シスト

「クララ、みなしごって、お母さんは死んだの。」

クララ

「お母さんは、ライ病で死んだ。お母さんがライ病院に収容されて、家族三人で洗礼を受けたの。お父さんは、ライ病院で働かしてもらって、お母さんが死んだあとも、ずっとそれをつづけていたの。」

シスト

「今、どこに住んでいるの。」

クララ

「家がない。橋の下。こじきをして食べてる。」

シストは、涙がでてきた。こんなかわいそうな子をほってはおけない。

シスト

「ぼくは、シストっていうんだよ。キリシタンだ。いっしょにおいで、お父さんになってあげよう。」

クララ

「うん、いく」

シスト

「クララ、年はいくつ。」

クララ

「9才。」

クララは、マリアと同じ年だった。クララはシストの手をにぎってついていく。

翌日、泊めてくれた人の家族も出発だ。打ち合わせたまちあわせ場所にいっしょに行く。昨日からクララもいっしょだ。シストに手をひかれている。

まちあわせ場所にきたのは老人、子ども、赤ちゃんをふくめ100人をこえる町人たち。皆、近所に黙って、家や家財を捨てて出てきている。

さあ出発だ。林の親分と三太夫親分が先頭に行く。こうして、ついこのあいだ信仰をすてることを誓約させられたキリシタンたちが、家族をつれてどこかにいなくなってしまうという、幕府にとっては不思議なことがおこりはじめた。また、キリシタンたちには口コミで、鉾山に逃げこめば自由に信仰できるという情報が、江戸から全国へと伝わりはじめた。

1613年9月、寺沢金山に、シストと林の親分が、江戸のキリシタンたちを連れて帰ってきた。林一家が世話を引き受ける半分と、三太夫一家が世話を引き受ける半分とにわかれたので、約50人ほどだ。シストがやせ細った女の子の手を引いている。クララだ。出迎えにきたカタリナとマリアと八重がそれを見つける。

カタリナ

「シスト。おかえりなさい。」

マリアと八重

「お父さん。おかえりなさい。」

三人がかけよってもシストはクララの手をはなさない。カタリナは、注意をすぐにクララに向ける。あわれな姿だ。

カタリナ

「この子はどうしたの。シスト。」

シストがクララの身の上を話してきかせる。カタリナは、クララのもう一方の手をにぎりながら聞いている。カタリナの目は涙の大洪水だ。

シスト

「カタリナ。いいだろう。」

カタリナ

「もちろん、いいにきまっているわ。クララ。新しいお母さんよ。」

カタリナはクララを胸にギューギューだきしめる。八重がつぎにやさしくクララをだきしめる。

八重

「おめの、あだらしい、ねえさんだよ。ながよくしようね。」

(新しいお姉さんよ。仲良くしようね。)

お父さんの方へ先にだきついて甘えたマリアが、次にだきつく。

マリア

「私も9才なの。うれしいわ。」

マリアは遊び相手ができるとおよろこびだ。むこうでは、林のおかみの大活躍がはじまっている。これから林のおかみの持っていた真の才能が輝く時がはじまるのだ。

林のおかみ

「先生の奥さん。八重さん。手伝って一。」

林のおかみは、何十人であろうが百何十人であろうが、全員をひとつの家族、自分の家族としてとらえることができる女なのだ。しかも、全体に目がとどき、差別なく全員を扱える。そして天性の親分肌の強さで、てきぱきと仕切ることができる。

子分たちの総動員で、林のおかみが夕方までに何とか皆に住み家を与えることができ、カタリナ、八重、マリアは、晩の食事づくりだ。ちょうど、「マタギ」の村人からレバーとホルモン

を買ったばかりなので、あるもの全部ぶちこんだカタリナ鍋が大鍋に用意される。今でいうスープキッチン、つまり、たきだしの第一回目がはじまった。

仕事場からルイスとヨアキムが帰り、クララをシストが紹介している。15才のヨアキム、カタリナゆずりの同情心にとむヨアキムは、クララの身の上を聞いて泣いている。やさしいおにいさんは使命感のようなものを感じている。

ヨアキム

「お父さん、ぼくがこの子を守ってあげる。クララ、どんな時でもぼくが守ってあげるからね。」

ヨアキムは、この言葉を誠実に守る。実は、クララは将来、ヨアキムと結婚することになるのだ。

翌日からカタリナと林のおかみは、キリシタンたちを大きな一つの家族として具体的に助けあわせる活動にとりかかった。

主力は、女たちだ。まず、これから慣れないきびしい労働にとりくまねばならない男たちをささえなければならぬ。また、食べ物、服をととのえること、けが人、病人の介護、幼児、老人の世話、全てを協力してやっていくようにした。

10才以上の子どもたちは、鉱山の仕事を手伝うから、それ以下の子どもたちは、キリシタンの共同体の仕事を手伝う。年よりたちも専門技術をもっていたりするから、それを用いて働く。

この時から1623年の終わりまで、寺沢金山のキリシタン共同体は、愛と一致と協力で、約10年も天国のようにすばらしい共同体として発展するのだ。これを模範として、院内銀山のキリシタン共同体も助けあう大きな一つの家族になる。

マグダレナや八重のように地元の人が、この地の春夏秋冬を生きる知恵を教える。たとえば、山菜取り、熊除け、川魚とり、アブの対策、マムシの対策、畑づくり、衣・食・住の冬の準備、つけものづくり、etc.だ。

最初のころ、そして、新入りのキリシタン家族が加わるたびに林のおかみのしっただげきれいの声かとぶ。

林のおかみ

「みんなさー。自分とこのおいぼれもさ、よそとこのおいぼれもさ、みんなみんな面倒みるんだよ。」

林のおかみ

「てめえのガキも、よそのガキも区別すんじゃないよ。」

林のおかみ

「あまったものは、全部だしな一。足りない人たちが持っていけるようにさ一。」

皆はキリシタンとして、愛徳の実践として、熱心に実行する。

独身者主体の鉱山のふんいきが、この時から一変した。かわいい子どもたちがあちこちにいる。やさしい母親が赤ちゃんにお乳をやっている。若いキリシタンの娘も清らかな花のようにめだっている。独身のほり子たちは、キリシタンの娘と結婚したいと思いはじめる。こうしてキリシタンの家庭が増えていくのだった。

林の親分の言ったシストの「かけ」「大ばくち」は大当たりだったのだ。殉教をえらぶことができずに信仰を捨てると誓約してしまった人々、また、迫害前に逃げ出した人々とその家族は、心の中につぐないたい望みをだいて鉱山に逃げてくる。彼らは全てを捨ててやってきて、キリシタン同士、愛し合い、助けあわなければ、生きてゆけない。

そのつぐないたいというのぞみを、仲間たちへつくすことに向ける彼らは、以前よりはるかに熱心に善徳を実践する。愛と一致と奉仕の共同体が形成された。

シストが、地下教会をつくりはじめてすでに19年だ。日本の北の地の出羽の国にきて活動をつづけてからも5年になる。今や地下教会のネットワークは完成している。どの鉱山にもクリシタンのつち親がいる。今の北海道、エゾの地の鉱山にまでもだ。

そして、迫害に追われたクリシタンが、日本の北へ向かうという大きな流れができ、九州地方からさえ、関東より北、特に東北地方に逃げていきだした。神がシストに地下教会の中心を寺沢金山、院内銀山にいちはやく移させ、特に東北地方の鉱山を受け皿として機能するようとのえさせたのだということがシストたちにわかってきた。

カタリナには手のかかるこどもたちはもういない。10月にマリアが10才になる。鉱山では大人にまじって働く年だ。八重という地元出身のたのもしい嫁もいて、カタリナは、いっそうクリシタンたちへの慈善の活動に打ち込んでいく。

その後も次々とクリシタンたちは逃げこんでくる。彼らは、家族連れでやってくる。冬の寒さ、雪の多さ。彼らを赤ちゃんから老人まで無事に冬ごえさせなければと、カタリナは寺沢金山全体のクリシタンのために身を粉にして働く。

カタリナがきずきあげたコネクションが最大限に生かされる。ライ病人のお店から、あったかい毛皮をたくさん買う。マタギの村から獲物のレバー、ホルモン、肉をできるだけひんぱんに売りにきてもらう。できるだけ回数多くカタリナ鍋をつくるためだ。

親分が独身のほり子たちの面倒を、彼らが死ぬまでみるという今までのかたちと違う、まったく新しい助け合いの理想的なかたちが、今、カタリナを中心に女たち、特に婦人たちの献身的な全共同体への奉仕によってできあがっていく。まず寺沢金山から院内銀山に模倣されていく。そして他の鉱山へと広まってゆく。

二人のクリシタン山奉行も、クリシタンたちをおおよろこびでささえてくれた。特にペトロ人見はこの5年間、シストを精錬技術とクリシタンの教えをひろめ、地下教会を拡大するため、出羽の国の多くの鉱山に派遣してくれた。寺沢金山と院内銀山では、役人たち、つまり武士たちをクリシタンにしてくれた。また、多くのつち親や山師たちをクリシタンにし、シストたちがクリシタンつち親を養成し、他鉱山に送り出す活動をいっしょになってやってくれた。

この二つの鉱山は、つち親、山師の多くがクリシタンで、ここからどんどん新しいクリシタンつち親が生まれ、他の鉱山へと送られていったのだ。また、この二人の山奉行が、伝道するので、近隣の農民たち、マタギの村の人たちにも家族でクリシタンになって洗礼をうけるものが出てきた。1603年から1604年にかけての冬は、寺沢金山と院内銀山が、上から下までキリストの光にみちた時だった。

この輝きは、誰の目にも明らかになっていた。佐竹義宣、出羽の国の殿の目にもである。殿は地下教会のことについては知らない。しかし、たくさんいる鉱山役人のほとんど皆がペトロ人見から洗礼をうけたことは知っている。久保田城下の武士や町人の多くに洗礼をさずけた彼を、城下から殿が遠くはなれた山の中、出羽の国のはずれの院内に送った5年前とは院内の状況がもうちがうのだ。銀の産出量が連年、きわめて多く、院内銀山の名は日本中で有名になり、院内は久

保田城下よりもにぎわっていて、久保田城下よりもめだつ場所になっている。

運命の日、1614年2月1日がきた。幕府は、全国的な禁教令であるキリシタン追放令を出した。この知らせが佐竹義宣に届いた時、義宣はペトロ人見の奉行職をはくだつし、出羽の国から追放した。これはちゅうちょなく行なわれた。

佐竹義宣は、ペトロ梅津に対してはキリシタンの信仰を捨てるようにと説得にあたった。もし彼がキリシタンをやめるならば、他のキリシタンは迫害しないという条件を殿は出した。ペトロ梅津はこの取り引きに応じた。殿は約束を守った。

出羽の国では、これら二人以外、誰もせめられなかったのだ。この時からペトロ梅津は出世の道をのぼりつめ、国家老にやがてなる。この時、この二人のキリシタン山奉行は、出羽の国のキリシタン全体の防波堤になったのだ。こうして地下教会の本拠地には何ら迫害の波はおしよせなかったのだ。

江戸のキリシタンたちを鉱山に逃れさせる活動をやりおえた馬井六左衛門は、この時、イエズス会が長年伝道し、彼もまた、多くの信者の面倒を見ている京都、大阪、伏見、堺の地域にいた。

キリシタン追放令に先だって、キリシタンの名簿づくりが去年の12月27日から、この年の1月27日まで行なわれた。名簿にのったキリシタンの隣り近所のものは、まきぞえになるのをおそれたので、特に貸家に住んでいるキリシタンたちのほとんどが皆から追い立てられ、家族をつれて家を出てさまよいはじめた。

六左衛門は、自分の羊たちが家を追われて道や船や森や山にさまよっているのだから、彼らに鉱山に逃げこむように教えてまわっていたのだ。そして2月21日になると、神父、修道士、同宿、伝道師、柱になっているキリシタンたちが長崎に追放され、教会が皆、こわされ、キリシタンを追い出す暴力がましたので、どの道筋も、ものすごい数のキリシタン逃亡者であふれるありさまになった。

全国的な追放令なので、彼らには行く場所がない。彼らにはシストたちが準備してきた地下教会しか逃げ場がないのだ。先にシストが全地下教会に出した指令のとおり、キリシタンのつち親や、ほり子たちが、彼らを迎えにやってきた。

六左衛門の荷は軽くなった。石見からも来てくれた。やはり、多くのキリシタンは北の鉱山に向かった。六左衛門は、自分の羊、命をかけて世話をしてきたキリシタンたちを、北の鉱山に見送りながら、この活動を終えたら、自分も羊たちの多くが向かった北の鉱山で彼らの世話を続けたいと思いはじめた。

仕えてきたパードレたちは、長崎から本国に帰される。所属していた有馬の駐在所は迫害によってもうなくなってしまった。寺沢藤兵衛のところに住もう。地下教会の中心、本拠地寺沢に住もう。六左衛門の心はこうかたまっていく。

1614年の5月。寺沢金山にも院内銀山にも、まだ少し雪がとけのこっている。しかし、春は春。初めての北国の冬を、寒さに苦しみながらも、何とか越すことができたキリシタン家族たちのよろこびは大きい。

新しい生活に自信と希望が持てるようになり、この生活を準備してくれ、迎えいれてくれ、今もキリシタンのために必死になって働いてくれているシストとカタリナに感謝をあらわしたいと、寺沢と院内にきたキリシタンたちは考えるようになった。

シストとカタリナがよろこぶ何かを贈りたいと皆、思っている。ちょうどこのころ、近江の国からヨアキムとエリザベータという年配の夫婦が、寺沢に逃げてきた。二人は中国製の白磁の観音像をもって、カタリナにそれを見せた。

エリザベータ

「私たちは、これだけを大切にもって逃げてきました。」

カタリナ

「わー。これ、マリアさまとイエズスさまなの？」

エリザベータ

「そうです。そのつもりで祈っているんです。本当は、子安観音だから、ちがうんですけどね。」

カタリナ

「でも どうして 赤ちゃんをだしているの？ かわいいわ。」

ヨアキム近江

「安産を守ってくれる観音だからですよ。」

カタリナ

「この赤ちゃんがかわいくってたまらないわ。ちょっとかして。みんなに見せてきていい。」

ヨアキム近江

「いいですとも。どうぞ、どうぞ。」

カタリナは、ヨアキムとエリザベータ近江夫妻の子安観音を、「かわいいでしょう」「かわいいでしょう」と大はしゃぎで皆に見せてまわった。このはしゃぐカタリナの姿を見て、何人もの人が同じことを考えた。

シスト一家が知らないところで話しは広がり、相談はまとまり、「おれ、そういうほりもの、石でつくれるぞ」と名のりをあげたキリシタンのほり子が、マリア観音をつくることになった。その完成にあわせて、キリシタンたちは感謝の手紙をそれぞれに書いて集めておいた。

ヨアキムとエリザベータ近江夫妻は、30年以上前に信者になっており、キリシタンの教えを説明するのも上手で、子どもたちや、まだキリシタンになって間もない人々のために先生となって教えることができるということがシストやカタリナにわかった。

院内銀山にも同様に、関西からキリシタンになって30年以上たっている人が逃げてきていて、やはりこの人たちも学があって、教えの説明が上手な人が多い。そこでシストがカタリナにこ

うきりでした。

シスト

「カタリナ、寺沢と院内のクリシタンの共同体に足りないものは何かわかるかい。」

カタリナ

「何かしら。」

シスト

「子どもたちや、クリシタンになりたい人や、なって間もない人に、クリシタンの教えをしっかりと教えたいと思わないかい。」

カタリナ

「うん。思うわ。」

シスト

「ヨアキム近江夫妻のような人、年配で、学があって、古くからのクリシタンで、教えるのが上手な人たちが院内にもやってきているんだ。彼らに学校を開いてもらったらとぼくは思っているんだ。答えは学校。」

カタリナ

「わー。学校……。私、学校のことはさっぱりわからない。」

シスト

「ぼくもだよ。ぼくたちがやるんじゃないくて、ヨアキム近江夫妻に中心になってもらってさ。」

カタリナ

「いい考えね。それ。」

シスト

「じゃ、今度、寺沢と院内の主な人たちを呼んで、話し合いをしようね。」

ということで、シストは日時を決めて寺沢と院内のクリシタンの主だった人達とクリシタンの教えの先生になってくれそうな人達を家に呼んだ。

そして、その日が来た。つけものとお茶を用意していると、戸がたたかれた。シストとカタリナは玄関の戸を開けて、外を見て、びっくり。すごく多勢の人が集まっている。江戸からきた約100人が、みんないる。林の親分と三太夫親分がつれてきたのだ。

他にも、来れるクリシタンで、迫害のためにそのあと逃げてきた人は、みんな来たようだ。台が置かれていて、何かが白い布をかけられておいてある。そのとなりに杉の木の箱がある。クララが、そこに恥ずかしそうにして出てくる。

クララ

「おとうさん。おかあさん。ちょっときて。」

シストとカタリナは、クララが何か代表してするみたいなので、「何だろう？」と顔を見あわせながら外にでてくる。クララはできるだけ大きな声を出す。皆に聞こえるようにだ。

クララ

「おとうさん、おかあさん。今日、お礼がしたくって、私たち集まりました。おとうさんとおかあさんがいなければ、私たちはいったいどうなっていたことでしょうか。私は……」

クララは、家も食べものもなかった日々と、生みの父親の斬首の遺体が切りきざまれたことを思い出して、しゃべれなくなった。泣きながらやっと言う。

クララ

「これ取って。これ、お礼の品。」

シストが白い布をとる。あらわれたのはマリア観音だ。

カタリナ

「まあー。こんな……。どうしよおー……。」

皆が手をたたいている。クララの涙に同情のもらい泣き。それに今、よろこびのうれし泣き。カタリナは、クララをハグし、なぐさめながら、口は「ありがとう」をくり返す。シストは母性あふれるマリアママの姿に、たちまちとりこになる。イエズスもとてもかわいらしい。

(この石を彫って作ったマリア観音は、今、寺沢の殉教公園のてっぺんに「北向き観音」と呼ばれて、小さなお堂の中に置かれている。シストとカタリナの殉教の直後から、約4世紀にわたって、ここにおかれ、崇敬されてきている。)

シスト

「何てすてきなマリアママとイエズスの石像なんだろう。ぼくは、うれしくって胸がいっぱいで……」

シストも感きわまってしまった。ここまでくるのに、ならずものたちをひきいて、神の国の敵と、祖国の敵と戦ってきた20年があるのだ。

シストとカタリナが目前にしているのは、ならずものたちが受け皿となって迎え入れられた品行方正なキリシタンたちだ。これは20年の実りのほんの一部にすぎない。

今、現実には、ならずものたちの巨大な地下教会が存在し、そこに数万人の品行方正なキリシタンたちが全国から流れこんできている。

しかし、シストとカタリナは自分をたいしたものだとは、これっぽちも考えない。実りの巨大さが、これは自分たちの手がらでは決してないのだと確信させるのだ。シストは続ける。

シスト

「皆さん、ぼくとカタリナはいったい何者でしょう。高麗（こうらい）から連行されてきた時は、ぼくは20才、カタリナは15才の若い夫婦。戦利品の奴隷。キリシタンでもなく、日本語も知らない、みじめな二人でした。

そんな、ぼくたち二人がいったい何をしたというのでしょうか。二年後、石見銀山に連れていかれてから、その時、その時、神様が思いつかせてくれることを、そのとおりにやってきただけです。

神様ご自身が全てをなさったのです。ぼくたちはただ、神様に道具として使っていただいただけです。ぼくもカタリナも、立派なことは何もできない人間で、最低最悪で、何も知らない子どものような者です。

ぼくたちは、祖国の敵、秀吉と侵略軍をゆるせない、愛せない、祝福できないでいた長い期間、自分たちが最低最悪の人間だって痛感させられました。

二人は、その時から、どんな悪い子も決して見捨てないお母さんのマリアママのことが理解で

きるようになりました。そして、マリアママ的な地下教会をつくらうって語りあってきたんです。

ならずものたちではじまり、今、信仰を捨てると誓約した人も、苦しみは耐えられないと迫害をさけて逃げてきた人も加わったので、この地下教会は、どんな子も見捨てないマリアママ的な地下教会だということが、本当に証明されました。この石像は、そのしるしのように見えます。

マリアママ的な地下教会の姿のように見えます。皆さん本当にありがとうございます。この石像はぼくたちの家で大切にあずかります。ぼくたち二人が殉教したら、この石像は皆さんのものにしてください。」

聞いている皆は、「マリアママ的な地下教会」「どんな子も決して見捨てないマリアママ」という言葉に感動している。神さまは、そしてマリアママは、どんな悪い子も決して見捨てないというのは、何とすばらしいことだろうと。

それだけでなく、皆は、この大将と女大将自身が、どんな悪い子も見捨てない、羊のためによるこんで命を捨てる本当の牧者だと思う。

今、シストとカタリナは見つめあい、ほほえみをかわす。それを見て、カタリナにだきついていたクララがいう。

クララ

「おかあさん、おとうさん、となりの箱にはお礼のお手紙がいっぱいはいつているの。」

シストがふたをとった。手紙がふちまでいっぱいだ。ぶ厚いものもけっこう多い。実はこの手紙は、お礼だけが書かれているのではない、当然のことだが、それぞれ書いた人の体験が書かれているのだ。それを読むことでシストはいろいろな情報を得、今後に役立てることになる。

このびっくりプレゼントの贈呈式のあと、シストの家では学校について話し合わせ、ヨアキム近江夫妻が中心となって、信仰教育の学校がはじめられることになった。ヨアキム近江とエリザベータ近江は、こうして中心的なキリシタンとして、今後10年間働くことになる。

1614年の6月末、一年で一番日が長いころだ。シストとカタリナがクララといっしょに、えんがわに腰かけている。シストは、仕事が終わると、こうしてクララに助けをもらいながら、カタリナといっしょにお礼の手紙を少しづつ読んでいるのだ。シスト家では、読むことにかけては、クララが一番だ。今、また、一通のお礼の手紙を読み終わった。

シスト

「この人もだね、何も関係ない右の五軒と左の五軒の家の人といっしょに罰するって言われて、『ころびます』って誓約した人がほとんどだね。」

シストとカタリナは、悲しそうな顔をしている。

カタリナ

「ひどいわ。こんなやり方って。」

シスト

「そうだね。これはね、役人に密告させるための制度なんだよ。お互いに見張らせるやり方なんだ。」

カタリナ

「いやらしいやり方だわ。」

二人のやりとりを聞いたクララが、自分の体験を思い出して語る。

クララ

「役人たちが、ライ病院に来て、中の人をみんなつかまえてしまった時、私、外におつかいに行ってたの。もう誰も中に入れなくなって、私一人ぼっちになっちゃったんだ。皆、知ってる人は、おまえをつれてかえると、となり近所に密告されてしまうから、かわいそうだけどつれて帰れないって言ったの。それで私、橋の下に行って、こじきの仲間に入れてもらったのよ。」

カタリナ

「まあ、そうだったの……」

シスト

「なんてことだ、カタリナ。日本人はこのやり方にはものすごく弱いね。」

カタリナ

「シスト。京や大阪や伏見や堺から逃げてきた人たち。あの人たちは、となり近所から『出ていけ!』って追い立てられた人ばかりよね。」

シスト

「うん、もし鉱山の地下教会がなかったら、行くところもなく、飢えと寒さで野たれ死にしてしまったでしょうって、その人たちは、みんな書いているね。」

カタリナ

「でも、シスト、鉱山の地下教会には迫害が絶対こないなんて言えないわよね。」

シスト

「うん。今回のキリシタン追放令で、日本中でたった一ヶ所、鉱山ではここだけがやりだまにあ

げられて、それですんだけどね。ほかは、どこの鉱山も何の迫害もなかった。どうしてここだけが迫害されたんだろうって、ぼくは考えるんだ。」

カタリナ

「どうして？」

シスト

「神様がきっと、ぼくにこう教えているんだ。いつかきっと日本中の鉱山に迫害が来るから、その準備をしなさいって。」

カタリナ

「やっぱり。」

シストはだまって夕ぐれの空を見上げる。考えているのがわかるので、カタリナも同じように空を見ながらだまっている。やっとシストがカタリナの方を向いて、にこっとする。そして一言いう。

シスト

「この両どなりあわせて10軒の連座制度の迫害に対抗する方法を、何とか見つけないといけな
いね。」

シストとカタリナとクララが家の中に入っていく。シスト家の晩ごはんの様子が見える。とてもにぎやかだ。話したり笑ったり。

ルイス

「みんな。ちょっと聞いて。八重から話があるって。」

八重がまっかになって、シストとカタリナの方へ体を向ける。

八重

「とうさん、かあさん、おら、こどもでぎだみった。」

(おとうさん、おかあさん、私、子どもができたの。)

シスト

「えー。」

カタリナ

「きゃー。」

シストがこんなに驚いて、ろうばいするのはめったに見ない。目を大きくしたまま立ちあがり、八重のところへ行き、八重の手を引いて立ち上がらせる。八重のおなかに手を置いてなでてみる。そしてつぶやく。

シスト

「本当だ。すこしふくらんでる。ここにぼくの孫がいるのか……」

びっくりしたシストが、まだ子どものような若い八重をやさしく抱きしめる。

シスト

「八重。ありがとう。」

シストは八重のおでこにキスをする。シストが八重をはなすと、今度はカタリナだ。八重をハグして、

カタリナ

「うれしいわ。孫だなんて……」

カタリナは、もう泣いている。シストとカタリナにならって、皆が次々に八重をハグする。そして、おめでとうを言う。皆は、大はしゃぎ。一人シストが静かだ。目はキラキラしている。しかし、白昼夢でも見ているような感じだ。

ルイス

「おとうさん、お祝いに、お酒飲もうよ。」

ルイスがシストの顔を見て、いつもとちがうのに驚く。

ルイス

「おとうさん、どうしたんだい。夢でも見ているの？」

皆が、パッとシストを見て、同じように感じて、口々に「お父さん、どうしたの？」って聞く。

シスト

「夢を見てたんじゃなくて、今、大きな大きな夢を描いていたんだ。」

ニコニコしながら、シストが宙を見たまま答える。

皆

「どんな？ どんな？」

シスト

「ぼくの血をひくものが、いつか、いつの日か祖国、高麗（こうらい）のためにキリシタンとして働くって夢。祖国をイエズスとマリアママのものにするために大活躍するっていう夢だよ。」

カタリナ

「わー、すてき！ きっとそうなってほしいわ！」

シスト

「カタリナ、孫ができるって、むしろにうれしいものだね。」

カタリナ

「シスト、私なんか、さっき孫のこときいたとたん、体がとけてしまいそうだったわ。」

これを聞いて、皆がわーっと叫ぶ。ルイスがお酒をもってきて、にぎやかなだんらんが続く。

同じ夜、シストとカタリナが寝室で語りあっている。

シスト

「ぼくの血をつぐ子が、日本人の女の子のおなかの中にいるって不思議だなあ。ぼくは高麗人なのに、三代目のその子は半分日本人だろう。四代目、五代目って、どんどん日本人になっていくんだね……」

カタリナ

「シスト。夕方、日本人の弱さについて、いっしょに話したわよね。この子も、その弱さをもって生まれてくるのかしら？」

シスト

「うん。それはさげられないね。」

カタリナ

「迫害が連座制度でしかけられたら、キリシタンでいつづけられるかしら？」

シスト

「うーん。そこが、問題だなー。何とかしなくては……」

シストは天井を見つめて、だまって考える。やがて二人は眠るために目をとじる。

同じ1614年の7月。寺沢に六左衛門が来た。いつものように寺沢藤兵衛の家に向かって
いる。田んぼは青々と稲が育って、風に吹かれている。藤兵衛の屋敷について、おもやの玄関を
開けて叫ぶ。

六左衛門

「こんにちは。藤兵衛さん。マグダレナ。」

奥からドタドタと走る音。マグダレナだ。はだしで玄関の土間に飛び降りて六左衛門にしっかり
とだきつく。

マグダレナ

「六左衛門……。」

マグダレナは六左衛門の胸に顔をうずめて、力まかせにグューグューしがみつく。六左衛門
は笑っている。

六左衛門

「こんなあいさつをするのは、マグダレナだけだよ。怪力だね。」

マグダレナ

「いじねんもあえねがったんだがら、あだりめだべった。」

(一年も会えなかったんだから、あたりまえでしょう。)

六左衛門

「11ヶ月だよ。」

マグダレナ

「とにかく、長すぎるべった。まんず、首っこしめでけるが。」

(とにかく長すぎるの。しめ殺してやりたいわ。)

マグダレナは、六左衛門をはなそうとしない。疲れて腕の力が抜けるまで続けるつもりだ。藤
兵衛が玄関に来た。困っている六左衛門を見て笑う。

藤兵衛

「六左衛門さん。まんず久しぶりだな。こんかいは、何日泊まっていぐどごだべ。」

(六左衛門さん、久しぶりですね。今回は、何日、泊まりますか。)

藤兵衛はマグダレナに、六左衛門をはなしてやれなどとは言わない。マグダレナが心ゆくまで
六左衛門に甘えるのをよろこんでいる。

六左衛門

「それなんだけど。これからぼくはこの家に住みたいんだ。」

マグダレナが、ぱっと六左衛門からはなれる。思わず聞きかえす。

マグダレナ

「六左衛門。このえさすむのが？」

(六左衛門。この家に住むの?)

両手で胸を押さえ、目も口も大きくひらいたまま、マグダレナは立ちつくす。心臓がドキドキ

して胸から飛び出しそうになる。頭の中が真っ白になる。

藤兵衛

「このえさ住む。それはいいごどだ。一緒にすんで、いっしょに神様のためにはだらぎましょう。さあ、あがってたんせ。」

(この家に住む。いいですとも。いっしょに住んで、いっしょに神のために働きましょう。さあ、あがって下さい。)

六左衛門

「藤兵衛さん、ありがとう。」

藤兵衛と六左衛門は、かたまってしまったマグダレナをそこに残して、奥にあがってゆく。しばらくしてマグダレナはふらふらと外に出てゆき、道があるきだす。

シストの家だ。カタリナが、洗濯物を取りこんでいる。少し遠くからカタリナを呼ぶ声がする。

マグダレナ

「マリアのかあさん。」

カタリナ

「あらー。マグダレナじゃない。どうしたの。」

マグダレナがすぐそばまで来て、話はじめる。

マグダレナ

「マリアのかあさん。はなしっこしてもいいが？ あのね……おら、心臓おがしぐなりそうなの。あだまもおがしぐなりそうなの。」

(マリアのお母さん、お話ししていい？ あのね、私、心臓がおかしくなりそうなの。頭が変になりそうなの。)

カタリナ

「えー。病気なの？」

カタリナが心配そうにマグダレナの顔をのぞきこむ。おでこに手をあてる。縁側にマグダレナをすわらせ、となりに自分がこしかける。

マグダレナ

「六左衛門がさっきおらのえさきたの。11ヶ月ぶりにしえ。」

(六左衛門がさっき私の家にきたの。11ヶ月ぶりよっ。)

カタリナ

「きゃー、六左衛門が来たの。うれしいわね。今度は何日、泊まってくれるの？」

マグダレナ

「六左衛門は、おらのえさすむっていったのしえ。」

(六左衛門は、私の家に住むっていったの。)

カタリナ

「えー。マグダレナの家に住むの？」

マグダレナ

「うん。おら、それきいだとだんによ、心臓どがどがしてきて、あだまはなんも考えれねぐなって、たおれそうにふらふらになって、今でも、心臓どがどがしたまんまなのしえ。」

(うん。私、それを聞いたとたん、心臓がドキドキして頭は何も考えられなくなって、たおれそうにふらふらになって、今でも心臓がドキドキしたまんまなの。)

カタリナは、吹き出してしまう。

マグダレナ

「なしてわらうのよ、おらっておがしが？ おらってへんだが？ なんとしたらいいの？ おら、六左衛門が大好きなの。一緒に住んだら結婚しでぐってたまんねくて気がくるってしまうがも。」

(何で笑うの、私っておかしい？ 私ってへん？ どうしたらいいの？ 私、六左衛門が大好きなの。一緒に住んだら、結婚したくってたまらなくて、気がくるってしまうかも。)

カタリナは、青ざめているマグダレナの真剣さに胸を打たれる。

カタリナ

「ごめんなさい、笑っちゃって。マグダレナは変じゃないわ。いちずで純粋なのよ。」

カタリナは、マグダレナを胸にだきよせる。

カタリナ

「かわいそうに。こんなに六左衛門が好きなのに……。」

同情心にあふれ、単純で、行動派で、子どものようなカタリナだ。

カタリナ

「実は、私、六左衛門の口から、彼が独身をつらぬくつもりだって聞いたことがあるの。でも六左衛門もあなたのこと好きよ。」

マグダレナ

「ほんとだがな？ いっけもすぎって言ってけねのに。」

(本当に？ 一回も好きっていつてくれないのに。)

カタリナ

「ええ。まちがいなく六左衛門はあなたのことを好きよ。二人はお互いに好きなんだから結婚しなきゃだめよ。」

よーし。私、二人が結婚するように祈っちゃおう。シストにも祈ってもらおう。シスト家全員で祈るわ。林の親分にもおかみさんにも祈ってもらうわ。

うん。これっておもしろいわ。すごい、いたずらよ。六左衛門には秘密で、みんなで『神様おねがい！』って神様にたのみこむの。きっと神様はきいてくれるわ。でもかなったら六左衛門、泣いちゃうかしら。」

カタリナは、いたずらっぽく笑う。カタリナは、まるで子どもだ。神様と仲良く遊んでいる子どもだ。

カタリナ

「マグダレナは六左衛門に、『好きです！』『良い妻になれます！』っていう二つのことを、おりあるごとに示していくのよ。いい？」

マグダレナ

「どんたふうにしてよ？」

(どんなふうにして?)

カタリナ

「そうね。食事をつくったり、せんたくしたり、さいほうしたり、女仕事をするときに示すの。」

マグダレナ

「うん、やってみるな。」

(うん。やってみるわ。)

マグダレナは、新しい課題をカタリナに与えてもらって、やっとおちついたようだ。そこへ、六左衛門がやってきた。

六左衛門

「やー、カタリナ、久しぶり。なんだ、マグダレナここに来てたのか。どうしたんだい。だまっ
ていなくなって。」

マグダレナ

「なんでもねー。ロクザエモンがきたごど、マリアのかあさんさ、おしえにいつてきたんだ。」

(何でもないの。六左衛門が来たことをマリアのかあさんに知らせにきたの。)

六左衛門

「ああ、そうか、ちょっと心配しちゃったよ。」

カタリナが、六左衛門とハグする。だまって、しばらくだきしめながら、心の中でさっそく
祈る。(神様。六左衛門がマグダレナと結婚する気になりますように。二人が結婚しますよ
うに。)

カタリナ

「どうかおねがい。」

六左衛門

「え、何がどうかお願いなんだい？」

カタリナ

「きゃー。ひとりごとなの。」

カタリナは、マグダレナに目で合図する。いたずらっぽい顔だ。マグダレナもうれしそうな顔
でうなづく。

マグダレナ

「おら、ばんげのまんまつぐりにけるべった。ロクザエモン、おら、うんめーごつつうおつぐる
がらね。あごおじねよに、きよつけれな。」

(私、夕ごはんつくりに戻るね。六左衛門、私、おいしいごちそうつくるからね。あごが落ちこ
ちないように気をつけてね。)

マグダレナのうしろ姿を見送る六左衛門の顔を、カタリナは見ている。そして、(やっぱり六
左衛門は、マグダレナが好きなんだわ。顔にちゃんとそう書いてあるもの)と、自分の意見に自

信を深める。

六左衛門

「カタリナ。ぼくは、これから藤兵衛さんの家に住んで、そこから、あちこち伝道の旅にでるんだよ。」

カタリナ

「うん。今、マグダレナから聞いたわ。うれしいわ。さあ、家にあがってよ。お茶のみながら話しましょう。話すことが山ほどあるのよ。」

家には、おなかの大きな八重だけがいる。六左衛門が来たのに気づいていて、もうお茶を準備してくれていた。八重も六左衛門にだきつく。

八重

「あやーロクザエモン、ひさしぶりだな。」

(六左衛門、久しぶりね。)

六左衛門

「久しぶりだね、八重、かわりはないかい。」

八重

「かわったごどあるんし。」

(変わりはあるわ。)

六左衛門

「えー。どうしたの？」

八重

「おら、はらさこどもでぎだの。」

(私、おなかに子どもができたのよ。)

六左衛門

「本当。やー、おめでとう、八重。そして、カタリナも。初孫だね。カタリナとシストにとっては。」

六左衛門は、カタリナをふりむく。

六左衛門

「あ、そうそう。忘れないうちに今日の大事な用件を話しておかなきゃ。カタリナの話しがはじまるまえにね。」

六左衛門はすわって、お茶を一口すするときりだす。

六左衛門

「さっそく伝道旅行の話しなんだけど。昌寿院(しょうじゅいん)のところにも行くから、カタリナとシストをそこに連れていきたいんだ。シストが都合がいい日にいっしょに行こう。」

カタリナが、目をかがやかしてうなづく。

カタリナ

「行く行く。シストも私も、昌寿院ていう人に会ってみたいって思ってたのよ。六左衛門ありが

とう。」

こうして話しは決まった。

カタリナからはキリシタン追放令によって、全国の鉱山で院内銀山一ヶ所だけが迫害され、ペトロ人見が山奉行職をはくだつされ、出羽の国を追放されたことと、山奉行ペトロ梅津が銀山の他のキリシタンを迫害しないという条件でキリシタンの信仰を捨てる誓約したことまで、11ヶ月の間に起こったことを6カ月分話したが、晩ごはんのために六左衛門が帰る時間がきた。

六左衛門

「じゃ、また、今度ね。ところで、あの子安観音はマリアママとイエズスかい？」

カタリナ

「きゃー。忘れてた。そうよ。マリアママとイエズスよ。また、今度、このことを話すわ。またね。」

何日かたった。六左衛門とシストとカタリナは今、昌寿院の家の中に座っている。侍女が、お茶を出している。昌寿院は、いない。外出中だったのだ。

侍女

「昌寿院さまは、もうそろそろお帰りになると思います。よく十一面観音のお社に祈りにいかれるのですが、今日もそこに行ってらっしゃるのです。」

六左衛門もシストもカタリナもびっくりしている。シストが六左衛門にきく。

シスト

「六左衛門。ここに木彫りの観音像がおかれているけど、十一面観音って何だい。」

この木彫りの観音像は立像で、子どもはだいていない。

六左衛門

「この木彫りの観音像は、シスト家の子安観音と同じで、マリアママだよ。十一面観音のことはよく知らないなあ。」

シストとカタリナは、まるで尼寺のようなこの家、そして仏だんそっくりにかざられた木彫りの観音像とか、はじめてなので、とても不思議な気がしている。

侍女

「あっ。昌寿院さまが帰られたようですわ。」

侍女が急いで部屋を出て玄関に向かう。

カタリナ

「どんな人かなあ。たのしみだわ。」

シスト

「うん。かわいそうな生い立ちのおひめさま……」

昌寿院が入ってきた。シストとカタリナの思い描いていた「おひめさま」ではない。墨染めの衣に白い頭きん。どこから見ても尼さんそのものだ。若々しい、美しい声がひびく。

昌寿院

「ああ、イエズス、マリアママありがとう！ また、六左衛門に会えるなんて！」

昌寿院は、以前は「六左衛門さま」と言っていたが、今はもう「六左衛門」と言い、六左衛門も「昌寿院」と親しく呼んでいる。シストとカタリナは、昌寿院の姿に似合わないよろこびようと、そして子どものように「ああイエズス、マリアママ、ありがとう！」という言葉に目を丸くしている。

六左衛門

「昌寿院、突然やってきたけど、昌寿院が会いたがってたカタリナとシストを連れてきてあげたんだよ。」

昌寿院

「えー。カタリナとシストなの。まーうれしい。カタリナとシストは私の心の友で先生なのよ。」

昌寿院がカタリナとシストにこういうものだから、カタリナとシストは面食らって言葉もでない。シストの頭は混乱してしまっている。その混乱をおさめるために、あいさつも忘れて昌寿院に質問する。

シスト

「あの、昌寿院って呼んでいい？」

昌寿院

「ええ、もちろん。私も、もうシスト、カタリナって言っているんですもの。」

シスト

「昌寿院はクリシタンだよ。仏教徒じゃないよね。」

昌寿院

「ええ、そうよ。」

昌寿院は笑い出してしまった。でもシストは念をおす。

シスト

「クリシタンをやめたわけじゃなくて、今でもクリシタンだよ。」

昌寿院の笑いは止まらないし、六左衛門もふきだした。

昌寿院

「今でもクリシタンよ。クリシタンの名にあたいしないとは思うけど。」

シストが真顔で質問するので、よけいおかしくって、昌寿院と六左衛門が大笑いする。別の部屋にいてこのやり取りが聞こえてきた侍女たちが、たまらなくなるととうとう吹きだして笑いはじめた。それでもシストは質問をつづける。カタリナも興味しんしんだ。

シスト

「昌寿院が今でもクリシタンだっていうことを、まわりの人は知っているの？」

昌寿院

「ええ。知っているわよ。みんな知ってて知らんぷりしてくれているの。私がクリシタンをやめないから佐竹の殿から離縁されたって、こんな有名な話し、ここらあたりで知らない人いないわ。」

シスト

「この2月に、院内銀山奉行のペトロ人見さまが追放され、ペトロ梅津さまがキリシタンをやめたときはどうだった？ 迫害は何かあった？」

もうみんなの笑いはおさまった。昌寿院は、ほほえみながら答える。

昌寿院

「何にも。」

シスト

「まわりが冷たくなるっていうようなことも、まったくなかったの？」

昌寿院

「なかったわ。実はね……。佐竹の殿は、今でも参勤交代の行き帰りの度に、私をみまってくれるのよ。おしのびでね。」

シスト

「えー。本当に？」

昌寿院は笑顔でうなづく。

昌寿院

「佐竹の殿は、キリシタンを憎んでいるのでも、恐れているのでもなくって、ただただキリシタンを憎んでいる徳川家をおそれているの。」

シスト

「ふーん。」

シストは少しだまって考えている。

シスト

「昌寿院、お寺によくいくの？」

昌寿院

「ええ。私、十一面観音が好きで、よくいくのよ。」

シスト

「お坊さんたちとはつきあうの？」

昌寿院

「ええ。自然につきあってるわ。でもお坊さんたちもみんな、私がキリシタンだって知っているから、そっとしておいてくれるわ。」

シスト

「ふーん。」

シストが、また考えはじめて、少しだまると、カタリナがかわいらしい口調で聞く。

カタリナ

「昌寿院、十一面観音でどんな観音なの。どうして好きなの？」

昌寿院

「十一面観音はね、女の人の姿をしていてね。頭をぐるりととりかこんで10個の小さい顔があつてね、頭のとっぺんにもう一個小さい顔が前を向いてついているの。」

カタリナは見たことがない十一面観音像を、聞いたとおりに想像してみよう。

カタリナ

「化け物みたいで気持ち悪いんだけど……。どうして、そんな像が好きなの？」

カタリナのすなおな表現に、昌寿院は笑う。

昌寿院

「カタリナって正直ね。私ね、十一面観音を、マリアママと赤ちゃんの姿の天使たちになぞらえているの。」

ニコニコしながら、じっと聞いてた六左衛門が、手をうって口をはさむ。

六左衛門

「あー。ケルビムだね。なーるほど。」

昌寿院

「そう。ケルビムちゃんたちなの。マリアママの頭のまわりを飛び回っているケルビムちゃんたちよ。」

六左衛門

「シストとカタリナも知っているはずだよ。ほら、有馬のセミナリオで、柱の飾りについてた天使だよ。子どもの顔で、あとは首の位置に小さなかわいいつばさが二枚あるだけ。おぼえてるだろう。柱頭をぐるっととりかこんでついてたやつだよ。カタリナはぼくに『あれなあに？』って聞いたことあるよ。」

カタリナ

「あっ、思い出した。すごくよく覚えているわ。私、首から下はどうしたのって聞いたっけ。」

六左衛門

「頭と顔だけの天使なんておかしいって、とうとう最期まで納得しなかったよね。」

カタリナ

「うん。」

皆が、また笑う。そして、楽しい会話が続く。



(秋田県横手市春光寺安置されている岩瀬御台のマリア観音)

シストとカタリナと六左衛門は、昌寿院の家を出て、街道に向かって歩いている。街道に出ると、六左衛門は久保田に向かい、シストとカタリナは寺沢に帰る。逆方向に向かうので、そこでお別れだ。

シスト

「六左衛門、迫害はこれからどうなると思う？」

六左衛門

「うん。徳川家は、天領で代官を用いて行なったことを、諸藩にも行なわせるにちがいないって思っているよ。つまり、領民全員を調べあげて、一人残らずキリシタンを名簿に記入し、それから、あらゆる方法で信仰を捨てさせる。つまり、ころばせる。ころばないものは殺す……」

シスト

「キリシタンを一人残らず根絶しようと、徳川家は決めているのかい？」

六左衛門

「家康と秀忠は、自分の後継者たちのために、キリシタンの根絶に手をつけたんだ。徳川家が続くかぎり、これは続くだろうね。家康と秀忠の念願は、彼らの家系が続くこと、そればかりなんだよ。

そして、その最大の障害がキリシタンだとみなしているんだ。そうだよ、シスト、徳川家はキリシタンを一人残らず根絶しようと、もう決めているよ。これから徳川家の支配力が増せば増すほど、迫害はてって去的になっていくだろうね。」

シスト

「そうか。やっぱりな。」

シストは、そうつぶやくとだまって歩く。街道に出た。シストとカタリナは六左衛門とわかれ、寺沢に向けて歩き出す。今晚は湯沢で宿をとる予定だ。

カタリナ

「ああ、きれいだよ。」

だんだん暮れていく空、右ななめ前に見える鳥海山、カタリナは美しさに感激しながらつぶやく。横手から寺沢までは、愛する夫、シストと二人だけで歩く旅だ。そして今晚は、シストと二人だけで湯沢の宿にとまる。シストは何かを一生懸命に考えながらだまって歩いているから、じゃましないように話しかけはしないが、カタリナはシストの横顔を笑顔で見る。

シスト

「ぶー。」

その時、突然シストが吹き出して笑顔になる。

カタリナ

「あら、シスト、どうしたの？」

シスト

「うん。すっごくおもしろい、いたずらを考えついたんだ。」

カタリナ

「えー。いたずらを考えたの？」

シスト

「うん。困るだろうな……。アハハハハ……」

カタリナ

「いったい誰を困らせるつもり？」

シスト

「家康と秀忠と、その後継者たち全員。」

カタリナ

「えー。どんないたずら？」

シスト

「今日の昌寿院みたいにね。キリシタンのみんながみんな、どこから見ても仏教徒に見えるように偽装してね。そしてね、迫害されたら、江戸のキリシタンにみたいに、さっさと『ころびます』ってころび証文を出しちゃうんだ。そしたら、やつら、それ以上どうやって迫害できる？」

」

カタリナ

「わー、おもしろい。それって昌寿院みたいに、まわりの人はみんなそのこと知ってるのにやるのね。」

シスト

「そう、そのとおり。おもしろいだろう。」

カタリナ

「うん。みんなで、キリシタンらしくないふうにするって、とってもおもしろそう。周りの人は知っているっていうのに。」

シスト

「そして、この方法できっとぼくの夢がかなうよ。いつかぼくたちの血を継ぐものが、キリシタンとして愛する祖国、高麗のために働いてくれるっていう夢。キリシタンを根絶されてしまったら、この夢はかなわないからね。」

カタリナ

「私、ワクワクしてきたわ。いたずらって大好き。シスト、私もシストと同じ夢をもう描いているのよ。」

シストとカタリナは、急に元気がみなぎってきた。

湯沢の宿の一室に二人はいる。食事が終わりくつろいでいる。

シスト

「カタリナ、このあたりの人達をどうおもう？」

カタリナ

「私、大好きよ。うーん。めずらしいものが本当に好きみたい。そして、興味があるっていうことを全然かくさないわ。すぐにいろいろきいてくるもの。それでいて、相手の自由をそくばくしないわ。やさしく見守っているって感じ。ここの人たち自身がとても自由に考えて、はなして、ふるまってるわ。だからきっと他の人の自由もおおらかに認めるのね。うん、おおらかでやさしいわ。」

シスト

「めずらしいもの好きって言えているね。それと、お祭りが大好きで、一年中毎月お祭りをやってるよね。いろんな神様が大好きで、一人ひとりの神様のために、全部お祭りをするからだよ。本当にかわってるよね。それから、人なつこくて、あけっぴろげで、おしゃべり好きで、ぶっきらぼうで、とってもあかるいなあ。人生を楽しんでいるよね。」

カタリナ

「ええ。このあたりの人達って、自分たちとちがうよその人にすごく興味をもって、そのちがいをおもしろがって楽しんでいるわ。よそものを歓迎するって感じあるわよね。私、寺沢に来て、地元の人があんまりすんなりと受け入れてくれるんでびっくりしてるの。」

シスト

「六左衛門が、このあたりの人たちは、スペイン人やポルトガル人みたいだって言っていたのを覚えているかい。」

カタリナ

「ルイスは、ここに来た時、この宿屋でマグダレナの話しを聞いててね。ここの人たちは日本人じゃないみたいだって言ったのよ。」

シスト

「へー。この宿屋で。ぼくがいないところでだね。」

カタリナ

「シストは別の部屋で、翌日からの打ち合わせをしてたのよ。」

シスト

「そして、ルイスは、日本人じゃないみたいなの、このあたりの人が入って、八重と結婚したってわけだ。」

二人は、ゆかいそうに笑う。

シスト

「ぼくも、ルイスが入った（日本人じゃないみたいなのこのあたりの人）がとっても気に入っているんだ。」

実はね、カタリナ、今、ぼくはこう考えはじめているんだ。神様が石見からここにぼくたちをこさせたのは、日本人じゃないみたいなこのあたりの人たちの中でしか実現できない神のご計画があるんじゃないかって。」

二人は、夜がふけるのも忘れて楽しく語りあう。

横手から帰ったシストとカタリナは、林の親分とおかみのところへおしかけた。

林の親分

「ほ一。かくれね一で、堂々と偽装して仏教徒のふりをするって一のかい。」

林の親分とおかみが目を丸くしている。

シスト

「うん。そうなんだ。」

林の親分

「そりゃーすっげー笑えるいたずらだな、まったく。そうして、キリシタンを根絶しようとする家康や秀忠の鼻をあかしてよ一、代々キリシタンが続いてゆけば、愉快、痛快って一もんだよな。おれはのったぜ。」

林のおかみ

「かくれないで、堂々としてというのがいいよね。先生の奥さん。先生は良くそんなことを考えつくもんだね一。」

林の親分

「おれたちは、まだ仏教徒を偽装もしてね一し、ここの役人にころび証文もだしてね一けどよ一。寺沢金山と院内銀山はキリシタンだらけだって一ことは、地役人（じやくにん）から佐竹の殿まで、出羽の国の役人はみんな知ってるよな……。」

それでいて、佐竹の殿の方からもちかけた取り引きで、ペトロ梅津さまが一人キリシタンをやめて、あとは目をつぶってもらってるわけだから、ここだけはすでに、かくれないで堂々と潜伏してる状態だよな……。」

みんながみんな知ってて知らんぷりをしてくれてるんだもんな……。神の敵になりやがった徳川家に打ち勝って、キリシタンを代々ついでいく……か。」

林の親分の分析力あふれる話に、みな聞きいつている。林の親分は先を読む力がある。しかも、具体的にイメージしてつかみとるのだ、今も彼は、それを頭の中でおこないはじめている。

林の親分

「シスト先生、全国の鉱山にいよいよ迫害がかけられて、世間と同じようにとりしらべられる時になったらよ、鉱山には代々キリシタンをつぐのに不利な点もあるぜ。」

て一いうのは、もともとほり子たちは早死にするからよ、結婚しね一んだ。だから子孫になにかを継いでゆかせようっていう気持ちがまったくね一。

それから、たいてえの鉱山は数十年でほりつくして閉じてしまう。そして、そこにはひとっこ一人いなくなる。このあたりの（日本人じゃないみたいな人たち）が、いくらすばらしくたって、寺沢金山や院内銀山が何十年もつかは誰もわからね一。そしたらほり子は、みんなバラバラになって、よその鉱山にながれていって、あとには何ものこらね一……。」

そうよな……。うち親にゆるしをもらって、ほり子をやめて百姓になりゃ一このあたりに残れるってこともあるな一。」

シスト

「林の親分、ありがとう。とてもためになったよ。今のはなし。」

林のおかみが立ち上がり、お茶やつけもののおかわりをもってくる。

カタリナ

「あの一、林の親分、おかみさん、もうひとついたずらがあるんだけど……。六左衛門は、まだ伝道旅行から当分帰らないと思うけど……。マグダレナがね、六左衛門と結婚したい思いがつのって、とても苦しんでるの。」

林のおかみ

「それで、それで？」

林のおかみは、身を乗り出した。

カタリナ

「私は、六左衛門もマグダレナが好きだと思うの……。」

林のおかみ

「そりゃーそうよ。私だってわかるわ、女のかんで。六左衛門はマグダレナを愛してるわよ。間違いないわ。」

林の親分

「何でそんなことがわかるんだ。おい？」

林のおかみ

「女のかんはするどいのよ。六左衛門が、マグダレナをじゃまっけにしたり、興味ないってふりしたり、子ども扱いしたりする、あのやり方よ。」

自信たっぷりの林のおかみに、林の親分は返すことばもない。

林のおかみ

「それで、そのいたずらっていうのは？」

カタリナ

「六左衛門には、ひとことも言わずに、六左衛門とマグダレナに親しい人たちが、神さまに祈るの。六左衛門が、マグダレナと結婚する気になりますように。二人が結婚しますようになって。」

林のおかみ

「私、のった！」

林の親分

「ワッハッハ。おれもだ！」

数日後、シストとカタリナは、今度は寺沢藤兵衛の家にきている。寺沢太郎右衛門もよばれている。六左衛門は、まだ伝道旅行から帰ってきていない。マグダレナは、カタリナのよこに来てすわっている。シストのいたずらの計画を、目を輝かせながら聞いている。

藤兵衛

「んだんすか。林の親分がいうとおりなだば、おらだじひやくしよどほりごだどはしえはんでいだな。」

(そうですか。林の親分のいうとおりだったら、私たち百姓とほり子たちとは正反対ですね。)

太郎右衛門もとなりで大きくうなずいている。

太郎右衛門

「んだ。んだ。おらだひやくしよだば、ご先祖さまがらうげついだものだば全部、たいせづにしてよ、それひぎついで、子どもどがまごどがさ、みんなつたえようっていっしよけんめいだがらなあ。」

(そうだ、そうだ。私たち百姓は、ご先祖さまから受けついだものは、全部大切にして、それをひぎついで子や孫に全部つたえようって一生懸命だからな。)

藤兵衛

「シストせんしえ、かぐれねで、どうどうと仏教徒に偽装するっていう、いだづらだば、やってみる価値(あでい)が大いにあるべ。おらもこのあたりでは、うまぐいぐど思います。いいひどだじだ、おもしろひどだじだ。いねよりいだほうがつっとたのしいって、大事にしてくれるんでしょね。」

(シスト先生、かぐれないで、堂々と仏教徒に偽装っていういたずらは、ためしてみる価値が大いにありますよ。私もこのあたりでは、うまくいくと思いますよ。いい人たちだ。おもしろい人たちだ。いねよりいた方が、ずっと楽しいって、大事にしてくれてるでしょうね。)

太郎右衛門

「んだ。んだ。なんとが、やってみるべ。なんにもわりごどしねひやくしよらが、役人だがらいじめられで、おもしろえやりがだで、じょんぶに生きでいだら、このあたりの百姓だったら、心のながで、応援してくれづべをん。むしろ、あつたかく助けてけるべをん。とにかぐ結果、気にしねでためしてみるべ。」

(そうだ、そうだ。ぜひ、やってみましょう。なんにも悪いことをしない百姓たちが、役人たちからいじめられていて、おもしろいやり方で、たくましく生きていたら、このあたりの百姓だったら、心の中で、応援してくれますよ。むしろ、あつたかくたすけてくれますよ。とにかぐ、結果を気にせずためしてみましょう。)

藤兵衛

「んだ。んだ。まずやってみるってごどが大事だな。せいっぺやってみれば、道っこひらぐべをん。ためしてみで、だめだったとしても、ためしてみるごどを楽しめば、おもしろがったって、神様さ感謝できるんだがら、何もそんしねな。」

（そうだ、そうだ。まず、やってみるっていうことが大切です。せいっぱいやってみたら道が開けますよ。ためしてみてもだめだったとしても、ためしてみることを楽しめば、おもしろかったって、神様に感謝できるんですから、何にもそんしません。）

太郎右衛門

「ただがいは、あいでがつえければつえほど、ただがいじでいがおもしろえわけだよ、家康と秀忠ど徳川家だったら、日本一強い相手だがら、おもしろえて、おもしろえて、しかだねな。神様のために、おもしろえごどでぎるなんてまったくありがで話した、わっはっはっは。」

（戦いは相手が強ければ、強いほど、戦い自体がおもしろいわけで、家康と秀忠と徳川家だったら、日本一強い相手だから、楽しくって楽しくってしょうがないってところだな。神様のために楽しめるなんてまったくありがたい話した。わっはっはっは。）

藤兵衛

「わっはっは」

マグダレナ

「あっははははは。」

豪快、陽気、楽天的、そしてチャレンジ精神にみちた（このあたりの人）にシストとカタリナはあっけにとられて、顔と顔をみあわせる。

カタリナ

「ここは、本当に日本なの。シスト。」

シスト

「たしかにパードレたちを思い出しちゃうね。カタリナ。」

笑いやんだ藤兵衛が、男らしい真剣な重さできりだす。

藤兵衛

「シストせんしえ、関ヶ原のただがいのあと、それまでなんびゃぐねんものこのあたり一帯を支配して、小野寺家が滅んでけでしまったけれど、ひゃくしょだぢはかわらねで、このとじさいぎです。徳川家だって必ずいつがほろびるべっ、したけどかわらねでひゃくしょはこのとじさいぎつづけるはずだ。」

（シスト先生、関ヶ原の戦いのあと、それまで何百年もこのあたり一帯を支配していた、小野寺家が滅んで消えました。けれども、百姓たちは変わらずこの土地に生きています。徳川家だって必ずいつか滅びます。しかし、変わらず百姓は、この土地に生きつづけるはずです。）

皆、真剣になって、藤兵衛の話しに耳をかたむける。

藤兵衛

「これよ、ひゃくしょの強さは、とじさねっこはやがしてるなだもの。ただな、そうして生きつづけるひゃくしょが、とじ守るのはちがってよ、目にみえねもののクリシタンの教えをよ、何百年も代々ついでいげるがどうかは、おらは、結婚が鍵だと思っんです。つまり、クリシタン同士が必ず結婚して、クリシタンの家同士がしんせぎになって、クリシタンだぢがあだらしい血族をつぐっていくなしえ。」

（これが土地に根っこをはやした百姓の強さです。ただ、そうして生きつづける百姓が土地を守

るのとはちがって、目には見えないものであるキリシタンの教えを何百年も代々ついでゆけるかどうかは、私は結婚が鍵だと思うんです。つまりですね、キリシタン同士が必ず結婚し、キリシタンの家同士が親戚になり、キリシタンたちが新しい血族をつくるんです。)

カタリナは、となりにすわっているマグダレナが「結婚」という言葉に、ビクッと反応したのに気がついた。「キリシタン同士が必ず結婚し…」と父の藤兵衛が続けると、マグダレナは胸に両手をあて、せつなそうな目をしてカタリナの方を向く。カタリナはすばやく小声でマグダレナに聞く。

カタリナ

「まだ、何もお父さんに話していないの？」

マグダレナ

「なんも、まだはなしてね……」

(何もまだ話してない……)

カタリナ

「私にまかせて。」

マグダレナがうなづく。

カタリナ

「あの一。藤兵衛さん。キリシタン同士が必ず結婚することが鍵だって、私もそう思うの。そのとおりだわ。生まれてくる子どもにとっても絶対それが必要だわ。おとうさんとおかあさんがキリシタンで、そのうえ、二人いるおじいちゃんも二人いるおばあちゃんも、おじさんたちもおばさんたちも、みんなキリシタンだったら、その子は自然とパードレたちみたいにすばらしいキリシタンになるって思うの。」

シスト

「ほ一。すごいね。カタリナ。」

シストだけでなく、カタリナの意見に皆が感心している。特に、自分の意見が別の観点から熱烈に支持されて藤兵衛はにこにこしている。

カタリナ

「わ一ありがとう、シスト。特に、おとうさんは家族の長で、その家の宗教の面でも柱だから、キリシタンの娘にとって、できるだけ信仰深い立派なキリシタンの男の人と結婚することが、とっても大事だと思うの。」

シストのすごく大きないたずらとはちがうけど、私もちっちゃないたずらを思いついたのよ。藤兵衛さん、太郎右衛門さん、シスト家と林の親分とおかみさんとでもういたずらしちゃってるんだけど、『六左衛門とマグダレナが結婚しますように』って、六左衛門には内緒で神様に祈っているの。おねがい、いっしょに祈って。」

カタリナはいたずらっぽく藤兵衛と太郎右衛門にほほえみかける。藤兵衛と太郎右衛門は、マグダレナをだまってみつめる二人の眼差しには愛情があふれている。マグダレナは苦しそうに、せつなそうに二人を見つつ、返事をまつ。

藤兵衛

「おめが、六左衛門さんと結婚したくてたまらねのは、寺沢のひゃくしょら、みんなわがって

らよ。今、この村で、皆、いちばん興味もって、おもしろがって話してるのは、マグダレナの恋が実るが実らねが、このことだ。」

(おまえが、六左衛門さんと結婚したくてたまらないのは、寺沢の百姓たちはみんなわかってるよ。今、この村で皆が一番興味もって、おもしろがって話してるのは、マグダレナの恋が実るか実らないか、このことだよ。)

マグダレナ

「やんだ———っ。うそだべー。おら、村の人さそなた話したごど一度もねもん。」

(やだー。うそでしょ。私、村の人にそんな話したこと一度もないわ)

太郎右衛門

「うそでね。村中がおめの恋に興味しんしんだなだ。結婚できるがでぎねがで、かげしておもしろがってる人もいるなだ。おら思うによ、村中の誰も、おめの応援してるなしゃ。大びゃくしよのお嬢さんの長年のおもいが、かなって幸せになってもらいでなって」

(うそじゃないよ。村中がおまえの恋に興味しんしんだよ。結婚できるかできないかでかけをして楽しんでるやつらもいるよ。おれが思うに、村中の誰もがおまえを応援しているな。大百姓のおじょうさんの長年の想いがかなってしあわせになってほしって)

藤兵衛

「んだな、村のひゃくしよみんな、おめど六左衛門が結婚できるようになって思ってるよ。まちげねな一。」

(そうだよ。村の百姓はみんな、おまえと六左衛門が結婚できるようになって思っているよ。まちがないな。)

マグダレナ

「したけど、おら、そなたごど何もしらね。」

(だけど、私、そんなこと何もしらないわ。)

太郎右衛門

「しらねのは、おめだけだ。マグダレナ。わっはっはっは。」

(知らないのはおまえだけだよマグダレナ、わっはっはっは。)

「マグダレナの雪のようにま白い、きれいだ顔だば、さっきあおざめでいだのに、今、りんごこみでたく、まっかっかになってる。湯気までたちのぼりそだ。」

(マグダレナの雪のように真っ白い美しい顔は、さっき青ざめていたのに、今、りんごのように、まっかっかになっている。湯気までたちのぼりそうだ。)

藤兵衛

「マグダレナ。父さんも、祈ってるがら、おもいっきて勝負してみれ。敵はてごえ。なんたってしじゅうしまで、神さまのために独り身をつらぬいできた人だがら、勝ち負けにこだわるな。勝負じでいを楽しめ、かだのちからっこぬいでしゃ、気楽に遊ぶみでにやるなだ。あとで、後悔しねよにおもいきってやれ。」

(マグダレナ、お父さんも祈ってやるから、おもいきり勝負してみろ。敵はてごわいぞ。何しろ44才まで、神のために独身をつらぬいてきた人だ。勝ち負けにこだわるな。勝負自体を楽しめ

。肩の力をぬいて気楽に遊ぶみたいにするんだよ。あとで、後悔しないように思いきってやるんだよ。)

マグダレナは、燃える目をして、大きくうなずきながら聞いている。

太郎右衛門

「んだ。マグダレナ。じっぱりやれ。どうどうと、かがっていげ。それでまげたら、わも、みんなも、なっとぐするべった。おじさんもよ、いのってるがら、やってみれ。」

(そうだよ。マグダレナ、大いにやれ。堂々といどんでいって、それで負けたら、自分もみんなも納得する。おじさんも祈ってやるからなっやってみろ。)

マグダレナ

「うん、とうさん、おじさん、大好きだよ。おら、いのちがけで、どうどうと、かがっていぐがら。」

(うん、お父さん、おじさん、大好きよ。私、いのちがけで、堂々といどんでいくわ。)

藤兵衛と太郎右衛門が笑顔でうなずいている、シストとカタリナは不思議なものを見るかのようなおももちで、この会話を聞いていたが、(このあたりの日本人じゃないみたいの人たち)に、さらに驚いてしまっている。シストがささやく。

シスト

「カタリナ。なんて積極的で、前向きで、さっぱりして、こだわらないんだろうね、このあたりの方は。」

カタリナ

「うん、シスト、私、このあたりの人って、愛情と勇気にあふれてるって思う。」

シスト

「そうだね。それに正直だし、あけっぴろげだし、ぼくは大好きだ。」

カタリナ

「私もよ。」

寺沢村に住んで、初めての伝道旅行から六左衛門が帰ってきた。シスト家にさっそくたずねてきてくれた。シスト一家と六左衛門の楽しい晩御飯が終わったところだ。シストは、六左衛門を送ってゆこうと外に出て歩きだした。

シスト

「ところで六左衛門、ちょっと聞きたいんだけど。」

六左衛門

「なんだいシスト？」

シスト

「よそから、流れてきたクリシタンの百姓にどうやって出会うんだい。」

六左衛門

「ぼくにとっては、何もむつかしくないんだよ。ぼくはイエズス会の同宿だからね。まず、村々に歩いていこう。そこで誰かに聞くんだ。『よそから来て住み着いた百姓がいますか？』ってね。いたら絶対に教えてくれる。とっても親切にね。それで会いに行き、「ぼくはイエズス会の同宿です」って名のるんだ。その人が、クリシタンだったら大喜びして、むかえてくれるんだ。」

シスト

「そんなに、かんたんなんだ……。新田開発をしているクリシタンもふえているんだろう。」

六左衛門

「うん。出羽の国は米作りに向いていて、しかも、新しく開墾できる場所がいくらでもあって、そのうえ久保田藩が新田開発しに、よそから百姓がくるのを望んでいるって聞いて、やってきているんだ。今のところ出羽の国は迫害がないからね。よそで迫害が強まれば強まるほど、流れ込んでくるクリシタンの百姓は増えていくはずだよ。」

シストは、ゆっくりと何度もうなずきながら聞いている。そして、つぶやく。

シスト

「そうか……。六左衛門といっしょにまわればかんたんだな……。」

六左衛門

「えっ。何だい。」

シスト

「あはは。ぼくは今、すごいいたずらの計画をねってるんだ。」

六左衛門

「えー。いたずらだって？」

シスト

「うん。徳川家にクリシタンを根絶されないためのいたずらだよ。昌寿院と初めて会って、その帰り道で突然、思いついたんだ。」

そうやってシストは六左衛門に説明をはじめ。林の親分の意見と寺沢藤兵衛の意見も教える

。

シスト

「どう思う。六左衛門？」

六左衛門

「ぶったまげた……。よくもそんな大胆なことを思いついたもんだね……。支配者から禁じられ、迫害され、弾圧されるキリシタンを、何代にも何代にもわたって住民全員が役人ぐるみでかばうなんて……。聞いたことがないよ。

たぶんおこったためしがないはずだよ、世界中のどこにも、今まで。前代未聞っていうやつだ

。

しかし、そういえば、ならずものの地下教会も前代未聞だし、そのならずものの地下教会が、品行方正のキリシタンたちを迫害から助けたっていうのも前代未聞だし……。

シストが思いつくことは、前代未聞の神のご計画っていうことが続いてきているからな……。今回もぼくはシストを信頼するよ。」

シストはニコっとほほえむ。

シスト

「うれしいよ。ありがとう。ぼくはよく祈って、考えて、やるべきことをもっとはっきりとつかまなければならぬんだ。まだ時間がかかるかもしれないけど。じゃ、おやすみ。」

ここで、シストは六左衛門と別れ、家に引き返す。

1614年の9月になった。シストは寺沢藤兵衛の屋敷で戦略会議を開いた。シストは、これからやるべきことをはっきりとつかったのだ。彼は、家康や秀忠やその後継者にキリシタンを根絶されないために、何年にもわたる準備が必要だということがわかった。

シストに呼ばれたのは、寺沢藤兵衛とマグダレナ、六左衛門、寺沢太郎右衛門、林の親分とおかみ、ヨアキム近江とエリザベータ近江夫妻、そしてもちろんカタリナ。寺沢に住んでいる10人が集まった。シストの話しがはじまっている。

シスト

「……久保田藩は収入を増やすために鉱山開発と新田開発を望んでいる。だからペト口梅津さま一人がキリシタンをやめれば、他のキリシタンは迫害しないという取り引きがおこなわれた。ということは、新田開発をするキリシタンたちも迫害したくないはずだ。

もうあちらこちらで、流れてきたキリシタンが開墾にとりかかっている。その人達といっしょになって、キリシタンの部落を作っていくんだ。全部の家、そして全員がキリシタンの新田開発をする部落を、あちらこちらに作っていくんだ。それらの部落同志は連絡を取り合い、キリシタン同志が必ず結婚できるようにする。代々それを続ければ、キリシタンはみな親戚という大きな血族ができる……。」

ヨアキム近江

「なるほど、シスト先生、それは連座制を用いて迫害をかけられても、負けないためですね。よく分かりますよ。私たち夫婦も、となり近所の人から追いたてられて、出ていかされましたから。」

エリザベータ近江

「そう、そう。長年仲良くつきあってきた人たちだったのにね……。そして親戚たちのなかでキリシタンでない人たちがみんな、キリシタンをやめるようになって、私達を説得に来たんですよ。そりゃ一つらかったですよ。血縁のものたちから、どなられたり、なかれたり……。」

ヨアキム近江

「右の五軒と左の五軒の関係ない人たちを、皆、処刑するっていわれたら、そこにはいられませんよ、本当に。」

エリザベータ近江

「キリシタンをやめないと、おまえの親も子も兄弟姉妹も同罪で殺す。親戚は、皆、財産没収のうえ、追放だとかいわれたんですよ……。」

シスト

「みんな。ぼくとカタリナに、江戸や京、堺、伏見、大阪の方から来た人たちが、お礼の手紙をくれたよね。近江夫妻と同じような目にみな合わされているんだ。ぼくたちが、手紙を全部読んで、わかったことは、日本人はね、となり近所の無関係な人たちをいっしょに処刑する、血縁の人間を無関係でも、いっしょに処刑するって制度には、本当に弱くって、負けてしまうってことなんだ。」

これに打ち勝つには、となり近所もすべてキリシタン、血縁もすべてキリシタンという状況を、時間がいくらかかっても、つくりあげていくしかないってということなんだ。」

六左衛門

「シスト、この連座制の本来の目的は、お互いに見張らせ、密告するようにしむけることだよ。キリシタン以外の人がそうするのを、どうやってふせぐんだい？」

シスト

「うん。それに対して手はない。このあたりの人が日本人じゃないみたいで、そんなことをしない人たちだからこそ、神さまはここに、ぼくたちを導いて来させたんだっていう、ぼくの心の中に神が置いてくださった確信があって、それに対して手はないのに、ぼくはこの大いなるいたずらをおっぱじめるんだ。」

六左衛門

「そうか。このあたりの人が、日本人じゃないみたいで、そんなことをしない人たち、ほとんどすべて、ここにかかっているんだね、神の敵である徳川家に、ぼくたちが打ち勝てるかどうかは。」

シストは大きくなずく。

シスト

「そうだよ。だからいっさいかくなれないんだ。このあたりの人がみんな、庄屋から代官にいたるまでみんな、どこそこの部落はキリシタン部落だとか、どこそこの村はキリシタン村だとか知っていて、誰も訴え出ないって、ぼくは信じている。何代にもわたって、何百年にもわたってね。そのうえに、このいたずらはなりたつんだよ。」

ヨアキムとエリザベータ近江夫妻は、げげんな顔をしている。

ヨアキム近江

「ちょっとまってください。いたずらってなんですか？」

エリザベータ近江

「いたずらっていったら、子どものやる悪さですよ。」

ヨアキム近江

「何かおもしろいことなんですか……？」

シスト

「うん。このクリシタン部落やクリシタン村の人たちはね、まわりのみんなからクリシタンだって知られてるのに、仏教徒とそっくりに住んで、ころび証文をだせっていわれたら、さっさとだすんだ。

家康や秀忠やその後継者たちの鼻をあかしてやるんだよ。クリシタンたちは何もびくびくすることはないんだ。だって最初っからまわりの皆が知っているんだもの。こうやって堂々と生きて、天下の支配者の計画をくじいてやるんだ。おもしろいだろう。」

二人は、目を丸くしている。そこでシストは、横手の昌寿院の生き方と、まわりの人たちの対応について語ってきかせた。

ヨアキム近江

「なるほど、シスト先生の話のすじがよくつかめました。いたずらに関しても私は大賛成です。何代にも、何百年にもわたって、あんな迫害をかけられたら……。あのときのことを思い出したら、よっぽどの対抗策をもってなければ、クリシタンは本当にじきに根絶されてしまいます。」

いちばん年寄りで、しかも迫害を直に受けた人の話には、みな真剣に耳をかたむける。

ヨアキム近江

「シスト先生のいたずらがうまくいったとして、クリシタンが何代にも、何百年にもわたって続くためには、もうひとつの鍵があると思うんです。

それは教えを正しく伝えてゆくことです。字が読めない人にも、暗記がにがてな人にも、あったやり方で。本をとりあげられても、聖画も聖像も。それでも、伝えてゆける方法を考える必要がありますよ。」

シスト

「そうだね……。何かいい方法があるかなあ……」

みんな考えこむ。エリザベータ近江は、そんなみんなをみまわして、ちょっとためらっていたが、口をひらく。

エリザベータ近江

「あの……、堂々といたずらするっていうのでしたら、いたずらついでに踊ってしまえば、どうかしらねー。」

みんな

「えー。おどるの？」

エリザベータ近江

「私は、おどりのふりつけができるんです。教えの要点の信仰箇条なんかに、ふりつけするんです。そしてみんなでおどれば、盆踊りみたいで、仏教徒みたいでしょう。どうでしょうかね。」

林の親分が吹き出し、そして大笑いする。

林の親分

「わっはっはっは。いいねえ。近江おどりとでも名づけときゃーはやるぜ、きっと、わっはっは。」

みんなもつられてわらってしまう。しかし、男たちがみんなあんまり豪快に笑うので、カタリナがエリザベータ近江に同情する。

カタリナ

「私、賛成。神さまをたたえて、おどるなんて、すてきだわ。私もやってみたい、楽しそう。」

林のおかみ

「あんた、笑いすぎよ。いい考えじゃないの。おどりだったら、何百年もそのまんま伝わるしさー、ふりがあれば文句も忘れないしさー。」

林の親分

「わっはっは。悪かった、すまねえ、わっはっは。たしかにいい考えだ。うん。おれは、ほり子たちがおどっている姿が、目に浮かんでしまってよー、わっはっは。それが、さまになってねーんだ、わっはっは。」

また、みんなが、つられてわらってしまう。迫害の話で重かった雰囲気、林の親分のおかげで一気に明るくなった。

エリザベータ近江

「私、やってみていいですか？ みなさん、かまいませんか？」

みんな口々に賛成する。

エリザベータ近江

「ああ、よかった。やってみます。」

藤兵衛

「シスト先生らの家のちかぐも、さわっこがあるごころだば、新田をつくれるよ。実はね、寺沢の百姓のながでは、キリシタンになろうって思っているものが、いっぺいるんだもん。その気持ちがかたまっているものさ、声っこかげでみるな。元気のいいわがせさ、心あたりあるんですよ。おらが、家たでてやって、いい米っこがとれるまで支えでやるならば、きっとおうじでくれるどおもいますよ。そしたら、キリシタン部落が、寺沢のながさもできあがるなっす。」

(シスト先生たちの家の近くも、沢があるところは新田をつくれますよ。実はね、寺沢の百姓の中ではキリシタンになろうって思っているものが大勢いるんですよ。その気持ちがかたまっているものに声をかけてみますよ。元気のいい若いものたちに、心あたりがあるんですよ。私が、家をたててやって、いい米がとれるまで、支えてやるなら、きっと応じますよ。そうしたら、キリシタン部落が、寺沢の中にもできあがります。)

太郎右衛門

「だれのごど、かんがえでるなだ？」

(誰のことを考えてるんだい?)

藤兵衛

「かあさんとふたりぐらししてる源五郎(げんごろう)、どそれがら、彌三郎(やさぶろう)、それから四郎兵衛(しろうびょうえ)、それから孫十郎(まごじゅうろう)だよ。源五郎の母さんが食事の世話どが、女仕事どがしてけるがら、ひとり身のわけひとらじは、こまらねべしな。」

(お母さんと二人くらしの源五郎、それから彌三郎、それから四郎兵衛、それから孫十郎だよ。源五郎のお母さんが食事とか、女仕事をしてくれるから、ひとり身の若いものたちは困らないだろうしな。)

太郎右衛門

「それだば、いい。おらもいっしょにすすめでみるべ。今度は、シスト先生だを手伝えるね、おらだもな。」

(そりゃーいい。私もいっしょにすすめてみるよ。今度は、シスト先生を手伝えるねえ、私たちも。)

林の親分

「じゃーおれは、ほり子の中から、もと百姓や、百姓になりたいキリシタンがいるか、しらべりゃーいいってわけだ。寺沢金山のつち親みんなにもそうたんのんどきゃーいいな。院内の方は、三太夫親分に同じようにやってくれるよう、おれからたのんどくぜ。」

シスト

「ありがとう、藤兵衛さん、太郎右衛門さん、林の親分。六左衛門はぼくを連れて、このあたりの村々を歩いてくれないか。」

六左衛門

「おやすいごようだ。クリシタンの百姓に出会いたいんだね。」

シスト

「そうだよ。地元の百姓と、よそから新しくきた百姓と、両方にね。それから新田開発をしてクリシタン部落をつくるのに向いた土地もさがしたいんだ。もうクリシタンが開こんをはじめているところも、そうでないところもね。」

神の敵の徳川家に打ち勝つためのシストの計画を、みんな大まかにつかんだようだ。これから、新しいことをおっはじめるといので、みんな未来に思いをはせて、わくわくしだした。お茶やつけものを味わいながら、しばらくいろいろと話をそれぞれに楽しんで、そろそろおひらきというころあいを見はからって、シストが話をはじめる。

シスト

「みんな聞いてくれ。キリシタンを根絶されないように、神がぼくにこの戦略をさずけているって、ぼくは強く感じているんだ。だからこれはきっと成功する。でも、それと同時にぼくは、ぼくとカタリナは、ころび証文を出さずに、祖国、高麗（こうらい）のために殉教するようになって、神が望んでおられるって、強く感じているんだ。

神が一人一人を導いてくださっている。それで、ころび証文をだす出さないは、それぞれ自由だからね。ころび証文をさっさと出すっていうのは、戦略の柱のひとつなんだけれど、みんなには最初から言っておきたいんだ。

迫害がはじまったら、ぼくとカタリナはころび証文は出さずに、殉教できるようやってみる。どんなおどかしにも、ごうもんにも負けずに、命をささげることができるかどうかは……、ぼくとカタリナは最低最悪の弱い人間だから、わからないけど、神さまがたすけてくださるって信じている。」

カタリナ

「シストと私は高麗のために、何もかもすべてささげつくしたいの。愛する祖国が、いつかイエズスのものになるための、いけにえのささげものとして、自分たちの命をさしだしたいの。」

六左衛門

「シストとカタリナには、それができるかもしれないね。みんな、シストとカタリナは、高麗から日本に連行されてくる時、精練の親方の身代わりをすすんで申し出て、つれてこられたんだよ。キリシタンでない時から、崇高な自己犠牲を実行した二人なんだ。そして、祖国への愛の強さは信じられないほどなんだ。」

林の親分

「その通りなんだぜ、みんな。シスト先生と先生の奥さんは、高麗を秀吉と侵略軍から救うには、これ以外方法はないって、六左衛門からいわれてよー。なんと『秀吉と侵略者の日本人たちをゆるします。愛します、祝福します、救ってやって下さい』って祈りつづけたんだぜ。

一万回殺されるよりもつらい思いをして、祖国のためにそれを実行したんだぜ。一年と九ヶ月もだぜ。おれもシスト先生と先生の奥さんなら、脅迫やごうもんにも負けねーで、殉教できると思うぜ。」

この話は、藤兵衛、太郎右衛門、マグダレナ、ヨアキム近江とエリザベータ近江には、初耳だ。驚きと、自分にはまねできないという賛嘆の気持ちで、五人はシストとカタリナをじっと見つづける。シストもカタリナもはずかしそうに赤くなって、下を向いている。こんな二人が、そんなことができた二人だなんて、ぜんぜん見えない。

カタリナ

「きゃーやめてー。私たち二人は最低最悪よー。ちがうのよ、ただ、シストと私は、高麗をどうしようもないほど愛していて、命をささげたいっていうのは、その愛情表現なの。」

みな、しばらくだまってしまう。林の親分の目に、今のカタリナの言葉で、涙があふれでる。

祖国の中国をはなれた林の親分には、祖国を離れてはじめて、強烈に育つ祖国愛があるということがわかっているのだ。

林の親分

「わかった。おれは納得したぜ。シスト先生と先生の奥さん。おれたちは、ここのキリシタンがころび証文をさっさと出しても、堂々とキリシタンを代々ついでゆける体制を、全力あげてこれからつくっていく。ただし、ころび証文をださないで殉教をめざすのも自由。ふー、自由でよかったぜ。」

林の親分は、シストとカタリナを見て、ニヤツとする。

六左衛門

「ぼくも、このことが自由で、本当によかった。『神により大きな光栄を与えるために、ぼくは絶対に殉教するんだ』って、子どもころからずっと心に決めてやってきた。

ぼくもみんなに前もって言うておくよ。ぼくは、ころび証文は出さない。ごうもんに勝って殉教できるなんていえないけれど、ごうもんされることは、人間としていちばん受け入れたくないものだよ。

神に、より大きな光栄を与えるためには、人間として一番いやなことを受け入れるようにと、イエズス会でぼくは教えられてきたんだ。だから、せめてぼくはごうもんを受ける。ごうもんになんか負けて殉教できなくても、ごうもんをぼくは受ける。だから、ころび証文はださないからね。」

だしぬけにマグダレナが大きな声を出す。

マグダレナ

「おらも、ころび証文ださね！ きめだ！」

(私もころび証文をださない。きめたわ。)

思わず両手のこぶしをにぎりしめているマグダレナ。ところが周りの人は、近江夫妻を別に、皆、ほおがゆるんでニコニコする。近江夫妻は、皆をみまわして感づいた。おくれてニコニコする。

六左衛門

「マグダレナ、なんで今、そんなことをきめるんだい？ 誰かと結婚して、家族でキリシタンを代々ついでゆくことを考えればいいのに……。いい戦略だよ。」

これを聞くとマグダレナは、大きく息を吸い込んで、キッと六左衛門をにらんで、ひとことはっきり言った。

マグダレナ

「神さまさを、もっとたくさんほめたたえることでしょ！ いーっだ！」

(神に、より大きな光栄を与えるためよ！ いーだ！)

六左衛門は困った顔になり、父の藤兵衛とおじの太郎右衛門は遠慮なく大笑いしだした。もう、六左衛門とマグダレナをのぞいて、みな笑いをおさえられない。楽しい笑いの時。しかし、この時、何も宣言しなかったあとの人たち6人の心の中にも、「私もころび証文はだしたくない。殉教したい」という望みがかたまっていたのだ。

こうして戦略会議は終わり、前代未聞のかたちでのキリシタンの戦いが今からはじまる。大将

と女大將は、やはりリストとカタリナ。今度の戦いは、地域的にはせまい。しかし、時間的には、これから260年も続く。そして、勝利おさめて終わるのだ。

実はこれから10年後、この人達は、一人もころび証文を出さず、望みがかなって殉教する。このキリシタンのリーダーたちに、残された時間はあと10年。

そして牢にいる最後の8ヶ月、これまた前代未聞のかたちでの聖母のご出現が、彼ら全員の上におこるのだ。

戦略会議が終わり、シストとカタリナ、林の親分とおかみ、そして近江夫妻が連れだって、寺沢金山の方へ帰っていつている。今、うしろからマグダレナが早足で追いつこうとしている。

マグダレナ

「まってけれ。マリアのとうさん。かあさん。」

(待ってー。マリアの父さん、母さん。)

カタリナ

「あらー。マグダレナ、どうしたの。」

追いついたマグダレナが息をはずませながら話し出す。七人そろってゆっくりと歩きながらだ。

マグダレナ

「ロクザエモンが、おらさ、なに言ったがきいだべ。このごろいつつもあただなもの。」

(六左衛門が、私に何を言ったか聞いたでしょう。このごろいつつもあんなふうなの。)

カタリナ

「えー。」

マグダレナはくやしきのあまり涙をにじませる。

マグダレナ

「おら、ロクザエモンに、いいおくさんになれるってわがらへるためによ、ロクザエモンのために、うんめー料理、いっぺつぐってあげていなしゃえ、服のほごろんだのもつぐろってけで、きれいにせんたくして、部屋も掃除してしえ、死ぬほどいっしょけつめいにやったの、おなごしごどを。マリアの母さんの言ったとおりにやったなへ。」

(私、六左衛門に良い妻になれるってわからせるために、六左衛門のために、おいしい料理をいっばいつくってあげて、服のほころびもつくってあげて、きれいに洗濯して、部屋も掃除して、死ぬほど一生懸命にやったの、女仕事を。マリアの母さんの言ったとおりにやったのよ。)

カタリナ

「まあー。それで。六左衛門は、なんて言うの。ほめてくれないの。」

マグダレナ

「ロクザエモンは、いっぺほめでけるよ。んで、いつつもこんただふうにいうのしえ。はえぐ、いいひどみつけれって。」

(六左衛門はすごくほめるわ。そしていつも言うの。早くいい人を見つけろって。)

マグダレナはわんわん泣きだす。

カタリナ

「あんまりだわ。かわいそうに。傷ついているのね。」

カタリナは立ちどまり、マグダレナを抱きしめる。他の人たちも気の毒そうに集まる。近江夫妻には林のおかみが説明する。六左衛門とマグダレナが結婚するようにと、二人に親しい人々が内緒で祈っていることも打ち明ける。近江夫妻が寄ってくる。

エリザベータ近江

「マグダレナ、まだ失恋したわけじゃないんですよ。そんなに泣かないでね。私たち夫婦も祈りますからね、ね。」

カタリナは、ハグをといて、マグダレナの顔を見つめて言う。

カタリナ

「そうよ。まだまだこれからよ。」

マグダレナ

「マリアの母さん、おら、これがらなんとしえばいいべ。」

(マリアの母さん、私、どうしたらいい。)

カタリナ

「待って、いい考えがあるわ。女仕事をしながら、六左衛門が好きだっていうことを、もっとしっかり伝えるのよ……。たとえば……。ごはんをよそうとき、ゴマで「好き」って書くの。つくろいものや、せんたくものはしっこに、白い糸で「好き」ってぬいとりするの。いい？」

マグダレナ

「うん。おらやってみる。」

(うん、私やってみる。)

こうしてマグダレナは家に帰っていった。

しばらくして、またマグダレナが、シストとカタリナに相談しに来た。マグダレナは、シストが六左衛門の一番の親友なので、シストにも話を聞いてもらいたいのだ。マグダレナが二人に説明している。

マグダレナ

「……おらが、まんまの上さよ、ゴマっこどがいろんただもので「好き」ってかぐど、ロクザエモンはおづげっこがば一っどかげでしえ、ぐっじゃぐじゃじぐしてしえ、ませでくっちゃうなしえ。はりしごどどがせんたくものどが、布っこのはしっこのほさ、いどっこで「好き」ってぬうどしえ、ぜーんぶかだっばしから、しらべで、いどっこはずすなしえ。ロクザエモンがおらさよ、パンのつぐりがだおしえでけだがら、おら、パンで「す」の字ど「き」の字やいで、ロクザエモンさわだしたの、したらよ、「す」の字のパンどご犬っこさかせでしまったのもだをの……」

(……私がごはんの上に、ゴマとかいろんなもので「好き」って書くと、六左衛門はみそ汁をぶっかけてぐちゃぐちゃに混ぜて食べちゃうの。つくろいものや洗濯物の端に糸で「好き」ってぬいとりすると、全部しらべて見つけだしてはずしてるの。六左衛門がパンの作り方を教えてくれたから、私、「す」の字と「き」の字にパンを焼いて渡したの。そしたら「す」の字のパンを犬に食べさせちゃったのよ)

カタリナ

「きゃー、犬に一？ 六左衛門たらー！」

マグダレナは、くやしくなってまた泣きそうになっている。

カタリナ

「かわいそうに。なんてことするのかしら。マグダレナ、あきらめちゃダメよ。まだ口で直接伝えてないじゃないの。今度は面と向かって言ってみて。『好きです。六左衛門と結婚したい』って。」

シスト

「そうだね。マグダレナ、それではねつけられたら、こう聞いてみてくれないか。「六左衛門は、誰とも結婚しないつもりなの？」って。だぶん「そうだ」って答えるよ。そうしたら、『同宿は結婚していいはずなのに、どうして六左衛門は結婚しないの?』って聞いてみてごらん。その理由をしっかりと聞いて、よーく覚えてぼくに教えてくれないか。」

マグダレナは、元気を取り戻して、帰っていった。

カタリナ

「ところでシスト、もうすぐ六左衛門とこのあたりをまわり始めるんでしょう。稲刈りが終わるころよ」

シスト

「ああ、そうだよ。」

カタリナ

「今までは鉱山のならずものの男たちのところにばかり行ってたけど、今度からはお百姓さんの夫婦や家族のところに行くんでしょう。うふふ。」

シスト

「うふふって何だい。そうだけど・・・」

カタリナ

「シスト、私と一緒にいった方が、うまくいって思わない。うふふ。」

シスト

「えっ、一緒に行きたいのかい。」

シストはしばらく絶句する。

カタリナ

「どうしてびっくりするの。」

シスト

「だって女が伝道して歩きまわるなんて聞いたことがないもの。」

カタリナ

「うそでしょ。忘れてるだけよ。シエナの聖カタリナが伝道して歩きまわっていたって、六左衛門やパードレから2人で一緒に聞いたわ。」

シスト

「あっそうか。でも一緒に行って何をするんだい。」

カタリナ

「そこの奥さんとお話するのよ。おばあちゃんや娘さんや子供たちともお話するの。シストと六左衛門が男の人たちと話をしている間に。それから近江の奥さんが作ってくれるおどりだって教えられるわ。シストや六左衛門はできる。どう。うふふ。私、寺沢のクリシタンの共同体でもいつもたくさんの女の人たちと子供たちと話をしてるでしょ。私、みんなにやさしく親切にしてあげるわ。」

カタリナがシストと六左衛門と一緒に出発する姿が見える。子供のようにウキウキしてはしゃいで歩いている。シストと手をつないだり、腕をくんだり、笑いかけたり、ピクニックにでも行く感じだ。いよいよ新しいことが始まる。日本のクリシタンの歴史で女性が伝道に歩きまわるのは初めてだ。活発に活躍し、名をとどろかせた女性としては、高らい人の太田ジュリアがいる。カタリナの活やくの仕方は太田ジュリアのとは違うものになるだろう。

クリシタンの農家だ。六左衛門とシストは主人の男と話している。シストがメインに話し、クリシタン部落を作るようすすめている。カタリナは何をしているだろうか。台所で奥さんと話している。子供たちに囲まれている。おばあさんもいっしょに話している。次の家族、次の家族、といくつもいくつもカタリナの伝道の場面が続けざまに目にうつり、話が聞こえる。

何というカタリナのやさしさと親切心。何と母性的な愛に満ちあふれていることか。相手の小さな苦しみにさえも、大きな同情と共感を表わすカタリナ。それが目に、声に、涙に、しぐさに生き生きと表現されている。共に泣いているカタリナが見える。共に怒っているカタリナが見える。抱きしめてあげているカタリナが見える。やさしく、心配そうに顔をのぞきこんでいるカタリナが見える。カタリナの持ち前の豊かな豊かな同情心が、子供のような、単純で純粋で素朴な心を光のように通過し、顔に、体に、声に、話に表現されて輝いている。それは相手の心を開かせて、もっともっと打ち明けたくさせる力だ。

実際に、多くの家で引きとめられて、一晩泊まらせられている。カタリナに話を聞いてもらいたくて、皆集まって、夜がふけるもかまわず、苦労や悲しみや心配事を次々に話している。同情心や共感を、幼な子のようにストレートに表すカタリナは、先天的な聞き上手だ。打ち明ける側は、彼女から返ってくるやさしさ、あわれみ、いつくしみ、いたわりの表現に、母のなぐさめを受けた子供のように心がいやされていっている。（あんな、お母さんのようにやさしく親切な人をみたことがない）と、口々にカタリナをほめるのが聞こえる。

カタリナは聞き上手だけでなく、話し上手でもある。カタリナが話し出し、その話が聞こえてくると、シストや六左衛門と男たちが話をやめてカタリナの話に耳をかたむけるのを次々に見る。何を話しているのか。彼らが迫害で土地を追われたり、ひどい目にあったことや、今の土地での苦労などを話すのを聞いてあげたカタリナは、自分たちの高らいからの連行、家族友人からの別れ、高らいで目の当たりにした多くの死、飢え、あらゆる悲惨さ、体の限界を超えた有馬までの裸足の旅、戦利品の奴隷として売られたこと、どんな日本人よりもみじめだった自分たちの体験をお返しに話してあげている。

聞く人の驚く顔が次々に見える。カタリナやシストがそれほどの苦しみをなめた人には見えなかったからなのだ。そして、カタリナが他の人の人生を語るのを次々と聞く。林のおかみの人生、らい病人のマタギのヨハネの、他のらい病者たちの、早死にしていた堀子たちの、残された妻子の、寺沢のクリシタン共同体の人々の、養女のクララの、いったい何十人の人生にカタリナは耳をかたむけて記憶しているのだろう。シストが、自分たちの恐ろしい体験をカタリナがまるで昨日のことのよう細かいところまで描写するのに驚いている。まるでカタリナはいろんなクリシタン人生の「かたりべ」だ。引きこまれるほど生き生きと語る。

六左衛門もカタリナの話の上手さに驚いている。次々とカタリナの十年間の伝道の場面が流れていく。カタリナは人に会えば会うほど、多くの人の人生の話をたくわえていく。そしてますます同情と共感に富んで聞き上手になっていく。同時に、どんな打ち明け話の内容にも、どんな境遇の人にも合った話を記憶の中から引き出して話せる話し上手に磨きがかかっていく。（私だけ

が苦しんでいるのではないんだ。他の人はもっと苦しんでいるんだ。) こう言って勇気や力を取り戻す人々の顔と言葉が次々に見え、聞こえる。

六左衛門とシストの、また、別の驚きを理解させられる。今まで二人は、重要な人、有能な人、影響力を行使できる人、柱になる人に、より時間や労力をさいて伝道してきた。しかし、カタリナの伝道はその正反対なのだ。

カタリナの伝道の原理は、あわれみの心、同情心だ。カタリナの興味を最もひきつけるのは、何も出来ない人、無価値な人、つまり、老い先短い老人、いたいけな子供、重い病気の人などで、その人たちと長い時間を費やし、話を聞き、なぐさめる。何も出来ない人、無価値な人など、より大切にするカタリナのやり方に、シストと六左衛門は自分たちのやり方を見直し、改めなくてはと考え、カタリナのやり方に習っていく。最後の十年間、カタリナと一緒に伝道に歩くことによって、シストと六左衛門の伝道はガラリと変わったのだ。

カタリナがシストと六左衛門と伝道に何度か行き、秋も終わりかけた頃、マグダレナがまた相談しに来た。マグダレナは、とうとう勇気を出して六左衛門に面と向かって言ったのだ。柿の木の下だった。マグダレナはかごをもち、脚立の上の六左衛門が高いところの柿をもいで渡してくれていた。

マグダレナ

「ロクザエモン、おら、たのみでござあるなしえ。」（六左衛門、私、頼みたいことがあるの。）

六左衛門

「ああ、いいよ。何でもやってあげるよ。」

マグダレナ

「えー、ほとにが、なんでもやってけるなだが。」（え、本当。何でもしてくれるの。）

六左衛門

「うん、時間がある限り、体力が続く限り、何でもしてあげるよ。何をすればいいんだい。」

マグダレナ

「おらど、けっこん、してけれ。」（私と結婚して。）

六左衛門の手がとまり、しまったという顔でマグダレナを見る。その顔を見てマグダレナは叫ぶ。必死だ。

マグダレナ

「でいすぎなの、おめのごど。おねえげいだ。ログジャエモン。今、なんでもしてけるっていったしえ。」（大好きなの。六左衛門、お願い。今、何でもしてあげるって言ったわ。）

六左衛門はゆっくりと脚立を下りながら考える。マグダレナを長く苦しませないように、一撃でとどめをさそう。それが一番親切な行ないだと。そのための言葉を捜す。見つかった。六左衛門はマグダレナの前に立つと顔を見つめ、わざと冷たい声を出す。

六左衛門

「僕は死んでもマグダレナと結婚したくない。」

マグダレナの両目からたちまち大粒の涙が流れ落ち、かごの中の柿の上にボタボタと落ちていく。六左衛門の計算では、これがかたがつくはずだった。しかしマグダレナはシストから知恵を授かっている。目と鼻を真っ赤にしながら、それでも奥歯をかんで震えがちになる声をしっかりさせて、マグダレナは質問を開始する。答えをしっかりと記憶しないとイケない。頭を冷やさなくては、と一生懸命だ。

マグダレナ

「おら、きぎでんだけども、ロクザエモンは、だれども結婚しねつもりなだぎゃ。」（私、聞きたいんだけど、六左衛門は誰とも結婚しないつもりなの。）

六左衛門

「そうだよ。誰とも結婚しないつもりだ。」

マグダレナ

「おら、そのごど、すじみぢたで、きちんと説明してもらいでえなんだけども、同宿なだば、結婚したっていいはずなだべった、なして、ロクザエモンは結婚しななよ。」（私、筋道たててきちんと説明して欲しいんだけど、同宿は結婚していいはずなのに、どうして六左衛門は結婚しないの。）

六左衛門は内心びっくりしてしまった。どうしてマグダレナはそんなことを知っているんだろうと不思議に思いながらも、論理性をもった答えをしようと頭をフル回転させる。最初から結婚してる同宿や、後で結婚した同宿と、「ぼく」という同宿はいったいどこが違うのだろうか。知っている同宿たちのことを思い出してみる。そして自分の活動と比べる。わかったぞ。

六左衛門

「マグダレナ、よく聞くんだよ。そのわけはね、僕が他の同宿と比べて桁ちがいに旅が多いからなんだよ。僕は有馬のセミナリヨ出身の最初の同宿の一人なんだ。17歳の時に秀吉が禁教令を出して、パードレや修道士たちの活動がうんと難しくなったので、迫害のさなか、危険で長い旅を休む間もなく繰り返すのが、僕たちの役目になった。それ以来、僕はシストの地下教会作りにも関わったせいで、誰よりもたくさん旅を繰り返してきたんだ。

今でもそうだろう。寺沢のこの家にいることなんか、ほとんどないだろう。誰か、僕と結婚してごらん。僕はほとんど一緒にいないから、最初っから未亡人同然だよ。僕がどこかで捕まって牢にぶちこまれても、殺されても知らせはこないよ。いつまで待っても帰ってこなくなる。それだけだ。そんな夫婦生活さえ10何年も続くと思うかい。たぶん、わずか数年で終わりだ。

僕はセミナリヨ出身の同宿だからイエズス会の修道士だと思われている。キリシタン狩りが始まったら、僕は真っ先に捕まるよ。こういう僕のような同宿は、結婚と伝道は両立しないんだ。わかったね。」

マグダレナはわかったと言わない。涙にぬれた柿の入ったかごを首からひもをはずして下ろすと、六左衛門に背を向ける。そしてどこかに行ってしまう。六左衛門はため息をつき、残された柿と脚立を抱えてあとかたづけをする。

そしてマグダレナは、シストの家へやってきたのだ。シストは伝道旅行から、昨日、六左衛門とカタリナと帰りついたばかりで、今日は家で疲れをいやしていたところだ。マグダレナが六左衛門とのやりとりを語り終えると、シストがうなる。

シスト

「う～ん。桁ちがいに旅が多いか・・・。」

シストは考え込む。

カタリナ

「私とシストは夫婦と一緒に旅をしているわ。」

シスト

「六左衛門の旅は、男ですらついていけないほどの旅だよ。」

カタリナ

「そうね。」

マグダレナ

「よーし、おら、きめだ。」（よーし、私、決めた。）

カタリナ

「決めたって、何を決めたの。」

マグダレナ

「おら、ロクザエモンさ、おらはおどごより、つえぐて、ロクザエモンのひとりたびにちゃんとついでいげるってしょうめいしてみせるがら。」（私、六左衛門に、私は男より強くって、六左衛門の一人旅にちゃんとついていけるって証明してみせる。）

こう言うが早いから、マグダレナはシストの家から飛び出して行ってしまった。シストとカタリナはとめる間もなかった。

カタリナ

「いったい何をするつもりなのかしら、マグダレナったら」

六左衛門が遠くに伝道旅行する仕度を始めた。数日もしないうちに出発するようだ。マグダレナも旅の仕度をひそかに始めた。しかし六左衛門は、いつもと違うマグダレナの様子を注意深く観察し、彼女も旅支度をしているのに気がついたが、知らぬふりをして、ただ荷物に縄を一巻き加えておいた。

六左衛門のほうは、いつもどおりに支度を終え、藤兵衛とマグダレナに今度の旅の予定を話し、出発の日もいつものように玄関に出た。けれども、いつもと違ってマグダレナが見送りに出てこない。藤兵衛だけがにこにこしながら見送ってくれる。家を出ると、すぐマグダレナが旅支度をした姿で、あとから家を飛び出し追いかけてきた。六左衛門は独り言を言う。

六左衛門

「やっぱり来たか」

マグダレナが追いついた。

マグダレナ

「ロクザエモン、おらもいっしょにいぐ。つれでってけれ。」（六左衛門、私いっしょに行く。連れてって。）

六左衛門は「連れて行く」とも「帰れ」とも言わない。歩き続ける。前を向いたまま。「帰れ」と言っても帰るようなマグダレナではないとわかっているのだ。

外で働いている百姓たちが、二人が並んで歩くのを好奇心に満ちて見ている。家に戻って家の人を呼んで指さす者もいる。マグダレナは六左衛門の横に並んで歩きながら、六左衛門の顔を見て話しかける。

マグダレナ

「おら、とうさんのゆるしもらってるがら、しんべしねでいいがらね。」（私、お父さんの許しをもらってるから心配しないでね。）

六左衛門は何も反応しない。

マグダレナ

「ロクザエモンは、しじゅうしでしょ。おら、おなごだけども15せいで、わけして、まめだがら。てづやすするのなんともねし、なんぼでもあるげるし。はしるたって、うまっこみでたくぱっかぱっかっはえぐあるげるし。およぐたて、ざっこみでたく、すいすいおよげるし……。おら、きっとよ、ロクザエモンよりよ、さんびのにつえど。あしでまといになんかぜっていならねがらしえ。」

（六左衛門は44歳でしょう。私は女だけど15歳で若くって元気よ。徹夜も平気だし、いくらでも歩けるわ。走るのなら馬みたいに速いわ。泳ぎだって魚みたいにすいすい泳げるし……。私、きっと六左衛門より寒さに強いわ。足手まといになんかに絶対にならない。）

マグダレナは一生懸命に六左衛門の表情を読み取ろうとするが、六左衛門はポーカーフェイスで表情を変えず、やはり何も言わない。

マグダレナ

「ロクザエモン、おらどいっしょにいげば、びょうぎになったどぎかんびょうしてもらえるべ。けがしてしまったら、おらきづっこの手あででぎるし、したら、おめ、うれしべー。」

(六左衛門、私が一緒に行けば、病気になったら看病してもらえるでしょう。けがをしたら傷の手当をしてもらえるでしょう。そしたら嬉しいでしょう。)

六左衛門は何も反応しない。仕方なくマグダレナはしばらく黙っている。もうほとんど村を通り過ぎるところだ。

マグダレナ

「ロクザエモンが、いろんたひとど、はなしっこしてるあいだにしえ、おら、おめのためによ、せんたくしたり、ぬいものっこしたり、おなごのしごどでぎるべった。したらよ、それだけなげぐ、おめがよはなしっこでぎるし、からだやすめるごどでぎるべ、きっと、ロクザエモンのたすけになるがらしえ、おら。」

(六左衛門がいろいろな人に話をしている間に、私、六左衛門のために洗濯したり、繕い物したり、必要な女仕事を何でもしてあげるわ。そしたら、それだけ長くお話ができるし、体が休める時間も取れるでしょう。きっと六左衛門の助けになるわ、私。)

六左衛門は何も反応しない。村の最後の家を通り過ぎ、その家にやっと大声が届くくらいのところまで来た。突然、六左衛門が止まったので、マグダレナも立ち止まった。六左衛門がマグダレナの足元を見ながら言う。

六左衛門

「わらじの結び方がよくないよ。ちょっとそこの木に、背中をもたせかけてごらん。」

わりと細い杉の木のところまでマグダレナの手を引いて連れて行き、マグダレナを寄りかからせる。六左衛門はしゃがみこみ、わらじに手をかける。

マグダレナ

「あー、ロクザエモン、つれでってけるなだな、おら、うれしー。」

(六左衛門、連れて行ってくれるのね。嬉しい。)

マグダレナは、涙があふれてしゃがみこんでいる。六左衛門がよく見えなくなる。六左衛門は荷物が一番上に入れた縄をすばやく出すと、おそろしい手早さでマグダレナの足首に縄をかけ、それを杉の木にまわす。マグダレナが気づいた時には、ももの高さまでらせん状に縄が巻かれてしまっていた。

マグダレナ

「あー、なにするなだー。ロクザエモン、やめでけれー。」

(何するの。六左衛門。やめてー。)

六左衛門はどんどん続ける。たちまちひじの高さまでくるくと縄がかかり、両手の動きをとめられる。ついに肩の高さまで巻かれたマグダレナは、杉の木と一体化してしまって身動きできない。

マグダレナ

「やめでけれー。ほどいでけれー。やだー。おら、やだー。」

(やめてー。ほどいてー。やだー。)

六左衛門は顔色も変えずに、結び終わると、後ろも見ずにさっさと早歩きで遠ざかり見えなくなる。

マグダレナ

「だれが一。だれが、たすけでけれ一。だれがきてけれ一。」

(誰か一。助けて一。誰か来て一。)

しばらく声が枯れるほど叫んで、やっと村の人が来てくれた。しかし六左衛門がほどきにくい結び方をわざとしたので、縄を切るために、鎌を取りに一人が行き、皆で待つ。寺沢村の百姓たちは気の毒がりながらも、杉の木に縄で足首から首までぐるぐる巻きにされたマグダレナがおかしくってたまらなくて笑ってしまう。そして、いろいろなことを言ってくれる。

「あや一。少しいき過ぎな気もするけどよ一、ここまで縛らねば一、走っていってしまうべをなあ一。六左衛門も大変だったなあ一。」

(おやまあ。少しいき過ぎな気もするけど、ここまで縛らなければ、走っていってしまうんだろ
うね。六左衛門も大変だったなあ一。)

「ままず、何やってらど思えば、マグダレナ、杉の木さ縛られでらったんだな。おめも少し気が
ねもんなあ一。あはは一。」

(何をやっているのかと思ったら、マグダレナが杉の木に縛られていたんだ。あなたも少し聞か
んぼうだからネ一。あはは一。)

「マグダレナ、あや一。しかだネ一ハ一、これだばハ、いつもあっちゃこっちゃせわしネ一。
おめでも、動けネな一。」

(マグダレナ、これは大変なありさまだ。かわいそうに。ここまで縛られたら、いつもあっちこ
っちせわしなくしているあなたも動けないネ。)

「あれ一、イモムシみでだなあ一。あっははは、マグダレナ、木さ縛られで大変だな一。たいし
たもんだ、おめだば・・・ハハハ。」

(あら一。イモムシみたいになって・・・あっははは、マグダレナ、木に縛られて大変な目にあ
ったね。たいした人だね、あなたっていう人は。ハハハ。)

「六左衛門もハ、よっぽど思案した結果、こうしたんだべな一。マグダレナも浮かばれねなあ一
、これだば一。浮かばれね一って言っても、死んじまったわけでもネ一けどネ。」

(六左衛門も、よほど思案した結果、こういう風にしたんだらうね。マグダレナも浮かばれな
いネ、こんな風にされて。浮かばれないっていっても、死んでしまったわけでもないけどね。)

「まんじしえ、早く鎌持ってこねべが一。なんぼなんでも、じゅうしごのおばこ、こんただ風に
しておがれねべった一。ままず、しかだねごど、マグダレナーっ。」

(なんとも、早く鎌を持って来ないかしらね。いくらなんでも、14、5歳の女の子を、いつま
でもこんな状態にしておかないでしょう。かわいそうに、マグダレナ。)

「六左衛門もごごまでするどはな一。おめも、きがねどごあるしな一。ままず、しがたねごど、
マグダレナ」

(六左衛門もごごまでやるとはね。でも、仕方ないかもネ、マグダレナもきかん坊なところがあ
るしネ一。)

「おらあー、こただにおもしろいこと、生まれで初めて見だけをん。ハハハ・・・。」

(私、こんなに面白いこと、生まれて初めて見た。ハハハ・・・)

「まんず、たまげだな。あのすばしっこいマグダレナをどんただふうにしてしえ、六左衛門はこんなふうになりっぱにしばったべ。まんず、ふしぎだなー。」

(あのすばしっこいマグダレナを、どうやって六左衛門はこんなに見事に縛りあげることができたのかなあ。まったく不思議だ。)

マグダレナの12年間ものあこがれの君、そして今は結婚して欲しくてこうしてけなげにアタックしている六左衛門のことを、マグダレナの前で誰も批判しない。寺沢の百姓たちのやさしい心が表れる。しかし、この話は明日には寺沢や院内の周辺の村々にまで知れわたっているに違いない。

藤兵衛の家にシストとカタリナが来ている。マグダレナが杉の木に縛られたといううわさを耳にしてやって来たのだ。打ちひしがれているマグダレナは今、カタリナに同情深く見つめられ、母親のようにやさしく胸に引き寄せられて、胸に抱きついて泣く。カタリナももらい泣きする。

カタリナ

「かわいそうに。マグダレナ・・・。」

マグダレナはカタリナの胸に抱かれ、泣きじゃくりながら、何があったかを話して聞かせる。

マグダレナ

「なんこうふらぐのしろっていうけどもよ、ロクザエモンはまったくそれだ。もうだめだな。どんたぶぎも刃っこ、ただねんだものね。刃おれ、矢つぎるってよぐいうべ。」

(難攻不落の城っていう言葉があるけど、六左衛門はまったくそれよ。もうだめ。どんな武器もはが立たないんだもの。刃折れ、矢尽きるって言うでしょ。)

シスト

「マグダレナ、おいで。」

今度はシストがマグダレナを胸に抱いてあげる。

シスト

「マグダレナ、自分の刀が折れ、矢が尽きた時は、敵の武器をぶんどって戦うんだ。」

マグダレナの耳に、シストの戦闘的な言葉が入るや否や、マグダレナの顔つきが変わる。彼女は3歳のころから、六左衛門の酒のさかなを平気で横取りしていた。その生まれ持った海賊気質が呼び覚まされたのだ。

チャンバラもすもうも、勝つまでやめなかった。その上、マグダレナは軍人氣質も生まれ持って備えているのだ。シストが大将のように語ったので、その気質もまた、呼び覚ました。敵がどんなに強大であっても、いったん指令があれば、その言葉に最後まで忠実に従いぬくのが喜び、という人間なのだ。

今のシストの語調は、女の子を相手にする時のシストではなかった。ならず者の男どもに指令を出す時のシストの語調だった。マグダレナはしっかり立ってシストをじっと見る。

シスト

「いいか、マグダレナ。六左衛門の武器は論理の力だ。彼は論戦で負けたことがないそうさ。セミナリヨで論理という学問を学んだからなんだよ。これから伝えることをよく覚えて実行するんだよ。」

いいか。まず、六左衛門から論理という学問の要点を聞き出せ。その次は、それをういて論理を組み立てる。結論は六左衛門がマグダレナと結婚しなければならない、こうなるようにだ。そして論戦を挑むんだ。そして打ち勝て。わかったか。」

マグダレナ

「うん、わがった。おら、ロクザエモンのぶぎをぶんどってただがってやるがら。うちどってかってやる。」

(うん、わかった。私、相手の武器をぶんどって戦ってやる。打ち勝ってやる。)

きりっとした美しい顔を見せるマグダレナ。それから何かを思い出したようで、シストに質問する。

マグダレナ

「マリアのとうさん、この間のロクザエモンの説明をおぼえてるでしょう。あれにはなんとして打ち勝てばいいべ。」

(マリアの父さん、この間のロクザエモンの説明を覚えてるでしょう。あれにはどうやって打ち勝つの。)

シスト

「うん、よく覚えてるよ。マグダレナ、六左衛門が出した理由は、ほとんどの女性には当てはまる。それは確かだ。でも例外なくすべての女性に当てはまるだろうか。」

いや、例外はある。この世でどんなに寂しく、辛く、心配と気苦労ばかりで、しかも短い結婚生活を送っても、天国で永遠に六左衛門の妻なのだから、それで十分に幸せだという女性がいたら、その女性は例外で、その女性となら結婚と伝道は六左衛門にとって両立する。それは私だ。そう言ってやれば論破できる。」

マグダレナ

「わーすんげ。だどもマリアの父さんさ、なんであのときにそれを教えてけねがったの。」

(わーすごい。でもマリアの父さん、なんであの時それを教えてくれなかったの。)

シストは目を丸くする。

シスト

「論理っていうのは、じっくりと考える必要があるんだよ。マグダレナはあの時、ぼくが何も言うひまもなく飛び出して行ってしまったじゃないか。」

マグダレナ

「あ、んだけっが。」

(あ、そうだったっけ。)

シスト

「でもね、マグダレナ、六左衛門が誰とも結婚しようとしめない本当の理由はこれじゃないよ。」

マグダレナ

「ふーん、せば、何だべ、おしえてけれ。」

(え、じゃー何なの。教えて。)

シスト

「たぶん彼は、セミナリヨでパードレや修道士たちから養成され、同宿になって彼らに仕え、一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬく彼らを素晴らしいと思い、彼らにあこがれて、自分もそうしようと思ったにちがいないんだ。10代の頃にね。」

イエズスが一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬいただろう。神への愛のために、自分の性欲に負けないでそれを支配し、一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬけるっていうことは、たいへんな名誉なんだよ。

もちろん、パードレや修道士は教会がそれを定めていて、同宿にはそんなきまりはないよ。でも六左衛門は、神がきっと自分に一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬくようお望みなのだ、と考えているんだ。だからたとえ伝道と結婚が両立するとしても、彼は結婚するのは拒否するだろうね。」

マグダレナは理解しようと一生懸命に聞いている。そして素朴な疑問を口にする。

マグダレナ

「おら、わがらねな。いっしょけんめい、貞潔をまもって、独身つつらぬいで、なしてたいへんな名誉なんだべ。」

(わからないわ。一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬけたら、どうしてたいへんな名誉なの。)

シスト

「そのための戦いがとても激しい戦いで、並大抵の努力では打ち勝てないんだ。だから勝てばたいへんな名誉になる。女の人には、決してわからないほどの激しい戦いなんだよ。」

マグダレナ

「おなごさわがらねっていわねで、せづめいしてけれ。」

(女の人にはわからないって言わないで、説明してよ。)

カタリナ

「私も知りたいわ、シスト。」

シスト

「よーし、じゃー、いくぞ。男はね、誰でも10代の前半になると女の人を裸を見たい、さわりたいって望み始めるんだ。」

マグダレナもカタリナも、キャーと言って真っ赤になる。シストは、そら見たことかという顔をする。

シスト

「この望みは10代、20代はとっても強烈で、30代になって少しずつおさまってきて、そしておじいさんになる僕の年にはとっても静かにおさまってくれるんだ。もうすぐ八重が孫を産むけど、八重のお腹の中にもうその子がいるんだから僕はおじいさんだよ。そして六左衛門は僕と同年の44歳だ。」

どんな男でも10代、20代、30代と、女の人を裸を見たい、さわりたいって強い望みが嵐のように心の中に吹きまくるものなんだよ。そして40代になるとこれがうんと静まるんだ。

六左衛門に初めて会った時、僕たちは22歳だった。24歳の時、林の親分一家のシスト塾が始まる頃、彼はこの欲望と激しく戦っているのを知ったんだ。自分自身が貞潔を守っていく戦いに苦しんでいたもので、若い堀子たちが貞潔を守るのは無理じゃないかって彼が最初心配した時なんだけどね。

彼は今はもう女の人を裸を見たり触れたりしないことは、ちっとも辛い戦いじゃないはずだよ。大変な戦いに約30年も苦労して打ち勝ったわけだから。欲望が静まって戦いがなくなった今になって、結婚して女の人に触れたくなんかないんだよ。

彼があと何年生きるかはわからないけど、一生涯貞潔を守るといふ戦いの苦しい日々はもう終わっている。あとは死までの年月をこのまま独身でいればいいだけだ。誰も恐ろしく苦しい戦いの末に勝ち取った名誉を、ちゃんとした理由もなく投げ捨てたりしないだろう。」

マグダレナ

「ちゃんとしたわけって。おら気がくるってしまいそなほど、死んでしまいそなほど、ロクザエモンをすぎで愛してるなんだの。ロクザエモンもおらにひがれでるし、愛してるってマリアの母さんもしゃべってけだっけもの。これはちゃんとした理由にならねべが。」

(ちゃんとした理由……。私が気が狂ってしまいそなほど、死んじゃいそなほど、六左衛門を愛しているの。六左衛門も私にひかれている、愛しているってマリアの母さんも言ってくれたわ。これはちゃんとした理由にならないの。)

シスト

「マグダレナ。マグダレナは生涯、すてきな男の人に出会ったことは何回ある。」

マグダレナ

「一回だけだ。ロクザエモンだけだをん。」

(一回だけ。六左衛門だけ。)

シスト

「六左衛門は伝道の旅の連続の生涯の途中で、とてもとても多くの独身のクリシタンのすてきな女の人たちに会っているはずだよ。僕にそんな話を彼がしたことは一度もないけどね。

でも、たとえば横手にいる昌寿院だって、とっても美しくって、若々しくって、すばらしい信仰をもったクリシタンの女の人だよ。どこに行っても六左衛門はそういう女の人たちと会い、教えたり、洗礼をさずけたり、助けたりしてきていて、心がひかれることだって、数えきれないほどあったに違いないんだよ。

そんな気持ちを、その度ごとに全部しりぞけてきたんだよ。そんな理由じゃ、いつものようにしりぞけられてしまう。

マグダレナ、六左衛門はね、神が自分に一生涯貞潔を守り、独身をつらぬくことを望んでいると考えているんだよ。だから神がそれを望んでいない。神が私と結婚することを、六左衛門に望んでいるって、六左衛門を納得させなければ、結婚してはもらえないんだ。マグダレナ、論理で彼に納得させるしかない。やってみろ。」

マグダレナ

「うん。マリアのとうさん、どうも。おら、やるがら。」

(うん。マリアの父さん、ありがとう。私、やる。)

六左衛門が伝道旅行から帰ってきた。マグダレナは杉の木に縛られたことには一切触れず、か
いがいしく旅で疲れた六左衛門の世話をやく。そして、六左衛門はマグダレナを杉の木に縛った
ことなどたいしたことと思ってないから、いつものとおりの六左衛門だ。早速マグダレナはシス
トの指令を実行に移す。マグダレナは紙と筆を用意し、すずりに墨をすって六左衛門を呼ぶ。

六左衛門

「やあ、マグダレナ、何をするつもりだい。勉強かい。」

マグダレナ

「うんだ、んだよ。ロクザエモンはセミナリヨで論理っていうガグモンならったんだべ。おらさ
、それのごどおしえでけれ。ごさ要点かいでけれ。」

(うん、そうよ。六左衛門はセミナリヨで論理っていう学問を習ったんでしょ。私にそれを教
えて。ここに要点を書いてね。)

六左衛門

「えー。要点をかい。うーん。困ったな。じゃー、三段論法を教えようか。マグダレナは何も知
らないから……。わかりやすいのは……。」

六左衛門は紙に筆で、まず三段論法と書き、しばらく考える。それからおもむろに書き始める
。

- 一. 神だけが何でも知っている。
- 二. イエズスは何でも知っている。
- 三. ゆえにイエズスは神だ。

少し余白をとって、もうひとつ書く。

- 一. 神だけが何でもできる。
- 二. イエズスは何でもできる。
- 三. ゆえにイエズスは神だ。

こう書いてから六左衛門は15歳の女の子にもわかるように、かみ砕いて親切に教えてくれた
。それでマグダレナにもよくわかったようだ。

いよいよマグダレナに論戦の準備が整った。冬支度も済んで、百姓たちがひまになった11月
の半ば、マグダレナは六左衛門に論戦を申し込んだ。

マグダレナ

「おら、ロクザエモンに論戦をいどむがら。どただ、議論するが本番まではないしょなのだ
なしえ。村中の人さ、この家(え)さよんで、聞いてもらうなしえ。マリアのとうさんさ、行

司やってもらおう、うげでたってけるが。ロクザエモン。」

（私、六左衛門に論戦を挑むわ。どんな議論をするかは本番まで秘密なの。村中の人をこの家に呼んで聞いてもらうのよ。マリアの父さんに行司をやってもらうわ。受けてたってくれる。六左衛門。）

六左衛門はびっくりした。大まじめなマグダレナの顔を見ながら、六左衛門は思ったことを口に出す。

六左衛門

「いいよ。受けて立とう。でもそっちこそ、いいのかい。ぼくは論戦に負けたことがないんだよ。ぼくにとっては遊びみたいなものになるんじゃないかなあ。マグダレナをみんなの前で、こてんぱんにやっつけてしまうよ。」

ということで、論戦は行われることになり、村中に論戦が開かれることがふれまわられ、大百姓藤兵衛の屋敷に皆来るように誘われた。

当日が来た。シストは行司を引き受けたので、もちろんいる。シスト一家が全員来ている。臨月の八重もやって来たのだ。林の親分とおかみ、そして近江夫妻が来ている。あとは寺沢の百姓たちが大勢押しかけて来ている。百姓たちがいろいろしゃべっている。

百姓

「何するなだべな一。論戦って。」

（何をするんだろうね。論戦て。）

「ほれ、よごでのかねざわのはちまんさんのかげうだみでったごどするんでねのげ？」

（横手の金澤八幡宮（かねざわはちまんぐう）の掛け唄（かけうた）みたいなことをするんじゃないかい。）

誰も論戦など見たことも、聞いたこともないのだ。しかし、このあいだマグダレナが六左衛門に杉の木に縛られたことは、村中を興奮させた大事件だったし、今日の論戦とやらは、マグダレナが申し込み、六左衛門が受けて立ったということで、何が起こるかとは皆わくわくしている。

ふすまを全部とっぱらって大広間になった藤兵衛の家の座敷はぎゅうぎゅう詰めの状態だ。村のほとんどの人が来ているに違いない。玄関まで人があふれている。行司のシストの大声が響く。

シスト

「今から、六左衛門は自分が一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬくのが神のお望みだと主張し、マグダレナは、六左衛門が自分と結婚するのが、神のお望みだと主張し、論じ合うこと。」

村人たちはたちまち興奮して大さわぎする。ワーワーという話し声がおさまるのを待って、シストが続ける。

シスト

「二人とも全員に聞こえるように大きな声で話すこと。」

床の間を背にして、シストは床机（しょうぎ）に腰掛け、両側に二人を皆の方を向かせて立たせる。

シスト

「それでは論戦の論題に、それぞれ異存はないか。マグダレナは。」

マグダレナ

「ねーっ。」

(ありません。)

シスト

「六左衛門は。」

六左衛門は、こんなことが論戦の論題になるとは夢にも思っていなかったもので、内心とても驚いてしまっている。しかし、論戦には絶対的自信があるし、この機会にマグダレナに引導を渡して、もう二度と結婚してと言えないようにしようと、瞬時に考えて、動揺を表に出さず、落ち着きはらって言う。

六左衛門

「ありません。」

シスト

「それでは、論戦を申し込んだマグダレナから口火を切りなさい。始め。」

マグダレナは今、前を、つまり寺沢村の人々を見ている。そのまま大きく息を吸い込み、ゆっくりと大きな声で話し始める。

マグダレナ

「おらどロクザエモンはふたりしてよ、かぎっこもいでらったの。おら、けっこんしでっていったの。」

(私と六左衛門は二人で柿をもいでたの。私、結婚してと言ったの。)

マグダレナは、今度は顔を六左衛門の方へ向ける。

マグダレナ

「おべでるべー。しんでもマグダレナど結婚しでぐねって行って、そのどぎ、ロクザエモンは、おらさ言ったべった。ほんとによ、本心がらそう言ったなへ。うそでねぐって。」

(覚えてるでしょう。死んでもマグダレナと結婚したくないって、その時、六左衛門は私に言ったわよね。本当に、本当に、本心からそう言ったの。うそじゃなくって。)

いきなりこんな言葉でマグダレナが切り出したので、六左衛門は(マグダレナ、いいんだろうか)と相手のことが心配になってしまった。

六左衛門

「そうだよ。本心からだ。うそじゃない。」

集まった人々も、こんなやりとりで始まったので、あ然としている。最初から、もう結論が出たのも同然だとしか思えない。(六左衛門が死んでもマグダレナと結婚したくないと本心から思っているんなら、マグダレナはどうしようもない。)と誰もがそう思った。マグダレナは少し間をおいてから、また質問する。

マグダレナ

「いまでも、そなたふうに、こごろがら思ってるなが。かわってねなだが。」

(今でも、そう心から思っているの。変わっていない。)

六左衛門

「ああ、変わっていないよ。そう心から思っている。」

聴衆もマグダレナが自分で自分の首を絞めるようなことをやっていると感じて、マグダレナのことを心配し始めている。ぶつぶつ、あちこちからささやきがもれる。大丈夫かなあ、と。それがおさまるのを待って、マグダレナがまた質問する。

マグダレナ

「しんでも、おらどけっこんしでぐねのに、おらどけっこんするのど、クリシタンやめさせるための、ごうもんうげるのどでは、どっちがロクザエモンにとってはやなの？」

(死んでも私と結婚したくないのに、私と結婚するのと、クリシタンをやめさせるためのごうもんを受けるのとでは、どっちが六左衛門にとっては嫌なの。)

六左衛門には、マグダレナの意図がさっぱり読めない。だから困って、しばらく考える。しかし、やはり意図がわからないから正直に答える。

六左衛門

「マグダレナと結婚するほうが嫌だ。」

そこまで六左衛門がマグダレナとの結婚を嫌がっているのを聞いて、みんなの口から落胆のため息や言葉がもれる。実は、みんなマグダレナを応援しているのだ。もう行司のシストが(勝負あった。)と言ってしまうのではないかと、皆シストに目を注ぐ。しかし、シストはそうしない。そのあと、しばらく待ってもマグダレナが次の質問をしないので、六左衛門が大きな声で話し始める。考えながらゆっくりと語る。

六左衛門

「マグダレナにはもうすでに説明してあるけれど、ここにいるみんなにもわかってもらいたいから、もう一度その説明をここでもくりかえす。

ぼくはみんなも知っているとおりに、イエズス会の同宿だ。実は同宿は結婚してもいいし、実際結婚している同宿は多い。しかし、ぼくは誰とも結婚しないつもりだ。神がぼくに一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬくよう望んでいるに違いないからだ。

では、それを証明しよう。ぼくは10才でセミナリヨに入学し、同宿として養成された。17才の時に、秀吉が禁教令を出したので、イスパニヤ人やポルトガル人のパードレや修道士たちが旅をする困難さが増した。日本人の同宿が、代わりに多くの長い危険な旅をする必要があった。ぼくはセミナリヨ出身の最初の同宿の一人だから、それ以来、危険で長い旅を絶えず繰り返すのがぼくの役目になり、今もそれが続いている。

他の結婚している同宿と比べ、けた違いに旅が多いのが、ぼくという同宿だ。誰かを妻としたなら、その結婚生活は一体どうなるだろう。ぼくは金を稼ぐことがない。妻は一家のために、ぼくに代わって稼がなくてはならない。ぼくは一年中、ほとんど旅に出ていて家にいない。一年以上、帰ってこないこともある。妻は未亡人同然だ。子供の養育もしつけも、妻が一人でしなければならない。いつ帰るか連絡もない。旅に出てしまえば、生きてるか死んでいるかもわからない。たとえどこかでぼくが捕まっても殺されても、誰も知らせてはくれない。毎日心配でたまらないだろう。

こんな結婚生活さえ、長くは続かない。ぼくはイエズス会のセミナリヨ出身だから、イエズス会の修道士だと思われている。キリシタン狩りが始まったら、ぼくは誰よりも早く捕まえられて殺される。こんなぼくには、伝道生活と結婚生活は両立しない。こんな結婚生活に満足し、耐えられる女性はいないからだ。ゆえに、神はぼくに一生涯、貞潔を守り、独身をつらぬくことを望んでおられる。」

六左衛門の話は終わった。とうとうたる弁論に、納得せざるを得ない。それで内心マグダレナを応援している寺沢のみんなは、絶望してしまった。やさしい寺沢の人たちは、負けが決定したと思われるマグダレナをあわれみの目で見つめる。あちこちから「かわいそうに」という声がある。

しかし、マグダレナは負けてがっかりした様子ではない。顔には戦いを挑むこわいほどの気迫があらわれてきている。マグダレナが口を開く。

マグダレナ

「ロクザエモンは、いっばんてぎには、あではまるんだけども、あではまらね例外もあるなだの、そういうことだから、全部、例外ねぐあではまる、そういうことだからだど断定するまじげーをおがした。だから、ロクザエモンは証明に失敗すてるなだ。」

(六左衛門は、一般的にはあてはまるが、あてはまらない例外もある、そういう事柄を、すべて例外なくあてはまる、そういう事柄だと断定する間違いを犯したわ。だから六左衛門は証明に失敗しているわ。)

六左衛門はびっくりして、マグダレナを見つめる。一体何を言ったのかは、ついこの間こういうことを教えた六左衛門と、教わったマグダレナしかわからないのだが、会場は一気に緊張する。何を言ったんだらうというつぶやきが、あちこちであがる。マグダレナは会場が静まるのを待つ。静かになると六左衛門に顔を向ける。

マグダレナ

「ロクザエモンは、こただ結婚生活にまんぞくしてよ、耐えられるおなごはいねーっていったべった。それはよ、れいがいねぐ、全部のおなごさあではまるべがや。れいがいは、ある。もしもよ、あるおなごが、おやじがらじゅぶん、生活をたすけでもっらって、しかもみぼうじんどうぜんの、とぜねして、せづねして、なんぎで、しんぱいばかりしねばならねちよごっどの結婚生活をこの世でおぐるどしてもへ、てんごぐだよ、えいえんにロクザエモンの妻なのだから、これ以上のしあわせはねーど、こごろがら思ってるなだばよ、まんぞくでげるし、たえでいげるべった。こーいうおなごだだったらば、ロクザエモンにとって結婚生活ど、伝道生活は両立するべった。して、そのおなごっていうのは、おらのごどだよ。」

(六左衛門は、こんな結婚生活に満足し、耐えられる女性はいないと言ったわね。それは例外なくすべての女性にあてはまるかしら。いいえ。例外はあるわ。もしある女性が父親から十分に生活を助けてもらえて、しかも未亡人同然の、さびしく、つらい、心配ばかりしなければならないわずか数年の結婚生活をこの世で送るとしても、天国では永遠に六左衛門の妻なのだからこれ以上の幸福はないと、心から思っているなら満足できるし耐えていけるわ。こういう女性となら、六左衛門にとって結婚生活と伝道生活は両立するわ。そして、それはこの私よ。)

六左衛門は、マグダレナに論理という学問の授業をしたことを後悔した。マグダレナに指摘されたとおりなのだ。今、聴衆たちはワーワーと騒いでマグダレナに声援を送っている。シストがそれを静める。六左衛門は困った。一体こんなことをどうやって証明できるのかと。

六左衛門

「じゃー、マグダレナは、神がぼくとマグダレナが結婚することを望んでいると証明できるのか。」

マグダレナ

「あー、おら、できるよ。てらさわのみんな、前にこの家（え）さ、てらさわのきりしたんの柱になってるひどらがあずまったの。しょうれい、はぐがいされだらっていう話しっこしでらっけ。そのどぎ、おべでる。ロクザエモン。ロクザエモンは、神に、いっぺおっきこうえいをあだえるためには、にんげんどして、いじばんやんかごどをうけいれるように、イエズス会でおしえられできたどいったべった。ごうもんされるごどは、にんげんどしていじばんやんかごどだどいったよね。だからロクザエモンは、神に、いっぺおっきい光栄をあだえるために、クリシタンをやめさせるための拷問をうげる。ロクザエモンはこの場所でこういったべった。」

（ええ、できるわ。寺沢のみなさん、前にこの家に寺沢のクリシタンの柱になってる人たちが集まったの。将来迫害されたらっていう話をしてたわ。その時、覚えてる。六左衛門。六左衛門は、神に、より大きな光栄を与えるためには、人間として一番嫌なことを受け入れるようにとイエズス会で教えられてきたと言ったわよね。拷問されることは、人間として一番嫌なことだと言ったわよね。だから六左衛門は、神に、より大きな光栄を与えるために、クリシタンを捨てさせるための拷問を受ける。六左衛門はこの場所でこう言ったわよね。）

六左衛門

「うん、言った。」

マグダレナ

「ロクザエモンのこの論理はただしいべ。まじがいねーべ。」

（六左衛門のこの論理は正しいわよね。間違いはないわよね。）

六左衛門

「うん、正しい。この三段論法には間違いはない。」

マグダレナ

「今さっき、ロクザエモンにおら、こうきいだべった。しんでもおらど結婚しでぐねーくしえに、おらど結婚するのど、どっちがロクザエモンにとってやだのって。そしたらよ、マグダレナど結婚するほ、やだっていったべった。だからいまだば、ロクザエモンっていう人にとっていじばんやんたごどは、おらど結婚するごどだべった。だから、

一、ロクザエモンは、神さまさ、より大きい光栄をあげるためにしゃ、にんげんどして、いじばんやんたごどうげいれるよにってイエズス会でおしえでられできた。

二、おらど結婚するごどは、ロクザエモンにとって人間どしていじばんやんたごどだ。

三、ゆえに、ロクザエモンは、神に、より大きな光栄をあげるためにおらど結婚する。

どうだ、この論理はただしべ。」

(今さっき、六左衛門に私、こう聞いたわよね。死んでも私と結婚したくないのに、私と結婚するのと、キリシタンをやめさせるための拷問を受けるのとでは、どっちが六左衛門にとっては嫌なのって。そしたら、マグダレナと結婚するほうが嫌だって言ったわ。だから今は、六左衛門という人間にとって一番嫌なことは、私と結婚することでしょう。だから、

一、六左衛門は、神に、より大きな光栄を与えるためには、人間として一番嫌なことを受け入れるようにイエズス会で教えられてきた。

二、私と結婚することは、六左衛門にとって人間として一番嫌なことだ。

三、ゆえに六左衛門は、神に、より大きな光栄を与えるために、私と結婚する。

どう、この論理は正しい。)

六左衛門は、冷や汗がふき出してきた。論戦で、こんなことは彼にとって初めてだ。今度は皆が六左衛門を見ている。彼が苦しんでいることは隠しようがない。

六左衛門

「論理としては正しい・・・。うーん。少し考えさせてくれ・・・。」

六左衛門はいくら考えても、この三段論法に誤りが見つからない。きゅうちに追い込まれた六左衛門は、苦しまぎれに一言いう。

六左衛門

「ぼくは・・・。若いころから長年ささげ続けてきたこの自己犠牲を続けたいんだ。神に苦しみをささげたい・・・。」

マグダレナ

「しじゅうしのロクザエモンには、いっしょうがい、ていけつを守るためにただがうのはくるしぐねべった。だってしえ、とっくにわのせいよぐさうじかってしまってるんだもの。んだがら、あど、じこぎせいでねぐなってるなだもの。ただの、ほまれになってるなしえ。年のおがげで、せいよぐどただがう重荷がらとがれでしえ、らぐになってるなだがら、かみさまどほがのひどらのためにしえ、あだらし、おもにをすすんでになうべきだべ。妻のめんどみで、こどもをやしなってるっていう重荷をすすんでになうべきだどおらおもうなだけども。妻のめんどみで、こどものごどやしなってそだてるっていうおもにのごど。むがしのただかいでかちとった名誉にしがみついて、あたらしただがいにかねってみがってだどおもうわ。おらどけっこんして、あだらしキリシタンぶらぐをつぐるただがいにくわるべきだよ。おらどいっしょにつぎのせだいのために、どうしゅぐロクザエモンの後継者をつぐるべきだ。それをしねで、なんとひっきょうなだべ、それなだばとうぼうへいどおなじなだべ。」

(44才の六左衛門には、一生涯、貞潔を守るための戦いはもう苦しくないはずよ。だって、もう自分の性欲に打ち勝ってしまっているんだもの。だから、もう自己犠牲ではなくなってしまうわ。ただの名誉になっているのよ。年齢によって性欲と戦う重荷から解かれて楽になっているのだから、神さまと人々のために新しい重荷をすすんで担うべきだわ。妻の面倒を見、子を養い育てるっていう重荷を。過去の戦いで勝ちとった名誉にしがみついて、新しい戦いにかな

いなんて身勝手だわ。私と結婚して、新しいキリシタン部落をつくる戦いに参加すべきよ。私と一緒に次の世代のための、同宿六左衛門の後継者をつくるべきだわ。それをしないなんてひきょう者、逃亡兵よ。)

この言葉に、六左衛門は神の声を聞いた気がした。確かめなくては。

六左衛門

「マグダレナ、あの三段論法は自分一人で組み立てたのかい。」

神か、または誰か大人の男が助けなければ、マグダレナにあんな論理を組み立てられるはずがない。もし誰の助けも借りず、一人でこの論理を組み立てたのなら、助けたのは神だ。そうしたらこれは神の声だ。六左衛門はそう考えた。

マグダレナ

「おら、ひとりでかんがえだのだよ。」

(自分一人で考えたのよ。)

六左衛門がつぶやく。

六左衛門

「だったらあれは神の声だ。」

六左衛門はシストに言う。

六左衛門

「シスト、ぼくの負けだ。生まれて初めて論戦に負けた。」

シストは今、床机(しょうぎ)から立ち上がり大声を張り上げる。

シスト

「勝負あったー。マグダレナの勝ちー。」

たちまち会場は大騒ぎになる。みな大声で、結婚しろーと叫んでいる。屋根がふっ飛びそうだ。シストの前で六左衛門がマグダレナを引き寄せ胸に抱き、耳に口をつけて言う。

六左衛門

「神のお望みだ。結婚する。」

マグダレナは、そのまま胸で泣きじゃくる。幸せの嬉し泣きだ。六左衛門の言葉が聞こえたシストが、すぐ近くの人に言う。六左衛門はマグダレナと結婚すると。たちまちそれは皆に伝えられ、今度は祝福の大騒ぎとなる。

それから間もない11月末、八重のお産が始まった。たいへんな難産になった。八重の体力がなくなってきた。カタリナがシストのところへ来て小声で言う。

カタリナ

「シスト、八重も赤ちゃんも命が危ないわ。」

カタリナも疲れきっていて、心配で顔が青ざめている。シストにも事態の重大さがよくわかっている。

シスト

「カタリナ、六左衛門を呼びにゆこう。」

カタリナ

「六左衛門を。」

シスト

「そうだよ。こういう時には産道で赤ちゃんが死んでしまわないうちに、何とか赤ちゃんの頭に水を注いで洗礼を授けるんだって、六左衛門から聞いたことがあるんだ。」

カタリナはうなづく。二人が外に出て、急ぎ足で藤兵衛の家に向かう。

六左衛門とマグダレナが藤兵衛の家から飛び出してきて、シストとカタリナと一緒に八重のもとへ向かう。家に着くと、六左衛門は急須に水を入れて洗礼の準備をし、八重のもとへ行く。あの元気な八重が力尽きてぐったりしてうめいている。赤ちゃんの頭に洗礼水を注げることがわかった。頭の一部が見えている。六左衛門はただちに洗礼を授ける。

六左衛門

「エゴ・テ・バプティーズ・イン・ノミネ・パートリス・エツツ・フィリイ・エツツ・スピリトゥス・サンクティ。」

それから六左衛門は、目をあげる。マリア観音がある。心の中で（マリアママ、助けて）と、熱烈に願う。そして大きな八重のお腹のみぞおちの上に、そっと手をのせる。

六左衛門

「イエスの、救いのしるしをしるす。」

そう言って、大きくお腹の上に十字をかき始める。

六左衛門

「父と、子と、聖霊の御名によりて、アーメン。」

その時、突然大きな陣痛が起こり、八重がウーンといきむ。すると、赤ちゃんの頭が全部外に出た。六左衛門を通して、マリアママが奇跡を行なってくださったことは、皆の目に明らかだった。

母と子の命は救われた。生まれた赤ちゃんは女の子だった。うぶごえがあがる。八重が泣く。

カタリナ

「女の子よ、八重。」

八重

「おなご。んだら、アグネスだな。」

(女の子なの。そしたらアグネスね。)

六左衛門

「アグネスか。いい名だね。」

六左衛門は、たった今起こったこと、つまり奇跡という偉大な恵みに、心の中でひたすら（マリアママ、ありがとう）と言って感謝をささげ続ける。カタリナが自分の息子のことを思い出す。

カタリナ

「今度は死ぬほど心配しているルイスを救わなくっちゃ。シスト、お願い。仕事場に行って、ルイスを安心させてあげて。ヨアキムもね。」

シスト

「ああ、そうだったね。八重、何か伝えて欲しいこと、あるかい。」

八重

「とうさん、ルイスさ言ってけれ。おら、マリアママどごみだの。笑って、うなずいでけでらっけ。そしたら、うまれできたのって。」

(お父さん、ルイスに言って。私、マリアママを見たわ。ほほ笑んで、うなずいてくれたの。そしたら生まれたのよって。)

そこにいた全員の背筋に感動の戦りつがおこる。

シスト

「八重、本当か。」

八重

「ほんとだ。ほんとうに、マリアママがきでくれだんだ。」

(本当よ。本当にマリアママが来てくれたの。)

シストは八重を見つめる。死ぬほど疲れきっていた八重が元気をとり戻している。不思議だ。

シスト

「八重とアグネスには、マリアママの祝福があるんだ・・・。」

こうつぶやくと、シストは精練の仕事場に向かう。

その晩、シスト家は六左衛門とマグダレナを加えて夕食を食べた。八重と赤ちゃんアグネスは休んでいる。

ルイス

「六左衛門、八重とアグネスの命を救ってくれて、本当にありがとう。」

皆も一斉に六左衛門にありがとうを言う。

六左衛門

「何を言っているんだい。僕じゃないよ。マリアママにありがとうを言ってくれよ。」

シスト

「わかった。みんな、マリアママにありがとうを言おう。八重とアグネスを祝福して下さってありがとう。」

みんなも大きくうなずいて、マリア観音をふりかえる。

ルイス

「お父さん、この奇跡は、お父さんとお母さんの高麗への愛と夢に対する祝福だと僕は思う。アグネスは初孫なんだもの。それから、堂々と仏教徒に偽装するっていういたずらに対しての祝福だと思う。今日、僕はマリアママの助けで生まれたアグネスを抱いた時、何の迷いもなくなったんだ。お父さんとお母さんは、高らいのために殉教する。僕たちは高らいのために堂々と仏教徒に偽装する。マリアママがそれを望んでるって示されたって、僕にはわかった。」

これを聞いて、シストとカタリナはものすごく嬉しそうだ。ルイスがこの奇跡をこんなふうに受けとめるなんて、夢にも思っていなかったのだ。

ヨアキム

「この奇跡にそんな意味があるんだったら、僕もルイスに続く。ね、クララ。僕と結婚して、高らいの血を継ぐキリシタンを未来のために残そう。」

クララが嬉しそうに、真っ赤になってうなずく。みんながびっくり仰天する。

カタリナ

「きゃー、クララ。まだ11才でしょう。もう結婚するの。」

ヨアキム

「お母さん、まだだよ。でも今日からいいなづけにして欲しいな。」

シスト

「ヨアキムもクララも、お互いにそんなに好きなのかい。」

ヨアキム

「うん。死ぬほど好きだ。」

クララ

「ええ。たまらないほど好き。」

シストとカタリナは顔を見合わせる。

カタリナ

「シスト、シストはヨアキムの嫁を江戸から連れてきたわけね。」

シスト

「本当にそうだね。よし、ヨアキム。クララ。いいなづけになることを許そう。」

ヨアキム

「やったー。」

みんながヨアキムとクララを祝福する。祝福の大きさがおさまると、六左衛門が言う。

六左衛門

「今日はアグネスの誕生日と洗礼のお祝い、それにヨアキムとクララの婚約のお祝い、それにマリアママが奇跡を行なって、八重とアグネスの命を救ってくれたお祝いだね。」

マリア

「ねー、六左衛門。どうしてあんなふうに赤ちゃんに洗礼を授けるの。」

みんなもそれを知りたがる。

六左衛門

「洗礼を授けられて死んだ赤ちゃんや幼な子は、天国にまっすぐ行って、神さまに会って永遠に完全な幸福を受けるんだ。洗礼を授からずに死んだ赤ちゃんや幼な子は、リンボウというところに行って自然的に幸せな状態になるんだ。神さまには会えないけどね。だから難産で赤ちゃんが死にそうなときには、赤ちゃんに何とか直接水を注げるなら洗礼を授けるんだよ。」

マリア

「リンボウっていうところがあるの。」

六左衛門

「そうだよ。流産した赤ちゃんも、みんなそこに行くんだよ。」

みんな、初めてリンボウという場所があることを聞いた。

六左衛門

「もし、アグネスが洗礼のあとで死んだとするよ。アグネスはまっすぐ天国に行くから、教会ではお葬式のミサは黒い服じゃなくて白い服でするんだよ。つまり、お祝いをするんだよ。」

マリア

「へー。」

シストとカタリナはまた、祖国に思いが向く。

カタリナ

「天国へ行かせること、それがすべてなのね。」

シスト

「六左衛門、高らいはまだ一人も宣教師を入らせないのかい。」

六左衛門

「中国からも日本からも、まだ一人も入れないんだ。」

シスト

「カタリナ、僕たちが高らいのために、命をどうしても捧げる必要が本当にあるよね。」

カタリナ

「ええ、シスト。」

マリア

「私も高らいのために結婚して、堂々と仏教徒のふりをするわ。でもお父さんのような人がいいな。結婚するなら。」

シスト

「ほー。お父さんのような人と結婚したいのか。」

シストはすごく嬉しそうだ。

カタリナ

「マリアも、私たちの血を継ぐ子を残してくれるのね。」

マリア

「うん。お父さん、お母さん、まかしといて。」

シスト

「じゃー、キリシタン部落づくりを、お父さんとお母さんはどんどん進めていくから、頼むぞ。」

みんなが楽しく笑う。シスト家全体が祖国高らいへの愛に燃えているのを、六左衛門とマグダレナがひしひしと感じた日だった。

1615年8月、寺沢村のキリシタン部落の計画は実現に向けて家が建ちつつある。当初は4軒の予定だったが、今5軒の家が建てられている。六左衛門とマグダレナが結婚したら住む家が加わったのだ。

藤兵衛は、屋敷に住み込みの奉公人夫婦を住ませることにした。家が完成したら六左衛門とマグダレナは結婚し、藤兵衛の家からこちらに引っ越す予定だ。キリシタン部落をつくる戦いに加わるため、そしてシストとカタリナのすぐ近くに住んだほうが三人の旅行には何かと便利のため、それと源五郎、四郎兵衛、彌三郎、孫十郎の四人の若者を未来の伝道士として教育するために、六左衛門はこう決めたのだ。

寺沢金山のシスト家、林家、近江家の近くに新しい5軒の家があり、大工さんたちが仕事を続けており、新田の開墾も進められている。今日は六左衛門、マグダレナ、源五郎と母親、四郎兵衛、彌三郎、孫十郎がそろって仕事をしている。そこに林の親分がやってくる。

林の親分

「おーい。田んぼづくりはちょっとやめて、俺の家へ集まれー。」

農具をそこに残して、7人は林の親分の家へ行く。林のおかみが藤兵衛と太郎右衛門を連れて帰ってきた。林の親分もおかみも、顔がとっても明るいので、良い話があるに違いない。シストとカタリナも来ている。近江夫妻も来ている。皆、嬉しそうだ。

六左衛門

「わー、みんなそろってるね。何か良い知らせかい。」

7人を代表して六左衛門がきく。

林の親分

「すっげー話だぞ。アンゼリスっていうパードレが、湯沢からちょっとの松岡金山に来るっていうんだ。」

六左衛門

「えー。パードレ・アンゼリス。よく知ってるよ。長崎からマカオかマニラに追放されたはずだけど・・・。詳しく聞かせてくれ。」

林のおかみ

「まず、みんな座って座って。お茶出すからさー。」

つげものとお茶が出されて皆が座ると、林の親分が説明を始める。

林の親分

「下嵐江銀山（おろしえぎんざん）のほり子が知らせに来たんだが、アンゼリスって一パードレは今ここにいるんだそう。これから増田（ますだ）銀山に行って、松岡（まつおか）金山に来るそう。他に同宿を3人連れて、津軽に向かっている途中だとよ。北に向かうから、南のこっちは来ねー。会いたいやつは、会いに行けだとよ。」

突然、孫十郎が叫ぶ。

孫十郎

「おら、ぱーどれがら、洗礼しでもらいでっ。」
(おれ、パードレから洗礼を授けてもらいたい。)

源五郎

「おらもだー。」
(おれもだー。)

彌三郎

「わーも。」
(おれもー。)

四郎兵衛

「おらもだー」
(おれもー。)

源五郎の母

「おれも。」
(私も。)

マグダレナ

「おら、ぱーどれがらけっこんしぎしでもらいで一。」
(私、パードレから結婚式してもらいたい。)

マグダレナが六左衛門の手をとって見つめる。六左衛門がはっとして言う。

六左衛門

「そうだ。結婚式をしてもらえる。5人の洗礼に結婚式だ。何てすばらしいんだ。こんなときに、パードレ・アンゼリスがやってきてくれるなんて。」

六左衛門は夢を見ている思いだ。

六左衛門

「シスト、カタリナ、僕たちの結婚の証人になってくれないか。結婚式の時に立ち会って、証人になってくれる人が2人必要なんだ。」

カタリナ

「きゃー六左衛門、本当。うれしい。なるわ。」

シスト

「もちろんなるよ、喜んで。」

六左衛門

「よかった。シストとカタリナが僕たちを結婚させてくれたんだもの。」

シスト

「僕は(敵の武器をぶんどって戦え)って、マグダレナに言っただけだよ。」

カタリナ

「私は祈っただけよ。」

六左衛門

「そうかい、マグダレナ。」

マグダレナ

「そんただごどねーよ。シストどカタリナは、おらど一緒にロクザエモンどただがってけだのしえ。」

(そんなことないわ。シストとカタリナは、私と一緒に六左衛門と戦ってくれたわ。)

林の親分

「戦って結婚するとは、めずらしい結婚だぜ。」

ちょうどお茶を飲んでいた林のおかみが、ブーッと吹き出してしまった。皆、大笑いだ。

カタリナ

「ねえ、六左衛門、六左衛門はいなかったから知らないけれど、ルイスと八重の結婚式の時、私、高らいの晴れ着をつくってシストと一緒に着たのよ。その服を持って行って着ていい。シストと二人で。」

シスト

「僕たちは日本の晴れ着は持っていないんだ。」

六左衛門

「高らいの晴れ着を持っているなら、ぜひ着てくれよ。僕も日本の晴れ着は持ってないけど……。もしかしてルイスも八重も高らいの晴れ着をきたのかい。」

カタリナ

「ええ、そうよ。ルイスも八重も高らいの晴れ着を着たのよ。」

六左衛門

「ルイスのを、僕に貸してくれないかい。」

マグダレナ

「おらも、やえがきたこうらいのはれぎ、きでなやー。」

(私も八重が着た高らいの晴れ着を着たいなあ。)

カタリナ

「私が着せてあげる。」

マグダレナ

「わー、うれし、おら。あんただきれった きもの、みだごどねくって、おら、まんずきでぐって、きでぐってしがだねがったのしえ。」

(わー、嬉しい。私、あんなきれいな服、見たことなくってすごく着たかったのよ。)

林の親分

「おれはこの5人の洗礼用に、ひょうたんとかための盃のための盃を持って行ってやるぜ。とにかく全員で行くぜ。」

皆がうなづく。

林の親分

「一週間後、出発だ。松岡金山で泊まるところは心配するなよ、みんな。全部おれがうまくやってやるからよー。」

寺沢村から15人が松岡金山に着いて一泊した翌日、医者に変装したパードレ・アンゼリスと3人の同宿が、案内の増田銀山のほり子たちに連れられて松岡金山にやってきた。パードレ・アンゼリスはシチリア島生まれのイタリア人だ。笠をかぶって顔を隠している。松岡金山のキリシタンつち親の家へ向かっている。

家のまわりには大勢のキリシタンや、洗礼を受けてキリシタンになりたい人が待っている。寺沢の15人がいる。院内からも来ている。やはり洗礼を授けてもらいたい人々を引き連れて、三太夫親分が来ている。

パードレは笠をとる。ほりの深い、鼻の高い、ひげだらけの顔があらわれる。キリシタンたちは大感激のうちにひざまづき、頭をたれる。パードレは小さく十字をきり、祝福を何度も与えながら歩き続ける。多くの人が感涙にむせんでいる。

寺沢からの15人の前をパードレが通ると、六左衛門がパードレに声をかける。

六左衛門

「パードレ・アンゼリス。同宿のルイスです。」

パードレがびっくりして立ち止まり、六左衛門を注視する。両手を大きく広げて前にのぼす。

アンゼリス

「オー。ルイス。」

パードレがこう叫び、パードレと六左衛門は再会を喜びつつ、かたくハグし合う。この光景に寺沢から来た人々は感激してしまい、マグダレナはなぜか泣けてしまう。

アンゼリス

「ルイスよ、こんなところで会えるとは・・・。どうしているんだ、ルイス。」

三人の同宿ともハグをしてから六左衛門が答える。

六左衛門

「この近くの寺沢村に、今住んでいるんです。パードレ、今日は村人5人の洗礼と・・・。」

六左衛門はマグダレナの手を引っぱってパードレの目の前に立たせ、マグダレナの頭に片手でふれ、

六左衛門

「僕とこの人の結婚式を挙げてもらいに来ました。マグダレナと言います。」

マグダレナ

「ぱーどれ、おら、まぐだれなっています。おねげーします。」

(パードレ、私マグダレナです。お願いします。)

パードレは大きくうなずき、いつくしむようにマグダレナを見つめ、それから引き寄せてハグする。

アンゼリス

「マグダレナ、おめでとう。結婚式を喜んでやってあげますよ。夕方、涼しくなったらがいいでしょう。ルイスと打ち合わせをしますからね。」

マグダレナは大喜びでハグをといた。パードレを見つめ、大きくうなづく。

アンゼリス

「ルイスよ、何か食べてから洗礼式をします。そのあと夕方まで罪の告白を聞くから、マグダレナと一緒に罪を告白しに来なさい。最初に二人の罪の告白を聞いてあげます。それが終わったら仕度をしなさい。仕度ができたら、早速結婚式をあげてあげます。じゃあ、またあとで。」

六左衛門とパードレが話している間に、押しかけてきた人みんなに、寺沢村の同宿、六左衛門とマグダレナという娘の結婚式を、夕方パードレがとりおこなうという情報が、次から次へと伝えられる。六左衛門はよく知られているので、そこらじゅうから（行こう、行こう、見に行こう）という声が沸き起こる。

パードレと三人の同宿が食事を終わり、洗礼式の準備が始まった。林の親分がひょうたんと、かための盃のための盃をパードレに手渡ししながら、説明をしている。パードレがびっくりしている。

アンゼリス

「・・では、この素晴らしい地下教会は、あなたが石見で始めたのですか。」

林の親分

「とんでもねー。夕方、パードレが結婚式をする時、証人として立ちあう高らい人の夫婦が始めたんです。今ここにはいねーけど、世界一進んでる高らいの精錬技術の先生で、秀吉が高らいを侵略した時、日本に連行されてきて、有馬でキリシタンになったシスト先生とその奥さんのカタリナが、石見の俺のところで始めたんです。21年かけて作ったもんです。」

アンゼリス

「高らいの夫婦が・・。有馬でキリシタンになって・・。21年かけて・・。有馬にはどのくらい、いたんでしょうね。」

林の親分

「2年ほどだって聞いてます。」

パードレはうなづいてだまる。ちょっと何か考えて、

アンゼリス

「わかりました。ここでの洗礼はこれをつかってやります。終わったらちゃんと返しますからね。大切なものでしょう。」

ここに3日間しか留まらないパードレは、洗礼式を最短のものにして行なう。第一日目の今日、洗礼を受けに来た人たちは、男も女も何十人もいる。

迫害の時代なので、パードレは信仰を最後まで守り抜くよう熱烈に励まし、それから一人ひとりに男から洗礼を授けてゆく。5人が選んだ洗礼名は、源五郎はマテオ。源五郎の母はアンナ。彌三郎はルイス。四郎兵衛はパウロ。孫十郎はトマスだ。

洗礼式が終わり、寺沢村の15人がまた一緒になった。これは寺沢村のキリシタン部落の誕生なのだ。11ヶ月前、シストが始めたキリシタン部落づくりの初穂が、こんなにも早く寺沢村に実った。

大喜びの15人の中でも、シストと、そして一緒に歩き回っているカタリナと六左衛門の喜び

は最も大きい。ゼロと1とはまったく違う。ちょうど寺沢金山のクリスチャン共同体が、カタリナと林のおかみを軸に、愛し合い、助け合う天国のような共同体として存在をはじめたので、他の鉱山にもそれを見習って同じような共同体が、それから約2年の間にどんどん作られてきているのと同じで、見習うべきモデルがあれば、次々にそれを見習って自主的にクリスチャン部落を、クリスチャンの百姓たちは作っていけるのだ。

シストが長男ルイスや次男ヨアキムにも手伝わせて、この日のために一週間で作ったものがある。2羽のガンの模型だ。もちろんつがいのガンをあらわしていて、2羽とも羽をたたんで水上にいる時の姿勢だ。木を彫ってこれを作り、カラフルに色をぬったものだ。六左衛門に高らいの晴れ着を着せ終わると、シストは六左衛門にそのガンの模型を肩掛け袋から取り出して見せた。

シスト

「六左衛門、これは夫婦のガンだよ。」

六左衛門は、初めて見るものなので不思議がる。

六左衛門

「ガン。これをどうするんだい。」

シスト

「本当はマグダレナのお母さんに渡すものなんだけど、お母さんはいないから、まず藤兵衛さんに渡して、結婚式の場に飾ってもらおう。」

六左衛門

「うん。でもガンの夫婦は何をあらわしているんだい。」

シスト

「それはね・・・、ガンは一度夫婦になると、一生相手をかえないんだ。相手が死んでも、別の相手と夫婦になることもない。それで夫婦がそれにならうようにっていうことなんだ。」

六左衛門

「へー。面白いね。しかし、きれいでかわいい置物だね。」

六左衛門は見とれている。

シスト

「じゃ、行こう、六左衛門。」

高らいの晴れ着姿の二人が藤兵衛の所へ行く。藤兵衛は、ルイスと八重の結婚式の時にガンの模型を見ているから意味を知っている。シストからガンの模型を受け取って、六左衛門が藤兵衛に渡し、結婚式の場に飾ってくれるよう頼むと、藤兵衛は太郎右衛門と一緒にキリシタンつち親の家へ持って行って、よく見えるところに飾ってくれた。

藤兵衛が泊まった家の奥では、カタリナがマグダレナに高らいの晴れ着を着せている。カタリナがふすまを少し開けて顔を出して叫ぶ。

カタリナ

「全部準備できたわー。」

これを聞いてあちこちで人が走る。パードレに伝えにゆく人もいれば、各家をまわってみんなに知らせる人たちもいる。たちまちぞくぞくと人が集まってきて大群衆になる。

洗礼式が行なわれた同じ場所で結婚式がある。キリシタンつち親の家の大きな座敷で、ふすまも雨戸も開けられているので、大群衆はすぐ外に立って、立ち会うことができる。

シストと六左衛門がここにやってきて、パードレの前に立った。パードレは白く長い細い布を首からかけて前に垂らしている。両方のはしに金糸で十字架が刺しゅうされている。これはストラと呼ばれる祭服だ。パードレが藤兵衛に命じる。

アンゼリス

「お父さん、あなたの娘をこの方のもとに連れてきなさい。」

藤兵衛がマグダレナを迎えにゆく。あちこちから「始まるぞー。始まるぞー。」という声が出て、キリシタンだけじゃなく、松岡金山の人々が大部分つめかけてくる。仕事が終わる時刻だ。日が沈みかけている。藤兵衛がマグダレナを呼ぶ。

藤兵衛

「まぐだれな、むがえにきたよ。とうさんが、つれでいぐがら。」

(マグダレナ、迎えに来たよ。お父さんが連れていくよ。)

奥から返事がある。

マグダレナ

「はい、とうさん。」

(はい、お父さん。)

ふすまが大きく開いて、夏の夕暮れのやわらかい光の中に、高らいの花嫁衣裳を着たマグダレナが出てくる。男たちのワーという歓声。女たちのキャーという歓声。マグダレナは薄い絹のヴェールをかぶって顔を隠している。

みんなが気絶せんばかりに驚いたのは、ウォンサムという高らいの花嫁衣裳だ。あでやかな、色とりどりの色の布のはぎ衣装なのだ。これを見て驚かない人はいない。女性たちはもっとよく見ようと前に押しかける。衣装の美しさに女性たちがますますキャーキャー騒ぎたてる中、藤兵衛の腕に自分の腕をからませて、マグダレナがゆっくりと道を歩いてゆく。あんな服を着てみたいと思わなかった女性は一人もいないはずだ。

高らいの晴れ着のカタリナ、日本の晴れ着の林のおかみとエリザベータ近江がそのすぐ前をゆく。この行列がキリシタンつち親の家の玄関に入り、そして座敷にあがる。パードレが再び命じる。

アンゼリス

「お父さん、あなたの娘をこの方に渡しなさい。」

藤兵衛はマグダレナを六左衛門のもとに連れてきて腕を離し、うしろにひかえる。並んでパードレを見つめる二人にパードレが話しかける。

アンゼリス

「ルイス、十字架にかかったイエズスと一緒にいたのはお母さんのマリア様とヨハネとマグダレナでしたね。あなたはマグダレナという名のこの方と結婚し、まったく新しい生き方を始めるのですから、私はあなたにヨハネという名を今、与えます。

二人が十字架にかけられたイエズスと共にいつまでもとどまり、二人がマリア様といつまでも共にとどまりますよう、これからヨハネという名をつかいなさい。いいですか。」

六左衛門

「はい。パードレ、ありがとうございます。」

アンゼリス

「では二人ともひざまずきなさい。」

パードレは祭壇の十字架の方に振り向いてラテン語で短く祈る。六左衛門がパードレと交互にラテン語で祈るので、マグダレナはびっくりしてしまう。パードレは二人の方に向きなおり、

アンゼリス

「二人とも立ちなさい。ヨハネ。」

と言い、六左衛門にラテン語で質問する。マグダレナを妻にすることを望むかと。六左衛門はしっかりと大きな声で答える。

六左衛門

「ヴォロ」

アンゼリス

「マグダレナ、結婚したいなら、私がラテン語で聞いたら（ヴォロ）と答えなさい。結婚したくないなら首を横に振りなさい。」

六左衛門がちよっと心配そうにマグダレナに目をやる。マグダレナが六左衛門に尋ねる。

マグダレナ

「ぼろ、ってなんだべ？」

（ボロって何。）

六左衛門

「私は望みますっていうラテン語だよ。」

マグダレナがうなずいて、又パードレを見ると、パードレがマグダレナにラテン語でヨハネを夫にすることを望むかと質問する。マグダレナは六左衛門より大きな声で答える。

マグダレナ

「ぜってい、ぼろ。死ぬほど、ぼろ。」

（絶対ボロ。死ぬほどボロ。）

パードレが笑い出し、しばらくとまらない。イタリア人のパードレ・アンゼリスは豪快に大笑いする。マグダレナは恥ずかしくなって顔が真っ赤になるが、幸いヴェールを顔に垂らしているので目立たない。

笑いがおさまるとパードレは力強くマグダレナの右手をつかんでひっぱり、六左衛門の右手もそうして自分の目の前でしっかりと互いに手を握らせる。そして首から垂らしているストラの片方の端を引き、ぐるぐるぐるっと3まわり、二人の手をくるんで巻きつける。二人は向き合って見つめあう。

アンゼリス

「ヨハネ、私のあとについて誓いなさい。わたくし、ヨハネは汝マグダレナを妻とする。」

大きな声でゆっくりと六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「この日より。」

六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「順境においても、逆境においても。」

六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「富める時も、貧しき時も。」

六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「病める時も、健やかなるときも。」

六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「死が二人を分かち時まで。」

六左衛門が繰り返す。

アンゼリス

「わたくしの忠誠を汝に誓う。」

六左衛門はマグダレナの瞳を、ヴェールを透かして見つめながら誓いの言葉を言いきった。その声には並々ならぬ決意が感じられた。シストもカタリナも感激して泣いている。六左衛門の声が聞こえ、言葉を聞いた者は皆泣いている。

もちろん一番感激しているのはマグダレナだ。しかし、次にどうやら自分も同じ言葉を言わなければならないようだとなって、マグダレナは緊張してしまう。生まれて初めて今で言う標準語をしゃべらなければならない。マグダレナが生涯でたった一度、標準語をしゃべる時がきた。いつもより高いトーンで、しかもふるえ声になって。パードレについてゆく。

マグダレナ

「わたくし、マグダレナは汝ヨハネを夫とする。この日より、順境においても、逆境においても、富める時も、貧しき時も、病める時も、健やかなるときも、死が二人を分かち時まで。わたくしの忠誠を汝に誓う。」

パードレは二人の結んだ手の上に十字をしるしながら、ラテン語で言う。（私はあなたたちを婚姻の絆に結ぶ。父と、子と、聖霊とのみ名によって。アーメン。）

パードレは3まわり巻きつけていたストラを取り除き、二人のつないだ手に聖水をふりかける。そして目で六左衛門に合図すると、六左衛門はマグダレナと結んだ手を離し、両手で静かにそっとマグダレナの顔の前に垂れたヴェールを持ち上げ頭上に折り返す。マグダレナの頬を両手ではさむと、マグダレナの唇に自分の唇をつける。六左衛門にとって、生まれて初めての口と口のキスだ。マグダレナにとっても、もちろん生まれて初めてのキスだ。六左衛門はやさしくマグダレナへの尊敬に満ちたキスを保つ。マグダレナの心臓はドキドキして胸から飛び出しそうになり、幸せで体が溶けそうな気がする。（結婚できたんだ。）と今、マグダレナは実感し涙がとまらなくなる。

アンゼリス

「祝福を与えます。ひざまずきなさい。」

こうしてパードレが最後の祝福の祈りを唱える。六左衛門が感動して泣いている。パードレが祈りを終えても、泣いている六左衛門とマグダレナはじっと動かない。パードレは温かいほほえみを顔にたたえて二人をじっと見つめている。それからパードレはやはり感動して泣いているシストとカタリナの二人にじっと目をやる。心の中で（この二人の高らい人夫婦が日本中の鉱山を結ぶ地下教会を作ったんだ。小さいものたちを用いて、神様は何て大きなことをなさるのだろう。）と思いながら。

結婚式は終わった。今、外に押しかけてきていた大群衆がワーワーと祝福の声をあげて大騒ぎしている。その背後の空き地の真ん中に大勢の男たちが太いまきを運んで積み上げ始めている。彼らは松岡金山の精錬部門の職人たちだ。シストはここでも高らい式の炉を作り、彼らに技術を伝え、キリシタンの教えも教えた。大恩人のシスト先生のために、特別に大きなかがり火を燃やして結婚式の祝いに花を添えようというのだ。

すごいまきの量だ。火が点火される。だんだん火の勢いが強くなる。精錬の職場で火に近寄る時に使う「火っこさ寄る頭巾」を彼らは被って、どんどんかがり火を燃やし続ける。炎からの猛烈な熱から、顔、頭、首、胸の襟元を守る、目の二つ穴だけがある頭巾だ。日は暮れて暗くなってきた。大群衆は火をかこんで集まる。

シスト

「わー、ありがたいねー、カタリナ。こんなに祝ってくれて。お礼に何かしたいもんだね。」

カタリナ

「うん、何ができるかなあ。」

この会話が聞こえたエリザベータ近江が二人に言う。

エリザベータ近江

「この人たちに、お礼にキリシタン踊りを教えましょうよ。」

カタリナ

「きゃー、それがいいわ。ねえ、みんな集まって。」

寺沢の15人が集まって話し合う。11ヶ月前の戦略会議の時、堂々と仏教徒に偽装するという方針に沿って、盆踊りのようにみえる踊りをつくってみんなで踊ろう、とエリザベータ近江が提案し、皆、特に女性たちが大賛成し、エリザベータ近江が振付けの才能を生かしてつくることになったキリシタン踊りだ。

エリザベータ近江は、「テ・デウム」という歌に振付けた。これはもっともめでたい歌で、大きな祝祭の度に歌われるグレゴリオ聖歌だ。歌の文句は三位一体の神様を褒めに褒める内容だ。祝いの歌なのにメロディーは短調だ。何度か聞けば、鼻歌で歌える、記憶にしみつきやすいメロディーだ。

寺沢金山のキリシタン共同体では鼻歌でメロディーを歌いながらエリザベータ近江が振付けた、都風の優美な踊りを踊る。

六左衛門

「パードレ・アンゼリス、今から（テ・デウム）に合わせて踊りを踊るんですよ。見に来ませ

んか。」

アンゼリス

「おー。（テ・デウム）で踊る。それはいいね。歌っていいですか。」

こうしてパードレと3人の同宿と、六左衛門とヨアキム近江が、そらでテ・デウムをラテン語で歌うことになって、かがり火の方へ向かう。藤兵衛と太郎右衛門はガンの模型をかがり火の近くに台ごと持って行って置いてくれた。カラフルなガンの模型がおどる火に照らされている。寺沢の残りの13人が、かがり火を囲んで輪になる。六左衛門が大声をはり上げる。

六左衛門

「皆さん、今日祝ってくださったお礼にキリシタン踊りを教えます。まねして一緒に踊って下さい。」

六左衛門が、いち、に、さん、と合図し、歌と踊りが同時に始まる。「火っこさ寄る頭巾」をかぶってかがり火の近くにいる精錬部門の職人たちは、シスト先生が踊りに誘うので、見よう見まねで、そのままの姿で踊りだした。

とにかく皆がびっくりしたのは、初めて見る都風の洗練された、上品な、優美な、静かな、あでやかな振り付けた。そして女性たち全員が目が吸いついてしまったのは、マグダレナがウォンサムを着て踊る姿だ。

大きなかがり火、つがいのガンの模型、「火っこさ寄る頭巾」の踊り手と、色あざやかなはぎ衣装のウォンサムで踊るマグダレナの取り合わせ、踊りの振りの美しさ、「テ・デウム」の節……。

松岡金山の人々は驚きとともに熱狂的な歓迎を示した。明日の夜も、あさっての夜もやってくれ、この踊りとメロディーをしっかりと覚えたいからと、みんなで一生懸命寺沢の15人に頼みこむ。これには応えないわけにはいかない。ついでに彼らは、ガンの模型を譲ってくれと願った。藤兵衛がころよくプレゼントすることにした。又、明日もあさってもマグダレナには色とりどりの布のはぎ衣装のウォンサムを着て踊って欲しい、シストとカタリナと六左衛門にも高らしいの晴れ着を着て欲しいとねだるので、これも了解した。

翌日、パードレはシストとカタリナと六左衛門を呼んだ。イタリア人のアンゼリスはいきなり本題から入る。パードレはまじめで悲しそうな顔をしている。

アンゼリス

「ヨハネ、あなたの実家は有馬領の三會（みえ）でしたね。シスト、カタリナ、あなたたちは日本に連行された最初の2年間で有馬で農家に預けられて暮らしたそうですね。」

三人は、はい、と答える。

アンゼリス

「去年の11月の後半に、一万の兵が有馬領でキリシタンを迫害しました。残酷な方法で殺されて殉教した者が多くでしたが、キリシタンたちは冬の最中に山に逃げなければならなかったので、寒さと飢えでも、一体何人殉教したかわかりません。」

カタリナが、真っ青になっている。シストと六左衛門の顔にも苦悶の表情が浮かぶ。カタリナがショックに打ちのめされて言葉が出ないのを察して、シストが代わって話す。

シスト

「パードレ、そこには僕たち夫婦を我が子のように愛してくれた第二の父親と母親とその子供たち、それから僕たち同様、高らいから連行されてきてキリシタンになった何千人もの同朋がいるんです・・・。」

とたんにカタリナの目から涙があふれ出す。シストがカタリナを引き寄せて抱く。

アンゼリス

「あなたたちの同朋の高らい人たちは、キリシタンの信仰においては英雄的に勇敢で、しかも神秘的な恵みを多く受ける人たちですね。信仰において、日本人よりもすぐれています。」

林の親分から、鉱山の地下教会を生き育てたのは高らい人夫婦のあなたたちだと聞きましたが、私は高らい人だったらやるだろうと思いました。地下教会ではないほうの教会でも、高らい人はむしろ日本人のお手本になっていて、柱のような存在です。」

シスト

「パードレ、私たちはハチカン・ホアキンと太田ジュリアのことは、仙台から来たフランシスコ会の江戸の同宿たちから聞きました。」

アンゼリス

「おー、ハチカン・ホアキンと太田ジュリア。ハチカン・ホアキンについての新しい情報を、私もついこの間仙台領でもらいましたよ。」

シスト

「どんな情報ですか。」

アンゼリス

「私はシチリア島の生まれでね、そこはナポリ・シチリア王国です。そことスペイン王国とポルトガル王国、それとスペイン・ポルトガルの全世界の全植民地をフェリペ3世という方が治めていてね、つまり、世界で最も大きな国の王様なんです。」

仙台の伊達政宗（だて・まさむね）という殿様が、フランシスコ会のルイス・ソテロ神父を、その王様とローマ教皇様に遣わしてね、おととしの10月28日に出港させたそうです。ルイス・ソテロ神父は、命を捨てて自分と仲間の宣教師や修道士たちに宿と聖堂を提供してくれたハチカン・ホアキンの頭がい骨を、最高の宝物としてフェリペ3世に献上するために携えていったそうです。

フランシスコ会が日本にまいた種の初穂として、又、江戸キリシタン中で最大の英雄の殉教者の聖なる遺物として崇敬を受けるようにと持って行ったそうです。」

シストとカタリナはこの話に聞き入っている。養女クララの殉教した父親と同じ迫害で殉教した高らい人なだけに、ものすごく身近に感じている。

実はルイス・ソテロ神父は1616年5月16日にマドリッドで手紙を書き、その手紙をつけてフェリペ3世にハチカン・ホアキンの頭がい骨を献上した。その手紙は今もマドリッドの有名な女子修道院に保存されている。1616年に一人の高らい人殉教者がこれほどの栄誉を受けていたことは「知られていない偉大な事実」である。なお、この手紙にはハチカン・ホアキンが高らい王国生まれだと文頭に明記されている。

カタリナ

「パードレ、太田ジュリアはどうしているのか知らない。」

アンゼリス

「太田ジュリアからは手紙をもらいましたよ。」

カタリナ

「えー、パードレは太田ジュリアと親しいの。」

アンゼリス

「はい、はい。とっても親しいのですよ。私は太田ジュリアが家康に仕えて駿府にいた約5年間、彼女の信仰を指導したのですよ。」

シストとカタリナは目を丸くしている。

アンゼリス

「ジュリアはね、漁師の家が9軒か10軒しかない無人島と変わらないような小さな島にいます。みんな今にも飢え死にしていしまいそうなほど貧しい人ばかりでね。生活に必要な物は何もないし、一緒に連れて行ったキリシタンの下女が妊娠してね、そこで子供を産んだから、その子を育てている下女を手伝っているんだそうです。」

カタリナ

「わー、赤ちゃんを育てているの。」

三人の子を産み育てたカタリナは、その苦勞を知っているのだから、ジュリアの苦勞が理解できる

。

アンゼリス

「そうですよ。日本一華美な宮殿で日本一の地位の人に仕えていた人なのに、今は日本一貧しいところで、下女の下女になっているのですよ。でもね、ジュリアはその島をイエズスガはりつけになったカルワリオの丘だと思って、幸せなんだそうですよ。」

赤ちゃんのお母さんは、山に薪を採りに行き、ジュリアは泉に水をくみに行くんですけど、二人の貧しい小屋からは山も泉も遠くって大変なんだそうです。上品で華奢な下女は夜までかかってやっと僅かの薪を背負って帰ってくるんだそうです。ジュリアは皆のための水をくんでくるのに、水を運ぶに小さな器しかなくて、貧しい小屋に帰ってきた時には水はだいぶこぼれてしまって、服はびしょぬれといった具合だそうです。」

カタリナ

「そんな・・・。赤ちゃんがいて、食べ物も水も薪もろくにないなんて・・・。」

同情深いカタリナはもうポロポロ涙をこぼしている。

アンゼリス

「ジュリアはカルワリオの丘の十字架上のイエズスの足もとで一生を終えるつもりですって、私に書いてくれたんですよ。」

カタリナ

「そうなの。なんて強い人。」

アンゼリス

「私が長崎で日本を追放されるのを待っていた8ヶ月の間、都（みやこ）の比丘尼（ベアタ）修道会の14人の修道女（ベアタ）と一緒にいました。その中に朴（パク）マリナという高らい人の修道女（ベアタ）がいましたよ。高らい人で修道女（ベアタ）に初めてなった人です。今、マニラにいるはずですよ。」

修道女（ベアタ）という言葉がわからなくて、シストとカタリナは六左衛門を見る。

六左衛門

「男は修道士、女は修道女（ベアタ）って言うんだよ。」

シスト

「へー、知らなかった。」

カタリナ

「私も初めて聞いたわ。」

アンゼリス

「朴マリナはね、1572年に高らいで生まれてね。」

カタリナ

「私より3歳年上だわ。」

アンゼリス

「日本に連行されて、1606年、34歳の時に洗礼を受けてキリシタンになりました。それから6年たって1612年に40歳で修道女（ベアタ）になったのですよ。」

去年、1614年の禁教令の時、彼女たちは家を取り壊されて、信仰を捨てないと拷問すると脅かされ、京都の大路に引き出され、俵に押し込められ、さらし者にされたのです。それから別々に引き離され、一人ひとりが信仰を捨てるよう説得されたのですが、誰一人、屈服しなかったのです。全員が裸にされて、凍るような寒さの中、雪が激しく降りかかっているのに京都の大路でさらし者に再びされたのです。

それから今度は裸のまま売春宿へ連れて行って、そこで彼女らを辱め、貞潔を奪うと脅かされたのです。若い女性たちは逃げて隠れましたが、朴マリナと他の8人は勇敢にそこに残ったのです。

この9人はそのまま喉のところまで俵に入れられ、縄で固く縛られ、二俵ずつ棒につるされて引き回され、夕方になると刑場である冷たい河原に運ばれ、そのまま丸一日さらされたのです。

その姿のまま京都の大路に連れ戻された時、朴マリナはね、日本語をよく話せなかったので、片言の日本語でこう大声で宣言したのですよ。（命を捧げようと望んでいるイエズスの信仰を、固く守り続けて戻って来た。）って。」

シストもカタリナも六左衛門もこの話に本当に感動してしまった。

シスト

「パードレ、高らい人が神秘的な恵みを多く受ける人たちだって言うよ・・・。」

アンゼリス

「そうそう、おととしの9月ごろでしたね。マシマという高らい人の女性が、天から来た幾多の気高い婦人たちが与えてくれる食べ物で12日間も飲み物も食べ物も断たれて牢に閉じ込められたのに、ピンピンして元気に満ちあふれて宅から出てきたのですよ。しかも最初の9日目までは柱に縛り付けられたまま過ごしたのです。」

シスト

「わー。詳しく聞かせて下さい。」

アンゼリス

「いいですよ。マシマは少女の時に日本に連行され、有馬でキリシタンになりました。有馬城で侍女として仕えていました。徳川家康のひ孫である第二夫人は、キリシタンの教えを捨てた城主ドン・ミカエルと共に迫害を侍女たちにかけたのです。

侍女たちの中で一番熱心で勇敢なキリシタンのマシマは、無理やり手に数珠（じゅず）を置かれるとそれを下に落として、それから拾い上げて、それをやった仏僧の顔に投げつけたのです。

第二夫人はマシマを城中の塔の地階の柱に動けないように縛りつけさせ、食べ物も飲み物も与えないように命令して、すぐに死ぬか、キリシタンをやめるかのどちらかになるよう追いつめました。

9日目に縄だけが解かれたあと、喉が乾いて死にそうだった時、突然雨が降り出し、水たまりの水をたまたま見つけた貝殻で、ほんの少しすくって飲むと、不思議なことに非常に苦く、イエズスが十字架の上で飲まされた酢と胆汁を思い出したそうです。それを飲んだあとは、もう最後まで飢えや渴きを感じなかったそうです。

又、夜、夢かまぼろしのうちに幾多の気高い女性たちがすばらしいごちそうを持ってきてくれて、これでマシマは命を支えられたそうです。マシマ自身には夢なのか現実なのかわからなかったのですって。そのあと城主の命令で一人の奉行に預けられ、その家で監視されながら生活しています。髪をそり、貧しい服を着て・・・。」

シストもカタリナも六左衛門も、だまったまま宙を見るようにして、マシマの姿を思い描いている。

アンゼリス

「実は私は11月8日にマカオ行きの船に乗せられて海上に出たところで、秘密のうちに迎えに来た小船に乗り移って、長崎に再び戻ってきたんですよ。有馬領での大迫害は、約一週間後の11月16日に始まったのです。

それから又、約一週間後の11月22日に有馬領の口之津（くちのつ）で高麗ジンクロー・ペトロと高麗ミカエルが殉教しました。ジンクロー・ペトロはね、殉教前夜、一緒に祈っていた友人に、「聖母が現れたので深く慰められました。それで殉教者になることは確実であると思います。」って言ったのですよ。はっきりと「聖母」が現れたと言ったのです。

ミカエルの方は、以前から幻視者でした。口之津に住むようになってから、パードレのいる加津佐（かづさ）へ夜によく行ってたのですが、灯りは必要ありませんでした。彼には一つの星が見えていて道を明るく照らしてくれていたのです、行き帰りの真っ暗闇の道を難なく歩けたのです。この星の幻視は、ミカエルが口之津で結婚するまでずっと毎回続いたそうです。結婚後は星の幻視はなくなった代わりに、度々気高い婦人や天使を見たそうですよ。

殉教の2日前に自分の姉妹と妻と姑にこう言ったのです。「夢の中で美しくて気高い婦人に会って、その人が『キリシタンを迫害しに兵がすぐ来ます。そなたは殉教者となるから用意をなさい』と私に言った」と。ミカエルは高らい人で最初の幻視者だと思います。

その前日にはミカエルは畑に行って少量の小麦の種子を蒔きました。妻が食べ物が家にもうほとんどないのでやめさせようとしたら、ミカエルは未来を予言して『これは私のためではなく、お前たちのために蒔くのだ』と言ったのです。ミカエルは預言の賜物も頂いていたのですね。彼が殉教して50日経った12月28日にこの小麦は一晩で成長して穂が出たのですよ。他の畑の麦はまだ地面すれすれに芽を出したばかりだというのに。1月6日にはその穂が実って粒になってたそうです。奇跡の麦粒が欲しくってみんなが穂を全部とってしまってしまったあとに、2回目の穂が出て、それがまた全部持ち去られると3回目の穂が出たのですよ。前代未聞の出来事ですが、パードレ・スピノラとパードレ・モレホンが調査して事実だと確認しています。」

シスト

「パードレ、どんなふうに二人は殉教したのですか。」

アンゼリス

「二人とも、キリシタン墓地の地面に投げ倒されて棒で激しくなぐられて、目や鼻や耳から血を流しました。そのご、素っ裸にされて両手を後ろに縛られて、泥だらけのわらじの底で頭と顔を踏みつけられました。それから息ができないほどぎゅーぎゅーに両手、両腕、首を縛り上げられました。それから太い2本の角材で足と股を挟まれ、7~8人がその上に乗ったので、骨が砕けそうになるまで押しつぶされました。それから手足の指をすべて切り落とされました。それから額に4本分の指の幅の十字架の焼きごてを押し当てられ焼印を押されました。それから鎚で口を殴られ、唇をつぶされました。

ジンクロー・ペトロはその時、うつ伏せにさせられ、腎臓の上に大きな石をのっけられていて、イエズスとマリアの名前を繰り返し唱え、『ころばない』と大胆に言い放ったので、唇をつぶされたのです。彼はとうとう刀で肩を斬られ、それでも『首を斬られ、体をこまぎれにされても

ころばない』と答えたので、首を斬り落とされました。

ミカエルの方は『私は高麗・ミカエルという者で、私に与えられるこれらの恵みを神に深く感謝しています』と言いつづけたので唇をつぶされ、墓地の入り口の階段の下に連れて行かれて膝の裏の筋を切られたらすぐに死にましたから、兵どもはミカエルの首を斬り落とし、体をこまぎれにしました。この時、22人が殉教しましたが、その場所には度々天から光の玉がおりてきて、それが小さな22の光の玉に分かれ、天に上って行って消えるのです。大勢の人が目撃しています。

」

シスト

「パードレ、どうして神様は高らい人たちにそんなすさまじい迫害をものともしない恵みや、不思議な出来事の恵みを下さるのでしょうか。」

アンゼリス

「私が気がついていることは、高らい人は日本人よりもずっと強く人を信じ、人に心を開きます。それから日本人よりもずっと実際的な奉仕をもって人に尽くします。

きっと神に対しても高らい人の方が日本人よりもずっと強く神を信じ、神に心を開くのでしょうか、日本人よりもずっと実際的に神に奉仕しているのでしょうか。神は日本人に高らい人のより優れた信仰を見習って欲しくて、しるしとして不思議な出来事を多く与えて、高らい人に目を向けさせようとなさっているのでしょうかね。」

こう言われてシストとカタリナはぽかんと口をあげたまま黙っているが、六左衛門は大きく何度もうなづく。その六左衛門を見てパードレが話しかける。

アンゼリス

「ヨハネ、昨日、院内銀山から来た人たちと話をしたね。その時ヨハネ石見三太夫親分からペトロ人見のことを聞きましたよ。院内銀山の山奉行になって、ここで六百人もの人に洗礼を授けたということを。彼に洗礼を授けたのは実は私なんですよ。伏見の教会でね。知ってましたか。」

六左衛門

「はい。パードレ、彼から聞いていました。」

こうして話題はペトロ人見の思い出話になっていった。

夜が来た。広場に昨日同様、盛大なかがり火が燃やされ、人々が集まってきている。マグダレナがウォンサムを着、シストとカタリナと六左衛門が高らいの晴れ着を着て、寺沢の人たちとやってきた。アンゼリス神父も同行の3人の同宿も、テ・デウムをまた歌うために出てきた。カタリナが目を丸くして叫ぶ。

カタリナ

「きゃー、シスト、あれ、あれを見て！」

カタリナが指をさしているのは、和服のはぎ衣装を着た女性たちだ。ウォンサムをまねて作ってきたに違いない。カタリナとシストがそっちに行くので寺沢の人も皆ついていく。シストやカタリナや六左衛門が知っている顔が何人もいる。大戸（おうど）村の人たちだ。大戸は盆踊りで有名な西馬音内（にしもない）の、松岡金山よりのとなり村だ。松岡金山から3kmしか離れていない。キリシタンが多いのでシストたちは何度も大戸に行ったことがあるのだ。

この大戸のキリシタンたちが、キリシタン踊りに熱烈にひきつけられてしまったのだ。大戸の男たちの数人が横笛まで用意してきたのには、寺沢の人たちはびっくりしてしまった。大きなかがり火のそばにガンの模型がまた飾られ、テ・デウムを歌うパードレと同宿たちと六左衛門とヨアキム近江が集まると、大戸の横笛をもった男たちがすぐそばに立ってパードレを見つめて笛を口にあてる。色あざやかな和服のはぎ衣装をたった一日で作ってきた大戸の女たちは、エリザベータ近江を見つめて準備している。

とにかく大戸の人のキリシタン踊りに対する熱心さは並大抵ではない。パードレが歌い始める。6人の男が力強く声を合わせて歌う。踊りも同時に始まる。今度はパードレが目をもん丸くしてしまう。パードレたちの歌に、ほんの0.1~2秒遅らせてついてくるような吹き方で、横笛が正確についてくるのだ。彼らは昨日聞いたメロディーをもう覚えてしまったのだ。パードレは大感激だ。音楽と踊りを愛するシチリアの血が沸きたってしまった。歌い終わると、思わず大声で話し始めた。

アンゼリス

「みなさん。このキリシタン踊りはなんて素晴らしいのでしょうか。昨晚、今晚、そして明日の晩も踊るそうですね。実はキリシタンの暦（こよみ）では、この3日間は8月12日、13日、14日にあたっていて、聖母マリア様の3日間のお通夜にちょうど重なっているのですよ。8月12日に聖母マリア様は亡くなられ、8月15日に被昇天されましたから、12日の晩、13日の晩、14日の晩とお通夜をするのです。聖母マリア様の被昇天を祝って、毎年松岡金山で今年のように3日間キリシタン踊りをこのように踊ったらいいと思います。」

パードレのこの提案に松岡金山の人々は大喜びする。口々に寺沢の人々に、毎年来て一緒に踊ってくれ、とせがむ。パードレは横に立っている六左衛門に聞く。

アンゼリス

「ヨハネ、毎年キリシタンの暦を調べて、この3日間ここで踊ってあげることはできますか。あなたの結婚の記念にもなりますよ。寺沢の5人の洗礼の記念にもなりますよ。4日目には聖母マリア

様の被昇天を松岡金山のクリシタンの皆と一緒に祝ったらどうですか。」

そこへ林の親分がさっと近づいてくる。

林の親分

「六左衛門、ここのクリシタンつち親が、俺たち全員に毎年来て欲しいとき。泊まる場所は任せてくれって言ってるぜ。みんな賛成してるぜ。どうするよ。」

六左衛門が向こうを見ると、寺沢の人々がかたまっている。何だかカタリナとマグダレナなんかはぴょんぴょん飛び上がって手をたたいているし、林のおかみとエリザベータ近江も互いに肩に手をかけあっている。一緒にテ・デウムを歌っているヨアキム近江もそれを見て

ヨアキム近江

「あれまー、大はしゃぎしているなー。」

と老いた妻が若返ったようにうきうきしているのに驚いている。

シストが精錬部門の職人全員に囲まれてやって来る。

シスト

「これから毎年3日間大かがり火を焚くから、寺沢の人々も毎年来て欲しいって。いいかな。」

話は決まった。松岡金山で一番知られているシストが代表して話す。

シスト

「松岡金山のみなさん、ありがとう。これから毎年、聖母マリア様のお通夜をここで守るために、僕たち寺沢の15人も来て踊ります。パードレ・アンゼリス、素晴らしい提案をして下さってありがとうございます。」

ワーワーと喜びの声があがる。また踊りが始まる。

その夜中、カタリナは布団の中ですすり泣いている。シストがすぐに気がつき、やさしく抱きしめる。カタリナが泣きながら言う。

カタリナ

「迫害されている有馬領の人たちがかわいそう……。私、心に剣（つるぎ）が刺さったみたいに感じてるの。日中、パードレの話聞いた時からよ。六左衛門とマグダレナの結婚や、寺沢の人たちの洗礼や、クリシタン踊りが歓迎されたことや、嬉しいことが山ほどあるのに……。踊りの時、パードレがマリアママのお通夜って言ったでしょう。お通夜って言葉が頭から離れなくなって、私、殉教した人たちのことを悼んでずっと踊ったの……。」

シスト

「僕もとっても辛い。毎年あんなにたくさん高らいから連行されてきていたし、それが7年間も続いたんだから、一体どれくらいの高らい人が日本にいるんだろう。特に有馬領や天草領は、領民のほとんどがクリシタンだろう。殿様や家臣も皆クリシタンだからね。高らい人も皆クリシタンになっているはずだよ。」

僕たちに孫が生まれたように、彼らにももう孫の世代ができていくはずだから、高らいの血を継ぐクリシタンの数は有馬や天草だけでも何千というすごい人数になっているはずだよ。彼らはこれからどんな目にあわされるんだろう……。僕の心も半分は喜びを味わっているけど、もう半分は悲しみと心配に押しつぶされてしまうそうだ。」

こうして二人はだまり、やがて二人とも眠りにつく。

松岡金山でのキリシタン踊りの最終日、とうとう大戸の女性たちは皆、和服のはぎ衣装を着てきた。すごい情熱だ。この3日間はひたすらはぎ衣装づくりと踊りに捧げてしまったようだ。踊りが終ると、まだあかあかと燃えている大かがり火の前で、大戸の人々が寺沢の人々を呼び集めて囲む。大戸の大百姓が大戸の人々を代表して話し出す。彼は明日、家族と、そして数十人もの大戸の人々と一緒にパードレから洗礼を受ける。

大戸の大百姓

「シストせんしえ、寺沢のみんな、あと、にじゅうごにじたでは、おおどのぼんおどりなんです。ぼんおどりのいつかかん、寺沢のみんなにいっしょにきでもらって、キリシタンおどり、おどってもらえねべがどおもって。できれば、これがらなんとし、きてもらえねべが。おおどでとまるところだばちゃんとよういしますから。そのあいだ、キキリシタンおどりだけでねぐ、信仰のごどについでもしどうしでもらいでのだんし。」

(シスト先生、寺沢の皆さん、あと25日経つと大戸は盆踊りなんです。盆踊りの5日間、寺沢の皆さんと一緒に来てキリシタン踊りを踊ってもらえないでしょうか。できればこれから毎年来てもらえないでしょうか。大戸で泊まる場所はちゃんと用意しますから。その間、キリシタン踊りだけでなく、信仰についても指導してもらいたいです。)

シストたちはもちろん大喜びで同意した。

こうしてこれから9年間、シストたち、寺沢のこのメンバーは松岡金山に3日間泊まりこみ、聖母マリア様のお通夜を踊り、大戸で5日間泊りこみ、盆踊りを踊り続けた。

この9年間の間に寺沢は村全体がキリシタンになり、大戸も村全体がキリシタンになる。どちらもシストの戦略どおり、堂々と仏教徒を偽装して寺に通いながら、実は村人みんなが洗礼を受けてキリシタンになっていて、周りの村々はそれを知っている。代官から庄屋にいたるまでそれを知っているという状態になる。

そしてキリシタン踊りはこの地方一帯のキリシタンに受け継がれた。約260年後、禁教令が撤廃されるまで、この地方一帯のキリシタンは祈りつつ踊った。しかも堂々と・・・。

翌日、パードレ・アンゼリスと3人の同宿たちは松岡金山を出発し、まず大戸に行って村人の集団洗礼だ。寺沢の15人も一緒に大戸に行き、大戸の大百姓とその一家と数十名の村人の洗礼式にあずかり喜びを共にする。そして聖母マリア様の被昇天のお祝いを皆で祝う。それから六左衛門と寺沢藤兵衛と寺沢太郎右衛門の3人は、パードレの旅を助けるために、久保田城下までお伴をするために皆と別れてパードレ一行と共に行き、残りの12人の寺沢の人々は寺沢に帰っていった。

この時からイエズス会のパードレと同宿たちは、宿主として、そして巡回の案内者として寺沢藤兵衛と寺沢太郎右衛門にずっと助けられることになる。もちろん六左衛門にもである。そして、殉教まで、あと9年・・・。